明治三十三年十二月廿五日第三種郵便物認可
明治三十五年十月五日發行（毎月一回五日發行）

女學世界

第二巻第十三號

口繪

秋の山づと
岩倉公爵の家庭
日光陽明門
歐洲の女辯士
江村の秋
山陽風景
長野割烹講習會
北越風景
遊就館
美人梳髮
其他



女學世界 第八卷第拾三號 目次


二八水は
肌を白くきめをよくし●にきび●あせも●ひび●すべて肌のあれ、おしろい下に用ゐて尤もよし又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり
登錄商標
12
本品縮圖
Nihachi Water
中瓶一本拾五錢
花王石鹸
品質善良と衛生に經濟を旨として製煉したる佳品なり
●賣捌所は全國到る處にあり
東京日本橋區馬喰町二丁目
發賣本舗
長瀨富郎
（電話特浪花九二二）

秋の山づと



（武内桂舟氏筆）

小川一眞製

梳髮

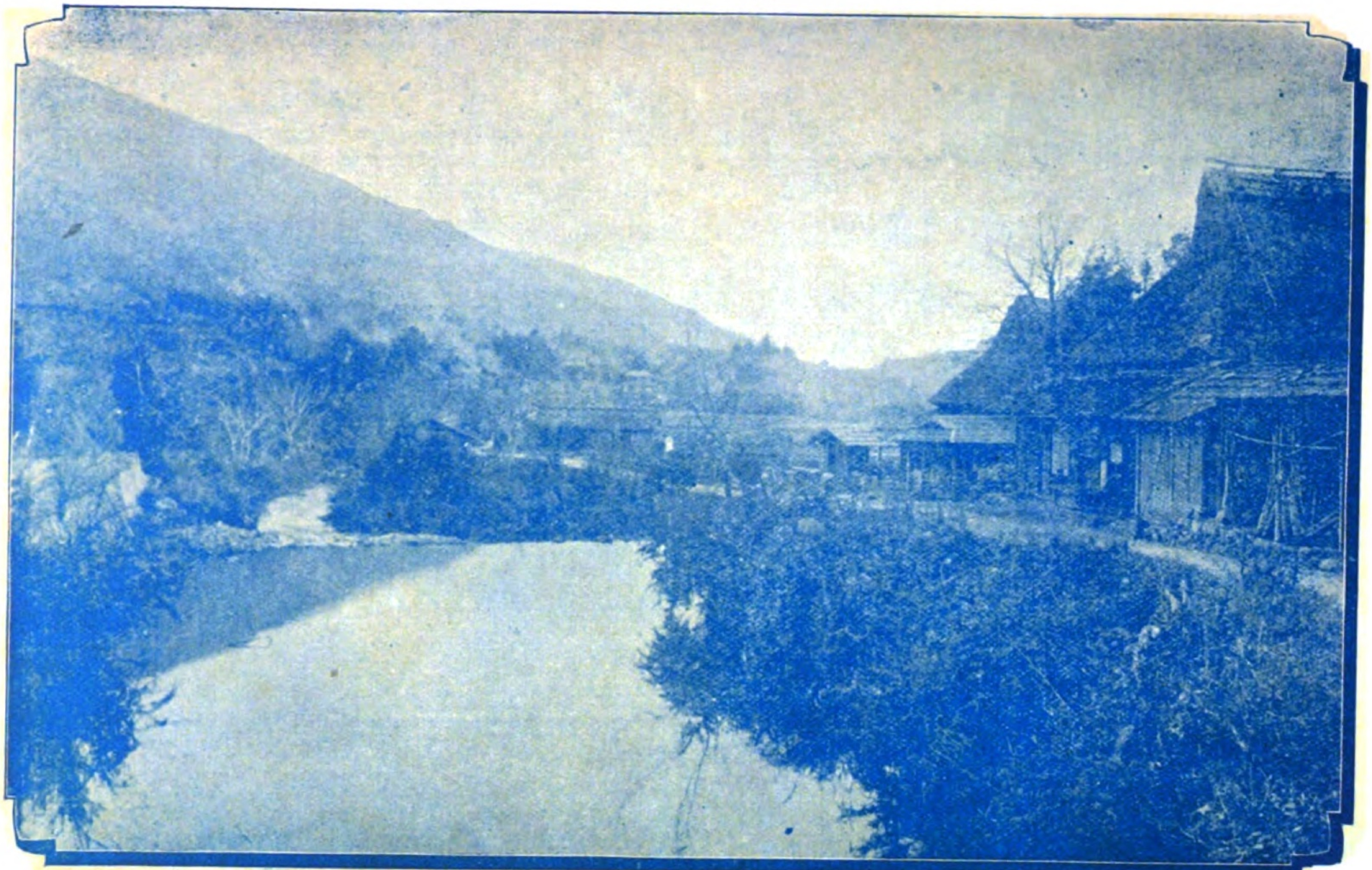


岩倉公爵の家庭



公爵夫人久子. 令嬢米子. 同季子

江村の秋



（辻爲次郎氏撮影）

山城國大原の里

目下流行盆栽園藝全書

農學士蒼古先生序　栢翁春郊君著

草木實驗 盆栽仕立秘法

盆栽は一の小天地なり數十丈の古欅を寸尺の盆鉢に縮め亭々百尺の森林を寸眸中に培養す疎影横斜の暗香は以て千春の芳芽を集め蒼古磐根の木公は以て萬年の綠を榮ふ悉く是れ盆栽妙味の特色人生樂事の清秀たる者彼の園碁に終日を費し勝敗に腦漿を絞るが如きものと同一視すべからず本書は斯道の寶冊にして平易圖解を備へ一讀其趣味を了得せしむ請ふ御愛顧あらんことを

全壹冊洋裝並製
正價金卅五錢
郵稅金六錢

農學士東條秀介君校閱　江原春夢君著

●果樹草花 盆栽庭造 園藝全書

（全壹冊洋裝）　正價六拾錢　郵稅八錢　（近刊）

園藝の進歩は是れ社會の進歩なり花卉や盆栽や造庭や其高尚にして巧なるの時は社會の嗜好も高尚にして複雜に赴けるの時なり蔬菜や果實や鮮にして美なるもの丶食卓に上るの時は蓋し衛生的智識の發達したるを證するに足らん今や文運日に旺にして人智年に進み社會次第に高尚の域に達せんとせり園藝の事茲に於てか世人の大に注目する所となりたり蓋し園藝は無邪氣にして娛樂の業たり又一方に於ては比較的に利益多くして愉快なる事業の最たり本書は東條學士精細の校閱にして江原氏實驗上の要話なるを以て趣味と利益の大なるといふを待たざるなり園藝者必らず一讀せざるべからず

（甲の一）

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

血塊 月やく

忽ち下る 確證新藥

本劑（調經丸）は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち快通流下する特効あり本劑參劑分を用れば二三ヶ月閉滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止にても必ず立處ろに流下し且つ悪血毒血を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて峻烈顯著なるに付**妊婦**の服用を嚴禁すもし妊婦服藥せば**即座に流産**するを以てなり尤も本劑は何人服用するも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分六拾錢貳劑分壹圓拾錢參劑分壹圓六拾錢特別製分貮圓貳拾錢（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき無効の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「専賣元日新館藥房」の名義に着目し購求あらんことを乞ふ

●わきが（腋臭症） 根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み若惱を挽せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貮圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割増しの事

以上貳藥 **専賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二五四六番）

●最新治療藥着荷

帝國大學病院賞用、効驗著大なる獨逸醫學界新發見の貴重新藥、數十種直輸入着荷致候、需要廣大の品のみ便宜上掲載致し候、價格及び送料は往復端書にて御照會次第即刻回答可致候

（藥名）

◎オルトフオルム ◎燐酸ゴデイン ◎鹽酸ヘロイン ◎トリオナール ◎パラアルデヒート ◎キセロフオルム ◎アイロール ◎タンノフオルム ◎ブロタルゴール ◎イトロール ◎イヒタルピン ◎アスピリン ◎タカヂヤスターゼ ◎ザリピリン ◎ミグレニン ◎タンナルビン ◎トロポン ◎スペプシ子 ◎次撤里ピスミット ◎ザロフエン ◎單寧酸オレキシン ◎純ペプシ子 外數十種

（病名） ◎左記病症特効各専門新藥あり

●下痢 ●虫刺 ●足労 ●頭痛 ●痔疾 ●腋臭 ●脊痛 ●胃弱 ●痳病

●便秘 ●引風 ●氣絶 ●虫歯 ●火傷 ●打撲 ●潰瘍 ●衰弱 ●貧血

●汗疹 ●田虫 ●疥癬 ●陰萎 ●月經 ●子宮 ●催眠藥 ●痳病豫防 ●痢病豫防 ●梅毒豫防

東京日本橋大通り本石町角 電話本局二一八六番

内外藥舗販賣品 直輸出入卸小賣

發賣元 大橋博愛堂

（甲の二）

（甲の三）

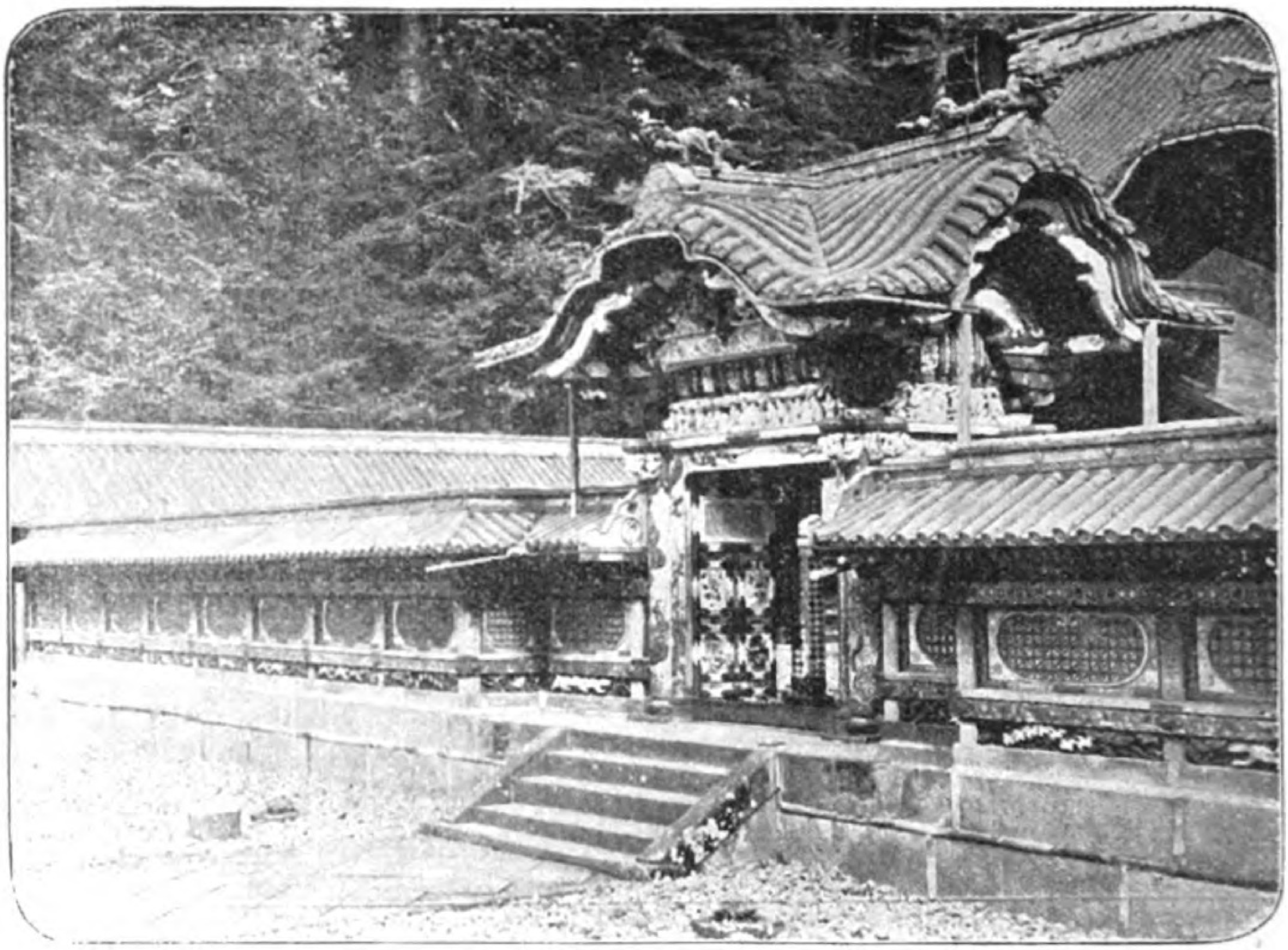
歐州屈指の女辨士

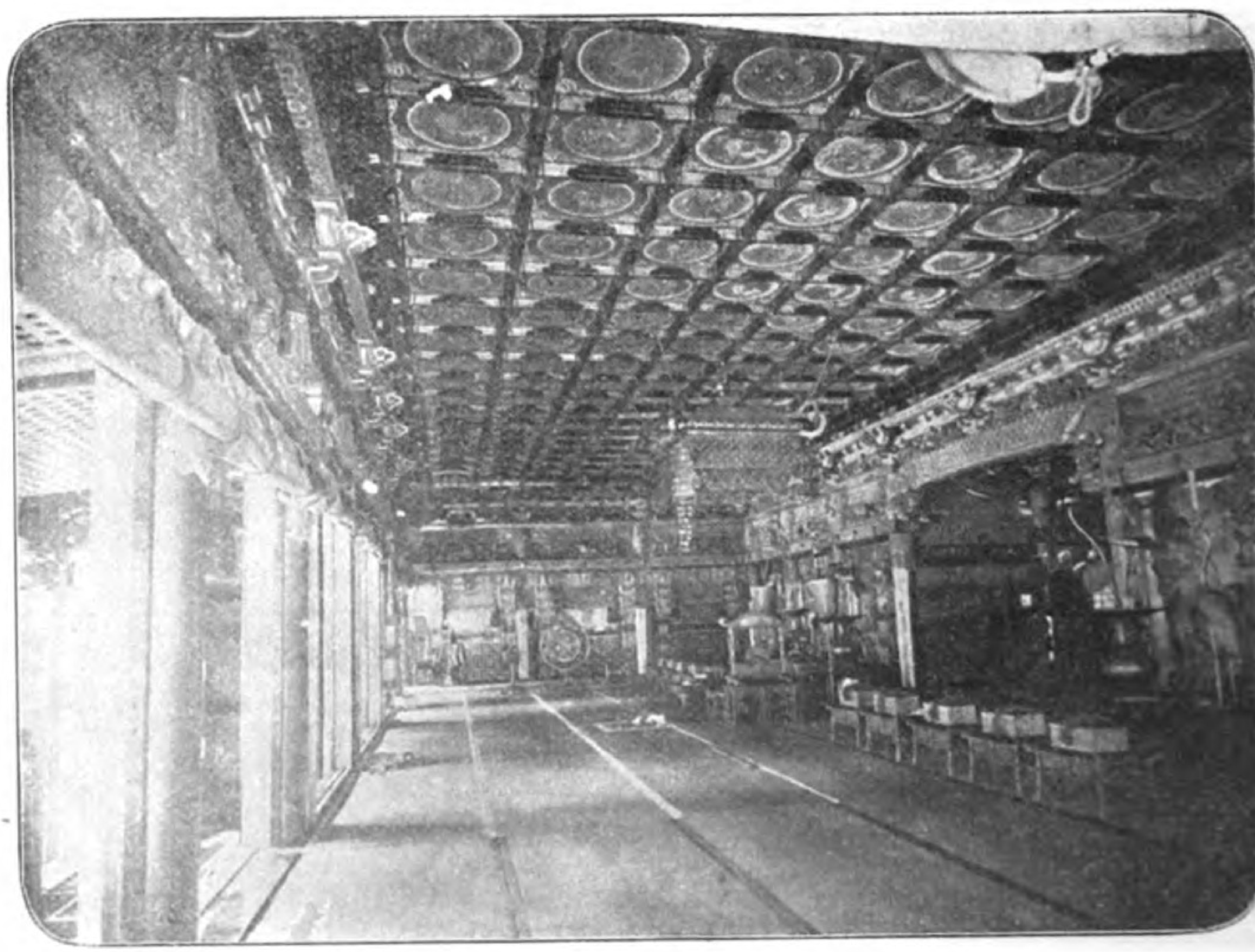


（記事參照）

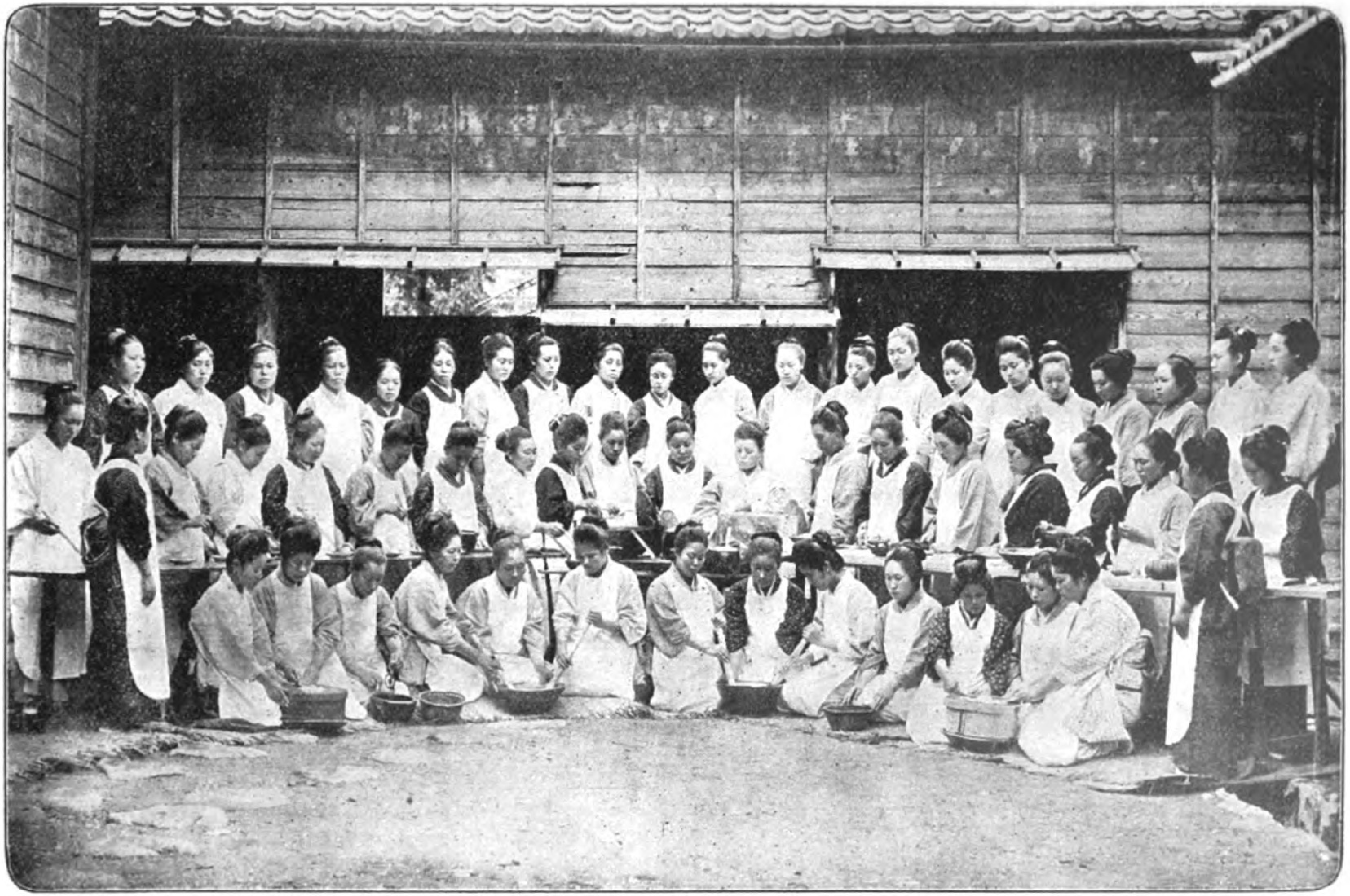
ミセス、ベサント女史

日光陽明門



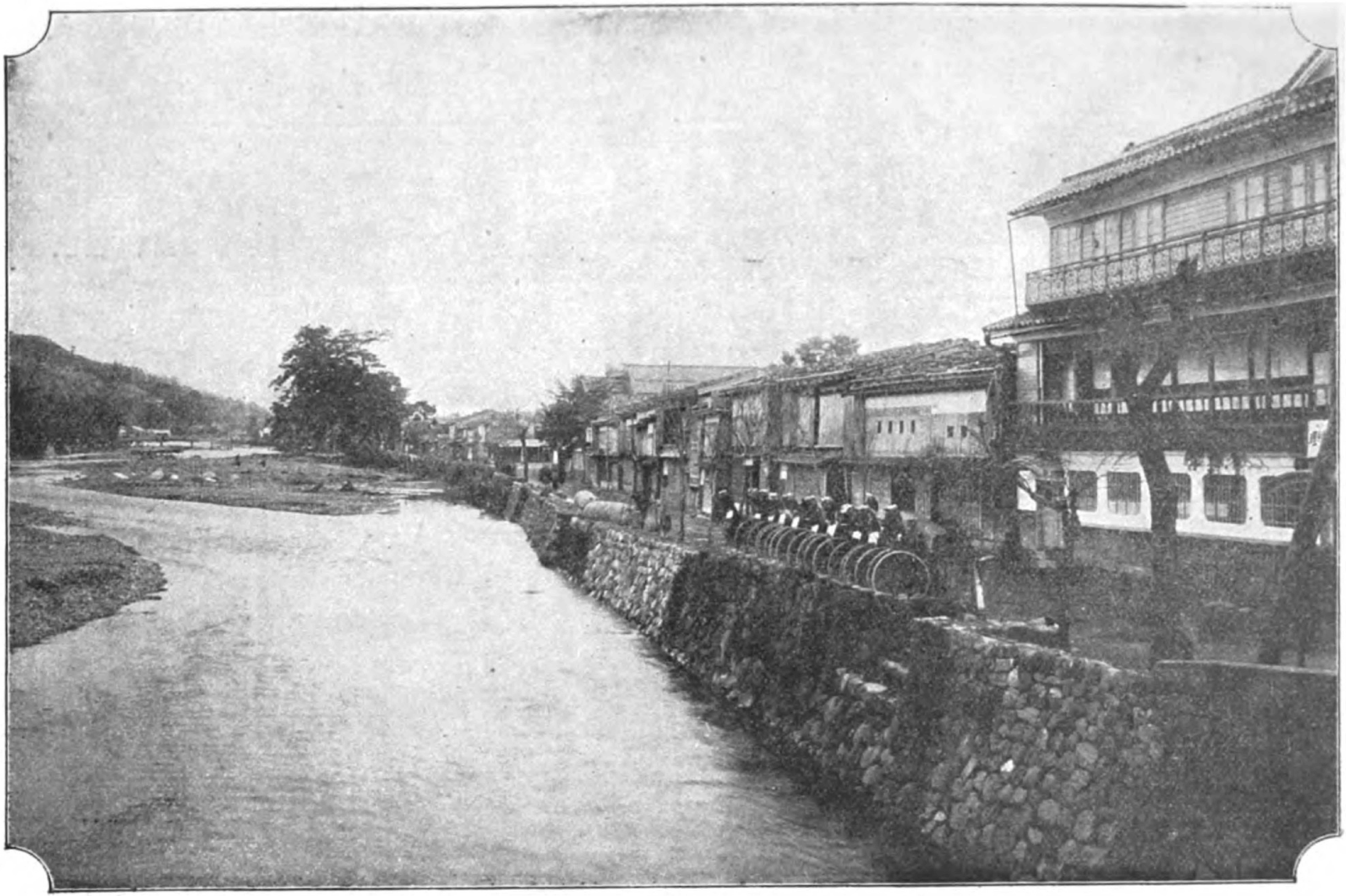


同内陣



長野教育會夏季割烹講習會

北越風景



金澤市淺野川岸

文學士 漢文學科專攻 久保天隨先生述

（正編上出來）

文章軌範精義

全部六册和裝
一册紙數三百有餘頁
每月一回發行

正編上 正價金四拾錢 郵税金八錢

▲正編 上。中。下。
▲續編 上。中。下。

文章軌範の世に行はるゝや、既に久しく、子弟之を講習せざる者あらず、本書は元と、彼土科擧に應ずる者の爲に、特に評選せしに過ぎざれとも、正續十四卷を通讀すれば、戰國の末より、宋末に至るまで、文章風格變遷の大略を領知し得べく、千古に傳へて不朽なるもの、亦た怪しむに足らず、而して古今の註釋、紛然雜出、其多きに堪へずと雖も、徒に無用なる文法を説いて其他に及ばず、因襲の餘に出でしもの、比々として是なり、天隨氏曩に四書新釋を著はし、次いで諸子に及ばむとせしが、刻下の時勢に感するところありて特に此書の撰述を先にせらる、全編を通じ平易流暢なる言文一致體を以て之を敘述し、周匝明白、一字を増減すべからず、就中字義の解釋と故事の説明とは、最も其意を致されしところにして、且つ編中處々に載せし諸家の傳記と評論とは、氏にして始めて能くすべきものなり、初學者は固より論なく、凡そ文を學ばんとするもの、必ず一本を机上に備へざるべからず。

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

一區線●自上野至高崎	山手線●自品川至赤羽
二區線●自大宮至白河	海岸線●自田端至岩沼
三區線●自白河至仙臺	海岸線●自友部至小山
四區線●自仙臺至盛岡	日光線●自宇都宮至日光
五區線●自盛岡至青森	兩毛線●自小山前橋ヲ經由シテ一區線ニ接續ス

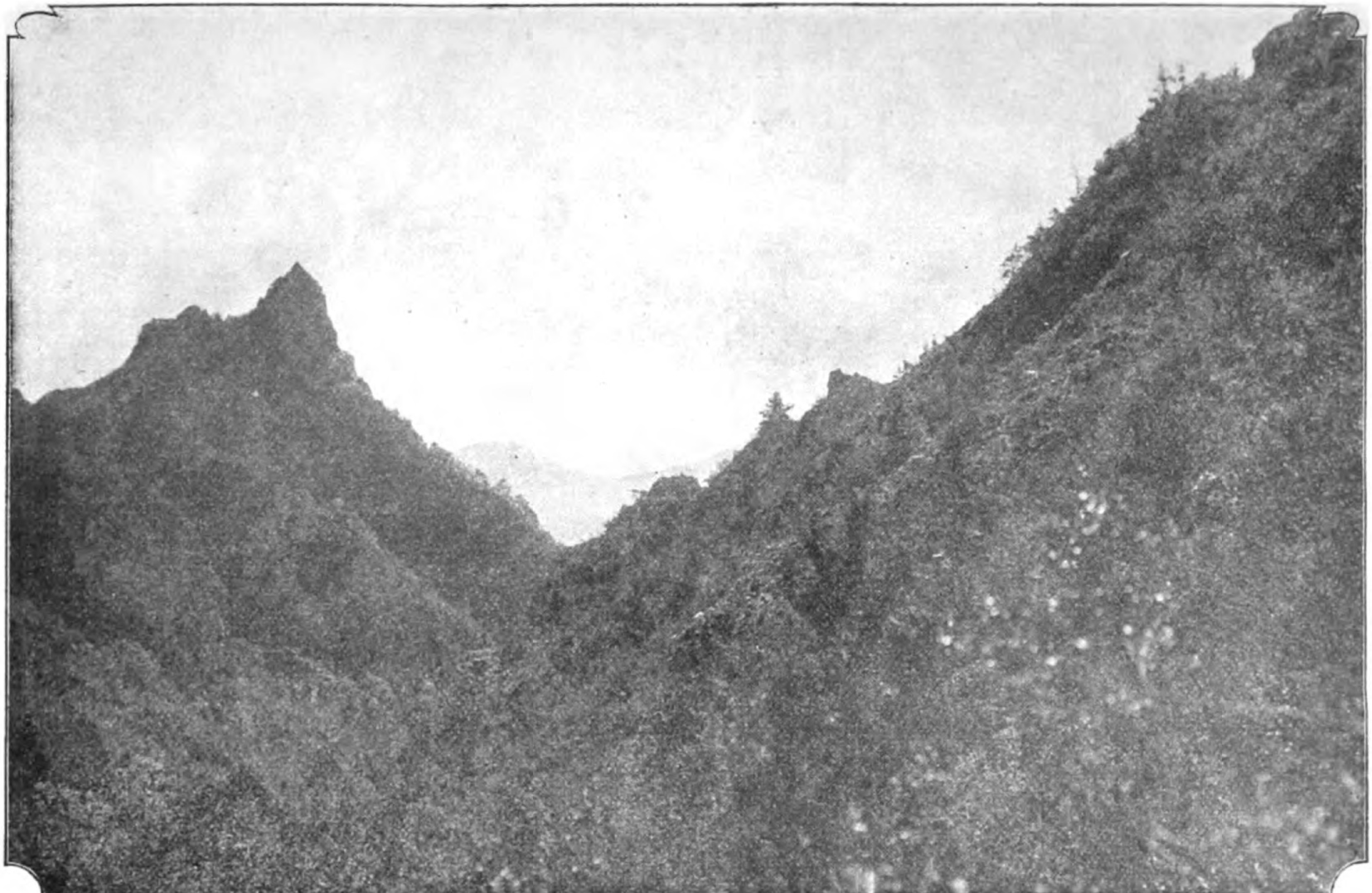
尚本書は前掲の外前付に本社各課所在地、及び、諸般の統計、旅客の注意、入場切符の發賣驛、定期乘車券、回數乘車券、學生の乘車賃金割引、多人數乘車券、列車仕給、旅客列車の別仕立、客車貸切、旅客の手荷物幷に小荷物其他の賃金表、大貨物運賃及手數料、日本鐵道貨物取扱人名簿等、あらゆる旅行に必要なる事項は秋毫も漏らさず明細に列記して遺憾なく實に從來坊間にありふれたるものとは大に其趣きを異にせり故に旅途に上る人は常に旅鞄中本書を收めたらんには旅情の慰籍となるのみならす精細に地理人情物産等をも知悉するとを得べし

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　**博文館**

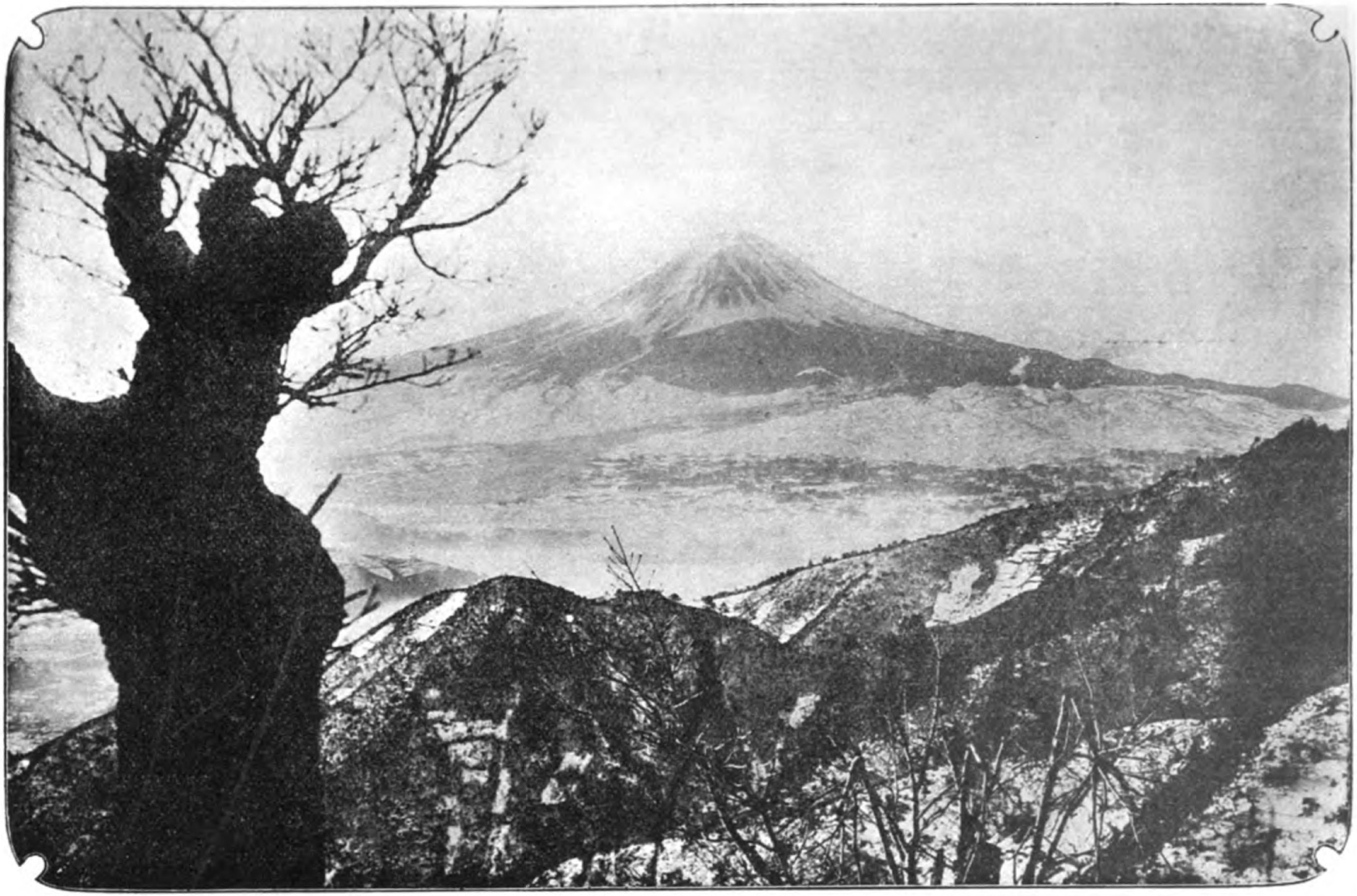
(乙の三)

（乙の四）

南海風景

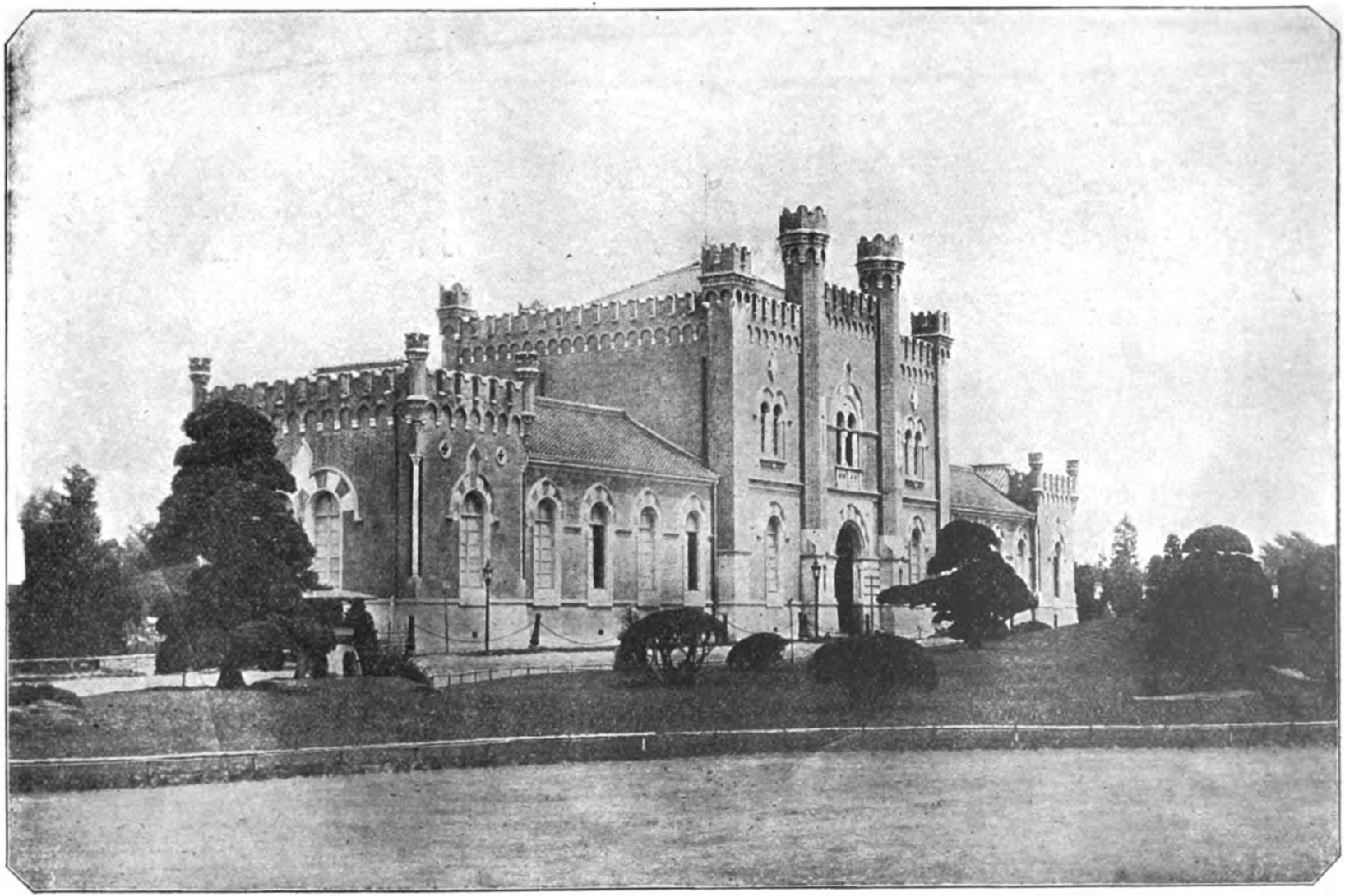


讃岐國小豆島寒霞溪



御殿場の富士

遊就館



東京九段阪上靖國神社境內

山陽風景



岩國錦帶橋

増訂新刊豫告

天城安政君著

増訂 商業讀本

（正價郵稅未定）

全四册 和裝

本書は創刊以來非常なる世上の好評を博し地方商業學校の教科書に採せられたると夥しく終に今日に至り二十版の多きを重ぬ然るに創刊以來年を閲する十年其間法令の改廢世運の進捗に伴ひ削除し改正し増補すべき項目多きを以て茲に大に訂正を爲し材料を増加し前版には未だなかりし海外企傑の傳記を叙し尚地理には東洋貿易に關係ある諸港市を始とし歐米の近況を加へ商品には重要輸出入品の總てを網羅し添ゆるに商況を以てし商事要項にはトラスト、ビルブローカーの如き舊版以來世人の注目する所となりしもの三十餘項を増し其他日清戰役北清事件戰後の經營財政の狀況外貨輸入等に關する事項等あらゆる必要の件を加へ前に三冊なりしを四冊となし挿畫及書式雛形等舊版に更に六十餘種を加へ以て簡潔にして要領を得たる最良無類の商業讀本と爲せり加ふるに舊版は文章稍々難解を免れさりしを新版は極めて平易簡明を旨とせり故に商業補習學校の最良なる教科書にして國語修身商事要項の三科目を此一本に由て教授するの便あり幸に江湖の一顧を待つ

松本重太郎君序文 森一兵君著

●商業大意

（第七版寫眞版挿入）

全壹冊洋裝紙數二百四十頁
正價金貳拾五錢郵稅金六錢

天城安政君著

●商業教科書

（第五版）

全壹冊洋裝紙數六百七十頁
正價金四拾五錢郵稅金十錢

（丙の一）

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

内科婦人科小兒科

女醫 大八木幸子

●午前宅診 ●午後往診

東京市日本橋區濱町二丁目十三番地南九十六號（淸正公前）

畏ク毎號 皇太子殿下 上覽ヲ賜

總裁 二條公爵　議長 本多男爵　編輯長 中村文學士　會務長 篠田法學士

青年議會

議員七萬餘人支部百九十ヶ所七月十日第五期一號發行す入會金十錢會費一ヶ月九錢六ヶ月五拾錢●見本郵券十錢●規則書進呈

東京神田千代田町 電話本局五七一 青年議會



最新特許 安全剃刀

定價壹圓替刃付壹圓卅錢送費二錢
●郵税代用は一割增の事

柄の先端にある事と其の作用にて刃台自在に廻轉し鼻と耳穴を除き思ふ樣に剃れ殊に小兒の頭毛を剃るには至極妙なり

販賣店其地になければ直に左の發賣元へ御注文あるべし

發賣元 東京市日本橋區本石町一丁目廿六番地 三劍商店

肺病

私儀多年肺病にて九死の際隅々一奇法發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券封入にて御照會あれ

安房[illegible]曦村千倉 川名助次郎

無代進呈

書籍○雜誌○發賣目錄○一冊
郵券貳錢送付あれ

東京市神田區錦町二丁目 勉強堂書店

岐阜縣師範學校教諭 松平靜先生著

女子作文教科書

全四冊

三四印刷中

[illegible]

本書は、高等女學校、師範學校女子部、其の他同程度の作文教科書として編纂したるもの也。從來女子用のものとして、世に出でたるものなきにあらねど、多くはたゞ文例を示したるに止まれば、完全なる作文書といふ可からず。本書は即ち、親切に作文の法則を說き、適當なる文例を掲げ、應用問題、自習問題幷に類句等を掲げ練習の便をはかりたるものなれば、教科用として適當なるは勿論、自習用として、また最も適當なり。

發行所 東京神田錦町一丁目十番地 明治書院

（丙の二）

世界お伽噺新刊

巖谷漣山人著（第四拾編）

徳利長者

附り 馬耳大王

正價金七錢　郵税金貳錢

愛蘭土のお噺を漣山人の筆に綴られたのが此編です、一つは徳利長者といひ一疋の牛を一本の徳利と取換へたのが運の開く基となつて貧乏な百姓が大金持になるといふ芽出度お噺一つは馬耳大王といつて貧乏な理髪師が馬の耳ある大王の頭を刈りとう〳〵其國の王になるといふ珍らしいお噺ですからとつくりと讀んで馬の耳に風とならぬやう一寸御斷り申して置きます

最近既刊

浮れ胡弓　渡邊金秋君書

豆の王　山中古洞君書

三ッの難題　中村不折君書

發兌元　東京本町　博文館

速記術

貴族院議長　近衛篤麿公題辭

衆議院議長　片岡健吉君題辭

文學博士　重野安繹君題辭

衆議院書記官長　林田龜太郎君序

衆議院速記主任　若林玵藏君著

●全一册洋裝　正價金四十錢　郵税金四錢

社會言論の發達と共に速記術の需用日々に增加し今や都鄙至る所に其使を見る若林玵藏氏は該術に於て夙に盛名あり出ては議會に敏腕を揮ひ入つては幾多の學生を敎授せらる本書は其傍ら斯術研究者の爲め其奥義を懇切に指導し誰人にも容易に自得する所あらしむ斯術研究者のためには無比の良典と云ふべし今回增訂再版して世需に應す

博文館編輯局編纂

●祝辭演說法（全一册洋裝）　正價廿五錢　郵税六錢

坪谷善四郎君著

●演說討論軌範（全一册洋裝）　正價卅五錢　郵税八錢

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

東京高等商業學校御雇敎師 スワン氏
東京高等師範學校
學習院講師
臺灣協會學校講師 松田一橋君 合著

日常英語新編

全一册 洋装

▲正價金貳拾錢 郵税金貳錢

本書は曩に極東の光を著はしたる英國の碩學スワン氏及學習院講師松田一橋君の合著にして兩氏が多年語學敎授に從事せし經驗に由り特に日本人の爲めに撰はれたり故に之を日常學校旅行社交の四部に分ち各章を甲乙の二課として全編四十五章甲乙九十課より成りぬ要するに甲課は日本人の生活摸樣を寫し乙課は日本在住の外國人の生活摸樣を寫し以て双方實用の英語會話を知了する簡便法を示せしなり請ふ學生諸君は必ず一本を座右に供へられんとを

發兌元 東京本町 博文館

圍碁全書新刊

初段 小林鍵太郎先生編述

近古名人打碁集

全一册 和装 正價拾五錢 郵税四錢

本書は正保より寛政に至る百五十餘年間に於ける名匠の打碁を撰擇し年代を追ふて順次列記せり載する所の碁譜は碁聖道策の手に成れるもの最も多く元丈知得の對局之に次けり蓋し好碁家は之に由て圍碁を研鑽せられたらんには造詣深く堂に昇り室に至る亦た易々たらんのみ實に斯道無二の秘典なり

續刊目次

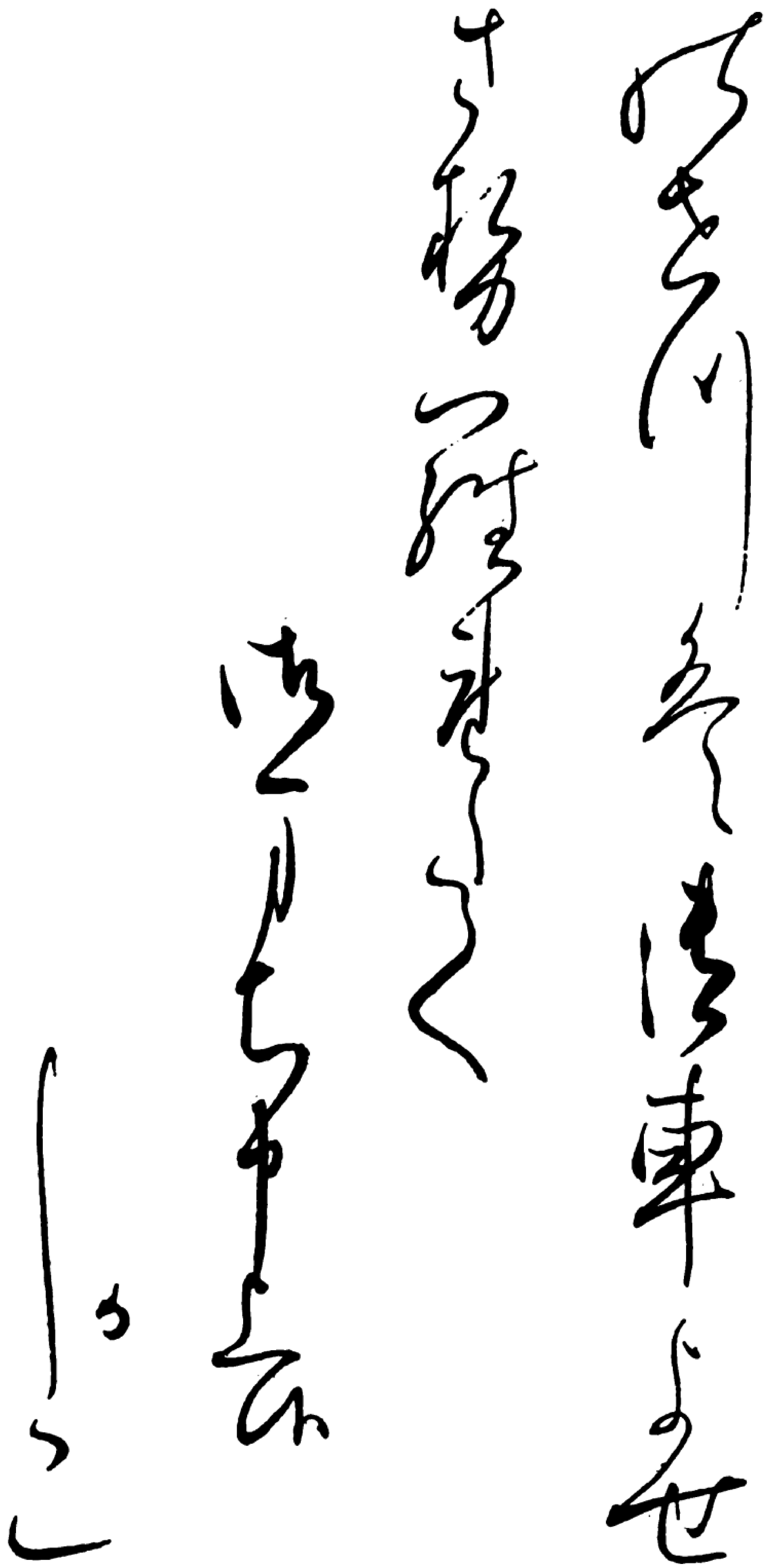
第拾壹編 近世名人打碁集 ▲正價金拾五錢 郵税金四錢

第拾貳編 今代名人打碁集 ▲正價金拾五錢 郵税金四錢

發兌元 東京本町 博文館

（四の四）

山の[illegible]もいまゝ色濃き
さらにいは村を里より深かし
おもふことはふかくなれ[illegible]
前栽乃二重三本い
なにいそしむ[illegible]はけふ[illegible]



阪正臣先生筆

延喜六年和歌月令御屏風八帖料依内勅奉之

八月駒迎　貫之

逢坂のせきの清水にかけみえていまやひくらむ望月のこま

擣衣

風さむみよわくらこ
ろもうつをと
そよめしたえも
きこゆなり
らる

坂正臣先生筆

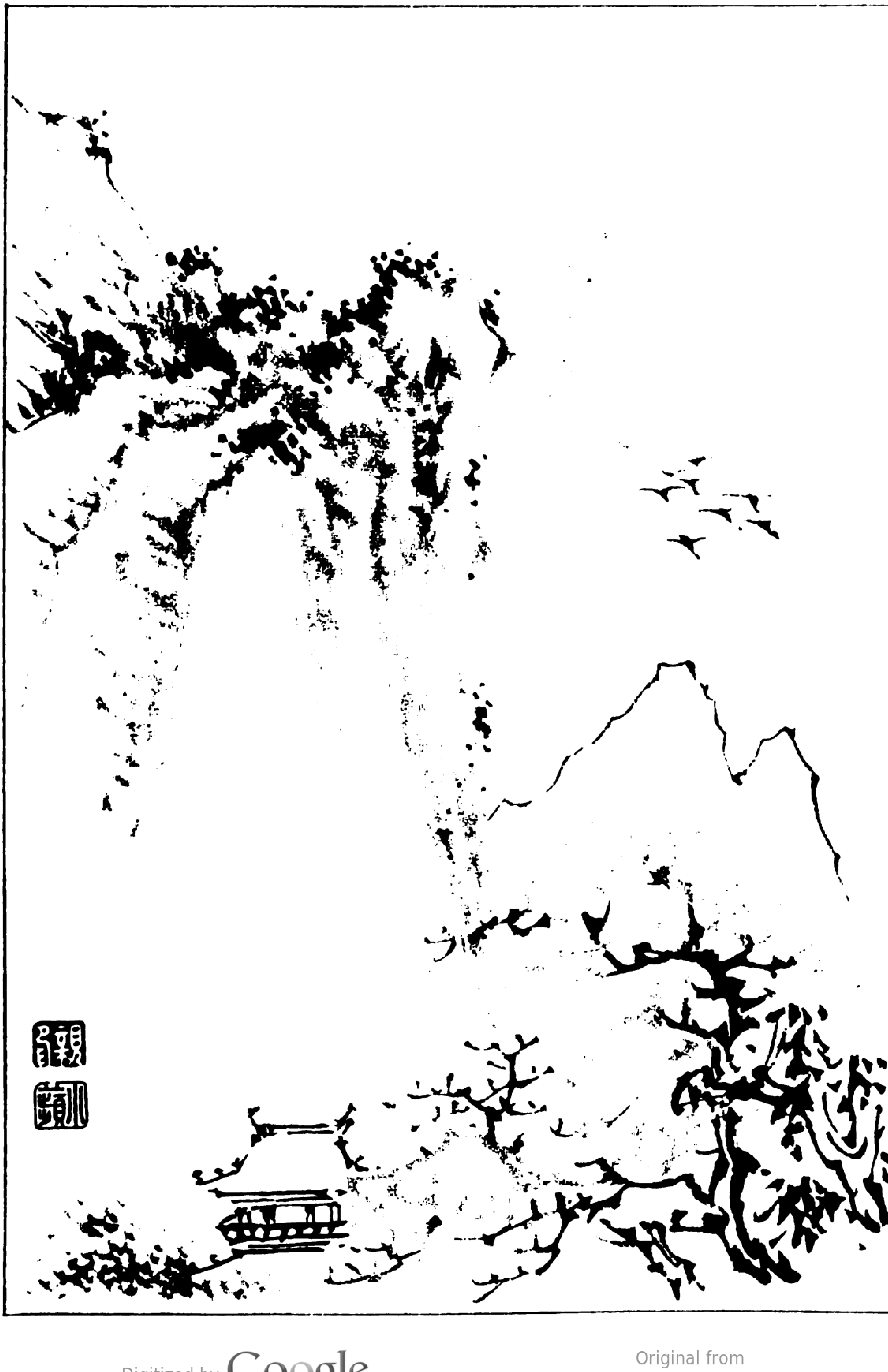
秋草に虫

野口小蘋女史筆



秋山晩霽

野口小蘋女史筆



菊



野口小蘋女史筆

鶴

蔣少小福女史畫



（丁の二）

帝國百科全書

農學士 井上正賀君著

（第八拾八編）

養蠶製絲論

全壹冊洋裝
上製金五拾錢
郵税金拾錢
並製金卅五錢
郵税金八錢

今や我國蠶業に關する學術漸く進歩し之れが普及を計るの必要**眼前に迫**れり從つて之に關する書籍の出版せらるゝこと甚た多く各一得一失あり**本書の特色**とする所は**尤新の學理**によりて其記述の順序及繁簡共に宜しきを得讀者をして一讀直ちに學理の妙を了解せしむるもの養蠶家必讀の要書なり

文學士 速水滉君著

（第八拾九編）

心理學

全壹冊洋裝
上製金五拾錢
郵税金拾錢
並製金卅五錢
郵税金八錢

智識なくして所謂精神科學を學ばんとするは恰かも數學の智識なくして自然科學を學ばんとするが如し輓近此學に關する典籍梓に上るもの決して鮮からず然かも其多くは泰西諸家の飜譯に止まり讀者其解し難きに苦まざるはなし著者之を憂ひ**歐米最近の著書**を參酌し**自家の私見**をかへて此書を著せり例證を日常の經驗に採り文字平易にして明快內容又卑近に失せず高尚に流れず其要領を叙述して殆んと剩す處なし庶幾くは斯學に志を有するもの江湖諸君の需用に應することを得ん

發兌元　東京市日本橋

（丁の二）

書新刊豫告

法學士 野口弘毅君著（第九拾編）

銀行新論

銀行は資本の融通を圓滑にし其需用供給を調和する所の機關にして經濟社會一日も之を缺くべからず然れとも其由來性質組織作用及營業の方法等を知悉せされば之を運轉利用して便益を受くる事能はざるべし而かも從來之に關する眞書なきは吾人の最も遺憾とする所にして本書は則ち此缺を補はんか爲めに公にせらる書中收むる所銀行の定義其活用種類組織及び紙幣の發行及び各般銀行の業務に關する評論なり其考證の該博立論の精確なるは今更喋々の要なし讀者幸に一讀して其の眞價を知られたし

全壹冊洋裝
上製金九拾錢　郵稅金拾錢
並製金卅五錢　郵稅金八錢

法學士 小原新三君著（第九拾壹編）

行政法各論

國家行政上の活動は百端にして恰も端睨すべからざるに似たり然れとも仔細に吟味し來れは此間又一定の次序あり常規ありて存ず行政法學の由りて存する所以なり本書は行政汎論の著に次て著者が特に稿を起されたるもの各部行政上の活動に關するあらゆる一切の法理はすべて最新行政法學上の見地に依り從横に論斷し解說し以て法の精神を闡明せり著者の行政法學上に於ける學識と見地とに關しては世既に定評あり苟も我行政の實躰と理論とを知らんと欲せらるゝの士は一本を座右に備へられたし

全壹冊洋裝
上製金五拾錢　郵稅金拾錢
並製金卅五錢　郵稅金八錢

區本町三丁目　博文館

（丁の三）

農學士石渡繁胤先生校閲池田榮太郎君著（製本出來）

桑樹栽培全書

全壹册

洋裝脊皮金文字入
紙數七百餘ページ
正價壹圓貳拾五錢
小包目方四百匁

栽桑に關する著書少からずと雖概ね其一方に偏する者のみにして全般を詳説したるものなし是れ斯業者の等しく遺憾とする處なり本書は著者の鑑みる處あり積年の辛苦を經て之を調査したるものにして筆を栽桑の沿革に起し苟も栽桑に關する事項は氣候土壤肥料桑樹の品種桑園開墾桑樹繁殖耕耘肥培は素より病害驅除桑園小作法より收獲收支に至る迄諄々詳説して餘す處なし加ふるに石渡農學士の懇篤精密なる校閲を經て公にせる空前の大著述なり當路の士一本を座右に供へて斯業改良の良師友となせ

農學博士 横井時敬君著	栽培汎論	上製 五十錢 郵税十錢	並製 三十五錢 郵税八錢
農學士 田中節三郎君著	栽培各論	上製 五十錢 郵税十錢	並製 三十五錢 郵税八錢
農學士 恩田鐵彌君著	稻作改良法	全一册 洋裝紙數二百四十頁	正價 三拾五錢 郵税六錢
福羽逸人君著	蔬菜栽培法	全一册 洋裝紙數五百四十頁	正價 七十錢 郵税十二錢
福羽逸人君著	果樹栽培全書	全四册 洋裝紙數六百七十四頁	正價 一圓五錢 郵税十六錢
江原春夢君著	園藝全書	全壹册 洋裝紙數二百五十八頁	正價 金六拾錢 郵税八錢
池田榮太郎君著	栽桑新論	全壹册 洋裝紙數二百五十頁	正價 三拾錢 郵税七錢
岩淵平介君著	桑樹病害論	全壹册 洋裝紙數二百四十五頁	正價 三拾錢 郵税六錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（丁の四）



第貳卷

第拾參號

女學の趣意は婦人に空想を奨むるの謂にあらず、實行を促がすの謂なり。文机に凭つて歌の題を探ぐるの謂にあらず、臺所に出てゝ家政を行ふの謂なり、深窓に在りて糸竹を弄ぶの謂にあらず、世間へ出でゝ廣く事物に接するの謂なり、飯も炊くべく小兒も產むべく洗濯もすべく。十露盤も持つべし、舞踏もすべく看病もすべし、手紙も書くべく、自轉車にも乘るべし、小供と一緒に繩飛すべく、老人の爲めには粥を煮て薦むべし。姑の爲めには按摩をもすべし。



樂しき家庭

東京音樂學校長　渡邊龍聖

家庭團欒の娛樂は人生の最大幸福なるが我國の家庭を歐米各國のそれに比して我國人は歐米人と同樣この幸福を亨けつゝあるかと言はゞ遺憾ながら然らずと言はざるを得ず、余が始めて米國に渡航して或る下宿屋へ投じたる時、下宿屋の主人は一日余を自分の居間に招きたれば余は直に其の室に入りしに、其の家の一家族即ち主人夫妻と小供二人とは樂しげに團欒し居れり、即ち主人は兄の子を膝下に坐せしめ、妻は弟の子を抱き、夫妻共に子供を愛しつゝ談笑し居れり、偖主人は先づ余に椅子を與へて、余を兄の子供に紹介して曰く、この人は日本の人にて、幾千里の海路を渡航し來りし人なれば未だ友人に乏しく且つ氣候にも風土にも慣れぬ方なり、汝はこの方に同情を表するや否やと問ひたり、依つて子供は如何にも氣の毒氣なる風情にて、充分に同情を表する由を答へ、室内の書棚より繪畫或は寫眞などを出していと懇切に余を慰め、それより母にヲルガンを鳴らして貰ひ、自分は其のヲルガンに合はせてスイートホームの舞踏を始め、且つ歌ひ且つ舞ひつゝ子供の力の及ぶ限り余を慰むることに努めたり、暫くしてこの愛らしき兒の舞踏終るや、弟の子供は自分の愛翫する翫弄物を余の前に持ち來りこれも同じく眞情を凝めて余を慰め、それより主人が自からも歌ひ妻なる人は絶えずヲルガンを奏し、一室の裡和氣靄然として愉快限り無く家庭團欒の快樂は天涯萬里の孤客たる

余をして無量の感心を起さしめたり、これを見ても歐米の家庭は我國の家庭に比して如何に樂しきかを知るに足るべく、翻つて我邦の家庭の有樣が彼れの家庭に比して雲泥の相違あることを知るべし

要するに人生の最大幸福たる家庭の快樂を增進せしめざるは文明の一缺點なりと思惟す、蓋し我國に於ける家庭の大部分がこの種の快樂を享くること能はざるは啻に家庭の組織の善良ならざるが爲のみならず、全く社會の狀況の之を然らしむる處にして社會の改良は家庭改良の先決問題なるべし、然し社會の改良と云はゞ問題頗る漠然となり、決して一朝一夕に談ずるを得べきものにあらざるも、先づ社會に於ける種々の習慣を改良せざるべからず、則ち歐米にては多く家に在つて快樂を得るを目的とし我邦にては家外に於て快樂を得んと欲するの傾向あり、この根本的の習慣を改良すること最も必要なり、我國現今の有樣を視るに、少しく社會へ顏出しを爲しつゝある紳士は種々の會合に出席すること多く、此會は日暮頃より相集り會の目的たる相談其他を終し後一同會食する習慣あり隨て時間も長く殆ど終夜を費さゞるを得ざる事多しされば會を終て歸宅せし時は既に自宅に於る晩餐の時間を經過し家に在りて留守を守りつゝある主婦は主人と晩餐を共にする事能はずして趣味無き食事を爲さゞる可からず、啻に無趣味の食事を爲すのみならず、時には主婦が良人の晩餐にとて良人の平常嗜好する料理を調へつゝ樂んで其の歸宅を待ちつゝあるも主人は會の多き爲め折角快樂たる晩餐を家族と共にする能はざるとあり、また主婦も只一人默然として時計のみを眺め其の針の午後十時、十一時を過ぐるも尙良人の歸宅せざる爲め深更まで無聊にて過さゞる可からず。倂主人の方は遂に通知を受けし會に行きたる爲め晩餐の時間を誤り八九時に至つて空腹を忍びつゝ歸宅すれば主婦は主人の歸宅如

何を知る能はざれば晩餐の料理は既に喰ひ盡して空腹なる主人に食物を與ふること能はざる事多し、これ等は全く主人及び主婦の罪にあらずして社會の罪なり、即ち家庭の改革に社會の改良に待たざるべからざる所以なり。

人動もすれば其子女に美服を纏はしめんと欲して金錢を浪費するも其心の飢ゆるに至つては更に意に介せざるなり

主婦と言文一致（一）

嘉悦孝子

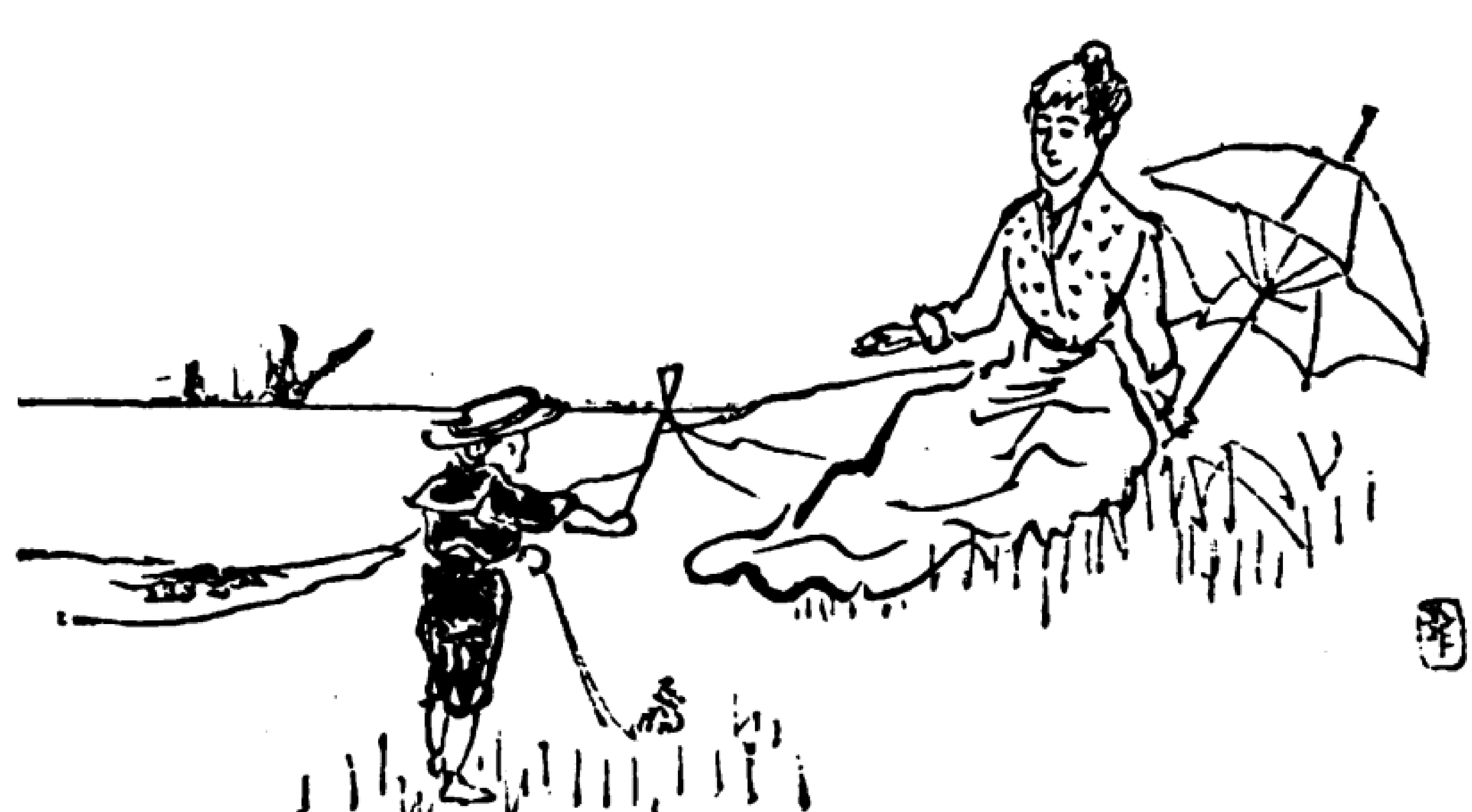
題目は既に陳腐であつて、言ふ處は又諸大家先輩の説き盡されたるもの、今更茲に繰返して喋々する必要もありますまいが、しかも尚は世の主婦たる人に對して、言文一致の必要を申して見たいと思ふのです。

國民教育の根底となる可きは、普通教育上に於いて、柔弱不完全なる擬古文を撲滅して、枯屈聱牙なる漢文直譯體を排斥して、更に國語の統一を計つて、完全なる日本文をこしらえねばならぬ事であるとは、凡そ心ある學者教育家のお說きになる處であります。しかも其國語統一を計る上に於いて、先決問題たる可きは言ふ迄もなく如上の各種の文體を全滅して、茲に口語を基本とせる所謂言文一致體を用ゐねばならぬ。のみならず寸刻も逡巡躊躇する事なく急速に助長して、以て日本現時の普通文章は、言文一致體を措いて、他に斷じて用ゐしめない樣にするのが尤も焦眉の急かと思れます。即ち此を普及せしむる方法として、各種の機關雜誌あり、各種の團体あつて、日夜專心一意斯道普及の方法を考へられる先生方も、少なくないのであります。が、其普及の遲々たる所以は、未だ其方法の宜しきを得ないからだらうと思はれます。云ふまでもなく小學校敎科書を言文一致として、小學校の作文を言文一致として、次代國民に於いて初めて完全なる功果を、見やうとする思召は、眞に異論も御座いません。

現時、道德教育が其効果なきを恨めしく思ふ教育家、其家庭の如何を知り給はぬが如く、言文一致主張者が、其効果を思ふ樣に見る事の出來ない事を恨めしく思はれ乍らも、尙ほ其普及を杜絕する關門なる家庭の如何を考へられないのではありますまいか。

次代に於て完全なる効果を見やうとせらるゝ方法も至極結搆で御座います。が私は聊か待ち遠しい樣な感じが致します。今直に其効果を得たいものとは、蜀を望むやうなものかも知れませんが、しかし別に夫程困難な事もなからうかと思はれます。

先づ一家の主婦たる人が、進んで言文一致を賛成し、實行する事が差當つて甚だ必要と思ひます。然るに今の一家の主婦たる人は如何。言ひ換ゆると、此等の主婦たる人々は如何なる經歷ある人でありますかと言ふ事を考へねばなりますまい。



中流以上の家庭の主宰者は如何なる教育の下に養はれたるものでありませうか。皆さうではありますまいが、中には或る時代に於いて、宗教學校に養てられ、日常祈禱を生命としたる人、もしくは普通の女學校に於いて、女大學流に育てられたる人、もしくは男女七歲にして席を同うせずとして、もの堅き母樣に育てられたる人が多くて、恐らく現代の所謂主婦たる人の、少しても文字を解する人の經歷を考へ來らば、斯くの如きものに外ならないと

想像されるのであります。

更に一歩を進めて、此等の人の讀んだ讀物は何かと云ふと、新約全書でないなら、源氏物語、枕草子の古文、加茂眞淵本居宣長の擬古文、此等の材料を以て組織されたる所謂高等女學校用國文讀本であるのであります。其人々の修學時代に於ては、其他に讀んだものとても、まあ新聞か小説位かと思はれます。

斯くの如き物に依つて作られたる主婦の頭には、只擬古文の智識はあつても、猥しい小説的の下劣なる思想はあつても、其國語と云ふものが如何なる物である事をも、言文一致が卑俗にして貴女の筆に上すには餘りに賤しいものとして。しまつて其が眞の文章である事を御存じにならない事は當然の事であらうと思はれます。

八百屋の注文書に、

「一筆しめしまゐらせ候。徒然と降りくらしたる春雨のいとゞ淋しきに、昔の事をも思ひ出てまし。若菜一籠送り届け給ひてむや。かしこ」と、書かれた主婦もあるとか。

呉服屋の注文書に、

「むつきの時に植ゑ置き侍りし桐の木の、花散り花咲いて、幾春秋を送り迎へ、うれしくも近き中に其子の嫁く事となり侍りぬ。用意にもと見侍りなむ。帶の樣々友染等も持ち越し給へ。かしこ」と書かれた主婦もあるとか。

斯の如きは眞に其一例に過ぎぬのであります。日毎日毎に其滑稽を演じて、恬として耻ぢざる者の如く、自らの無能無識を標榜して、世の物笑となるを知り給はぬお方は蓋し少なくない事でありませう。よし、世の物笑が如何あつても、滑稽がいくら演じられても、もし日常の用事が、それで務まるとすればともかく、大切な其用事までが曖昧の中に葬られて、遂に良人の夕食の料理にも間に合はぬ不都合を生ずる事もあらうかと思へば

誠にお氣の毒な次第です。

斯くの如き主婦を以て組織されたる社會では、未だ言文一致を用ゐる勇氣がない事は無理ならぬ話て、敢て疑ふまでもありません。しかも此主婦の勢力は、其男子の半面として、決して薄弱なものでありません以上は、世の言文一致主唱者は先づ其主婦をして、言文一致の權下に服從せしめるより最善の方策はないかと思はれます。

一國の文化は、國語の發展にあると云ふ言語學者の說が若し間違つた言てないとすれば、國語の消長は一國の盛衰に關すると云ふ教育家の說が虛言でないとすれば、英國や獨逸が比較的正確なる國語を有して居る丈け、それ丈け長足の進歩をなして、朝鮮や支那や不完全なる國語を有して居る丈け、それ丈け長足の退歩をなしたといふ事が現實であるとすれば、國語の統一を計る第一着の起點の言文一致を用ゐると云ふ事は、疑もなく國民として當然の義務なる事を信ずるのであります。

主婦たる人、母たる人は兒童に教育を受けしむべく定められたる國家の明文に服從しつゝ、尙ほ、不文の義務を守らざるものあるは、誠になげかはしい次第であります。

家庭時言

文學士　大町桂月

女同士

女三人よれば姦しとかや。凡そ世の中に、うるささは蚊也、蠅也、教育なき女也。

教育なき女、一人あるだに、始末にをへ難し。多く集れば、益厄介也、知らず、女同士より集りて、何事をか演出する。其最も下等なる者にありては、所謂井戸端會議

となる。同じ棟割長屋の一女子が妾にてもなければ、之を光榮とするを、なほ世の俗物が大臣になるを光榮とするが如し。一く〱仕合のよき女かなとまづ其女を羨み、次に娘の顏のおかげにて、左團扇にて暮さるべき其父母を羨み、愈す〻みて、其父母の容貌に及び、あの親にして、か〻る器量よき娘をもてるは、とんびが生める鷹にやと、そろ〱惡口を始む。その惡口は、うつりて、そこに居合はせぬ隣人におよび、わが姑に及び、終にはわが亭主の惡口までさらけ出す。あまり多く言ふも、筆のけがれ也。山の神の井戸端會議は、日比谷あたりの蛙のより合ひよりも、今少し下りたるものにて、うるさくて、やかましくて、とても聞かれたものに非ず。嫉妬、猜忌、邪推、ひがみ、根性、惡口、讒訴、陷擠、愚痴、未練、狹量、妄りに他を羨むを、餘りに小毀譽を氣にするを、下らぬ事を苦にすることなどは、これ敎育なき一般の女子に免れざる通癖也。

所謂山の神よりは大に進みたるものとても、なほこの通癖より超脫せるものは稀也。校舍などに集れるものを見るに、さすがに表面は女だけにおとなしき也。をとこの如く喧嘩をせず、つかみ合ひをせず、同盟休校をなさず。されど、內心をさぐれば、全く表面とは反對也。これその厄介なる所以也。表面にさらけ出して亂暴する男子が御し易くして、表面におとなしき女子が却つて養ひ難き也。之を物にたとふれば、男は犬也、女は猫也。男は蟬也、女は螢也。男は蟹也、女は蛇也。男は瀨にはねる鮎也、女は泥にもぐり込む鰻也、男は栗の實也、女は薔薇の花也。

か〻る女同士のより合ひ、表面は何等の風波もなきが如くなれど、裡面は即ち鼎沸す。邊幅をかざり、城廓を設くるが常なれば、到底肝膽相照らすと云ふが如き心交は、之を女同士の間に求むべからず。しやべれば、おしやべりと嘲り、だまつて居れば、おすましさんと嘲

る、活潑なれば、お轉波と譏り、おとなしければ、猫の皮かぶると譏る。出來なければ輕蔑し、出來ればそねむ。先生にほめらるゝものあれば、且つ羨み、且つねたむ。終には其先生が偏頗なりと恨む。先生が一寸でも一人の顏を見れば、早や氣があるものと邪推し、やさしくすれば、つけあがり、叱れば泣いて、通す。何事にも氣を廻はしすぎ、ひがみて氣さとれば、女の前には、うかと口がきけず、うかと褒むるをも出ず。成績表を示せば、優等者が他よりそねまれ、いぢめられて、かはいさう也とて、成績表を示さゞる學校あるにても、如何に女同士といふものは、嫉妬心がつよくして、內心よりうちとけて親しまぬものかを知るべし。女にありては、學校の成績よきことが、何よりの榮譽也。席順の下になることが、何よりの心配也。かくて、自



から奮發すれば、それてまだよけれど、自分の足らぬことは棚にあげて、他をねたみ先生を恨むにいたりては、其愚及ぶべからず。概して女は感情の動物也。感情とても、同情に富むとか、思ひやりがあるとか物のあはれを知るとか、自然の美、藝術の美を愛するとかと己れを離れたる感情が發達し居れば、洵に結構なれど、あいにくそのやうな感情は發達せずして、發達せるものは、おもに己れに關する私情也。女子は到底己れを空しうすること能はず。人が何かさゝやき居れば、己れの惡口を言ひ居るに非ずやと、先づ氣を廻はす、何事にも己れといふことを離るゝ能はず。こゝに器量よきものが、よき所へ嫁入りしたりとせんに、女子が之を聞きて、まづ浮び及ぶは、己れの器量の如何也他の嫁入を聞きて、祝意はつゆなくて、却つてくやし涙

をこぼす。私情の動物も、こゝに至りては呆れはてたもの哉。たゞ女子が私情を脱し得るは、其生める子也、其愛する夫也、稍下りて生みの親也。兄弟とても、往々私情の衝突を免れず。繼娘は、必ず繼母と衝突す。嫁は必ず姑と衝突す。女朋輩は必ず喧嘩絶えず。女學生同士は、必ずうちとけて親しまず。元來女子は柔弱なるものなれども、私情衝突するにいたりては、隨分殘酷なることをしでかすもの也。「戀しかりけり、戀しかるらむ」と夫の妾に同情をよする女は稀に見るの例にして、夫の死後、妾をなぶり殺しにし之に小便ばりかけて甘心せし漢の呂后のやうな餘り過激なることは出來ずとも、多少之に類することをなすが常也。平生は夜行する事の出來ぬ女も、瞋恚のほむら胸にもゆれば、牛 蟲 をもなす也。他の女をのろひ殺さむとする也。嫁をいぢめて快しとする惡婆もあり。朋輩を追ひ出して途方に迷はせて喜ぶ婢女もあり。弱を扶けて、強をくじくは、男子の意氣地、男の強きにたよりて、弱き女同士をいぢむるが女の常也。而して強き男を我方に控へ居れば、いよ〳〵強く他の女にあたる。夫が我に向つて鼻の下長しと自覺すれば、益はげしく姑と衝突す。女は概して依賴心の甚だしきもの也。依賴心甚だしきが故に、不平も多く、怨恨も多し。例へば、つたかづらの如し。蔦は獨立する能はず、何か立木にまつはらざるべからず。蔦が松にまつはるは、女が強き男を得たる也。されど、男があまり強すぎて、親切氣がうすらぎても不可也。例へば、朝顏が大木にまつはり難きが如し。されぱとて、強みの方がなくなりても不可也。例へば、柳の枝に南瓜のぶらさがるが如し。女同士のよりあひに至りては、蔦が立木を得ずして、蔦同士にてからみ合へる也。洵に始末がつかず足の入れ處もなき也。

余豈に妄に弱き女子を罵らむとする者ならんや。余が說きたる所は、女にても、わけのわかりたる人の必ず

首肯する所なるべし。又救濟せむと苦心せる所なるべし。之を救濟するの方法は、もとより一朝一夕に說きつくすべきに非ず。要は、獨立心を養成し、私情を抑へて公情を發達せしめ、知を明かにし、意志を確くするに在り。而して此に達するには、學問藝能の敎育のみにては不可也、家庭敎育と社會敎育と相待つて、精神を修養するが肝腎也。

質素の辨

携帶品、道具の類は、實用を辨ずれば足れり。その上の欲を言へば、品質丈夫にして、長持ちのするを尙ぶ。今一歩すゝめば、少し贅澤なるも、身分相應なれば可也。すべて貴顯富豪を眞似て、身をかざり、人に誇り、實用よりは、みゑを先きにし、贅澤をきはめ、善美をつくさむとするは、甚だ以て不心得也。



月に千圓以上も收入ある人が、金時計をぶらさげるは、その人に取りては、必ずして贅澤にあらず。されど、百圓やそこらの收入しかなきものが、その眞似して金時計をぶらさげるは、身分不相應也。中には眞の金時計を買ふの餘財なくして、金着時計にて、ごまかさむとするもの多し。さりとはさもしき心根哉。

余は信ず、衣裳や、携帶品や、すべて身分相應にて目立たぬものかよし又萬一紛失破損するも、さまで惜しからざる位のものがよし。同じく金時計を失ふとしても、富豪の身にはさまで惜しからざるべく、又再び之を買ふに嚢中毫も痛痒を感ぜざるべし。されど、借金までして之を買ひ求めたる人は、大に惜しかるべく、又再び買ふと難かるべ

く、さればとて、今迄金時計をぶらさげたるものが、今更白銅の時計もぶらさげられず、こゝに何とか無理算段せねばならざるべし。よき衣服つけ居らば、他にしみなどつけられし時、大騒して口惜しがるが俗人の常也。又つひわが携帯品や、道具をこはされさる時、且つ惜しみ、且つ怒り、どなりちらすもの多し。一家の主人、妻君が來客に對して、話などなせる時、俄に物のこはれたる音すれば、その客に對してにこ〳〵せし面相俄にかはりて赤鬼の如くなり、又青鬼の如くなり、客の前もかまはず驚いてふりむきて、ほんの過失にてなしゝものを、情用捨もあら〳〵しく叱りつくるは、余のしば〳〵見し所、さりとは賤しき品性もあらはれて、さも、しくも、かたはら痛きもの也。而してこれ畢竟するに身分不相當に奢美なるものを所持するに基く。物慾の累をなすと、亦甚だしい哉。

余は漫に口に之を言ふのみならず、現に實行し來れり。余は今日まで身分不相當の贅澤物をもちたるヿなし。余が身邊の用を辨ずるもの、机にまれ、硯にまれ衣服にまれ、時計にまれ、路にをとしても。すりに取られても、小兒や女中に過失にてこはされても、毫も惜しからず、又余の財力にていつにても買ひかへの出來るものを所持せり。懷中時計は、昨年までは、四圓にて買ひたる白銅製を用ゐ居りしが、老朽事にたへざるに及びて、七圓にて鐵製をかへて。銀時計だに買ひたるヿなし。その餘のものは、くだ〳〵しくは言はざるべし。余とても、物の美を解せざるにあらず。善美なるものが、身のまはりにあれば氣持よからざるにあらず。されど好んで質素に甘んずるは、金錢の用途他に多きにもよれど、また此用意あるによる也。

尤も職業の如何によりて、一概にも言へず。訪問を業とする人が、餘り質素なる風をなし居れば、門前拂ひをくはさるべければ、止むを得ず體裁をよ

くせざるべからず。また信用のなき醫者や代言人なぞの衣服、玄關も、むしろ自分不相當に張らざるを得ざるべし。かすりに兵兒帶にて通し、老西鄕も、維新前、遊說してまはりし頃には、可成り立派なる風をなしゝとかや。たゞ止むを得ざる塲合の外は、すべて質素に甘んずべきもの也。

　さればとて、必ずしも價の安きものを用ゐよといふものに非ず。丈夫を主とし、また自分相當を主とすべし。紳士たるものが、强ひて書生の直似せずともよき也。妻君が下女の眞似せずともよき也。例へば、衣服の如きも、木綿物よりは、紬類が、見てもよく、且つ丈夫にて、遙に長持ちのするものなれば、紬類を用ゐるが却つて德用なるべし、余嘗て三圓にて山高帽子を買ひしに、半年かぶるかかぶらぬに、ねぼけ色になりかけたり。或日他家にて小



供に踏まれて、われ目を生じ、またかぶること能はざるに至れり。よりて、今度は五圓にて新に買へり。細君驚いて曰く、御身も追々紳士的になり給へる乎。と余笑つて答へず。其帽また今度は細君の目の前にて、わが子に踏まれたり、一時はつぶれて凹みたり。然るに二圓だけ高き効能はこゝにあらはれて、之を直して見るに、何等の痕跡をも印せず、何等のわれ目をも生ぜざりき。

盜難

　一家をもち居れば、いつ盜難あるかもはかられず。ねる前には、必ず一度は其事を思うて、用心すべし。まづ戶じまりを嚴重にせざるべからず。戶じまり如何に嚴重なるも、なほ盜の入り來るとあり。如何にしてか之に處すべき。

故なくして、金錢物品をとり去らるゝは、馬鹿々々し

き事也。之を防がざるべからず。されど、之を防かむとして創をうけ、物をとられたるより更に大なる損害をうくるも馬鹿げたると也。盗にはいられたる上は臨機應變に之を欺き、もしくば威すべし、これ上策也。力と術とあるものは、之を捕ふべし、これ中策也。おとなしく若干の物を與へて去らしむべし、これ下策也。正當防禦のために之を殺すは、策の最も拙なるもの也。

欺きもしくば威して去らしむるは、面倒なく、損失もなくして、一番よき也。それには機智を要す、また膽のすわり居るを要す。あわてゝは不可也。之を聞く一士官夜半までも手紙をかき居りしに、戸外は雨ふり始れり。雨中遙に草鞋の音を聞く。その音漸々近づき來りぬ。戸の前にてとまりぬ。戸開きぬ。草鞋の主今や椽側に上らむとす。士官徐ろに落ちつきたる聲にて曰く、おい〱泥足のまゝにて上られては困ると。賊之を聞いて驚いて一語も發せずして去れりとぞ。たゞ一言にて、賊を去らしむ、策の最も得たるものといふべし。而してこれ膽病者や周章者には出來ざるべし。

むざ〱と物を渡す前には、出來うべくんば、之を捕へたきもの也。捕ふるには、腕力あるを要す、柔術撃劍などの心得あるを要す、又膽氣あるを要す。されど、賊が力量非常に強きか、多數なるか、もしくは兇器を有するかならば、容易に捕へ難し。捕へむとして却つて創をうけざるやうに用心すべし。

我に力なく、柔術撃劍などの心得なく、且つ利器なくして、盗が遙に我より強き場合には、默許して物をやるの外なし。一つ例へば、金十圓をもちたりとせんに、之を二分して三圓を一の財布に入れ置き、七圓を他の財布に入れて、他の所におき、これだけしか無しとて、三圓入りの財布をわたすも、さまでの損害はなかるべし。かゝる場合にも賊の顏は見ざるをよしとす、顏を見らるれば、露顯を恐れて、殺意を生するとなしとも限らざ

れば也。

非常に猛悪なる强盜ならば、利器を以て正當防禦をなさゞる得ざる塲合もあるべし。成るべく、ピストルもしくは刀を身邊に備へおくをよしとす。然し普通は威すを主とすべし。決して始めより、兇器をもたぬ竊盜にきりつくべからず。また刄物など備へをく以上は、少しは擊劍などを知り得らざるべからず。殊に臆病もの、周章者にては、却つて危險也。賊を斬らむとして、誤つて我妻を斬ることなしとも限らず。まづまづ膽のすわり居らぬ人は、刄物をもち居らぬが却つて安全也。

特に婦人に告ぐ、女はたまには賊の爲めに身をけがさるゝとあり。されど賊とても恐怖心胸に充ち居るものなれば、色情などあるものに非ず。之あるは、多く寢相惡き女を見て、ふと誘發せらるゝ塲合也。注意せらるべし。

瑣言録

◉京の着倒れ、大阪の食ひ倒れと云へり。いづれも非なれども、食ひ倒れの方がまだよし。多少身躰の榮養に益する所あれば也。

◉衣食住の中にて、食が最も大切也、次に住也、衣は最も末也。然るに世俗、殊に婦人は衣を重んず。

◉なまけものにて、ぶしやうものにて、口が達者にて尻が重く、ぐずら〳〵する妻君こそ、世に困つたものなれ、夫に垢ついた着物を着せる也。子供にほころびた着物を着せる也。簞笥の中は、めちやくちやにて、何處に何があるやらわからざる也。臺所は狼藉たり、一目人をして嘔吐を催さしむる也。

◉家に妻君の病めるは火鉢に火の消えたるが如し。

宴會につれ行き、共に散歩する場合は格別、家にありては、妻は衛生上の美人なることそよけれ。

◉物を買はむには、よしや車賃を損しても、本場の大店にて買ふべし。場末の小店にて買ふべからず。

歐洲屈指の大雄辯家ベサント女史

（英皇戴冠式の夜に於ける一大警告）

ミセス、ベサントは英京倫敦の人、千八百四十七年十月一日を以て生れき。父をゼームス、モリスと云ふ。ヘルローに學業を修め、千七百六十七年を以て、シズセイの牧師フランク、ベサント氏に嫁せり。千八百七十四年以來、政治上並に社會上の問題を攻究し、ナシヨナル、セキユラー協會員となりて、數種の小册子を著しき。其の名聲を擧けたる著書は「哲學の果實」なりとす。爾來社會主義を研究すること日も尚ほ足らず、千八百八十九年には神智協會の一員となり、次いで印度及び北米合衆國を遍つて、此の協會の趣旨を演說し、歸國後は、同協會の首領として、社會救治の大事業に熱衷す。著書多し。『暴風雨より平和に至る』『再入身』『人の七原理』『死と其の後』『カルマ』『自我の其の殼皮』『人と其の躰』『四大宗教』『神に結ぶ三箇の道路』等其の重なる者なり。

本年七月五日を以て執行せられたる英國皇帝の戴冠式は近代希有の盛觀にして、陸には世界各國に亘れる英國殖民地より參列せる軍隊を以て飾りとなし、海には數百の船艦を羅列して大英帝國の威嚴を發揚せり、當日倫敦の宮廷には各國の皇室の代表者並に、使臣峨冠霓裳を曳きつゝ雲の如くに參列し、印度局に於ては印度諸王の謁見ありて三層の大館は百千の日月を集めたるが如く電燈に照され、紅紫爛熳たる珍卉奇花を以て飾られ、白衣長袴の貴夫人が纏へる黃金寶石の光は印度諸王侯が三千年の寶を一身に集めたる珠玉錦繡と相映じて人をして天國の華麗も此には及ばじと思はしめしといふ、斯る盛觀の夜に當りて端なくも非帝國主義を主唱せる神智協會の一員ミセス、ベサント女史が印度の慘狀を唱へつゝ此の盛觀に醉へる大英帝國の同胞に向つて一大警告を爲したるは、實に當夜の一奇觀なり。ミセス、ベサント女史の火の如き雄辯はクヰンスホールの大廣間に於て演ぜられたり、當年取つて五十六歲、白髮白衣一老女史は拍案一喝歷々として印度の慘狀を訴へ、了り次て徐ろに口を開いて帝國主義の前途を警告せり曰く我等靜かに人生の運命の有爲轉變を見來ればあはれにも趣深し、人間歷史ありて以來幾多の大帝國は此の世に現はれたりされど彼等の勢威は彼の後に此、此の隣に彼、後れ先ちて皆地に墜ちぬ、彼等が天下の富と力とを集めたる光榮は皆消へて跡なし。

云々とそれより大羅馬帝國の末路を說き、西班牙帝國の運命を說き、以て大に世の帝國主義に熱衷する輩に向つて頭上一大鐵槌を下したるは、壯觀偉麗實に當夜、印度局に於ける諸王謁見式の盛觀に對比して一段の奇觀なりき。

ベサント女史。辯舌は雄大壯烈にして日本は元より歐洲にても此の如き明晰にして力ある辯舌は未だ嘗つて聞かざりしと當夜この演說を傾聽せし人々はいへり、當夜の聽衆一千餘名中には老紳士もあり、書生もあり、花の如き少女の傍らには破帽弊衣の勞働者も交はれりと一方には戴冠式見物に狂喜せんとせし帝國主義の花やかなる名に心醉するものあると同時に他方に於て又此の如き警告に耳を傾け喝采する老若男女もありしは遉がに大英帝國なりける。

家庭

九十六媼の話

（活きたる衛生學）　糸左近

先月の十二日の朝、獨り机に憑つて、降り頻る雨を眺めながら、今年は又何たる天候だらう、春以來、夏期休暇になつたらと、待ちに待つて居た海水浴行も、斯う降つてばかり居て、而も重ね着してゐるやうな寒さでは、迚も駄目だし、ぢやと言つて、此の儘鬱々と、書物ばかり見て居るのも、却て身の爲にもなるまい、「善く勉むるものは善く遊ぶ」と、いふ金言もあるしなど丶、色々思うてゐる矢先へ、下婢が、

「福田樣といふ方が見えました。」

「さア此方へお通し申せ。」

と、言葉が未だ終らぬ中に、親しい人のこと丶て、

「先生どうです海邊旅行は。」

「さア、さう言はる丶につけても、殘念なのは、此の天氣て。」

「天氣位何うでも善いぢやありませんか、上野から滊車て水戸まで行き、水戸から那珂川を滊船で下り、大洗の金波樓あたりて、四五日逗留し、樓上慘憺たる海上の景を眺むるも亦一興、その中晴れ丶ば尚善し、さうしてお歸りがけに、僕許へお立寄下されば、僕の大切の寶物を、お目にかけませうけれど。」

「それは大賛成、なんの、雨降らば降れ風吹かば吹けか。」

そこで、早速其の日の午後三時に出發した、所が運の善いことには、其の翌日から雨も止んで、丁度五日間は、氣儘に東海の絶勝を我が物にして、六日目の夕刻、約束通り、福田君の宅へ行つた。

この福田君といふは、常陸は新治郡三村の人、今より三年前に、都の螢雪で醫道の文を讀まれた節、幾分か相談相手にもなつた緣故から、今でも、

路遠く隔つるとても杜鵑、月の夜毎に一聲はせよ。

など、情ある音づれを絕えずしてゐるのである。

「さア何うか寶物を見せて下さいな。」

と、初めて行つた家なれど、遠慮もなく請求してゐる中に、豫ねて聞いてゐた、福田君のためには祖母に當る今年九十六歲といふ、まだ鬢髮も左程霜おかぬ、名も菊子と言はるゝ目出度い老婆が、徐々と挨拶に出られた、福田君は微笑みながら、

「これがその大切の寶物で御座いまする。」

余は何となく、敬愛の心が起きて、

「眞にお寶です、眞にお寶です、名人の掛物でもあらうと思つてゐたのが、今更ながら恥かしくあります、それは何うか幾重にも御許し下されて、其の御年になられたに就いては、斯うしたからであると云ふ樣なお考へも御座いましたら、都の苞に、お聞かせ下されたいもので。」

と、ひたすら賴めば、

「萬更無いでも有りませぬ。」

これより余が問ふまゝに快よく答へられた長命談、いざ然らば左に。（○は老婆が詞の印　●は余が詞の印）

○「萬次郎（福田君の名）などは、醫者の不養生で、夜通しでもして勉强するかと思へば、或る晩は宵から寢る、朝は四時位に起きることが稀にあると、或る時は九時頃に漸と目を擦つて出るやうな始末、けれども私は若い時から、朝は大概四時、夜は九時頃と定めてゐます、四時に起きてから、今は萬次郎が年寄には毒ぢやと、强ひて止めますから、廢しましたが、元は必ず何んな寒中でも、水を浴びることにしてゐました、全躰私は偏屈で御座いまして、宿人が綺麗好狂人と笑ひました位でありますから、失禮なお話ですが、大小便しました後は、其の度毎に、局部を水で洗ふことに、今でもしてゐます、これが第一に人樣と異つた事、第二に生れてから炬燵へ這入つたことがありませぬ、寒

くて堪らねば掃除をします、運動さへ怠りませんと、暖かくもあれば、御飯も旨しく食べられます、第三に私しは夏冬とも寝る前には、必ず「ケッピ」を致しますので。」

●「「ケッピ」とは何の事ですか。」

○「オホヽヽ、不調法なお話ですが、お尻を焼火て温めますことで御座います、これを致しますと、夏は寢床に這入ってから、涼しくなりますし冬は温かく眠りに就かれます。」

●「御酒を召し上りますか。」

○「ハイ良人が在した時分勧めますから猪口に二杯位頂きましたが、良人が亡くなりましてから、永らく止めてゐましたのを、近頃萬次郎が晩御飯の時飲めと言ひますから、今は又一杯位宛は頂きます。」



●「誠に失禮なことを申すやうですが、三度のお食事は何のやうなものを、お拵へになりますか。」

○「大概朝は味噌汁と梅干一つ、午飯は霞が浦に漁れる鰻や鮒鯉又は土鰌、時に依れば海魚も食べます、晩は大好物の豆腐か歟のやうなものを養ます、この外自然生などは、折々「とろゝ」にして頂きます。」

●「貴女何んなことが、此の世に於いての樂しみと思はれますか。」

○「不仕合にも子には先立たれたけれども、孫の萬次郎が温順に子より孝行してくれますから、何の心配も無く、只々閒がな隙がな、お寺參詣をして說教聽くのが、何よりの樂みで御座います、上見ても際限は無く下見ても切の無いものですから、私の樣に結搆な者があらうかと、喜こんでゐるのであります、一躰私はから申しては自慢のやうで御座いますが、人樣の物は、令へ食べずに居ても、塵一つ借らぬと言ふことを佛樣に誓言してゐますから、盆が來ませうと、大三十日が參りませうと、一厘のお錢取りに來るものが無いと云ふ道理でつまり何の苦になることもなく、只々悠々と、今日まで長生した譯で御座いませう。」

この外四方山の雜談もしたけれど、長命話しはまあ此の樣なものであつた。

熟々と此の老婆の言行を味はつて見ますに、一々道理に適つてゐて、成程と感心するより外はありませぬ、寢るにも起るにも、其の時間の規則的なる點から、冷水を以て身躰を洗ふに至つては、自然と其の衛生法に適つてゐることは言ふまでも無く、便所より出て手さへ洗はぬやうな不性者の多い世の中に、獨り其の局部まで洗ふとは、古今に稀なる美行と言はねばならぬ、最も土耳其人は紙を以て拭ひ取つたる後、又水を以て奇麗に洗ふことを習慣としてゐるから、土耳其人には痔疾に罹るものは、殆ど無いと云ふことを聞いては居たが、恐らく其の外の國に之を行ふものは曉天の星であらう、抑身躰の排泄物中で、大小便位穢いものは無い、然るに之を紙位で拭つておくとは、實に不潔極まつたことである、何の位この不潔物が不識不知生命を縮めてゐるか知れぬ、何人も最も奇麗に洗はねばならぬ處は、肛門であるといふことを、忘れてはなりませぬ。

次に、此の老婆は炬燵へ這入らぬと言ふが、これは又大賛成である。炬燵程炭酸瓦斯を作り易いものは多くあるまい、其の炬燵へ終日當つてゐるなどは、命知らずの馬鹿者と言はねばならぬ、一躰日本は暖爐の設けが無いから、是非とも火鉢を要する、これは已むを得ないが成丈鐵瓶をかけておくことが、必要である何となれば、

水蒸氣は炭酸瓦斯を清潔にし、室内を温むるからてある。

次に、酒は餘り用ゐぬ、令用ゐても、一二杯に過ぬとは、これも亦能く衞生に適つてゐる。

次は食事の點てある、朝は淡泊な味噌汁に梅干のやうな刺戟物て、鈍い胃嚢の分泌物を促し、午食は脂肪の强い物や最も多く蛋白質を含んだ肉類などを食し、夕は脂肪の少い蛋白質の多い豆類を副食物とするに至つては、醫者も及ばぬ大衞生家と評さねばならぬ。

この外頭を冷して腰部を温め、冬は暖に、夏は涼しく寒ければてゝに掃除をなす、暖を取つて室内を清潔にする一擧兩得の行ひ余は實に感又感に堪ぬのてある。

今や錦繍綾羅に身を飾り、或る時は骨牌に夜を深し、或る時は敷炬燵に朝寢を貪り、洋食に和料理に、鮨に蕎麥に、酒に茶に、胃嚢は之を消化するの暇なく、腸は之を排泄するに忙はし、斯る贅澤三昧の、否我身知らずの灰殼的が間々ある、退いて其の内幕を見れば、見せぬ山師の金屏風てあるけれど、其の金屏風を取り退くれば、借金の證書は積んで山をなし、細君の涙は流れて川をなしてゐる、斯く情欲の奴隷となつて躰を損し、心を苦しめ、遂に短命以て世を終る者啻に男子のみならず、婦人方にも澤山有勝てある。

返す〴〵も、菊子老婆は、聖哲の敎を聽いて心を清め、足ることを知つて天命に安じ、塵無き里に身を養ひ、閑を釣り寂に耕し、或る時は孫と一杯の晩酌に陶然樂しみ、或る時は曾の手を携へて嬉然喜び、悠々と永き月日を送ることの樂しさは、實に羨ましきことゝ言はねばならぬ、筑波の山よ、霞が浦の湖よ、若し心あらば、汝の形を改めざるが如くに、此の老婆のため行末長く友となれよ。

終りに臨んて今一言せんに心配の刃程生命を傷ふ利器は無いと言ふことてある、心身の關係は爭ふべからざるの眞理て例へば憂へて食すれば山海の珍味も旨からず、樂んで飲めば番茶も玉露の味がする、從つて身躰の榮養となることは、何人も認むる處であらう。

衞生を守らうと思ふのも心、倫理を實踐せんと考ふる

のも心、此の菊子老婆を貴女方に紹介するのも余が一片の老婆心である。

人をして富裕に幸福ならしむるものは心の富なり

新式家屋の構造

近藤嘉三

家屋改良の豫備として私は玆に居室改良談を試むる、これは世の紳士淑女が賛成をされて家屋改良の端緒を開かれんことを望むのである。

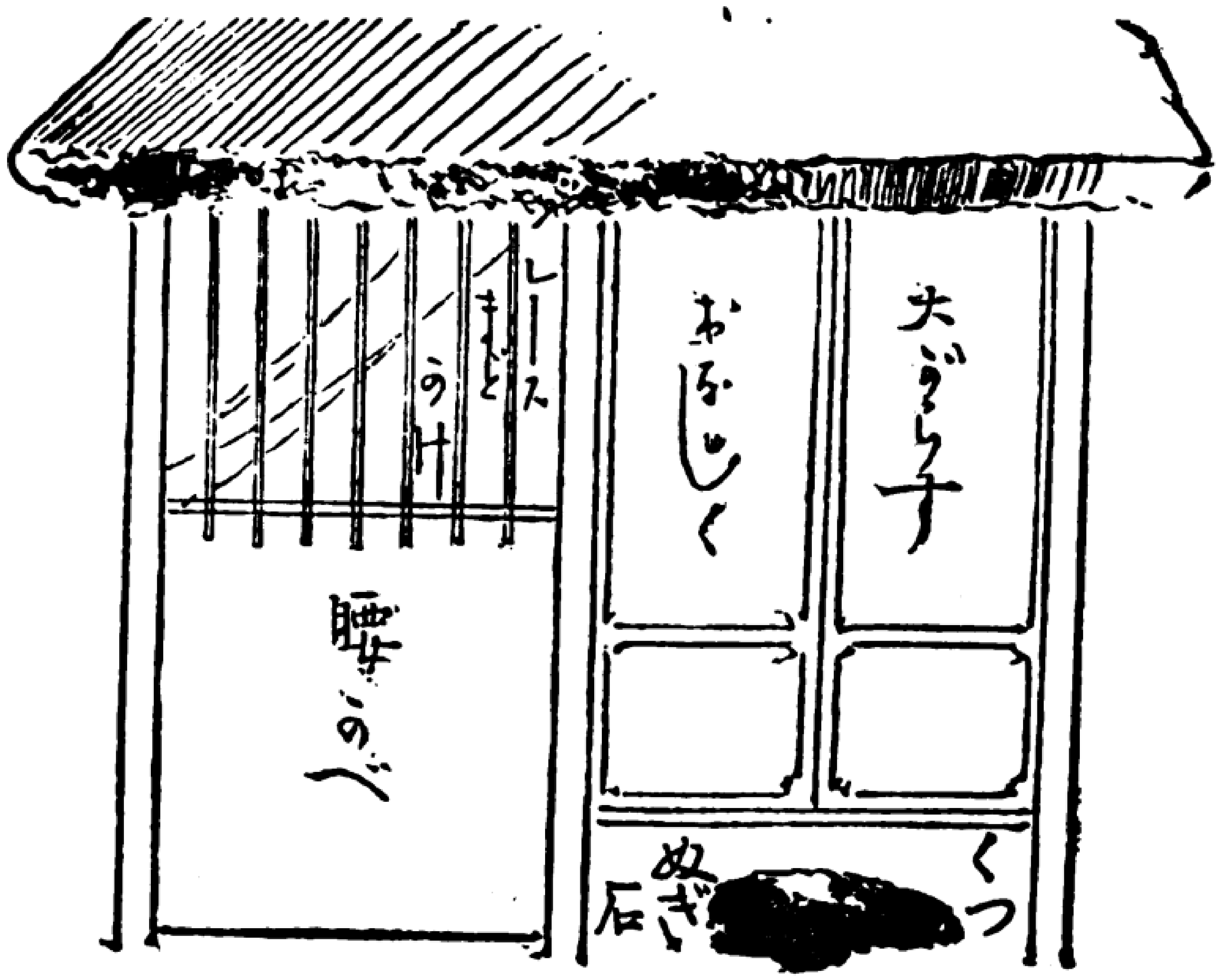
私は頃日陸軍技師某と家屋建築改良のことを談じた。その時技師の談は日本の家屋は他に餘り比類の少い建築で一種高雅な趣味を持つて居る、故に若し將來家屋改良等のことがあつて從來の建築が廢る場合には、是非美術の一つとしても保存が致したいものであると云ふことであつたが私共も異存は無い。

衛生とか經濟とか云ふ立場から見たる價値は暫く措いて、兎も角もその淸素淡雅なる所には慥かに一種の風品を持つて居る。

何とか云ふ西洋人が日本の家屋を評してマッチ箱だと云ふたとかて、例の歐風拜崇連中からは建築物としては半文の價値も無い樣に看做されて居る樣であるが、然し又日本の家屋には又洋館の到底も及ばぬ一種の風品がある、夏向きなどに、少し床の高い住家の、襖や障子をすつかりと取り外づして、軒の翠簾を庭の青嵐に吹かせて、世の中の土用は何所にあるかと云はぬ計りの涼しそうな住居、マッチ箱かは知らぬが、その住心地の好い事は穴藏のやうな窓の少い洋館の及ぶ所ではない。凡て住宅の良いとか惡いとか云ふことは、第一にその土地の氣候風土に適するや否やと云ふことに由るのであつて、それは南洋諸島や印度あたりの樣な熱い國の建物が何程よくとも、魯國の北の方や滿洲などの樣な寒い所には適せぬ樣なものである。

我國の樣な氣候の好い、空氣の淸朗な國には丁度現今の家屋の樣な建物が最も適して居る、我國の家屋も今日の樣に進歩するにはいろ／＼と變化を致して居る、

然し大體に於ては終始一貫の系統を追ふて居る。上古のことは知るべからずとするも、中世以來、彼の藤原時代の殿舍の構造、それが一變して禪味を帶びた鎌倉風の武家的家屋となり次で東山時代の明朝流折衷の建築となり近くは又歐羅巴風の建築の趣味を加ふるなど、いろ〳〵と變化をして居る、然し大體は變らぬ、それは、日本造りと稱する家屋の建て方が我國土の氣候に適して居るからの事であろふ、故に若し將來家屋改良など云ふことがあつても、矢張りこの變遷の軌道を追はなければ恐くは實用に適はぬであろふ。



然し私は今日の日本の家屋を以て決して完全なものとも缺點の無いものとも思はぬ、衛生の上から考へても、又經濟の上から考へても、趣味と云ふ上から見ても、缺點は中々多い、即ち早晩その改良を要すべき時期の來ることは疑はぬ、然しこの家屋改良と申すことは中々の大事業で、一寸板葺を瓦屋根にするとか板塀を土塀にすると云ふ樣な容易い仕事では無い、又何程衛生や經濟の點に於ては完全に出來ても、人の嗜好に適せぬ樣では兎ても行はるゝものでは無い、丁度今日の衣服改良が實行されぬと同じ事で、加之も家屋改良の方は之を衣服改良などに比ぶれば、その難易決して同日の談では無い、一層も二層も困難であろふ。

凡て改良などの實行を期するには趣味……人情に適する趣味を造つて之を導くが一番の捷路である、嗜味が一たび世人の意向に適すれば、それが流行の勢ひを造る、既に流行となるその實行は誠に易々たる所

である、又愈家屋改良など企つると場合には、彼の衛生の上からも經濟の上からも、趣味の上からも、いろいろの方面から考慮して完全——完全とは參らぬも先づ完全に近い考案を立てねばならぬ、然しこれは中々の難事である。

凡そ改革なるものは、その必要に催されて起るものであつて、家屋の改良などもその必要に迫らるゝまでは先づ〳〵改良は六ヶしからふと思ふ。

現今の日本の家屋は種々の點に於て不完全不便利の點は多いに相違ない、それは官廳や學校や兵營などがその建築が段々と改めらるゝを見ても分る。

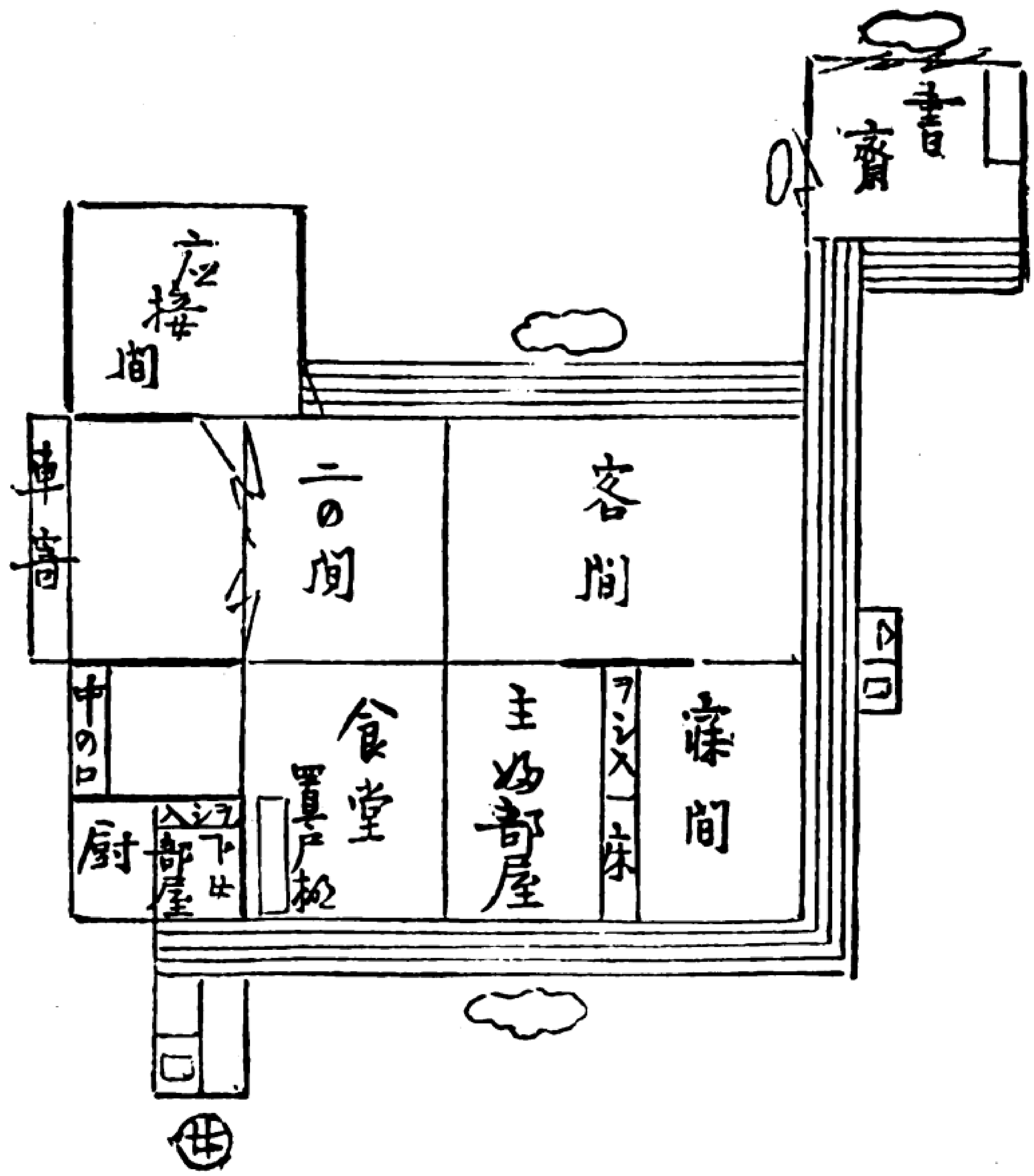
私は我國の家屋を何の樣に改築したれば好いと云ふ樣な考へは差當り無い、然し若し他日家屋改良と云ふ樣なことの始る場合の素だけも造り置き度く思ふのである。

家屋改良は斯樣な次第で無論難事には相違ないが、現時の家屋に於ける缺點に就て、是非改めたく思ふこと又改めねばならぬことの中でも、彼の躰育に就ては脚部を折つて着坐する爲に身長の發育を妨ぐることは實に甚だしい、それから生活上の趣味に就ても例之ば禮式などの如き、彼の坐禮と云ふものは何となく卑屈らしく見へて醜い、外客との交際は勿論であるが同じ日本人間の交際にも洋服を着た客に對して坐禮で接遇する如きは隨分失體と云ふて好い。それから又日本風の家屋は一躰に動作が不活潑に爲る、これも膝を折りて坐する爲めである、即ちその爲に立居が不自由で一寸その邊りの物を取るにも、おつこうであると云ふ樣な譯で終にこれが不活潑の原因となるその外穿物を一々脱せねばならぬか、まだいろ〳〵不便不自由が多かろふ。

それで私は建築の改良よりも、先づ差當りそれらの不便利不都合を去る事に爲たれば如何と考ふる。それは費用も至て少く且つ手輕に實行され加之も他日の家屋改良の素を爲すのであつて、即ちその案は差當り家屋の改築などのことは止めて、先づ暮し方丈を改むる、例へば坐布團に代ふるに椅子を以てするとか丈低い机を

洋風のテーブルと取り代ふる位で充分である。

先づ斯様にして膝を折ること丈を已めたい、一口に云へは西洋風の暮しを日本造りの家でする様なものである、斯様にさへ致せば段々とその暮し向に伴ふて家屋の建築上の意匠も出來て參る、例之ば此の窓にはレースか何かの窓掛が欲いとか、この襖障子は硝子戸に取換へ度いとか、天井が低とか、床の間は邪魔であるから止めるとか、又床の間の代りに棚を取り付くる、と云ふ様にそれ〴〵の考案も出來る、然様なると、どうも我國の氣候では窓の少い洋館よりは矢張り從來の様な明け放しの建築の方が適するとか種々の家屋改良案の資料が出來る、斯様に住宅改良の基礎が定ると衣服の改良も禮式制度も何も彼もこの家屋に適當なる考案が出來るであらう。



先づ斯様にして室内の體裁を改むる或は又和洋折衷の家屋を造るも面白い兎も角も折膝流の住み方を改むるのである。その家屋の有様は御園を拜觀した人は知らるゝてあろうが、あの御園の中に散在して建てられてある御茶屋の様な風に成るのである。

此の案の實行は然まで難事でなかろふと思ふ別荘などは勿論、普通の住宅にも適する、殊に兒童の部屋の如きは尤も便利である、この案を實行して尤も便利を

感ずるは商家の店舗であろうと思ふ。
今試みに中等人士の別莊向の家屋の室內をこの案に依りてつくり直し且つ之に適する一種の裝飾を與ふ。
或はこの案を鵺的家屋と云ふ人もあるかも知れぬ、然し鵺的の家屋、別に何の不都合も無い樣に思ふ。今日の日本の家屋は多くは鵺的家屋ならぬものは殆んど無い即ち　應神の朝に新羅人が韓樣の宮殿宅舍を建て始めてから、日本流の建築に韓樣の趣味が交り、又た孝極の朝には段々と支那流の建て方が更に加味された、それから追々この支那朝鮮風の建て方が日本風に感化されて終に平安朝の寢殿造りと成り、鎌倉時代に至ては更に禪家の趣味を普通の住宅に加味し鵺的は益々鵺的に成り、門の左右に櫓のあるものなれば長屋門と云へる一種の新案も出來た、近くは又段々と洋風の趣味を建築に交ふる樣に成つて參つたが、程克く同化され咀嚼さるれば間の子流の建築も決して惡くは無い。
今玆に擧ぐる家屋は一寸した別莊向の家屋で間數は僅かに大小六七間に過ぎぬ、その圖前の如し

家庭衛生

病家に休息せさる人は世上の地獄に在り

醫學士　石原笠軒

此前私は便秘を患ふる婦人方の爲めに一回記述致しました其時小兒の便秘に就きては後日改めて御話致すべきことを御約束申しました、仍て今回は其事を述べまして且他に一必要なる家庭衛生上の注意を陳べやうと存じます先づ

〔一〕小兒の便秘

としては、私の意味する小兒と云ひまするのは此處では主として小さき小供であッて生れたてよりして滿一年半乃至二年位迄の小兒に就きて申上げるので御座ります、如斯幼少なる小兒の便秘に就きましては隨分數多く見る所であッて母たる御婦人方の爲めには甚だ心配の種となるのであります、殊に幼少であるからして取扱上非常に困難を感ずるもので御座ります先づ小

兒生れまして凡そ四五十日を經過する時、それ迄には毎日二三回の軟かき便を通じ來たりしものが、通じの度數が段々に減じてまゐり一日一度位となり終に毎日は通ぜぬやうになります二日も通じが無ければ大變に心配に耐えないので醫者を迎へると云ふことになるのです、殊に初めての小供であれば母親の心配は一層深いのですが澤山小供をお持になッたお方なれば左程驚きも致されぬでしやう、けれども兎に角捨てゝ置くわけにはいかないのであります、一躰どうして如斯便秘が起るものであるか、書物には色々と其原因を列擧してありまするが、普通は貧血とか、腺病質とか慢性の胃加答兒慢性の腸加答兒の結果とか、或は養育の仕方が不攝生的であるとか、或は之に授乳しつゝある母なる人の身體の具合が惡いとか若くは乳母の身體の具合がよろしくないとか等の爲めに起るものとしてあります何れにせよ種々の原因によりて小供の身體が惡くなりて便秘を來すに相違はなく、其内には原因が唯一ツばかりでなく二ツも三ツも重なる場合もあるのでしやうけれどもまた時としては小供にも母又は乳母にもまたさなくして人工哺乳を行ッてゐる時でも別段何が惡かッたと云ふこともなくして而も小供に便秘が來る場合もあります、換言すれば原因が不明であることもあるのです、是等の事共が原因となりて便秘を來すのではありまするが詮する所、何れも腸の蠕動作用が遲緩するのであッて詳しく申しますれば先回にもお話申したる、腸の上部よりして下端に向ッて順次に丁度蠕蟲が蠕蜒と匍匐する狀の運動があッて之が爲めに腸管が上の方から縊れッゝ内容物を段々と下の方に送り出す所の作用を營み得るのです之が蠕動作用なるものです此作用が遲緩するのであります、

小さい小供の通じが減ッてまゐると機嫌がわるくなッて來るとか其ほか色々の症候のあることは別々申上げませんが其内必要なことは便が堅固になッて來て、時とすれば殆んどやはらかき石と云ッてもよろしい程の硬度に達することがあります、そればかりでなく大へんに大きくして小供の割合には大に過ぐるのです、依

て通じがある時には小供が非常に努力しなければならぬ、即ち腹壁の筋に力を入れ、横隔膜にも力を入れて腸管内の内容物を下方に壓迫するのです、如此努力する爲めに小供が顔を赤くするなど隨分可哀相な有樣であります、如此努力を以て大きな、硬き便を排出するのであるから、屢々肛門を傷付け其處に裂傷を生ずるとか、内部の粘膜を破るなどのことが出來てきて、便に血が付着するのです、是れ最も困却する一の難事であります、一度生じたる傷は、直ぐにはなほらず、便通毎に疼痛を發し、小供は益々便に居ることを嫌ひ恐れ、依て益々困却するやうになるのであります、

小供が生れて間もなく便秘を發し、それが一旦癒ッて後度々同じやうな事を繰り返へすのは珍しくありません、

扨て如此塲合には如何したらよろしからうとか、と申すに、何でもかでも醫者に往くのが何より一番のことでありますが、それとも、小供の養育者が平素心得てゐて効あり害なく、また必要なことは何であるか、否、苟くも當世の母たる人、また將來母たるべき人のよろしく承知してゐなければならぬ點に就き申上げませう、

前々しるしましたゝ通り便秘は腸の蠕動作用が遲緩したるが爲めに起ッたのですから、目的は此蠕動作用を適當に再び元のやうに回復して一日に一回なり二回三回なりのよき通じがあることにしなければならぬのです、

先づ第一に御注意申すのは初めての便秘で、二日も三日も便秘が續くときは必ず直ぐ醫者に委せねばなりません、むしろ一日の通じが無ければ同樣に醫者に診て貰ふのが當前です、それから、度々の便秘で、小供の養育者なる人が其事に就き經驗があるならば一日位通じがなくとも左程恐るゝには及ばぬのです、そこでお話申すやうなことを色々と御試みなさい、

初めに考へんければならぬは原因の點であります、原因即ち便秘を惹き起した原因です、前に列擧した貧血とか腺病質とか慢性の胃腸加答兒とか授乳者の身躰の變調などのことは皆さんに向ひて詳しくは喋々しませ

ん、即ち對原因療法は最も必要であるけれども之は醫者の致すべきことでありまするからして省畧します、次に一般養育法を規則正しく致し、授乳の度數、其時間の間隔を嚴重にし、人工哺乳を行ってゐる小供ならば牛乳なり煉乳なりの良否に注意し、授乳法の身躰の具合が惡いならば一時授乳を中止して授乳者自身の健康回復を計り其間は健康なる乳母に取換へるとか又は人工哺乳を行ふこととなす、殊に養育の仕方が惡く、小供の胃腸を害したる爲めに起る場合が最も多いのでありまするから特別是等の點に注意せられんことを切望致すのです、

それから寒き時分には下腹の冷却せぬやうに「フランネル」の腰卷をさせるとか、暑氣の時節でも同樣に腹掛をしておなかの冷ひぬことを務めるのが肝要です、また、温き罨包をする、是はやはり「フラチル」又は他の脩麗なやはらかき布片の腰卷位の幅に作り三枚位重ね之を微温よりはも少し暖く丁度指を入れてみて心持がよい位の温度の湯にひたし、よく絞りて其水があまり浸み出ぬ程度にし、冷却せざる内に直に下腹を卷き付け、其上から油紙を一枚卷きて、衣服の濕めらぬ用心をなす、如此することを一日三四回とす、例之ば朝起きてから、正午、夕方、夜分などにする、寒き時分には殊に心持のよいもので、小供がよく寢付くものです、それからまた、毎日お湯をつかはせ其時下腹部を輕く柔く按摩をしてやるのです、臍の上の當りから下の方に手の掌をあてゝ壓しつゝまはすとか、兩手を以てもみ下すとか、或は少供の腹の右の方はもみあげ、臍の上の處は右より左え摩擦し、左の側は下方にもみ下しなどする是は腹部按摩法と申します、ひどくしてはいけませんまた全身浴をなさぬ時は腰湯をさせるのもよろしくあります、

次には灌腸法であります灌腸器より申上れば普通の「グリスリン」灌腸器が輕便であります、之は大抵の藥店に賣捌きゐるのですが其内小なる分で五「グラム」入りと云へば、ガラス管の長さが凡そ二寸位で兩端が硬護謨で其一方は注入嘴となり其長さ一寸許「ガラス」管

の内部は「ポンプ」の「ピストン」のやうな者て「ニッケル」鍍金の軸の一端には丁度「カラス」管に密着するやうに皮製の閉栓が卷いてあり、一端は管外にありて大人の親指が入る位の環をなせり、先づ大略如此構造です、上製のものは永く使用に耐え得ます、之を使用せんには「グリスリン」に湯を等容量に割り（しかし「リスリン」はもッと餘計てもかまひません例令ば「リスリン」二と湯一てもよし）溫度の加減は割る湯の溫度と「グリスリン」と湯の容量との關係によッて違ッてまゐりますが、殆んど熱湯位のものてよろしく、されば「グリスリン」の爲めに丁度よい加減になります、しかし必ず指を入れて見てあまり熱くはない位て、もし、あつければ暫く冷却するのを待ツのです、凡て「グリスリン」と湯とを混合する容器は極清潔にして置かんければなりません、これて丁度よき溫度になりますれば灌腸器の注入嘴口を入れて一パイに吸ひ上げ次に此注入嘴には充分に「グリスリン」を塗り付け甲乙二人にて甲は小供を仰向に寢かし且つ兩足を捕ひて少し上にあげ、乙は小供の右側に座し左手の拇指と食示指とにて小供の肛門を少しくひろげ置き右手にて灌腸器を把持し（如樣にても自分の便利よきやうもつ）物柔かに注入嘴を肛門に入る、丁度嘴が皆入れば左手を放し「ガラス」管の處を持ち居り、右手の拇指を環内に入れ示指と中指にて「カラス」管を挿み持ち拇指にて「ピストン」を押しやるべし、これは速くするを可とす、然れども嘴體を強く肛門に壓せることは避けねばなりません、唯右手の示指中指と拇指との間に力を入れるのみてよろしいのてす、

注入する分量は小さい小供即ち前の方に述べましたる生れてから間の無いものては五「グラム」入り一パイで澤山です一歳位なれば一パイてよろしいことかありますが二ハイやつても差支ありません、また、滿二歳迄は三パイ位でも害はありません、四ハイでも同樣てす、しかし一パイ以上を注入するには早くやらなければなりません其間は肛門を甲の人が指にておさひゐるのです、また速くするに就ては肛門へ嘴躰を挿入すること

によく用心をせねばなりません、「グリスリン」灌腸器にも十「グラム」入り二十「グラム」入りがあります右の五「グラム」入りを三ベイも取換へるよりは是等の方を一回ですむやうにするのが便利です、

○○灌腸料としては「グリスリン」ばかりでもよろしくまた石鹼水、食鹽水なども用ゐることがありますが先づ右の「グリスリン」に湯を割ッたのをおすゝめ申します食鹽水などは小さき小供には一回に百「グラム」乃至二百「グラム」をやることがあります、また水を用ふることもあります、

人によりては灌腸の代りに飴（かたあめ）の一寸位の長さのものを湯にちよいとひたして肛門に入れ置きそれてわけなく便通を催すと云ふ人がありますす念の爲めに御話申して置きますしかし餘り不潔にならぬやうに希望致します、便秘の時に硬き便が出たあとて、少しばかり肛門が脫出したやうな氣味が見ゆれば綿に「グリスリン」か若くは油類を付けやはらかに肛門に當てゝ脫したる部分を元に壓し入ることが必要です、之は無理におし入れずとも少し壓して居れば大抵ははいります、尙一言申上度いのは非常に硬き便の時には兩手の示指端に油又は「グリスリン」を塗り肛門の前後を少し押して便をおし出し、または指にて引き出すことも心得て置いてよろしいのです、まづ、ザッと、右の次第で御座ります、若し、小供が滿二歲以上であれば灌腸器は大なる分を用ひ、また其他は大畧右に述べたる法を同時に行ふことを致します、しかし今一ッ申上げ度いのは、小供は齒が生ひ出せば即ち食物をやッてよいと云ふ天然の示してあります、即ち滿一歲位から乳の他に食物をやッてよいのです、然るに滿一歲半にもなるに尙ほ乳のみは反ッて自然に反したことてあるのです、世間には往々にして滿二歲にもなるにまだ乳ばかりやッてゐるお方もあるやうに思はれまするが之は餘り過ぎたなされかたかと存じます、扨て又、既に食物をやッてゐる小供に便秘が起れば其食物を更へて見るのです少しはやはらかき菜葉なぞも混ずることとして見るのです魚や肉ばかりではよろしくないのであります、長

くなりますから書き落したる處は後で補ふことに致し便秘の事はこれで擱筆申しまする、

西洋百味簞笥

（食物の調理と消化）　池田再來

◉食物は調理の加減を誤るときは消化すべき物も不消化物となる、消化といふ事は啻に食する物の消化し易きによるのみでない、鹽、砂糖などの加味物も、其程々を知つて用ゐるときは大に消化を補ふものとなり亦之を害ふ者ともなる、

◉總ての食物には皆夫々持合せの香味がある、此本當の味を能く知つて其を好むとが大切である、假令ば砂糖をつけずに菓物の味を知り、（西洋人の癖として菓物に無暗に砂糖を撒りかける）バターをつけずに良き麵包の香味を知るとか杯も必要の一つである。

◉加味物を程よく用ゐることは大に必要で、其用ゐ様次第で毒ともなり、藥ともなる。是は單だ加味物ばかりに限らず、食物全體の上からでも大切なる箇條である、必ずしも單に滋養物の多いばかりが身體の養ひになるとは限らない、一つは其人の嗜好にも依り、又習慣上にも關係があるから決して杓子定規で行くものでない

◉偖此加味物の功用は何邊にあるかといふに假令ば香氣ある青味を添ゆる杯も、食物の消化の上に直接何の功能も無いやうであるが、是は消化液を分泌さする上に好き刺戟をなす者で、加味物を用ゐる目的は又此所にある、殊に植物性の食物には此加味物を程よく使用すれば大に功能がある、病人の食物には兎角香味を缺ぐとが多いから、其邊を能く注意するとが必要である。

◉鹽は植物性の食物に最も入用であつて、實驗上から胃液の分泌を助け、食物を同化さする功用がある併し是も餘り多く用ゐてはならぬ。

◉胡椒も加味物として國によつては非常に高價な國もあるが是とても餘り多く用ゐてはよからぬ。

◉クリームと砂糖とは、用ゐて宜しい者であるが、但だ此等を麥粉（オート麥粉）と燒林檎と珈琲と共に一食に食せぬがよい、斯くすると麥粉は消化し難い食物とな

る。

●バタ−は最も消化し易き脂肪分であるが、脂の多い肉類と、酢と共に之を麪包に用ゐては其功が無い。

●卵子や肉の中にある蛋白質も、料理の溫度を誤つと不消化物に變ずる、料理の巧妙は其物の滋養分を保つにある、卵子を湯に入れて沸騰するは宜くない、之を煮るには沸騰した湯の中に入れ、固く閉ざして火より遠ざけ、五分か十分の間を其儘に置くが宜しい、沸騰した六合の湯は立派に四個の卵子を煮る熱が有る、但し器物を覆ふか包むかして風に當てぬやうにするがよい。

●肉の蛋白質を保つ料理法は炙ぶるが一番に宜い、(即ち通例肉片を柔かにする爲に行ふ方法)暗赤色の者が眞赤色に變じた時が適度の溫度であつて、蛋白質を得やうと思ふ調理の目的を達した者である、燒肉の內部は弱き胃にも至極適當の食物である。

●カスタード(乳卵羹)は乳や卵の如き滋養分多き食物て調理した者であるから、病人に取つて一番良好なる食物であるやうだが、是は砂糖を用ゐるから宜しくない、若し牛乳の代りに雛雞のスープを用ゐ、砂糖の代りに少量の鹽を用ふれば病人に取つて最もよきお皿である。

●食物は新に調理した者を限り何んなに安價でも何なに旨くとも仕直した者は宜しくない、又何んな場合でも質の良い食料を用ゐるやうに注意せねばならない銃獵肉や、腐つた卵子や、古びた野菜杯は用ゐて宜しくない。

●病人や小供の爲には注意して調理するとは勿論であるが、出來る丈け消化し易い物を料理して決して永く胃中に滯るやうな食物を與へてはならぬ。

●人は往々誤つて小供の胃腑が未だ發達しないのを、生れつき胃腑が弱い者と見做すとがある心得べきとである、偖小供の胃は最初の程は唯乳ばかりを消化する、夫から消化し易い澱粉質の者、夫からよく熟し或はよく調理した果物杯を消化する、追々と生長して消化器が發達して來た時は、病氣の快復した人の格で、同じ注意を以て食物を撰み之を料理するのが宜しい。

黄金を有する人は恐怖を抱き
之を有せざる人は憂苦を懐く

猛獸の育兒法

法科大學 青柳一太郎

寅の歳に因みて虎に關する種々の事柄を思ひ起こせるが、わが學び居る統計學中虎の育兒法を連想せしむるものあれば試みに之を述べて既に母たり又將來母たるべき我親愛なる姉妹諸孃の高覽を仰がんとす。

▲歐洲と日本育兒法の比較

虎は其子を生みて後僅かに三日を經れば、之を千仭の壑中に陷れてその強弱を試み、其よく自ら斷岸絕壁を攀りて再び母虎の下に來るものゝみを哺ふといふ此くして乳兒の時に強弱の淘汰をなすが故に、生來虚弱なるものは空しく溪谿の中に斃死し、生れながらにして強健なるものゝみ生存するなり、從つてその弱者に與ふべかりし乳汁は生存する強者の有となるを以て生れながら強健なりしものはます／＼強健となるの理なり。此の如き育兒法なればこそ虎は百獸の王とも呼ばるゝ猛獸となり得べきなれども、又その殘忍酷薄なることはげに獸類の獸類たる所以にして淺ましき限りといふべし、されど人類にも此あさましき猛獸の育兒法に似たるものあることそうたてけれ。

人口統計にて有名なる「ワッポイス」といふ人の調べたる、歐洲十三箇國の人口の平均年齢別と、我國人口の平均年齢別とを比較するに其割合は次の如し

▲人口一萬人に就ての年齢別

		歐洲十三ヶ國平均	日本
第一期	當歳より五歲まで	一、一二〇	一、一七三
第二期	六歲より十歲まで	一、〇六六	一、〇八二
第三期	十一歲より二十歲迄	一、九三四	二、〇七五
第四期	廿一歲より三十歲迄	一、六九二	一、五七九
第五期	卅一歲より四十歲迄	一、三七三	一、二八六
第六期	四十一歲より五十歲迄	一、一〇七	一、一五九
第七期	五十一歲より六十歲迄	八四六	八一四

此の統計表によりて觀れば第一期より第三期までは日

本の人口は比較的多數にして、第四期以後、歐洲諸國は多數なり、即ち日本は歐洲諸國よりは小兒の數多くして壯年者少なく、即ち日本にては小兒時代に死するもの少なく壯年時代に至りて死するもの多くして、歐洲諸國にては之と反對に小兒時代に死するもの多く、壯年時代に死するものは少なきことを示すなり或る人はこの觀察を否みて、歐洲諸國は文明の程度高く又宗教の力により、人々節慾する結果として出產數少なきが爲め我國よりは小兒の數少なしと論ずるものあれども其實然らずしてそは只論者の臆說に過ぎざることは又統計上より證明さるゝなり、即ちやゝ正確に近き統計によれば彼我人口出產の割合は次の如し。

▲人口百人に付き一年間に於ける出產數

歐洲十三ヶ國平均	三、六二
日本	二、九五

此の如く我が國の出產數は歐洲諸國より少なきに拘らず、却て小兒の數は歐洲各國より比較的多きことを見れは小兒の死亡數は彼れに多くして我れに少なきことを知るべく、又之と全しく小兒の數は我國は彼れより多きに拘らず、壯年時代に至りては却て反對の現象を來たし彼れの人口多くして我れの人口少なきを見れば壯年時代に至りて我國の死亡數多きことを知るべきなり。

彼我人口の割合上此の如き現象を來たす所以は、氣候風土の干係等其他種々なる原因あるべしと雖も、就中重もなる原因として一般に認めらるゝ所のものは、彼我育兒法の差異に在りと言はざるべからず。歐洲諸國の如き文明國にして其育兒法は却て我國に劣ると言はゞ人或は之を怪まんもその實全く然りと言はざるべからざるものあり、勿論歐洲諸國の育兒法は學理的には發達し居ること疑ひなく、此點に於ては我國の育兒法の遠く及ばざる所なるべし。

▲學理の育兒法と愛情の兒育法

歐洲諸國にては其學理的に發達せる育兒法と彼の國々の風俗習慣上完全に實行され難き傾きあり、何となれば歐洲諸國の習慣として、女子は社交上にまれ政治

上にまれその家庭以外の事業に干與する範圍の廣きこと、我が國の女子があまりに家庭的にしてあまりに偏狹なる範圍の退縮し居る如き比にあらず、從つて歐洲諸國に於ては母たるものは兒童の養育に專ら力を盡くすこと能はず、又たとへ家庭內に在りても乳兒を褓母に一任して、己れは夫と手を携へて散策を試むる如き風俗なり、甚だしきは容色の早く衰ふるを恐れて乳兒に己れの乳汁を與へず、牛乳を以て之に代ふるといふ、抑も小兒を養育するに牛乳を以てすると母乳を以てすると孰れが可なるかは學理上議論ある所なるが、先づ牛乳を以て養ふことは優れりとなし其他の點に於ても凡て彼れの育兒法は完全なりとするも、如何せん、此學理的發達せる育兒法を實行すべき責任ある母は愛情を其子に專らにして之か實行を務むることをなさすして責めを傅母に歸す、而して傅母か其乳兒に對する愛情は更らに之より深からざるを以て、其保育監護は母の自らなすが如く懇切なる能はず、學理に適へる育兒法もその實行上宜しきを得ざるが爲め、生來虛弱なるものは冷酷なる機械的保育に堪え得ずして夭死し、生れながら强健なるものゝみは生長し得るなり、自らその子を壑中に陷るゝことこそなされ、其實際は恰も虎が其子に對して施す所の强弱淘汰の法は自然に行はれ居ると言ふべし、されば彼の國の壯年者は强弱淘汰を經て生き長らへ來りし强健者なれば、勢い壯年時代に於ては死亡者少なきの理なり、之に反して我が國の育兒法は歐洲諸國の育兒法に比すれば、その學理は發達し居らざるを以て、乳を與ふる時間の定めなきが如き衣服の衞生的ならざるが如き種々の欠點は免かれざれども、我が國の慣習上一家の母たるものは專ら力を家庭內にのみ注ぎ、殊に小兒の養育に至りては慈母は萬事を擲ち滿身の愛情を傾けて他人の到底忍び難き困難辛勞を忍び、殆んどその身命を犧牲に供して厭はざるの美風あり、此事實は歐洲人も認むる所にして彼れ等は我國を指して「子供の極樂園」なりと稱す。此の如く愛情の點に於ては我れは彼れに優り、愛情に溺るゝあまり却つて學理に適せざる欠點も生ずれども、一

方に於ては冷酷なる機械的育兒法の及ばざる長所ありて、此長所は其短處を補ふて余りあるが故に、もし歐洲諸國の如き學理的といはんよりは寧ろ機械的とも名づくべき育兒法によらば一日も生存し得ざる虛弱の小兒も、我國に於ては彼國より比較的に長年月間生存し得るなり、此の如くにして虛弱なるものも比較的長年月間生存し得るも、天賦の躰質如何ともし難く到底生れながら强健なるものゝ如く生存し得ず、されば壯年時代に至りて死亡するもの多き理なり。

▲富國强兵と人道仁義

さて彼我の育兒法を比較してその利害如何といふに、單に之を物質的に觀察して經濟上より論ぜんか、我が國の育兒法は不生產の甚だしきものなり。小兒は自ら自己の生活資料を生產し得ざるのみならず、其養育保護の爲めに壯年者をして生產事業に全力を盡くさしむること能はざらしむ、社會の生產力を減じ經濟上不利益なること之より甚だしきはなし、但し將來成人の後生產に從事し得る小兒を養育することは長き年月の間に就て見れば必ずしも不生產にあらず、却て將來の生產力を增す所以にして經濟上喜ぶべきことなれども壯年者の保護を要する間のみ生存し、その間自己は少しも生產をなさずして壯年者の生產せるものを費やし加ふるに壯年者の生產力を害し居りて漸く自ら生產に從事し得る時に至りて死亡する如きものを養ふことは徹頭徹尾不生產の極にして富國强兵の途に反し國家の進運を阻害すること幾くなるやを知らず。此理は彼我の區別なく當然のことなるが、さて我國の如く小兒多く壯年者少なしといふことは、即ち此徹頭徹尾不生產的なる虛弱の小兒は比較的に多きことなれば、從つて經濟上に於て彼れに比して損害を受け居ること大なる理なり、然らば或る一派の所謂帝國主義論者の如く、又或る一派の富國强兵論者の說に從つて、我が育兒の慣習を改めて歐洲諸國の虎に似たる育兒法となすべきか否々人類は國家の爲めに生れたるにあらず、又經濟の爲めに生れたるにもあらず、人類をして人類たらしめんが爲めに生れたるなり、人ありてこそ經濟もあり國

家もあるなれ、強きものは弱きものを助け、壯者は幼者を助くるは人類の人類たる所以にして、命旦夕に迫れる病者をすら一刻たりとも生き長らへしめんと務むるは人情の然らしむる所にして、此人情を全ふせしむるが爲めに經濟も必要なり、國家も必要なり、故に余は飽くまでも名を國家に籍りて人道を無視するものに反對せざるべからず。もし又國家は主にして人は從たりとするも、なほ歐洲諸國の育兒慣習によることは必ずしも富國强兵の途にあらずと信ず。蓋し國家の生命は無窮なり目前の利益によりて百年の計を忘るべからず、百年の計の爲めに千年の後を忘るべからず、此の如くに國家の無窮なることを思はゞ人道を捨てゝ一時の富國强兵を得るも、又其人道を捨てたる應報の來らんことを恐れざるべからず。之を一家に就て見よ、貧乏もの、子澤山といふ諺の如く、貧乏なるが故に子多きにあらず、子多きが爲めに貧なりと雖も、貧者は永久に貧ならず、子なくして富めるもの奚んぞ知らんや、子多き貧者よりも幸福ならざる時の來ることあるを。又さらに國家に就て見よ、人情を矯めて猛獸的育兒法を執り武斷敎育によりて一時富國强兵天下並びなしと思へる彼の「スパルタ」國は、千年の後ち今いづくにか在る、迂遠なる孔孟の仁義說を尊びて經濟の何たるを知らざりし我が君子國は今なほ依然として繁榮し居るにあらずや、然らば人らしき育兒法を捨てゝ虎の如き育兒法による必要なきにあらずや。さればとて又欠點多き我國の育兒法のこのまゝにては何時までか滿足すべき、我が愛情主義を根本とし、彼れの長たる學理を應用して完全なる育兒法となし、小兒の多きと共に壯年者の數をも多からしむることを務めば、人道よりいふも、國家主義より見るも、經濟上より見るも、少しも間然する所なく、此に至りて始めて黄金時代に達すべし、是れ世の母たり若くは母たるべき人々の務めにあらずや。

遊戯の一時は對話の一年よりも發明する處ろ多し

信州の割烹講習會

女子職業學校割烹科教員　岡野をり江

長野教育會は去年夏期はじめて長野に女子のために割烹講習會を開かれましたが、今年は篠井線が全通したので、松本にて開かれる事に決議され、去年の通り私に講師として參る樣に會長からの御依囑に未熟てはござゐますが、家庭の庖厨改良に出來るだけ働いて見たいと存じますので、お受けを致しました。

松本にての講習

▲期間と人數　去年長野は三週間でござゐましたが、今年松本は二週間と申す豫定て、人數は初め五十名限りが段々ふへて百名になりました。講習は八月四日から十六日まで、中の日曜一日休み、毎日朝八時から夕五時まで開きました。

講習の場所は松本中學校の生徒扣室を用ゐました。元來庖厨の設備のない扣室ゆへ勝手かよくはありませんでした。松本は長野に比し飲用水はきはめてよろしいのを自由に得られます地方ですが、この講習室は雜用水はありましたが飲用水の便が悪るく、小使にくみこませましたので氣の毒て、なるべく使用に注意するやうにしました。短期の講習に十分な設備を望むわけではありませんが、講習の場所はなるべく飲用水に便宜な箇所を選定するのが必要でござゐます。

▲器具　器具は大概松本て整へられました。『煮笊』鬼『スダレ』の樣なものさへ用意され、東京からもつて參いつたのは、『テンピ』『ソース鍋』『フライパン』『ビスケット型』『アイスクリーム器』など、『押し枠』はひとつもつて參つたら、これを雛形に直ぐに作られました。そのほか『引筒』ぐらゐ、なるべくあれコレといはず、地方にあり合せのものを用ゐるつもりで、鍋などは學校のを借用しました。

▲材料及實費　夏季山間の信州に割烹材料に乏しいのは去年長野の講習で覺えがありますので勿論魚類は用ゐ得られるとは思ひませんでした、且なるべく牛鳥

肉の類を用ゐたいとの考へもありました。それは鳥獣の肉の調理がとかく家庭にまだ發達して居ない。今後ます〱これを用ゐるやうにならう、また用ゐねばならぬとぞんじますのと、殊に信州の如き魚類に乏しい地にはこれが必要であらうと思はれ、洋食または折衷食を日本割烹と半々ぐらゐに講習科目に加へました。講習生の一半はバタの風味を喜ばれるくらゐ、他の一半は牛乳の臭もあまり好まれぬほど。ソレてアイスクリームなども匙をとらずに嫌はれるものもありました。松本はよく開けて大概のものは不自由なく得られますのに、洋食店はないとの事でした。しかし肉の調理については一躰によく注意されて嫌はれる者はありませんでした。なにしろ百人からの大勢ゆへ、シチウを作つた時は馬鈴薯一斗五升を用ゐ、一斗鍋に四鍋つくりましたが、このシチウが一滴ものこらず盛りつくされてしまゐました。

牛肉鶏肉はこう用ゐましたが、豚肉は夏季なので得る事が出來ませなんだのは殘念でした。モット豚を食べます事を奨勵して、鹽豚でも製す事にしたら、山間の食物材料に適す事であらうと思はれました。

魚類は一躰に不充分のところへ、時化で滊車が不通となつたくらゐゆへ、越后からの輸入がされ、僅かに鹽鯖生鯖、小鯛を用ひたばかり。鯖は膾と昆布締とに用ゐました。秋季にさへなれば魚類は自由に得られると聞きました。

信州は鯉が多うござゐますが、わけて水利のいゝので、松本は養魚業が面白いほど盛んでござゐます。臼田ては鯉をテンプラにしたのを饗された事があります。蔬菜は去年長野では大根、甘藷にさへ困りましたので、甘藷など東京から用意しましたが、案外松本は新薯も大きなのがあり、大根も太く、細隠元もあり、畑ものは自由によいのがありました。長野よりは土地がよいのかそれとも今年は畑作が早熟であるのか、兎も角この方の材料は十分でした。

醬油は『龜甲萬』があり、酢も味淋も可なりのがあり。去年の長野よりは一躰に材料は豊かでありました。

實費は日に平均五品て、最低七錢五厘、最高二十二錢、二週間合計一圓八十錢てありました。

▲閉會　八月十六日に講習證明書を授與しました。鳥羽松枝子（長野高等女學校教諭）多湖きね子（松本高等女學校教員）が補助せられ、廣瀬、武野稻垣横內四女氏は幹事に、そのほか、高橋、三村、三井、平林四君の助力をうけ。又敎育會の本會は長野にあつて、松本に開いたので原副會長はわざ／＼開期中出張巡視され。首尾よくこの講習を終了しました。

南佐久婦人會の講習

松本の講習修了の後、十九日から一週間南佐久郡臼田村て同婦人會の講習が開かれ、これにも參る事になりました。

信州は各郡に敎育上有力な婦人の團體がありますさうて、殊に南佐久の婦人會はこれまで率先して種々の講習を開かれ、有力であると聞きました。

臼田は小諸から五里這入ります、郡役所の所在地て、岩村田、野澤など開けた處はその途中にあり。郡役所の所在地てす。講習の場所は臼田高等小學校でありました。器具は松本に用ゐたものをソックリこの會で一時讓りうけ（閉會のとき臼田では望み人が多く、入札にして會員に分配しました）。すべて松本の通りに實習が出來ました。

魚類はやはり越後からで烏賊、章魚、小鯛を用ゐる事が出來ました、鯉はこゝも多くあります。牛肉は屠殺日があつてその日の外には得る便がありません。鷄卵はよろしいのがありました。野菜は、大根、茄子、南瓜、馬鈴薯その他松本よりもさらによいのがありました、講習生は九十三人、十三四以上の年少の令孃が多く、近在一二里ぐらゐから通はれたのが多うございました。

この講習會に嬉しく思ひましたのは材料はすべて現品を講習生各自が携帶された事て、大根でも、胡瓜でも、鷄卵でも、鯉でも大槪自家のものを銘々もつて來られました。それゆへ野菜は東京の市中では迚も得られな

い新鮮のものばかり、瓜をうつとプン／＼香が立ちますので心地がよく、風味がよろしうござゐました。隨て現品をのぞきますので、實費はすくなく、ある日は一人二錢五厘で濟んだ事もありました、地方に開かれる講習會は自然こうなりましようが、なるべくこうしたいと思ひます。臼田はよい例でござゐました。この會の補助にも鳥羽松枝子を强いて煩はし。野尻上條、川田、丸山四女氏は幹事にわたられ、同婦人會長は高見澤氏等の配慮を多くうけました。

兩所通じて講習期習の不足の上に、季節が割烹實習には材料を得るに都合がわるく、思ふ樣に出來かねました。地方殊に信州の如き地方にこの講習を開くには秋季か春季がよろしからうと思はれ、私はこの季間にこの會を開かれるのを望みます。

(完)

酸き葡萄酒酸き腰乾、及裸麥の麵包は家を富ましむ

秋の庖厨

(季節總菜のしをり)

春江女史

▲煮物

○むし鰯あんかけ。おろし山葵
○蛸の柔か煮。自然薯うまに
○燒餅煮ひたし。新蓮根しほ煮
○さゝえ薄切。(腹ときて共煮)胡椒ふりかけ
○蛤時雨煮。紫蘇の實うま煮
○いなだの酢煮。干ずいきの煮染
○鹽いり付松茸(青のりかけ)
○松茸湯煮くづかけ。おろし柚子
○ゆで慈姑。ひじき

▲なまり節葛かけ　大せみ切にし薄醬油にて煮揚げて葛だまりを掛くるなり、加役にはおろし山葵、或はけしの類よろし、これは平椀の類に盛るべし、又中皿に用ゆるには大きくささて燒鹽をちらしかけ蓼酢を

掛くるべし、大猪口に用ゆるには小く賽形に切りて黒胡麻味噌にあへるをよしとす

▲鰯うしほ煮　頭と腸とを取り能く洗ひ暫く鹽を塗り置き後ち水にて洗ひ熱湯を上よりかけてその油氣を取り去り常の煮うしほの如くすべし、但しあまり數多く入れては惡しく三つはかり入るゝなり、尤も小鰯をよしとす潮煮の法は色々あれど總て先づ魚に熱湯をかけて油氣を去りて後鹽梅すべし

▲甘鹽鰹の料理　湯煮してこぼし酒、醤油少し入れ鹽梅すべし盛りて出すまへに酢を入れるなり、取合せには根芹などよし、又茶碗などに用ゆるには右の如くし鹽を少し出してよき程に切りむしして長いものあんをかけるべし

▲拌へ物

○身蜆、葉人參五分切。さんしやうみそあへ

○赤貝へぎて、茗荷のせん。わさび味噌あへ

○海老みそあへ

○芋莖胡麻酢、はしき豆あへ

○にんじんほろあへ

○盛分、鮹の黒ごまあへ、身蜆青あへ、松茸白あへ

△蒟蒻あへ物　むしりこんにやく、小賽目蒟蒻、糸こんにやく細ぎりなどいづれも鹽にてもみ湯煮して水氣を去り或は油にてあげてか又はその儘にてもよし好みの味噌にあへるか又は味噌かけとすべしあしらへは油揚豆腐、木くらげ、其他時のもの見合すべし

▲松茸味噌拌　苦みたる上等の松茸を細ぎりとし熱湯をかけて水氣を去り冷して抽味噌胡麻みそその他好みにあえるべし

▲葱の富士あへ　ねぎの白根ばかりを一寸程にきりゆでて籠にあげ白胡麻を摺り味淋に酢を加へ味噌を入れ摺り合せてあえるなり

▲萵苣の芥子あへ　葉をよくゆでゝよく水をきり味噌をこして酢と味淋とを加へ芥子をまぜて拌へるなり

▲ずゐきあへ　皮を剝ぎて一寸五六分位にきりゆで

て絞りあしらへに實のいりたる枝豆ゆでて彈き出しともにあえてよし胡麻あえ味噌あえなどよろし

▲茄子のあえ物　茄子を短册か小賽に切りて水につけおきあく出しして水氣を去りてあえるなり、胡麻味噌唐からし味そなどよし

あえ物をつくるに總て野菜ものはざつと湯がきてよろしく乾物ならばよく湯煮にするか又は水にひたして柔らげて用ゆべし、その他油揚豆腐、絞り豆腐などは一寸炙りてよろしあえ方は味噌何にても好みと品により白あえ、黒あえ、酢あえ梅肉あへ、生姜みそ、わさびみそ、からしみそ、山椒みそ唐からしみそ、蓼みそ木の芽みそいろ〳〵あり時節に見合すべし

▲汁

○身しゞみ、ちさこま〳〵

○新里いも、十六さゝぎ

○茄子の大賽の目薬にんじんこま〳〵

○松茸冬瓜の大賽吸口に柚子

○初茸つまみ菜口柚子

○鮑のうす切、青こんぶ短册

▲摺り流し初茸汁　初たけを細かに刻みて白水にひたしきよく洗ひて擂盆にて摺り煮汁にてとろゝ位にすりのべすゐのうにてこして汁にまぜるなり汁の實には摘み菜などよし

▲おこと汁　これはさと芋を四半にきり、大根をいてふに切り人參を輪切にし、燒豆腐を角切にし赤小豆をいれて共煮にするなり

▲八杯豆腐汁　水六合に酒一合の割合にて能煮立て醬油一合いれ都合八杯の分量にて、豆腐は絹ごしを薄やつこか又は細長く角に切り澄汁仕立にすべし、但し葛を薄くとき汁の煮立つ時入れば味ひ殊によし

▲摘み菜しる　赤味噌仕立にて摘み菜入れて煮るなり、あしらひに里芋をいれるを柳に手まりといふなり以上いづれも鰹魚節だしと知るべし。

▲とろゝ汁　自然薯又はつくね藷の皮をむきてわさびおろしにて卸し摺鉢にてよく摺りさめたる味噌汁

を少しづゝ入れて摺まぜのばすなり、上おきに青海苔を火どりて粉にしてかくるなり

▲膾並刺身

○葛引鯛、蓮いも。おろし山葵、いり酒
○鯉細つくり、子を酢にてとき。おろし山葵
○さより細つくり、貝のはしら。生姜酢
○鰯引さきて、大根たん冊。生姜酢
○鯖うすつくり海月せん。二はい酢
○鰡うす作り、めうがせん。からし酢みそ
○いなだ皮ごとづくり。たて酢

▲鰯の酢びして　鰯の首と腹を去り能くあらひて水氣を去り鹽をふりよき酢をひたくにして漬け二時間ばかりおして初の酢を捨て新らしき酢を仕かへ壓をおくこと初の如くにし右の如く四五度して酢をしたみて壓を置くべし、扨大根、茄子、唐がらし、蓼など一しよに入れて漬けてよし

▲蛸鱠　章魚の足を成たけ薄く切り熱湯に通し大根刻みて鹽もみにして絞り胡麻酢にてあえるべし

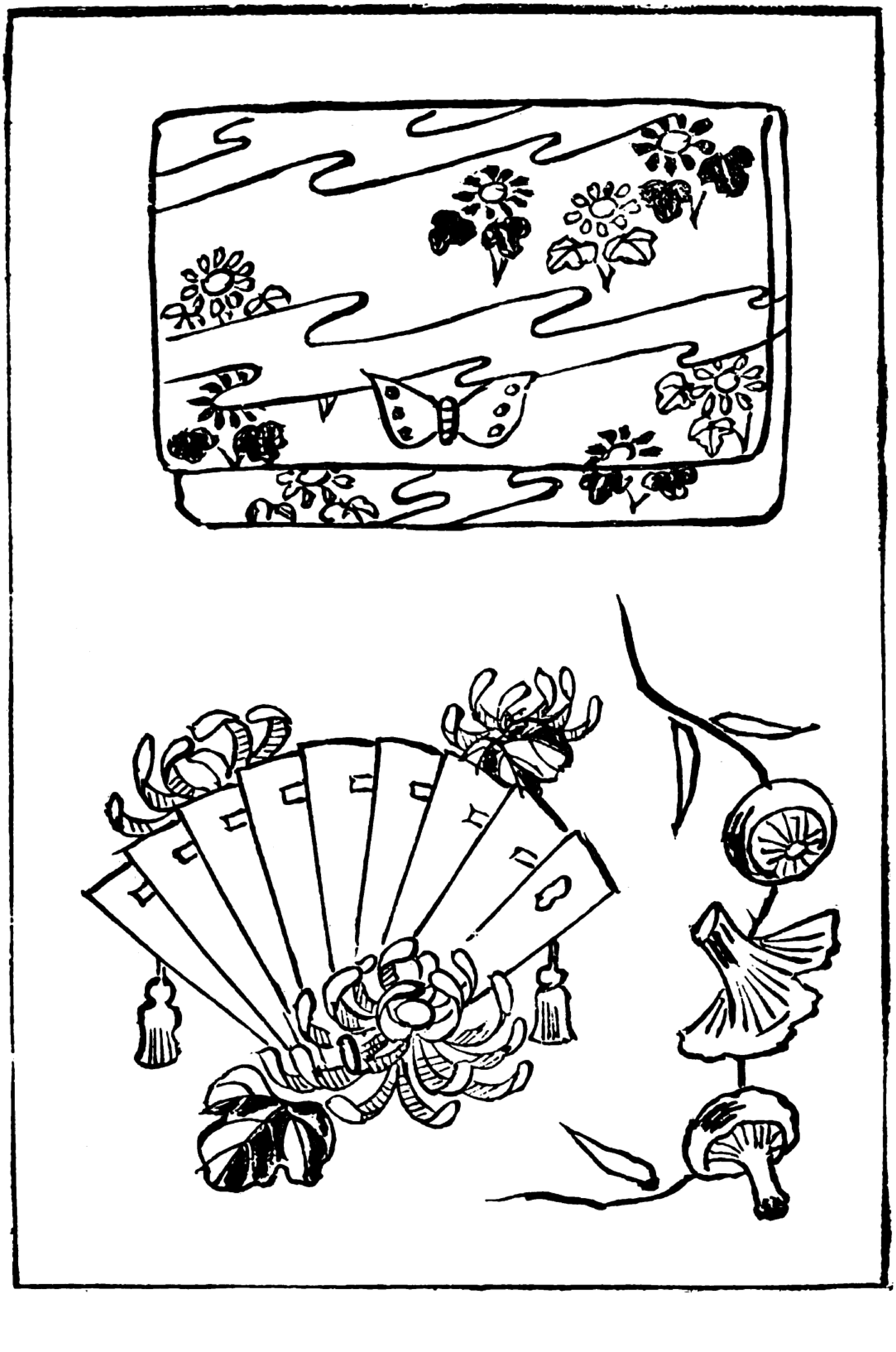
▲鮒ぬたあえ　三枚におろし大根、胡瓜、白瓜の類きざみ合せ酢みそにあへるべし

▲小鯛三杯酢　水洗ひして串ざしにし白焼して胡麻の油にて衣なしに揚げ三杯酢につけ置くべし三四日にて骨まで柔かになるべし、又唐がらしを入れ置くもよし

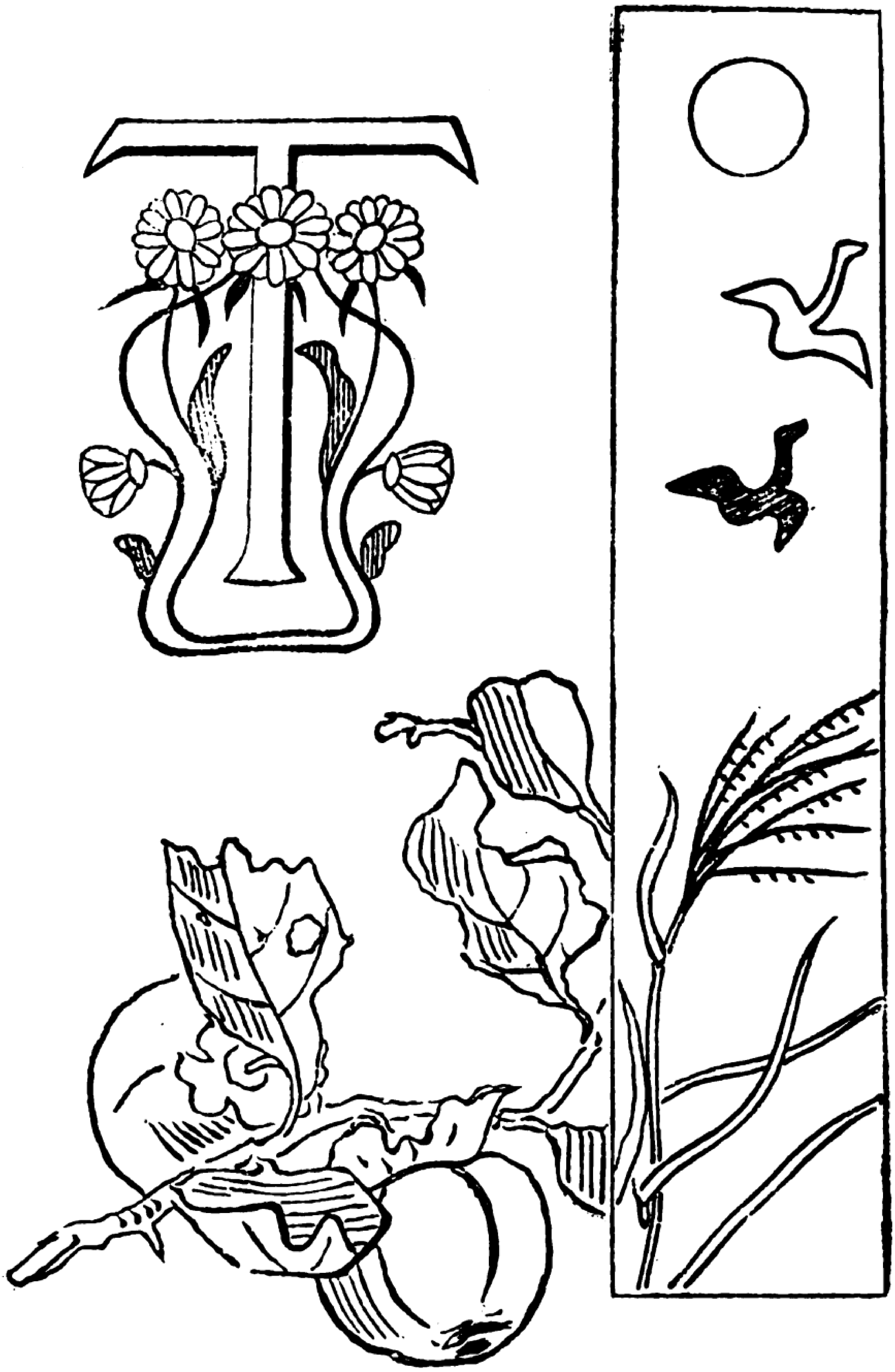
▲鱧皮鱠　付焼にして細かく刻み揚げ豆腐焼きて刻み瓜類もみて盛り合せ二杯酢又は生酢かけて出すべし

▲浸し物

○ぜんまい、からし酢
○藤豆、黒胡麻あえ、
○ちさ亂切生姜細切酢じようゆ
○餘まき隱元斜ぎり酢じようゆ
○裂茄子（焼きたるを）胡瓜醬油
○菊の葉びたし三杯酢



刺繡圖案



▲茄子の浸し物はゆでゝ水に浸けあるを拔き板の上にならべ水氣をおし出て取り、ごまの醬油をかけるか又は丸ながらあつ灰に入れ焼きて皮を去り引さきて生醬油、胡麻ふりかけて用ふるもよし

▲又蓮芋の浸しは皮を取り小口切にしてザツト湯煮し、三杯酢、胡麻かけて用ゆべし

▲ぜんまいの浸しは前々より水に浸け置き湯に灰をいれてその中へ入て煮立て水につけてよくあらひ水氣をしぼりて一寸五六分か二寸位にきりからしを溶き醬油に合せてかけるべし

▲牛蒡ひたしは牛蒡をよくこそげ大せんに切湯煮して熟つ〳〵の處へ白胡麻を炒りて摺りまぜ右の牛蒡にあえかけて用ゆべし

すべて浸し物は猪口又は小鉢に盛るべし、淡泊なるをよしとすれば餘り多く盛らぬがよし、扨生醬油、摺り胡麻醬油、胡麻醬油、芥子醬油、酢醬油、山椒醬油、柚子醬油、山葵醬油、唐辛醬油、薄醬油その他二杯酢、三杯酢、合せ酢等かけて出すなり尤も爪類は格別なれどすべてザツト湯煮して用ゆべし

▲吸物

○鯒斜きり。十六さゝげ
○黒鯛切身、粒初茸、防風
○海老のたゝき、冬瓜そぼろ。こま〳〵生姜
○鶉のたゝき、つまみ菜
○むすび干瓢、なたまめせん

▲このしろ叩き吸物　頭と骨とを取りよく叩きてよきほどにとりて油にてあげあらへにはわり葱さゝがし牛蒡など用ひ味そずまし仕立にすべし

▲鱧の皮吸物　はもの皮の背ひれを取り味淋醬油にて付焼にして小口より二三分ほどに切りかき餅をかきて二品とも器にいれ上等の煎じ茶を熱く煮てかけ胡椒の粉又は生姜の絞り汁を入るべし

▲鮟鱇吸物　水わらひして皮を引き身を小さく切り皮も細かく、切り身、皮、わた、髯ともに味噌清汁仕立てにすべし

史傳

婦人立志篇

▲序説

塚越停春

天は婦人を三面に作れり。一面は人としての婦人也。一面は妻としての婦人也。一面は母としての婦人也。凡そ天地の間に人と生れたるものは、其男性たると女性たるとを問はず、必ず先づ一人前の人たらざるべからず、必ず先づ一人前の國民たらざるべからず。是れ其一個の人として作られたるが爲め也。是の點より見て、總ての婦人は必ず先づ人としての婦人ならざるを得ざる也。之と同時に、幾ど總ての婦人は則ち又必ず或る男性と相擇て相共に夫妻的關係を定め、家庭的集團を成す。是れ其一個の妻として作られたるが爲め也。而して妻の幾ど總ては則ち必ず子を生み子を育するの任を負ふ。是れ其一個の母として作られたるが爲め也。

母として作られ、妻として作られ、人として作られたる者、果して婦人の婦人たる所以なりとせは、婦人の宜しく如何に志を立つべき乎は則ち之を知ること難きに非ず。母としての婦人たらは、則ち須らく大なる母としての婦人たるを期すべきのみ。妻としての婦人たらば、則ち須らく大なる妻としての婦人たるを期すべきのみ。人としての婦人たらば、則ち須らく大なる人としての婦人たるを期すべきのみ。

大なる人としての婦人たらむと欲せば、則ち須らく自ら其人物事業を大成せざるべからず。大なる妻としての婦人たらむと欲せば、則ち須らく夫をして其人物事業を大成せしめざるべからず。大なと母としての婦人たらむと欲せば、則ち須らく子をして其人物事業を大成せしめざるべからず。

子をして人物事業を大成せしむるに道あり。先づ自

ら人物事業を大成せざれば能はず。己自ら大なる母たらずして能く其子を大なる子たらしめむとするは甚だ無理なる注文なれば也夫をして人物事業を大成せしむるに道あり。先づ自ら人物事業を大成せざれば能はず。己自ら大なる妻たらずして其夫を大なる夫たらしめむとするは甚だ謂れなき要求なれは也。是の故に己自ら大なる人たらむと期するものは言ふまでもなく、或は大なる妻たらむと期し、或は大なる母たらむと期するものは、即ち必ず先づ己自ら大なる人たるを期するより始めざるべからず。

然らば則ち婦人の大なる人たるを期し、幷せて大なる妻たり大なる母たるを期するの道何如。首として身躰の健康を有せざるべからざる也。教育を有せざるべからざる也。自治の精神と資格とを有せざる



べからざる也。思慮に富まざるべからざる也。勇氣なかるべからざる也。鑒識なかるへからざる也。愛情に富まざるべからざる也。敬意を存ぜざるべからざる也。品行を保たざるべからず。勤儉ならざるべからざる也。信仰なかるべからざる也。誠實ならざるべからざる也。たとへ其總てを有せざるまでも、必ず其數者を有せざるべからず。

若し能く其數者を有し、若くは其總てを有する乎、獨り自ら立ては以て謂ふ所の大なる婦人たるに足り、人の妻となりては以て謂ふ所の大なる妻たるに足り、人の母となりては以て謂ふ所の大なる母たるに足る。健康なれは斯に爲すあるを得れは也。教育あれば斯に用ゆるあるを得れば也。自治の精神と資格とあれば斯に立つあるを得れば也。思慮に富め

は斯に變に處するを得れは也。勇氣あれば斯に恐れざるを得れば也。鑑識あれば斯に其共にする所を擇ぶを得れば也。愛情に富めば斯に相親むを得れば也。敬意を存すれば斯に相褻れざるを得れば也。品行を保つは斯に過なきを得べければ也。勤儉なれは斯に乏きを免るべければ也。信仰あれば斯に守る所あるを得べければ也。誠實なれば斯に其終を全ふするを得れば也。

知るべし、婦人の志を立てゝ専ら勉むべきの事は、則ち

第一に健康を保つに在るとを。

第二に教育を十分にするに在ることを。

第三に自治の精神資格を養ふに在ることを。

第四に思慮を練るに在ることを。

第五に勇氣を有するに在ることを。



第六に鑑識を研くに在ることを。

第七に愛情を發揮するに在ることを。

第八に敬意を忘れざるに在ることを。

第九に品行を愼むに在るとを。

第十に勤儉を守るに在るとを。

第十一に信仰を保つに在とを。

第十二に誠實を存するに在ることを。

婦人の人物事業を大成する所以に至ては則ち實に其中に在るのみ。夫をして人物事業を大成せしむる所以に至ても亦實に其中に在るのみ。子をして人物事業を大成せしむる所以に至ても亦實に其中に在のみ。

▲健康

健康は人生の最も重要なる打出の小槌也。あらゆる慶事吉事は毎に健康の槌の揮るゝ所に打出さる。

健康の槌は、事業に觸るれば以て成功を打出すべく、行爲に觸るれば以て道徳を打出すべし、容儀に觸るれは以て美容を打出すべし。又之を家庭に觸るれば以て一家の和樂を打出すべく、之を夫に觸るれは以て夫の人物事業を打出すべく、之を子に觸るれば以て子の人物事業を打出すへし。たとへ健康其物が直接に總ての幸福と總ての成功とを打出さゝるまでも、總ての幸福と總ての成功とは則ち決して健康の基礎なき所に打出され得るものに非さる也。

健康なる精神は健康なる身体に宿ると云へり。身体の健康に申分ある時は、之が精神も自ら戚憂萎縮を免れずして、假初の感冒に罹りても何となく氣分の引立たさるを覺え、蟲齒の痛みにも少なからず精神の萎靡を感するは、世人の常に經驗して之を知る所に非すや。之に反して身体の健康旺盛なる際には之が元氣も自ら昂り、何事を思考するにも克く詳精なる思考に堪へ、何事を判斷するにも克く明確なる判斷をなし得るは、是亦世人の經驗する所ならずむば非ず。是の故に男性にまれ、女性にまれ、如何なる階級の人にもあれ、如何なる種類の事業にもあれ、苟も一事一業を成さむとし、一人一個の人物を作らむとせば、何は扨置き身体の健康旺盛にして精神の健康亦之に從ふに非ざれは能はず。現に古人も健康は成功の母なりと謂はずや。

然り健康は實に成功の母也。獨り成功の母なるのみならず、亦實に道徳の母也。何となれば謂ふ所の道徳は則ち人類の共存規則に對する個人の自動的敬重を指すものなれとも、所謂自動的敬重は身体精神の健康ありて斯に始めて遺憾なき發揮を見るに足るべけれは也。身をつみて人の痛さを知り、同病にして相憐むは、則ち人情の常にして、自家の痛悲の爲めに事情相同じき他人の痛悲を痛悲し、自家の不幸の爲めに他人に對する慈善心を發するものなきに非ず。而も積極にして健全なる慈善、健全なる同情、健全なる道徳は、則ち身体精神の健康に申分なく、和樂愛物の情溢れて慈善となり、同情となり、道徳となりたるものならざるべからず。又然らざるものは實際之を實行すへき實力もなき也、た

とへ全く實力なきに至らざるまでも、其實力には頗る制限あるものたることを免れざる也元來人類の共存規則なるものは主として弱者の爲に存ずるものにして、之が規則の敬重は强者に於て最も當に遵守せざるべからざるものなるを知らずや。將た强者の敬重にして乃ち始めて價値あるの敬重たるを知らずや。

斯れば所謂身躰の健康は何事をなすにも之か土臺となるものにして、男性となく、女性となく、最も先づ之か保全の爲に力を致さゞるべからざる也。然り而して我邦に在りては、今猶往々に之を忽がせにするものなきに非ず。就中婦人に於て殊に其然るを見る。日本の婦人は、平生家庭に深坐するのみにして外出することは甚た多からず。加ふるに



多くは一定の職業を有せざる也。否成るへく勞働を避けて手足の十分なる發達をなさざらむことを望み、戸外の行歩を避けて日にやけざらむことを望み、甚しきは其食を小にして以て其腰を細にせむことを望むものさへある也。以爲らく此くの如くならされば以て其美容を保つに足らずと。而して此くの如きの風習は、社會の上流に至るに從ひ、愈々益々甚しく、之が結果は上流社會の婦人を擧げて殆ど半は病人たらしめむと欲しつゝある也。然れども此くの如きは則ち婦人をして全く爲すなきものたらしむる所以なるのみならず、亦實に其美容を殺す所以たり。眞成の美容は決して筋肉の不發達なる中に在るものに非ずして、十分に發達したるものゝ中に在り。決して半病人か

る間に在るものに非ずして、十分に健康なるもの丶間に在り。何となれは健康の美は眞に枝頭の花の美なれども、不健康の美は恰も室咲きの花の美の如く然るものなれば也。

加之家庭の和樂の如きも、其最も重なる原因の一は是亦一家の健康に存じ、就中主婦の健康に存す。主婦健康なれば、家事の總てが滯りなく擧げらる丶に止まらず、其精神も亦自ら愉快に實るを以て、觸る丶所春を生じ、融々として和氣家に滿つるに至る也。又婦人自ら心身共に健康にして、克く自身の人物事業を成就するに於ては、以て進ては積極に夫の人物事業を助成するに足り、退ては消極に夫の煩累掣肘とならざるに足らむとす。若し或は之に反して婦人の健康に多少の障碍ある乎、之が心身の働きは自ら活潑明確を缺き、家に在りては隅々に手の屆かぬ所あるべく、夫を助けては則ち夫の憂をなし、夫の手足まとひとなり、子を養ふては則ち亦健全なる能はず、子を敎へては則ち亦行屆かざる所あるを免れざるべし。

數へ去り數へ來らば、健康が人生の最も重資なる打出の小槌にして、殆ど總ての成功と福祉とが皆健康の槌より打出さる丶ものなること知るべき也。殊に從來の我邦に在りては、婦人の總てが妻たり、妻の總てが母たる有樣なりしを以て、不健康なる母も、半病人の妻も、其子に憑り、其夫に賴り、以て世に立つことを得たりと雖も、兩性の差別次第に減じて、婦人も男子も同じく獨立して一己の生活をなすもの次第に多きを加ふる今後に在りては、復た尫弱半病人の婦人にして到底劇烈なる生存競爭に堪へ得べきに非ざる也。

試みに健康と成功とか古より我か婦人界に如何なる關係を有ちたりし乎を見よ、其如何に重要なるものなりし乎を知るに於て自ら餘師なくむは非ざるべし。

我邦上代より平安朝の末に至る間、殊に寧樂朝前後に至る間は、婦人の材力か頗る發揮せられたる時代也。遠く神代の昔に天照太神の天下に君臨し給へるは申すもおろか也。降て帝國建設以後に在りても、神功后を初めとし、飯豐靑皇女、推古帝、皇極帝、持統帝、元明帝、元

正帝、孝謙帝等、皆女性を以て、或は大政を攝行し、或は四海に君臨し給へり。伊弉冊尊の如き、豐玉姫の如き、玉依姫の如き、佐保姫皇后の如き倭迹々日百襲姫の如き、倭姫命の如き、弟橘姫の如き、忍坂大中姫皇后の如き、草香幡梭皇后の如き、宮子皇后の如き、光明皇后の如き、大伴坂上郎女の如きは、或は坤儀を正して大政を補裨し、或は大廟に奉仕し、或は才識詞藻を以て一世に卓絶したりき。一を推して十を知るへし。此等の女性か如何に當時に重要なる働きをなしたりし乎を思はゞ當年に於ける日本婦人の材力たる、已に殆と遺憾なく發揮せられ、其事業に於て殆と全く兩性の區別なかりしと共に、其技能に於ても殆と全く兩性の區別なからむと欲したりしや知るへき也。而して此の時代は、兩性の事業に殆と全く區別なかりしだけ、其勞働にも殆と全く區別あるなく、婦人の外出來往亦男子の如く自由



自在なりしを以て、其筋骨の發達、其健康の旺盛も亦多く男子に讓るものに非さりき。

伊弉冊尊か夫尊を扶けて山海を跋渉し、以て天下を經紀し給へるは、十分の健康を有し給ふに非すして焉そ克く此の如くなるを得べき。天照太神か手つから神衣を齋服殿に織らせ給ひ、素盞嗚尊の來り侵すに及ひ、髮を結て髻をなし、裳を縛ひて袴となし、八坂瓊の五百箇の御統を以て其髻鬘及ひ腕に纏ひ、背に千箭の靫と五百箭の靫とを負ひ、臂に稜威の高鞆著き、弓弭を振り起て、劒柄を急握り、堅庭を踏て股に陷し、沫雪の若くに蹴散し、稜威の雄誥を奮はし、稜威の嘖讓を發して、徑すに詰り問ひ給へるは、十分の健康を有し給ふに非ずして焉ぞ克く此くの如くなるを得べき。佐穗姫皇后か親ら皇子を抱て城外に出つるに當り、多力輕捷の軍士之を執らむと欲して得る能はさりしは

亦十分の健康を有するに非ずして焉ぞ克く此くの如くなるを得べき。將た弟橘姫か遠く征戰に從ひて節に相摸の海に死し給へるも、神功后か自ら三軍を督して新羅を遠征し給へるも、幡梭皇后か躬ら桑とりて蠶事に從はせ給へるも、同く十分の健康を有し給ふに非ずして焉ぞ克く此くの如くなるを得べき。

斯るやんごとなき方々にして猶且つ然り、況や一般の婦人に於てをや。武埴安彦の反する、其妻吾田媛は實に之が謀主たりしのみならず、夫婿の山背口に於ける軍を督するに對し、彼女は自ら大坂口の軍を督して京師に向ひたりしに非ずや。景行帝の西征する、周芳の鼻師に神夏磯媛あり、豐前の速見邑に邑長速津媛あり、熊襲梟師の二女に市乾鹿文、市鹿文あり八女の縣に八女津媛ありしに非ずや。共に是れ一部族の酋長にして、優に其部下を威服しつゝありたるものたり。

降て平安朝に至りては、兩性の事業に區別なく、兩性の技能に區別なく、從て兩性の健康に區別なきこと、復た寧樂朝以前の如く然る能はずと雖、猶婦人の外出も自在に、男女の交際も制限なくして滔々たる男子か相率て婦人となりたる割合には、其健康に於ても、其技能に於ても未だ衰弱を見るに至らざりき。紫女淸女以下の才媛彬々として輩出したるは其故なきに非ざる也。遂に堂々たる公卿大夫にして、宮入の戲弄する所となり、或は叫て、吾れ婢女を見るも忸怩として心を勞すと曰ふに至らしめり。

殊に一方に勇健なる北方日本の勃興と共に崛起したる武家の婦人に在りては、素撲なる田舍に生活し、健强男子に讓らざりしもの少なからず。就中信州木曾家の鞆繪、越後城家の板額の如き、吉野朝廷の伊賀局の如き各々自ら一軍を統率して陣を陷れ敵を斬るに足り、千古の勇婦として今猶兒童走卒にも記臆せらるゝ所に非ずや。此くの如き勇婦の輩出は、婦人の健康か概して旺盛なりしことを示すものに非ざるはなし。

其後次第に婦人と男子との間に事業の差別を大にし遂に江戸時代に至り、其家の婦人は全く深閨を以て其天地となし、其間に生れ、其間に長じ、其間に老ひ、之が

健康亦爲に大に衰へざるを得ざりき。而も一藝一能に長じ、世に爲すあるに足りたる婦人に在りては、猶多く健康の躰軀を有し、從て其精神も亦健康なるものなりしこと、此等の婦人が槪して長壽を保ちたるものなりしを見ても之を知ること難からず。

勇氣と廉恥

鹽井福子

家に主母あれば妾奴僕婢敢て弱子と抗せず——蘇老泉

▲橘姫の故事　▲上毛形名が妻の事
▲山名氏清が妻の事　▲夜叉御前の事

士は己れを知るもののために死し、女は己れを愛するものゝために、容づくると云ひけん。されど、女とていたづらに容貌を飾るのみにあらず、殊に日本の女子は、つねに柔婉靜肅を以て本分とする中に、またおのづから強剛勇烈の心を保ち、節にのぞみては、火に入り、水に投じて、赤き心を、知る人のためにつくす、弟橘姫の如きおはすよ。姫は尤もよく日本女子の性質をあらはし玉へる君にて、日本武尊、東征の御時從ひ玉ひし妃なり。尊、まづ伊勢尾張の賊を平らげさせ玉ひ、御船にて相摸より上總に渡らんとし玉ふ。時に暴風雨にはかに吹き起りて、尊が御船をくつがへさんとし、殆ど危ふく見えけるに、媛申させ玉ふやう、かやうに俄かに風起り、浪あらびて、御船を覆さんとするは、たゞには侍るまじ、これ必ず海神の心ならむ。願くば妾の身を以て御子の命を贖ひまつらん。尊は所遣の政をとげ玉ひて、かへり言奏し玉へとて、

さねてゝ　さがむのをぬに　もゆる火の
ほなかに立ちて　とひし君はも

と歌ひ玉ひ、あはれ怒濤に飛び入り玉ひぬ。いとをしくもまた心地よき御ふるまひならずや。草むす屍、水くかばね、此の日のもとの國は女子も折りにふれては、決してのどには死なぬなり。かばかりの姫が赤心、鬼神に通じけん、狂ひかへりし水面、とみに鏡の如くすみわたりて、御船はそれより穩かにすゝみ、無事に彼方の岸にたつしたりと云ふ。さて七日ありて、姫が水く屍、海邊に

つきたりしかば、その御ぐしをとりて御墓をつくらせ奉つる。上總の國なる橘神社とは即ちその御墓にて、かぐはしき御名は千載の今日までにつたはりぬ。

敷島の大和心を人とはゞ
朝日に匂ふ山櫻花

花は櫻木、落花の朝日にひるがへりたるばかり、いさぎよきはなかるべし、士や介、武士の大和だましいばかりいさましきものはなかるべし。從つて武士の妻、武士の母、武士の娘、またいさぎよく、愚痴ならず、卑劣ならずいたく祖先を崇拜し、家名を重んじ、義に死し、信に死し、身いさぎよからぬも死にまさる耻とす。我が朝、淨瑠璃は、よく人の人情風姿をうつしたるものなるが、その文句の中にも

「わたしもお前につれそうからは何のみれんにとめはせね」（鎌倉三代記時姫の言）

「其方も武士の娘じやないか、重次郎が討死は兼ねての覺悟」（太閤記）

「系圖正しき我が家を逆賊非道の名を汚す不孝者とも惡人ともたとへがたなき人非人、不義の富貴は浮べる雲、主君を討つて高名顏、天子將軍に成つたとて、野末の小家の非人にもおとりしとは知らざるか主に背かず、親につかへ、仁義忠孝の道さへ立たば、もつそう飯の切り米も百萬石にまさるぞや」（太閤記）

などありて、まこと武士は人倫の道にそむき、五常の道をすてゝ、非道の富貴をとらず。たゞ惜しむものは家名欲するものは功名、知るものは耻、取るものは義、富貴を見る事塵芥の如く、一身を鴻毛より輕んじ。女も武士の家に生まるればまたつねに此の覺悟を保てり。　舒明天皇、天が下を知ろしめしてより九年、蝦夷叛きて、邊境をおかしかば、天皇、上毛野形名を大將軍として、之れを討たしめ玉ひぬ、形名即ち鳳闕を辭し奉りて、深く蝦夷の地に入りしに、敵兵強くして、獅子奮迅の勢ひもたゞならざるに、兵士あたり得ずして、大に潰え散ぜしかば、止むを得ず、走りて壘に入りたり。　群虜勢ひに乘じ、いよ〳〵むらがり來りて四方をとりまきぬ。壘中殘

れるもの僅かに十數人、謀の出る所なきに、今はたゞ三十六計走るにしかじとや思ひけん、形名やみに乘じて逃げ去らんとしけるに、共に從ひたる妻女、慨然として云へるやう、今更走るとて如何で免るゝ事を得ん、妾日來聞き侍るに、將軍の祖先は海表を平らげ、武威內外にふるひたりとかや。しかるを其の子孫にして、敵にうしろを見せ玉ふは、將軍が耻辱のみには候はず、祖先の功をも滅し、家名をもけがさん、將軍まことに顧み玉へやとて、淚を流して諫めつゝ、且つ形名に酒をすゝめて醉はしめ、夫を寢ねしめて後、自から劍をはきて突進し婢妾數人をして弓弦を鳴らさしめしに、形名も醒めて、共に圍みをとき去りぬ。しばらくして、潰散せし兵士もあつまり來りて、遂に蝦夷をうち平らげて、めでたく歸へり、功を奏したり。

また明德のころ、山名陸奧守氏清その、婿播磨守滿幸等とはかり、都をほろぼさんとしけれど、運拙くて軍にうちまけ、氏清をはじめ、山名上總介、小林修理亮、山口彈正、佐々木の一族、土屋黨、すべて人に知らるゝほどの兵八百七十九人、或ひは自害し、あるひは討死して、みな道芝のつゆと消えはてたる中に、滿幸は伯耆へおちくだり、氏清の子、宮田左馬助、その弟七郎は、逃れて丹波におちくだりけれど、國人そむきて容るゝものなきに、是非なく津の國有馬の奥に行きて髮をそり、熊野へさまよひぬ。氏清の妻は和泉の堺に居て夫の安否を心もとなく思ひわかすほどに、左馬の助の使はしり來りて、氏清のうち死を報じ、左馬助及び七郎は丹波路へおちのびたりと告げしに、北の方、かつ悲しみ、かつ怒り、夫の討死はかねても覺期したり、今更に悲しむべきにあらねど、左馬助の不覺さよ、七郎の云ひ甲斐なさよ親のうたるゝを見捨てゝひとり命をのがれ、うき名を流したる口をしさ、今は何にかけてか露の命をながらへん、草の陰までもおくれ奉らじとて、すでに自害をせんとせられしを、女房たちおしとゞめ、かゝるためしのなき世にしもあらばこそ。唯みぐしをおろさせ玉ひて殿のおんあとを吊らひ給はんこそ誠の御道にこそは候へどさま／＼になだめ、敵の近づかぬ先きに何方へも

立ち忍ばせ玉へとて、御輿をすゝめ、難波の三位と云ふ女房一人御輿につきて逃れたりしに、和泉の日根野と云ふ所につきて休みけるほどに、あやしき物おとの輿の中に聞えしかば、簾垂をあげて見るに、夫人小袖の袂に刀の柄をとりそへて、自害して臥されたり、未だ事ぎれ玉はねば、根來の方へ入れ奉り、とかくいたはりけれども、湯水をだに食こしめされず、ひたすら後の世を急がせ玉ひけるほどに、兄弟の子、何處よりか聞きつけ、尋ね來り、三位を以て、あはん事を乞ひけるに、夫人ゆるさせ玉はず、弓矢とる人の子の二十歳にあまりて、父と共に軍に立ちて、目の前に親のうたるゝを見すてゝ逃げをち、身のおき所のなきまゝに遁世入道するだに口をしく、人の別れの悲しさに、ためしなき身の自害してすでに臨終にとりむかふ母を見んとは何事ぞや。たとへ其の家にあらぬ人なりとも父を見すてゝ逃ぐると云ふ臆病ものやあるべき。烏帽子にせられし小二郎だに義を思ひて、親と共に討死したるをこれ程みれんのものを、子なればとて此の世に二度見ん事は叶ふまじ。中々心も亂るゝに我にとふものを云はせそとて、衣ひきかつぎて臥しけるに、兄弟も力なく立ち去りたりとぞ。

耻を知るを以て日本の武士とす、耻を忍びて生きざるを日本武士の妻とす。平治の亂、義朝、六波羅の合戰にうちまけ、東國さして落んとし玉ひ、鎌田を召して汝に預けし姫は如何にと問はせ玉へば、妻に申しおきて候ふと申せば、軍にまけて落つると聞き、如何ばかりの事か思ふらん、中々殺ろして歸れと宣へば鞭を上げて六條堀河の宿所に馳せ來りて見けるに、軍におそれて、人一人もなきに、持佛堂の方に人音しければ、行きて見るに、姫君、佛前に經うちよみておはしけるが、正家を御らんじて、さて、そも、軍はいかにと問ひ玉へば、守の殿はうちまけさせ玉ひて、東國の方へおん落ち候ふが、姫君の御事をのみ悲しみまゐらせたまふと申すに、さては我れ等も只今敵に捜し出だされ、是れこそ義朝の娘よなど沙汰せられ、耻ぢを見んこそ心うけれ。あはれ、高きも卑しきも、女の身ほど悲しかりける事はなし、兵衛佐殿は十三なれども、男なれば軍に出て、御供申玉ふ

ぞかし、妾は十四になれども、女の身とて殘しゝかれ、我が身の耻ぢを見るのみならず、父の屍を穢さんこそ悲しけれ、兵衛まづ我れを殺ろして、守の殿の見參に入れよと口說き玉へば、守の殿も此の仰せにて候ふと申せば、さては嬉れし事かなとて御經をまき納め、佛前に向ひ、手を合はせ、念佛申させ玉へば、正家御うしろにまわり、殺ろし奉らんとすれども、御產屋の中より抱きとり奉りし養君にて、今までおほし立てまゐらせたれば、如何てかあはれになかるべき。涙にくれて、刀の立て所も覺えずして泣き居たり、姫君敵や近づくらん。とく〳〵とすゝめ玉へば力なく、三刀さして御首をとり云々と平治物語に見えたり。

また同じ義朝の子にて、美濃國、青墓の宿の長者大炊の女延壽ばらの子に、夜叉御前と云ふ女ありたり。平治の亂、賴朝父におくれて、青墓へ下り、大炊が許へ尋ねより、賴朝なりと名乘りけるに、延壽斜ならず悅びて、夜叉御前の御方へ入れまゐらせて、さま〲にもてなし奉りけれども、なほ東國へ下るべきよし云ひて、急ぎ出て玉ひけるが、宗淸の兵に捕へられ、都に上ぼらんとして、亦もや此の大炊の許によられ、かねて義朝の次男朝長の屍の埋めありしまで見つけて堀らせ行きけるに、夜叉御前いたくかなしみ、我れも義朝の子なれば、終にはよも助けられじ、一人ひとり、異なる所に亡はれんよりは、佐殿とつれだちて、同じ草葉の露と消えんこそ、せめてならめとて伏し沈み玉ひけるを、大炊、延壽、いろ〳〵に慰めて、とり留めまつりけるに、姫もやゝ思ひわき玉ひてか、漲りかへる御袖の涙も、やゝひまありて見えけるに、さりともと人々心許るしけるが、二月十一日の夜、姫は思ひあまらせ玉ふまゝに、そつと青墓の宿を出てられ、遙かに隔りたる株瀨川の流れをたのみて沈ませられける。時に御年僅かに十一歲、父と兄とにおくれて、耻かゝぐと覺期したる小女心の殊勝にもまたあはれなる事にて、竹の子は生れながらにふしを保ち、武士の子は生れながらに耻を知るよし。幼きものすら此の如く、まして大人しきほどのもの、また如何て女々しかるべき。

慈善家の妻

心の能く整備せる人は艱難に當りて希望を懷き
繁榮に當りて敢て傲らず

横山天涯

加賀金澤市に小野太三郎といふ奇特な老人が居ります、維新前より獨力が數百人の孤兒貧民を收容して、日々世話を燒いて居るから、北陸地方では大抵此の老人の名を知らぬ者は有りません、東京では爪生岩子、金澤市にては小野太三郎老人、わが日本の國で慈善家といふので藍綬褒賞を得たのは此の兩人で有りますから、慈善問題などに注意して居玉ふ貴婦人方は、概ね此の小野太三郎の名を御存じて有らうと思ひます、石川縣では金澤の名物だなどと申して居る位で有ります、併しながら世間が此の老人の事業を持て噺やす割合に、此の老人の内室に就きて何とも噂しませぬのは、自分は甚はだ殘念に存じますから、自分は茲に此の老人の妻に就きて少しく貴婦人方の御注意を得やうと思ひます。

一昨々年……明治卅二年の十一月、此の小野太三郎老の内室は歿くなりますた、隨分久しい病氣で有りまして、金澤の有志者は皆な金澤病院に入院せしめた方がよからうと奬めましたが、一種の偏物で有る老人の事で有るから「世間樣の御厄介になるのは相濟まぬ」と申して聞き入れず、救貧場の入口の三疊の狹ッくるしい室で、永眠しますた。其の生前の摸樣を聞きまするとは誠に稱贊すべき事實は多い、小野老人は常に「私の仕事は皆な妻の庇陰で有りますと」申して涙に咽ぶのも無理はないやうで有ります。

内室の名は島谷泉子と申しました、弘化元年金澤市に生れて、慶應元年二十一といふ歳、小野家に嫁きますた、其れ迄老人の妻に迎うると七回、皆な救貧事業の醜汚なるに驚き、何れも妻の方より離緣を申込みて去りましたから、老人も最う自分には女緣はない者とあきらめ、一生獨身で消らす覺悟で居たといふ事で有りますた、併しながら老人に親しき離れ彼、一人の手で日々多數の病者、子供を世話燒いて居るのを見兼、種々詮索

の末探かし當てたのは、一昨年病歿しました泉子で有ります、當時小野老人は古着古道具を商ひ、其の利益を以て貧民を養うて居りましたが、固より其の收益で足らぬ事が有るから、當時の苦心は一ト通でなく、慶應二年頃は事業を廢せんと致したのを、夫を勵まして中絶せしめなかつたのは此の泉子の力で有ります、自身も行李を擔ひ、菓子飴類を持つて金澤市中或は附近の村落をあるき廻り〻した、而して傍ら窮民の疾病を看護し、孤兒の衣類を洗濯して、夜間眠るとは僅に二三時間しか無かつたといふ事てあります。

一躰小野救貧塲は他の規則立つた所と違ひ、其の收容者は二三百の多數で有るが、別に世話人とか監督とかいふ者は有りませんので、悉く老人夫婦て遣つてゐたので有ります、最も一ト小屋毎に世話役らしき者は居るが、其れはほんの名義丈けて、實際は老人夫婦二人て、一切世話してゐたので有ります、小野慈善錄などに依れば



一窮民を起臥せしむる各家屋の内には其の窮民の中より實直の者を選拔して其の家屋を屬する一切の事務を執らしむ之を取締役といふ

一取締人は諸物品の保管被救者の監督を司り日々外に出で〻業を執る者歸屋の都度人別及び所持する物品を調査し若し疑はしげれば事實を糺して君に報ぜしむ

一癈疾にして業を執ると能はざる者は取締人を看護せしめ病める者には藥餌若くは藥代を與ふ

一被育者に課せらる〻公賦金は君自ら之を納む等種々の規則は上つて居ります、しかし乍ら實際此の取締人といふのは、矢張被育者の中より選拔した者て有るから、幾年居ても乞食魂生は取れず、充分取締の任

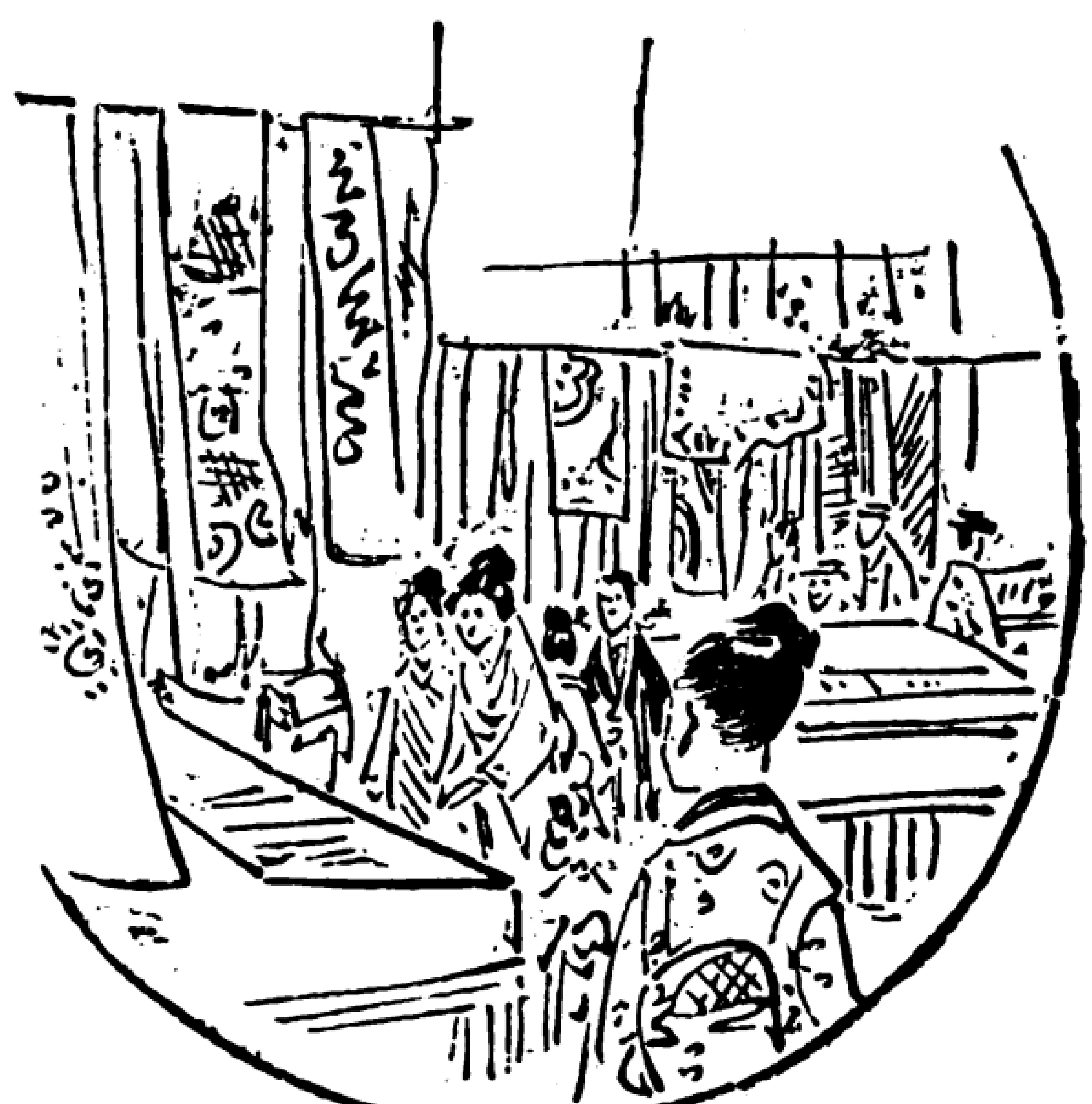
務を盡す者は無い、便宜上取締人は置いてあるか。實際の取締は老人夫婦の外、他に無いと言つた方が寧ろ事實に近いので有ります、而して老人は外に出てゞ諸物品の買入、兵營、市役所等の出入に奔走して居りますから、家に在りて孤兒の注意、病人の世話などは悉く内室の仕事に屬するので。其の能く小野救貧場の今日の如く人に知らるゝやうに爲つたは、自分は内室の骨折は與りて多いことゝ信じます。

明治八九年の頃、夜、老人は金澤市の五枚町を通りました、一人の女が河中に身を投げんとするのを認め、驚いて之を援け、細かに其の仔細を質しますと、此の婦人は幼時兩親を失ひ、親戚に養はられ居る中、年若の失策より左る男と懇親と爲つた、然るに薄情にも男は棄てて他國に赴き、養父母は日夜責めさいなみて身を置くに處なく、終に投身するに至りし者と涙ながらに語るを聞き、深く其の淺墓を諭として家に伴ひ還り、内室に示すと、泉子は大に氣の毒がり、自身市中を奔走して八田某氏の家に下婢が要るといふを聞き、同家に頼みて下女に遣り、後越村喜吉といふ男を見立てて金十七圓幾十錢に新衣一襲を添へて娶はしたといふ事で有ります、同人は今も尚は生存して泉子の親切を語り、小野家に出入して居ります、記者も一度此の女に會つて泉子の同情深きを聞いた一人で有ります。

明治十八年十月、曹洞宗僧侶等相謀りて慈善追弔會を大乘寺といふに開きますた、老人は孤兒貧民を伴ひ、之に赴きますた、皆な新衣を着け、一人の見苦しき者は居なかつたのを、金澤市民は皆な驚いたといふ事で有ります、實は金澤人は、小野の者と言へば別世界の者のやうに思ひ、皆なぼろ〲の衣服を着けて居る者と思つて居るので有ります、例令が何某の兒は醜陋しき風であるといふのを、小野の子の樣だといふのは、通り言葉の樣に爲つて居る位で有る其の金澤人の眼先へ皆な薩張した着物で有つたもの故、見る者何れも驚いたといふのは不思議では有りませんか、市民は眼を驚かしめた此の衣類等の心遣は、内室泉子の一ト通ならぬ苦心の潜めるとを認めねば爲りません。

泉子は自己の任務は自己一人の手で爲さねば氣が濟まぬといふ人て、孤兒等の衣服は悉く自己一人の手て縫った人て、例令幾程數多きも決して他人の手を煩はしませんてした、澤山の縫物有る時は、人に頼んだら宜からうと注意する人有れば、饑ける顏色を爲して「其の樣な贅澤な事」と言つて、氣分あしき時ても常に縫物を膝より離しませんてすた。

世道、江河慈善事業不擧久矣、若小野君者、豈匪罕覯哉、君我縣金澤堀川人、家故少祐、志篤慈善、一日視鵠面鳩形者過門、感乎心、淚乎眼、乃審其狀、收而養之、其徒傳播、來請哀者日多、一日、踰半歲、食指已數百、或規以損資、君謝且泣曰、吁渠猶非人乎、乃割屋割資以安之、而其法亦具備、即疾者藥、老者庇、健者力、幼者敎、不俾復懈怠、有死者、



君便負行葬之、如此者三十餘年、賴以活者千有餘人、葬者三百餘人、年尙見養者百有余人、而君家殆荒、而君之志逾牢矣、明治十八年有司上奏、聖旨特賜藍綬褒賞、二十三年大乘寺行施招君、君與百餘人俱赴、皆着新綿衣、行止有序、君尤謹愼、傍人皆嘆息泣下、嗚呼日本洲八十四、爲戶數千萬、雄富之家何限、大都損人利己、半百光陰、枉消此中、以君視之果如何哉、閒十一年、駕聖北巡、有司欲采聞、召君叩之、君循々恐懼訴曰、某實因斯事恐人言致過、意不言由之不果、嗚呼此尤不可及矣、抑如弊會閏風而起者、愧於君多矣、玆値大憲下佈衆庶拜賀、亦丁弊會三周紀、聊謀賑、且托君以米一石、頒領其徒、并錄君善行數事、且贈木盃一塊、粛表高義以寓欽慕之意。

此文は、明治二十二年金澤共潤會は、帝國憲法發布式の時、老人の名譽表彰會を金澤公會堂に擧げ、米一石及び盃を贈つた文章で有ります、君は此の表彰狀を得た時、泉子を呼び、金澤市民で此の樣な名譽を得たのは自分一人、之は皆なお前の庇蔭だと喜んだそうで有ります、一躰老人は自分の功を常に妻に讓りて居るのを見て、或人は之は小野老の癖だと申して居る人も有るが、自分は窃に内室泉子の他の及ぶ能はざる高き所ありしが故と信じます。

之も前のと一對の美談で有るが、老人は明治十八年藍綬褒賞を賜はりて以來、未だ一度も身に着けた事は有りませんしかるに、泉子の病歿致しまする一週間ばかり前に、寫眞師を招き同人の寫眞を撮らせまする時、老人は深く仕舞つて置ける行李の中より恭しく藍綬褒賞を取り出だし、泉子の胸に着けました、彼のヂスレーリが伯爵の榮譽を得んとする時、夫人に其の榮譽を讓つたのと事は違へど似て居る話說では有りませんか。

斯くの如く小野老人は、内室泉子に對つて尊敬して置かないのを見れば、泉子の如何なる婦人で有るかは、大抵想像するとは出來やうと思ひます、されば深く小野家に出入して居る者は、小野老人よりも泉子の方を貴び、子供等も能く泉子に昵みて病歿しました時も、二百幾十人の收容者は、皆な聲を放つて泣き、日頃騷々しき場内も燈火の消へたやうで有つたと申します、石川縣廳も其の淑德を聞き、明治二十二年四月

平生夫ニ從フテ貞淑又能ク業ヲ勗メ夫太三郎慈善ノ資ヲ裨ク其行爲多年一日ノ如ク洵ニ奇特トス依テ爲其賞金五圓下賜候事

の賞狀を與へ、本願寺法主大谷光勝師も

其許義貞淑夫ニ事へ能ク家業ニ勉勵シ共ニ慈善ノ擧ヲ補クル等多年一日ノ如ク遂ニ地方廳ヨリ賞金拜受候事全ク平素聞法ノ然ラシムル所奇特ノ至仍テ茲ニ黒柿菊總念珠一連賞與候事

明治二十二年六月二十二日

執事　渥美契縁

の賞狀を贈つて來たといふ事で有ります、泉子は、夫が

禪話を喜び、其の行爲羈束の外に逸せんとする傾向あるに反して、極めて温順な人で、常に眞宗の法話に耳を傾け、暇さへ有れは、寺詣を缺きませんてした、小野老人を知つた者は、幷せて泉子自筆の「諸惡莫作衆善奉行」の扁額は、老人の室に掲げて有るのを知つて居るとて有らうと思ひます、前に掲げた名譽表賞狀に、君の家殆んど荒れ、而して君の志愈々牢しとあり、小野老人の志をして愈々牢からしめたのは、自分は泉子の力による者と信ずる者て、而して普通婦人の見て不快とする乞丐貧民の世話を不快とせず、能く夫の事業を助けたのは、信心の篤かつた故て有りましやう。

泉子の病歿致しました後の小野救貧場は、小野老人はからり元氣は無くなり、且つ性急と爲りて、小供等を敎訓するにも寛嚴度を失ふやうな事が有りて、聊か曩日の樣子と摸樣は變はつたと言へます、老人は此の事業は自分一代だと覺悟を定め、近年退隱する積りで金澤各宗連合の僧侶に事業を引き渡すとか聞きました。惜しや金澤の一名物も、内助を失ひしより元氣を失ひ、數十年廢したる煙草を假りて欝を忘れんとするなど、記者は深く老人に同情する者で有ります、泉子は、名婦鑑などに出て居るやうな赫々の蹟を示して居る婦人ては有りません、固より傳ふべき學識も何も有りませぬが、其の平凡なる無學なる生涯の中に、外見に知られざる苦心、貞節の存ずるとは、他の名婦才媛に讓らぬ小野太三郎老の名は喧しき割合に、泉子の事は世間に知られて居りませぬから、聊か聞けるまゝを記るして、慈善家の妻として玆に小野泉子を紹介致しますた。

▲喫茶と胃の消化力　倫敦にて過去二十年來に於ける喫茶の流行は非常なるものにして上流社會は勿論下等社會と雖ども何れも之を喫用せざるものなき有樣なるが扨て中には今日英人が神經衰弱を來し又不消化病を起すもの頗々なるは、要するに喫茶の多量なるが爲めならん近頃ポツ〳〵流行し來れる、胃の消化力を增さんが爲めに就寢前に熱茶を喫用せし習慣は昔し就寢前に熱湯を飮用するの習慣の變化に外ならずと英國の土曜評論は言へり

文苑

やちぐさ

○折にふれて　佐々木信綱

水海の岸の木かげにたゞずみて
しづかにおもふ天地の歌

藥の香あめにしめれる窓のうちに
やせたる妻のおもわさびしき

窓のあたり秋の夕日のとく暮れて
くらき軒端にこほろぎの鳴く

○箱根雜詠　小原頴之

湖添の島山のうへに安らけく
高くそびゆるとつ宮どころ

谷川の瀬のおとひくゝ沈みつゝ
霧たちまよふ底くらの里

旅やかた眠られかたき秋の夜の
枕にひゞくやまみづのおと

○折にふれて　木下利玄

たらちねもわれ思ひてやおはすらむ
雁がねさびしいさよひの月

谷川を中にへだてゝこがれあひし
紅葉はちりぬ同じながれに

鳥さしの竿かたげつゝ歸りゆく
片町さむくゆふ日しぐるゝ

齋藤俊之

木魚の音靜にひゝく尼寺の
苔の小庭にあちさゐのさく

棧橋に見送りませる母君の
おもわさひしき夕附日かな

偕一人たちる小道のなら林
林しつかに小雨そほふる

澤弋

母君か織りて仕立てゝ小包に
おくりたまひしこの夏衣

やり水にひやしゝ麥酒くみなから
ひるの暑さをかたる夜半哉

大殿か繪たくみぬしてかゝせましぬ
山田の賤か小田うゝるすま

印東昌綱

きかさむかきかすましきかほゝ笑て
むかふる妻をみるが悲しさ

筆にのみはかなく告るわかおもい
語らむ夜半のありやあらずや

村長ぬくすしもかはる故里に
むかしのまゝの入相のかね

早川喜隆

虫賣と花賣のをぢと別れゆく
土橋のたもと日はなゝめ也

武者一騎おちゆく野路の薄原
かたわれ月のかげくらくして

新井千湧

山青き所や野邊の果ならむ
見わたす限皆すゝき原

月こえて風靜まりて七浦の
水神まつり今宵にきはし

峯つゝき高山つゝき紅葉して
夕くれおそし麓七村

たちとまり別るゝ野邊の夕風に
空かきくらし尾花はなちる

なき人の施餓鬼を終へてこぎ歸る
浦わさびしく月は出にけり

馬子がうたふ追分ふしの聲さひて
岡のかや原秋のかぜ吹く

新井[illegible]城

君は西に我は東にわかれても
なかむる月はかはらさらまし

絲くりて老女眠れる賤か屋の
軒のいさら井清水あふるゝ

うらやまし淺き流に山葵うゑて
暑けさしらぬ山守の翁

堀越科子

知るや君知らすやあるらむよし知るも
此わがこゝろ知るべくはあらじ

唯一人たとりゆく世にあらなくに
苦しとわれは何おもひけむ

うせし子のねふりはさめす奥つきの
かなめの垣ね若葉しけりぬ

松井友子

片山柳子

ゆきすきて又戻りくる物うりの
　呼聲さびし五月雨のかと

苔のみ多きをさし丶床の花
　花さかぬまにしをれはてぬる

雨の跡いまた乾かぬ御墓邊の
　小さき草に露そおきたる

市田豐子

をさな子は書けにゆきしまゝごとの
　莚の上にすもゝ花ちる

麥つきの杵の音やみて歌やみて
　夏の夜いたくふけにける哉

うぶすなの宮居いとなむたくみらが
　斧の音やみて日は暮れむとす

池谷久子

ひんかしの海にもすそをひたしつゝ
　雪をよそへる不士の上たけ

汐あみし人皆去りていそつたひ
　たゝ月影を浪にくたくる

幼子を中にかこみて賤かやの
　夕けたのしきともしひの色

池谷朝子

裏畑のけいとうの花きくの花
　秋うつくしき小山田の家

人形をねかすといひし幼子の
　まづ寐入りたる春雨の窓

母君のいたつきいえし此朝け
　籠の小鳥を放ちやるかな

島崎いさ子

海の上山のうへにもしら雲の
　峯そひえたつ夏のそら哉

昨日まですみし家客よ今日よりは
　いかなる人のたちならすらむ

女郎花はぎよすゝきと匂へとも
　さびしくみゆる秋の野邊かな

蒲生直子

めぐらせる松の垣根のところ〴〵
　ざくろ花さく村をさの庭

芋の葉に朝つゆみえてやれ垣に
　朝かほさける田舍道かな

さなへとる手をとゞめつゝ小車の
　ゆくへ見送る里の少女子

筆の行方

鹽井福子

三人行けば必ず我が師あり、その善きものを擇んで之れに從ひ、その善からざるものを見ては、之れを改むとは、久しく論語に聞く事のみなりしを、今日はじめて思ひ得られたり。

我が友に近藤淸子と云ふがあり。秋田の人なればとて師の君より秋園の雅號を賜はりぬとかや。幼きより繪畫の道に志あつく、ひたすらにその蘊奥を極めんために、密かに家をぬけ出てゝ都に遊び、師の君の家を手傳ひて、傍らその道に心をつくす事、五年に達しぬとかや。

人馴れぬ我れは、昨日まで如何なる人ぞとも、知りも聞きもせず、たゞ我れよりすぐれたるを、うれしき友と、人知れず思ひたるを、此のほど俄かに故郷に歸るようきゝつ。さては久しき旅寢に、さしも故郷の忍ばれぬるか、可愛き子、旅寢をもはやよしと親御の免るされてか、はた、めでたき事のあればにて呼びかへさるゝなるか、何れにしても人ははや魂魄もかけらんが、我れはすぐれたる友、遠ざかるがいとをしく、しきりに止めまほしき思ひすれど、めでたき事のありもして歸へられぬるを、止むるもあしかるべしなど、思ひもし、語りもすれば、いな、さやうの事に呼びかへさるゝならば、强ひてもとゞまるべきを、家に變る事の起こりて、にはかに家を嗣ぎ、親、はらからを養はずばならずてと云はれつ。泣きて別れををしみ、むせびて都をしたひ、道の半ばにして歸るをいたく悲しまれ、けはしき山、けはしき谷、ひとり行くを心細げに、かへりての後の業をもさばかり案じらるゝもやう、身にしみて我れは心細く、悲しく察せられたり。送りて、かへりて、何となく力を失ひ氣を失ひ、つく〳〵と思ひめぐらせば、そゞろ身の上に思ひ至りぬ。我れも學びの道、畫の道、心をよせし事の久しきを、心のどかにうち過ぎてや、何れの道にもすぐれず、さりとて遊ぶにもあらねど、何となくすさむ如くなり。あはれ天才なき身、親にやしなはれ、兄にやしな

はれ、雨露のめぐみをのみうけて、霜雪のくるしみをつまされば、かやうにいつまでも器をなさぬなるか。親の恩、兄の恩、師の恩、たゞつむのみの我が身なるかな。思へばかなしさにうちも泣かれぬ。文の道捨つるななど云ふ母の教へ、せめて從ひて、今日より燈火の下に、必ず一筆をと思ふも、秋園女史が我れにとゞめたる心の形見なるか。之れを日記の筆初めとす。

さびしき道を好む心に、とかく森の中、林の中を過ぐるを、一朝あやしきものにあひたるおそろしさに、再びは通らじと思ひたるを、遠き路をあゆみ、殊に今日は會の日、時にもおくれたり、雨もいたくふりぬ。少しなりとも近き路をと思ひ、心も足もかねての森の中に向ひて、何のその輿市兵衛ほどの財布はもたぬを、恐るゝ事やある、心を丈夫にすべしと思ひて行きけるが、折りしも雨つよくて、陰欝たる森林、そゞろ臆病づきて、葉末の露のたまりこぼれぬるにも胸とゞろくばかりなるを、何處よりか男子の我れと同じくあゆみ來りぬ。魂魄もきえて足も地につかず、水たまりにすべらして、あな憎く、洗ひたての足袋をよごしたり。先きになり、あとになり、わなゝく〳〵行くほどに、野嫗の急ぎ足にて來りたり。あなうれしゝ、たのもしくて我れ知らずかけよりたるに、嫗のふりかへりたるも耻かしく、またうれしかりし。さるにても心さへ丈夫ならばと、心にさへ丈夫をたのみぬるを、何とて、丈夫のかやうに賴まれずして匹婦の中々にたのまれしならん、我れながらあやしかりしよ。

此の日、雨ふれば必ず來まじと思ひし友の、來りて門のほとりにて行きあひぬれば、

　ふりはへて君が來むこそをかしけれ
　　けふは如何なるあめか下そも

とかそつけて見すれば、よろしきは、たんとさやうの事の玉へとて笑ふ。されど、此の人、年若きに眼のすぐれたる人にて、よく人を見、物を見る。眼のすぐれたるは心の明かなる故なるべし。同じのどかにはぐくまれても賢と愚とはおのづから分かれぬるか。恐るべし、我れは人を知り、物を見る眼をもたざるよ。

論語よみの論語知らずはまだよけれ
論語よまずの論語知らずは

とは、むかしの人の句なるが、げに教育なき人ほど口惜しきはあらじ。上野の汽車にて、家に歸らんとし、あきたる所に乘らんとして、足ふみ入るれば、只一人の野嫗あわてゝ我れをつきのけて、いけぬ／＼と云ふ。何事かとあきれてたゝずめば、誰れよ早く來、彼れよ此處へ來と、己れが同行の者を呼び入るゝなり。とかくするほどに室は皆ふさがりたり。

是非なく隣室に入りて、掛くべき席もなくなりにたれば我れは立ちたり。野嫗は、同行のものを引き入れたるを得たりがほなり。まだ身をちゞむれば、一人二人は掛くるべき席もあきをるに、さらぬだに骨太の身躰を思ふさまに廣ろげ、ず太き足を勝手ざまにひきのばし、黄ろばみたる齒を、ありたけあらはし、遠慮なくつばを飛ばし、大聲を上げて語りあひ、おくれぬる人などつゆ省みもせず。ぶ作法者かなと、腹だゝしく、知らぬ所に出でゝは、かやうのものは、とかく巾をとらるゝよと、そゞろ涙のさしぐまれぬるを、これへかけ玉へとて傍らの人の席をゆづりくれぬ。あまりのかたじけなさに、腰もおろしかねてたゝずめば、我れは男なり、立ちたる方景色もながめられつとて、强ひて席をゆづられたり。見れば立派なる男子、我れ如きに席をゆづられたるやさしき情け、身にしみて涙ぐまるゝを、田舍者の不作法さ、なほ得意顏に、ペー／＼言葉をふりたてゝ、我れより外に人なきが如し。さるにても、教育なきもの、たゞ我れのみを知りて、公德を思はず、下等動物と同じき感を見る。日本人の小さきは、まゝ此の類ひを見るよ。下等の汽車、いたくこりたり。雨ふるも風吹くも、今よりはのらじ、下等にはのらじ。

此のごろ飼ひたる鷄、餌も十分に與へあるを、とかく食を爭ひ、大なるものは小なるものを制して、憎くき事の多きを、よく／＼とて、大きなるものには、容易くこなし得ぬ小魚の乾したるをそのまゝに與へ、小さきものには、きざみてとらすれば、大きなるもの、己れのはそのまゝ捨ておきて、まづ小さきもの、きざみたる方を

奪ひてさん〳〵に食し、後に己れのをてなし食す。ぬけめなき事あきるゝばかりなり。あはれ、獸慾、鳥慾、愚ばかりすさまじきものはあらぬよ。　猫などの、日來けやさしう、人の膝などにむつるゝ時は、蚤も殺ろし得ぬさましたるを、鼠とらふるときのすさまじさ。さかりのつきたる時の恐ろしさ。猫は之れがため、飼ふを好まぬなり。

花の頃、人の狂ふ中を行くがうるさくて、夫婦者と思ひて、男女の伴れだちぬるあとに從ひて、森の中を行きけるに、春に狂ひたる人、道に迷ひてか、やがてその人に王子の道を問ひたり。　妻と思ひたる女、よた〳〵とよろめきて、まはらぬ舌に答ふるさま、酒に狂ひたる樣子、見れば、眼の色もかはりをりたり。　十人並よりはすぐれたるみめ形ちに、糸織のふきのうすき小袖を着し、黑襦子の帶をひつかけたる姿も意氣なり。　醉ひたる眼を時々見合せ、二人物語り行く口つき、言草、誠の夫婦とも覺えず、女は三十を五つも越えたらん如く、男は三十路に足らはぬけなり。　丸わげ姿は何れ何者かの妻君なるべし。　男は商人か、職人か、人を見る眼をもたぬ身には察する事能はねど、何となく身分定まらぬ者の如くなりき。　二人とも大に醉ひぬ。　酒にのみならで情にまた醉ひたる如く。　滊車のふみきりに立ちどまりて、棒杭に臂をつき、とろんとしたる眼に、行く先きをおつとりとながめたる女の眼には、迷ひの雲深くして、いつ晴るべうとも見えず、かやうの人、夫を殺ろし、夫の子を殺ろすにやと、あまりのすさまじさに思はず身のふるへ上りぬ。

明日のわかれ

印東昌綱

すさまじかりし雲のたゝずまひ、打よする波の響も、やう〳〵靜まりゆきて、西の空赤う暮れ殘りたるに、引揚げし漁船六つ七つ肩寒き夕べの風に吹き曝されつ、遠く聞ゆる金臺寺の晩鐘は、村々にや通ふらん、遊び居し里の子らも大方歸りゆきて、松陰の細道暫し人の往來

もとたえたり。
秋の女神の、み舟なす三日月の薄き光は、いつか中空に澄み渡りつゝ、打仰ぐ二人は飽かて別るゝ悲しみの、胸を射通して宿世はかなき、縁の思を今更のやうにかき亂しぬ。
さらば如何にしても明日は歸りますか、少女はかくいひ出ると共に、砂山の小松がもとに力なき歩を止めたり。
人はあらずや、男は心もとなげにあたり打見やりしが、やをら其處にかゝまりつ、さて低き聲は續けられぬ。
君が語らんとする所は、大方推しはかりゐつ、二人が物がたらんも、はや今宵のみとなりぬ。君が文はよしあらずとも、我とても今一度委しういひ殘し置かんとは思しよ、世に咲き出る花の散るべきことわりをもてるからは、相逢ふもの相別るゝ、又人の世のさだめなるべくいづれは悲しさ、夕べの出てんとは元より君もしれりし所、唯其覺悟のかくとみにせまりこしは、假そめなる我壽筆の、多く助けたる業なりしとは、返す〳〵も悔いて、猶足らざるの恨なり。世は皆夢の一時に醒めてはかなき明日の契を、明日よりは寂しき窓のもとに落ち散る木葉數へつゝ、思にぞ沈むべき。あゝ此世は遂に君とすむべき餘地あらざるにか、祈るは唯君が行末の幸多く、圓なる家庭の母と呼ばれん春にこそ。かくいひをへて、太き息の胸打つなる男の衣の文は既に見わかず、顔ぞ秀れて白かりし。
少女は、早くも袖嚙みしめつ、假の世の假の宿りとはいへ、かく淺からぬ心の程を語りわかしも、元よりとこしへに承けかたき契りの、今は斷念の清くはた美しきを君に見まゐらせて、君がみ名のいよゝ世に立のぼり、君が行末の恙なく、彼の君と共に睦ましう榮えまさん事を祈るべく、改めて此處まで誘ひ申しゝを、思ふ事の、それさへ聞えあくべき力もなくて、と少女はひたと泣きふしゝが、辛うして寂しげに男の顏打守りつ。
ふと見かへるかなたの砂山を蹈り遲れたる蜑の子の、唯一人急ぎ足に過ぎ行く後影淡く立てめし霧の内に、やがて見えずなりぬ。此處も霧やおりゐるならんと、

又頭重うなりはし給はずや、少女はおのが羽織をぬぎて、男の羽織にと打重ねつ、松虫の聲はいつこよりか、やさしう聞えきにけり。

少女はこの濱に近き酒造家某の愛娘にて、都なる某女學校を卒へしは、去年の春なりき。男は美術學校出身の畫師にして、既に都なる其家の婿かねに立ゐつ、業を卒へなばすなはち海外に赴くべく、畫師自らは其用意とり〳〵なりしに、俄然病の鬼は、此うら若き畫師をして前途の志を挫かしめつ。しかも其基は語るべからず云ふ可らざる痛苦の内にこもれる故なりき。かくて、あるゆかりのもとに、此少女か家の離れやにと移り住みて、一年餘りの月日を一度も都に出てず、傍ら筆に思を紛らせつゝ、身を養ひゐたり。さるを幸か不幸か、神はしもか弱き畫師が情の手綱に、更に一つの病を綴ちさしめぬ。世は皆つめたき石のもとに、いくたの不平ものみつゝ、月日をすこしゝ畫師其人は、今やまのあたり、世にも暖かくうるはしき玉の露に潤ほへるあるを見出したるなり。かくて其やさしき露の光は、熱せし畫筆のさきに結はれつゝ、秋思てふ畫題のもとに、美くしき金枠のはめられて、都なる秋季展覧會の窓に掲けられぬ。思ひ餘りて湧き出し詩人か誠の聲には、花に狂ふ小鳥も節を合すへく、はた戀人か胸をもうごかしてあまりあるへしとは、永久の情をうたへられし畫師自からが胸にふれたる誠の情をモデルとして、深き思の筆よりなりたちし秋思の一幅よ、其艶麗の外に溢れつゝ、熱き感情の内に滿々たる、觀る者をしてあらゆる感歎の聲にむかへしめ、限なき聯想を引起さしめつ。かゝる才筆を持ちなから、此二とせを空しく病の爲、田園の生活にゆたねし畫人の、瞬時も早く其身を强うし、其志をひるかへして、再ひ世にたつの春に相あふへく、世評は極めて喧びすかりき。

さるを是と同時に計らさりしモデルの物語は、あらぬ意味をさへ打添へて、世に傳はりぬ。畫師は益々激しに激しつ、はては己れを忘れて、いかて歸らん、此儘に此濱邊に住みはてん、と迄いひ出てぬ。少女はかねて日增の事情の、からみにからみぬつゝある事を知れば、人し

れすかついさめかつ慰めかつはけまして、いよ〳〵此里を立さるべく思ひたゝしめつ。さてしも二人か上に今日の此はかなき歎を繰返さしむべき秋の夕べは與へられたるなり。

少女は道すから摘こし嫁菜の花を、大方むしり捨てつ、短き人の一生を、長かれと祈るこそ常なるべけれ、あはれいかなれは我とちゝめての苦しひに踏迷ひけん、都に出てし三年か程よ、春は花のうらゝかなるもの、秋は月の清らなるものとのみ思ひ居たりし、かく申さば心淺かりし身よと笑ひ給はんか、誠にあつき涙もつ我身とはゆめ知らざりしよ、さるを此一年がほど内には、我をいつくしみ給ふ尊とき父母ましつ、外には我を迎ふる懐かしき故郷の海山あるにもかゝはらで、花は春のはかなき、幻月は秋のあはれなるうつしゑの心地せられて、せはき胸に新に刻まれし愛の釘の、さても鋭く、はてては人の情のくるしきとさへ思ひ知り侍りき。あゝ神の光くまなき園生しも、咲亂れたる百合の花に立まふ蝴蝶は、暖かき羽袖に愛の露ふくましむべく、遂にまとひ入り侍り、かゝる契の末いか計り暗き世をか、一人たどりゆくとは思さずや。ゆるされざる思の、かくてとこしへに消ゆる時あらぬ寂しき身、哀れなる世とは思し給はずや、望多き君か上につきまとふはかなき雲の旗手は、遂に靡くべき夕べにもあはて消えゆくなるべし。我罪の深さ、我上の恐ろしさ、とかうはきこえあげし、語らしと思ふものから空に雨あり、人に涙あり、降り出ではいつすむべくもあらぬ庭たづみの、せめては我心の水に、とこしへ變らしの一言を宿しおき給ひてよ、その御言葉やこの世かの世はなれざるわれらのかためにこそ、情極りてそのまゝつめたき小草の上に倒れんとせし少女のつやゝかなる髪に、暮れゆく風のさと吹きたちて、膝なる花はあたりに散りみたれつ。

語りましゝ事は、今更きく聞かぬの愚さを繰り返すべき要もあるまじきを、などさはさきなる言葉に引きかへて、心よわらはいはるゝよ、さてはあすゆく我身の心さだめを、又もたがへしめんとにか、否さにはあるまじきをと、暗くなりし海つらを指さしつ、凪きたりと見ゆ

る波のけしきも、底の心は計り知るべからず、平和は常に妨げの聲に打追はるゝとか、我とても一度ふみ出し道の、一筋に誠の道たゞしきあとさしもふみゆかんとは、すれもより〳〵君にも語りしが如く、人は我身をして、殊更にけはしき道にはこばしめ、あらぬ昔しひを與ふるものゝやうに覺えつ、こは我ひが心のしか思はしむるかは知らねど、さる雲霧深き中にしも、我と撰びてまとひ入にし過去の夢よ、是皆か弱き身、幸薄き己れ自らのなすわざながら、其迷ひ其過りは、遂に今日のこと誠ひ多き、嫉み多き、寂しき生涯を作りなすべき身となりはてつ。そを今打破るべき、打てわすべき、力の我にあらぬるはあらねど、なとかあらざるにはあらねと、やゝ激したる聲の猶いひつゞけんとするを、少女は暫しとさへぎりつ。

そは前の夜にもくれ〳〵いさめ申しゝなるを、さる寂しき御心を、かりにも重ねて出し給はんには、いよ〳〵我罪の程恐ろしうて、神のみ前にもたやすくはゆきかたからむを、役なき事いひいてゝ、又も胸苦しきさせまつりしかな、君のあつき御心は今にして胸にしみ通り侍り。たゞせ給へよ、いさたゞせ給へよ、日は全く暮れはてたるを。

立ならぶ沖の小島の上に、月はやゝ傾ぶきそめて、柏崎西の濱のあたり、燈火の數は見るか中にまさりゆきぬ。相たすけつゝ辛うして歩み出にし二つの影の魂は、いつくかわけ行くややの松の下道虫の聲又ひくし。

秋の粧

宮澤すみ子

○仲　秋

涼風萬里に動きて秋氣已に半ばなり、いまだ霜露の嚴なるはなく、滿天滿地悲哀の面影ならて、籬にからむ朝貌の花おとろへず、古代紫うす紫やがてくれゆく秋のほろびを知らず顔なるがいぢちしけれど、又紅葉に爭はんのさまにはあらで、朝な〳〵、さすがにつぼみの數はまさねど、うからぬ秋を我が世と咲くぞ愛らしや。佛法がながき〳〵人心の支配となりて、秋を涙にアす

詩人うたふていはずや

　黄菊しらぎく其外の名はなくもがな

まことや白菊の閑雅なる紫のたぐひにあらず、黄菊の纖妙なる紅の類にあらず、世漸く花にうとからん時、香態愛すべきの狀を籬にやどして、風にわらひ、霜にほこり、露をうらまぬ風情けなげならずや。

秋の天、一日は一日より寂たらんとの時、蓋し紅紫の色、調和なしがたくて、詩人は唯白と黄の淡きを愛する靑き葉また見どころ多し、あはれ黄菊白菊その外の名はなくもがな。

　○案山子

人來と見しはの蓮月尼が高吟もおもひいだされて、やさしきは案山子なり。勞多かりし農夫が田植うたの外目にはたのしげなる春のころよりかけて、雨にも風にもいとひ、やくが如き炎天に、一番草二番草刈り去りて二百十日もことなう、すぐれば、田面の穗浪揃ひて、波やうつらん其さまま嬉し。

こゝらも近きがほどは田なり、鳴子の音、夕風にしるく、げにや人ミとおやまたるゝ案山子の、破れたる笠など着て立てるはをかし。

　○かりのやどり其上

故里をあとに、こゝ長野市へうつり住みたる家といふはもとより我が有にあらず　家居のつきぐ〵しをと並びが岡の法師は邸宅を以て人品のよしあし定めけるがゆるせ法師の君よ、故里のは庭ひろう、家また狹からざりき、繁き竹村、たかたかき樹々數へがたう、山より落ちしかけひの水も優なりけるを、こゝ借家の、おもふこと、叶はぬはいとつらし。

狹うして陋なる我が宿、かくて我は市の生活に入りぬ。今は敎育窓にゆめみし平和の天地山水紫明の田園にありとおもひぬ。何ぞ知らんや苦痛煩悶、桃花婉なる田野にありき、潤水のながるゝのほとり、うき世にとほからずして、憂きは家毎に交々いたり、三百戸の小村、笑ふてくらすの人はあらざりき。

然れども空高ふして、人なき夕ぐれ、靜かに天地を俯仰すれば、イーートーナルライフのかぎりなきを覺へて、山

寺よりひゞく晩鐘、田野の寂寞を破りて、身いさながら天上昇に展する如くおもひぬ。

こゝには人の聲かまびすし、黄金、名譽、嫉妬、權勢、ほこりかに往來して、こゝより見たる星影は故山にて見たるのそれよりはたふとからぬ感想、とは狂なりや。

○かりのやどり其中

しかはあれどこゝもまた、神の作り給ひし一部分なり狹き庭には木の數たかきが四五本ありて、青桐の葉ひろき、月をやどするよろしく、又雨のこゑ閑雅なり、夢は涼風一陣見舞ふこともあるべく、冬夜あられに夢むすびかねて、こゝまた宇宙の寂寞をおぼゆるに足らんとて、さすがにうれし。

これよりの秋、興ふかゝれな。

○かりのやどり其下

この春、唯十日はかりこゝへ來れる折しも、李の花しろう咲きて、雨を帶びし風情のはしなく、楊貴妃がかぎりなきの怨をおもはへしを、先きのころ其實赤う熟して、ほろ／＼と落ちぬ。

子等は嬉しとて狂せんばかり、稍大なるは兄に、稍小なるは妹に、而て母はいと小さき一つを。

故里の庭に植へおきしと等しき小菊のこゝなる垣根にもさかりなるを、さすがに子等はむしらざりき。こもまた先きのあるじがまきけんものよと、詩趣さらに深し。

日本は風流國にあらずや、到るところに花あり、せまき庭またこのおもむきあり　いざやしばしこゝなる市にたのしき朝夕あらしめ給へ、しかも筆、人の聲にさへぎられて、意の如くならず、これよりの秋、これよりの冬、我が筆のはこびいとうれはしうてなん。

▲米國の婦人醫者　米國に於て婦人にして醫師となりしは一千八百四十九年エリザベス、ブラックウエル孃を以て嚆矢とす、後ち三年を經てヒラデルヒア府に六人の婦人醫者を出し、一千八百八十九年には米國内に總計三千人、一千八百九十六年には四千五百五十五人となり、目下は六千人位ならんとのことなり

學藝

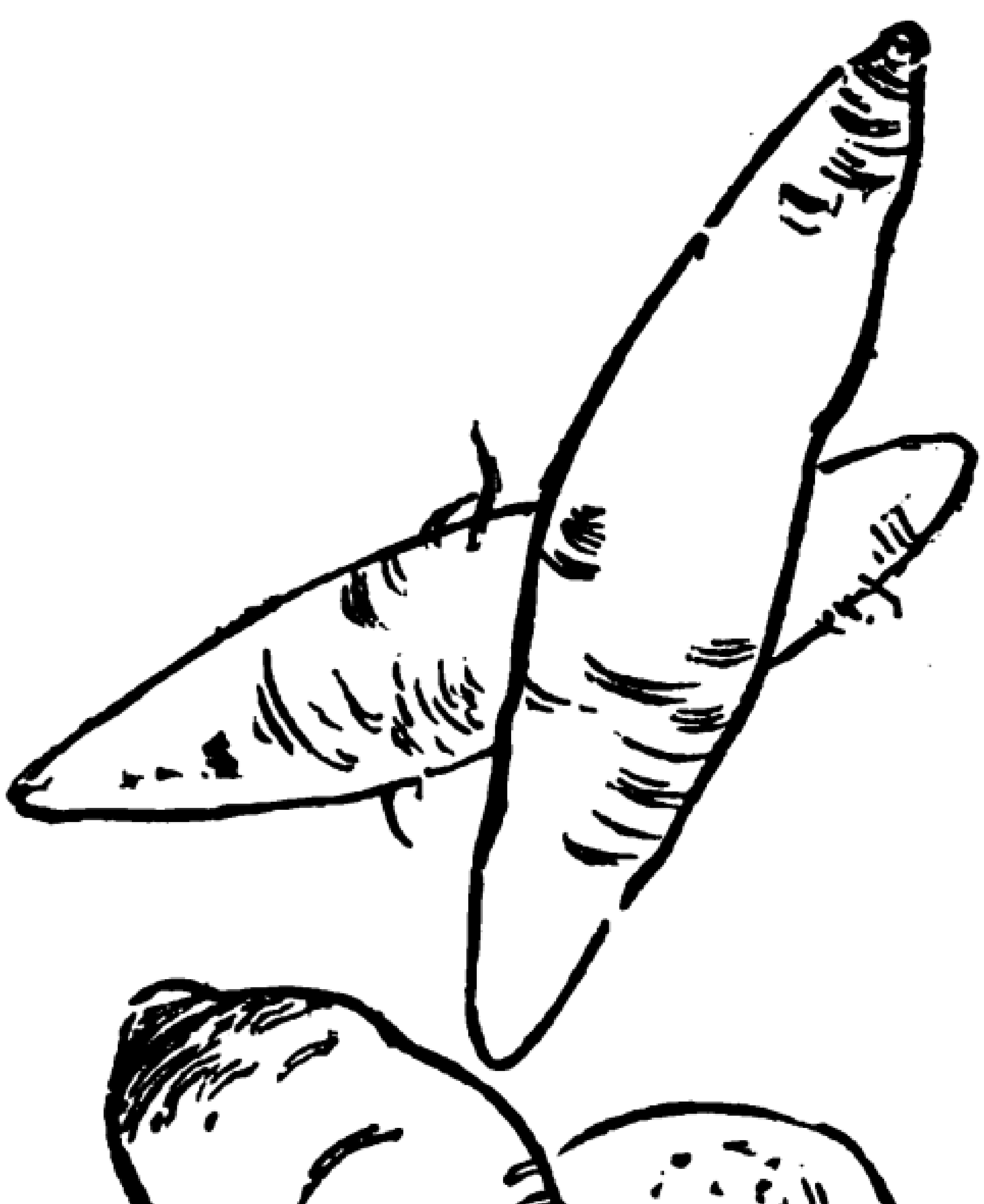
植物講話

藤堂梅軒

甘藷と馬鈴薯

橡實の脊比べとは、よくいひますが、今甘藷と馬鈴薯の脊比べといはば、未だ聞いたことはないでしようどうせ、此んな物の脊比べに、碌なことはありますまいが甘藷と馬鈴薯とに於ては、隨分ともに、そんなに、事もなげに云ひ棄てるのも殘念でしよう。馬鈴薯はイザ知らんが、甘藷は確かに、婦人社會に持て囃されて居ます。臺所の飯炊女より、機械場の工女に至るまで、否、ズット上つて、お孃樣や奥樣などに至るまで、「おさつ」「おいも」とて、中々に愛されて居ります。甘藷もこゝに至りては仕合物といはなければなりません。

さて、其の甘藷が、馬鈴薯に脊比べをするとは、どんなことであらうか。脊比べといつて、何も脊の高さを比べるといふ譯ではなし、種々の點に於て、双方の比べ事をするのであります。先づ其の姿からいへば、どちらも圓いが、一つは長みて、一つは短い方です。チヨット、一つを京阪の長顔といへば、一つを江戸ッ子の丸ぽちやといふ方でしよう子。それから、色合になると、奇妙にも二つとも、同じ樣で、白面と紅顏とがあります。白と紅との、どちらが旨いかといふに、人によりて、好、不好



がありますから、一樣にいはれません。成る程、日本人などては、色の白い人を美しとするが、西洋人などは、血色の良しいのを貴ぶと同じ樣な譯でしようか。マサカ、それ程でもありますまい。兎に角、武州河越の甘藷は、色が紅くて味が良いと申して、評判でありますが、中國や京阪では、白いのを賞美して、栗の實よりも旨いといひます。それて、藷屋の行燈には、よく「十三里」と書いてある、それは、九里四里といつて、二つを合せれば、そう成るのであります。それと同じ筆法で、京都では、櫛屋の看板に、よく「二十三や」と記したのがある。これを解剖すると、十、九、四となるので、即ち唐櫛といふ意味なのであります。丸で判物の樣ですす。話がチロツト外れましたが、馬鈴薯ては、白と紅との、どちらが旨いかといふと、白い方が旨いといひます。實際、馬鈴薯は三百種もあるといふが、甘藷はそう無いようてす。

そこて、甘藷は久しい間、我々の知己になつて居るが、馬鈴薯を膳に上すは、未だ昨今のように思はれて、珍らしいようだが、どうも我々に多く好かれないようです。それは、萬更理由がないことてなくて、どうも馬鈴薯には、甘藷のような甘味が乏しくて、即ち砂糖分が足りないのであります。併し西洋人になると、此の馬鈴薯を、極々賞味するそうて、どうしても長く食し慣れたものは、格別であるといはなければならん。又一方から考へると、料理法にも關係することてあらうと思はれます。馬鈴薯を燒いて豚油て煮るとか、又は煮立に食鹽を振りかけて、直に食するかなんどの、割烹に於て、未だ日本人は秘術を知らぬが多いからでもありましよう。何にせよ、こんな價の廉い、量の多い物を、料理法の不案内から、ムザ〱と廢物にするは、如何にも、殘念て堪りません。

右の故か、將た知己の深さによりてか、甘藷は本來我が國產物て、馬鈴薯は全く外國から來た物だと、考へられて居ます。これは、頓だ間違て、實は、どちらも外國から渡つたものであるのです。甘藷は一名りうきういもといつて琉球から渡つたのだといひ傳へますが、未だ

ここ、遠い外國から來たのださうで、素と、南洋や印度から來たといひます。否、南亞米利加が其の極の遠い原産地であるといふ說もあります。元祿十一年に、琉球王より鹿兒島藩に獻納したといふ說も、寶永二年に、薩摩の山川郷の利右衛門といふ人が、琉球から、種を持て歸つて、栽ゑたといふ說も、皆極近い事柄で、眞正の原産地から渡つたといふことではありません。◎そこで馬鈴薯の原産地はどこで

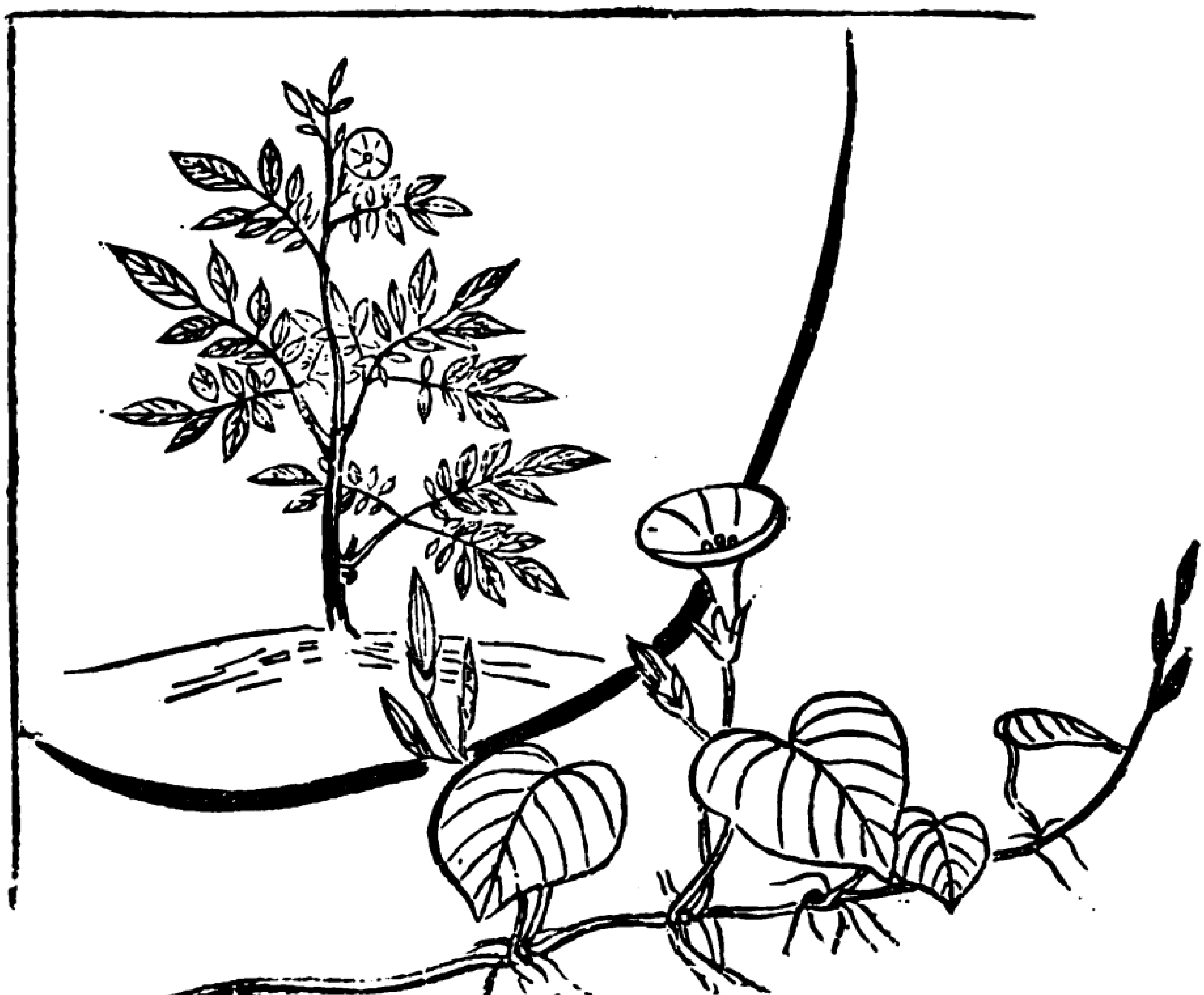


あるかといふに、亦南亞米利加で、今は世界到る所に擴がりました。之も僅に百年程以前からのことで、我國へ渡つて來たのも、矢張り其の頃だとか云ひます。關東地方では、此の芋を一名淸太夫いもといふてすが、それは昔し、秩父の代官河原淸太夫といふ人が、頻りと其の栽培を勸め廻つたからといふさうです。すると、甘藷と馬鈴薯とは、其の原産地が同じで、其の姿形がよく似て居る所からいへば、或は兄弟骨肉の間柄ではあるま

いかとも思はれます。人間ならば確かに保證しますが、そこが、人間でないだけそうは信ぜられないのです。第一に其の芋の成立が全く違つて居る、即ち甘藷は根が太くなつて出來たのであるが、馬鈴薯の方は莖が芋となつたのであります。此所の圖を見るゝ自然に知つて來ます。右の方にあるのが、甘藷の自然に出來て居る所で、これて見れば、成る程、根の變化したものてるあことが知れるてしよう。然るに、左の方にある馬鈴薯を見ると、芋の着いて居る枝は、少しも鬚のないだけ、根てないことが分かるてしよう。本當に馬鈴薯の芋は其の莖の枝てあるのてす。其の芋の面を見ても、若干の芽の點がポツヽヽあるのが、甘藷とは丸て違ひます。いはば、枝の尖がモット長く延びるべき筈なのが、却つて縮まつたので、其の芽の點は、即ち尋常の枝の上にあるのと少しも變つたことはない譯です。だから馬鈴薯を作るには其の芋を若干に小く切つて數を多くし、其れに各ヽ一ッ以上の芽の點があれば、それを土の中に埋めて、よく地上へ莖や葉を出します。農家が畑に作るのは、皆此のようにするのであるが、我々の素人でも、矢張り、そのようにして、乾度出來ますから、試しに遣つて御覽なさい、慰みになるどころか、實際益に立ちます。

こゝに猶一つ馬鈴薯の芋が、莖枝から變つたものてあるといふ實地の證據があります。馬鈴薯の栽ゑてある家では、これも一つ試みて御覧なさい。それは其の莖の上の方の枝まで土を被せて置くのです。すると後に芋を掘り取るときに、乾度、土を被せて置いた枝の尖にまで芋が出來て居ましよう。それが何よりの證據になります。甘藷は、どうして作りましようか。これも亦始は其の芋を地に栽ゑます、すると、それから芽を出します。しかし其の芽は馬鈴薯とは異つて、根から直接に萠え出るのであります。根から出るといふと、隨分變てあるようだが、別段に變てもないのです、草や木には、往々こんなことがあるので、現に菊などは、年々根から芽を出すのみか、其の一枚の葉を栽ゑただけても、芽を出す位であります。秘傳の作菊になると、迂濶に、

其の葉一枚を、盜まれないようにするとかいひます。右によりて見ると、甘藷と馬鈴薯とは、其芋の成立が全く違つて居るから、同じ兄弟でないことが分かつたてしよう。所で、此の二つ物の相違は、これ位に止まらんのでありすす。更に、根本から、全く別の種類に屬するものです。甘藷は、植物學では、之を旋花科に、馬鈴薯は茄科に屬するものとして居ます。平く申せば、甘藷は牽牛花の類て、馬鈴薯は茄の類とするのであります。斯くいへば、牽牛花や茄の類に、こんな芋が出來るとは、どうも不審議だなどといふ人もありましよ



う。けれども事實は爭はれぬもので、左に一々其の理由を話しますから、そこに至つて成る程と思はれたい。甘藷は全く蔓本て、丁度牽牛花のようであります。しかし畑に於ては、何物にも纏はないで、只地の上を匍つて居るだけてす。葉は圓形で、之も亦牽牛花のようてす、或るものは二ッ三ッに裂けて全く牽牛花の葉てあります。一般に其の裏は紫色をして居る。花になると一層牽牛花の形で色は淡紫でチョット優しいものてず。それが、葉の腋から出る軸の上に、二ッ三ッ咲きます。其の芋は葉の着所から出て地中に竄り込む根から出來るのであります。これだけの形態を見れば、確かに甘藷

が、牽牛花の類たることが分るでしよう。それに芋を生ずるのが不審議と思ふならば、牽牛花の類である所の旋花を見れバ疑が觸けます。旋花の根は矢張り、肉太くなつて、芋のようになりかゝつて居ます。だから、昔し饑饉年には、其の根を掘り起して、毎日の米に代用したことがあるそうです。それで此等を總て旋花料といふのであります。

馬鈴薯の形態は全く違ひます。成る程、茄のように其の莖が立つて、二三尺の長さに成長します。葉は少々、茄のとは違ひますが、一枚が大小幾多に裂けて、チヨツト藤の葉のようです、そうして短い毳のような毛が一面に生へて居ます。莖の先の葉の腋から、花を出して、その花が、丸て、茄や桔梗のようで、只白か、淡い紫色をして居ります。どうしても、茄科の植物であります。

甘藷は總體暖地の產で、奥羽、北陸の如きは、餘り作りません。若しも作るならば、非常の面倒がかゝります。どんな地味でも出來ますが、砂地を最もよろしいとします。何でも海に近くて、他の物が適しない所には甘藷を栽培するが一番よろしいです。始は芋を地に栽ゑますが、後は其の蔓を若干に切り分けて、一本づゝを砂に揷し込めて置けば、それで澤山に成長繁殖します。それに夏の頃には稻のように、除草や、耕培などの勞が要りませんから、誠に雜作のない農作物であるといはねばなりません。馬鈴薯でも亦、どんな土地にも適します、それに寒い所でも搆はずに出來ます。中々澤山繁えるもので、一本から五升ばかりも取れるそうだから、一名ごしようといもともいひます。又六月頃と此の頃と二度も、芋が獲られるから、二度いもともいひます。甘藷は、そうは行けませんが、毎年七月頃に、細い新い芋が出て、此の頃になると充分實の入つた、太い大きいなのが得られます。此の秋の間に專ら取り納れて置いて、冬や春まで持ち越して置きます。何でも冬の間には、藁や薦に包んで、充分に保護しますので、そうでなければ、腐りが廻ります。その冬の間にこそ、熱いホコゝゝの甘藷を盛んに賞味するので、何も婦人の方に限

つたことはない、男の仲間でも多くは、これを味つて怒る者もなければ、不平を溢す者もありません。勿論甘藷の中でも一向に味無くて、水ッぽいのがあります。これは少々種類の變りものでみづいもといはれて居るものです。これは婦人方が召上つても、失望の種になります。

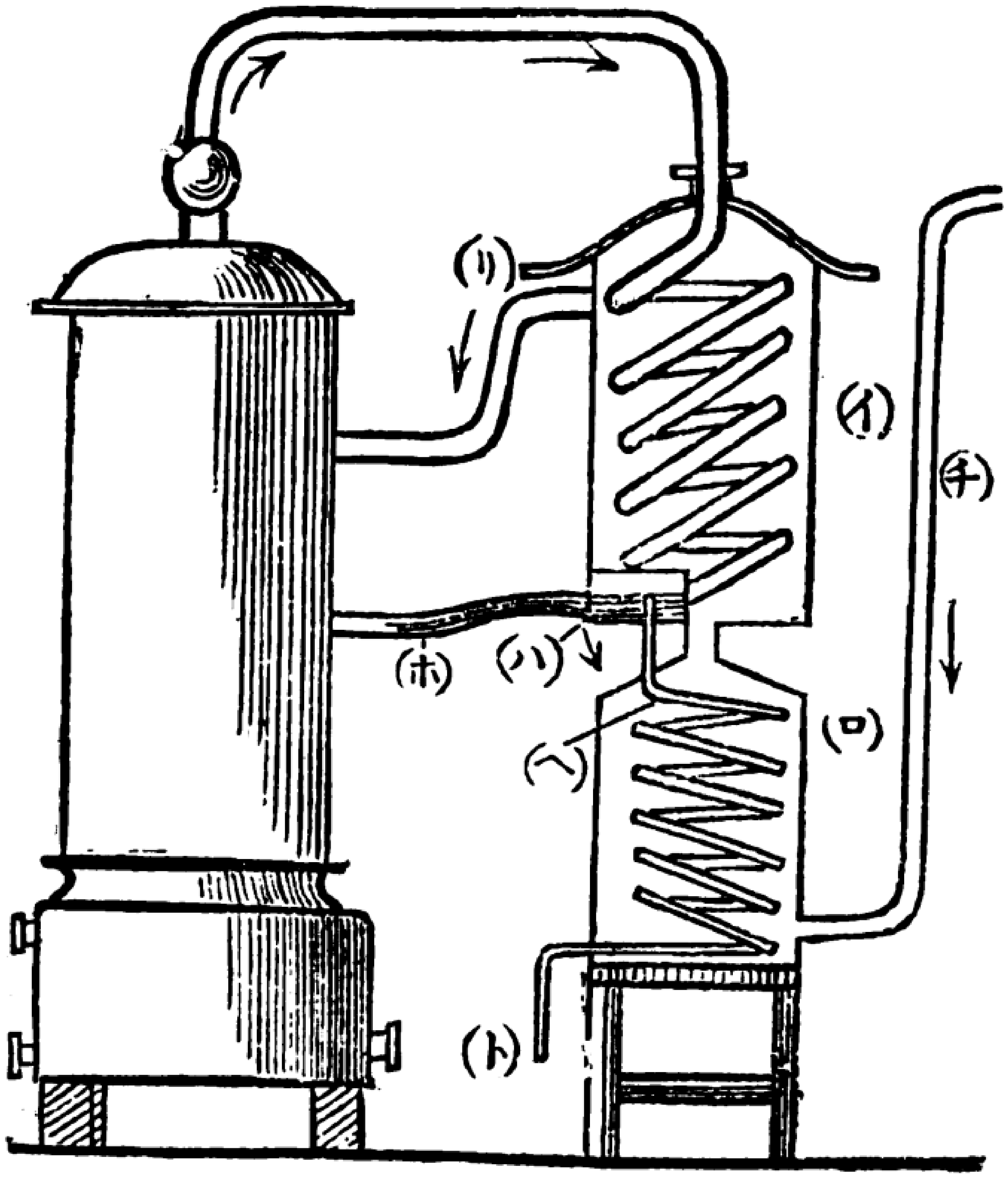
甘藷と馬鈴薯との効用は、こゝに繰り返すまでもないが、併し數へ擧げれば、中々澤山あるに驚く程であります。九州などでは、農家の常食として、米や麥に和ぜて炊ます。若しそれが常食にして餘りを生ずるときは、これを薄く切つて、乾し固めて貯へ置きます。時々これを搗き碎いて餅を拵へたり、餡を造ります。馬鈴薯は、こんな物には造られないが、味噌を拵へることが出來ます。そうしてどちらも、其の植物全躰を、馬や牛の飼料に當てることが出來ます。それから、又どちらの芋からも、葛のような澱粉が取れ、又酒を醸します。謂はゆる芋燒酒といつて、鹿兒島で賣る者は、即ち甘藷から製した酒であります。馬鈴薯からは主としてアルコールを造ります。

アルコールは他に麥や砂糖等からも造りますが、馬鈴薯は大切の材料とせられて居ます。今ザット、アルコールの製法を述べましよう。それには先づ、馬鈴薯を澱粉となし、次に其の澱粉を葡萄糖に變化させ、最後に、それを變じてアルコールとするのであります。

最初に馬鈴薯の芋をよく洗ひ淨めて、それを擦り潰ぶし、それに澤山の水を加へて、よく〳〵攪き廻はして置けば、數時間を經て、段々底に沈むものが出來る、それが即ち澱粉で、色々の雑物がこれに混じて居ります。そこで上の液を流し捨てゝ、沈澱物だけを取り殘すのです。今度はこれを葡萄糖にするために、別に鐵鍋の中に水を盛りて、これに、その水の百分の一半ばかりの硫酸を滴らして、よくよく和ぜて、極淡い稀硫酸にするのである。それを火に掛けて沸騰させて置いて、それに、先の澱粉を少しづゝ次第〳〵に加へて、尚絶えず煮立てますると、凡そ五時間ばかりして、澱粉は全く變化して葡萄糖となります。

それから、これをイヨ〳〵アルコールにするのです。それは右に出來た葡萄糖を、暫く其のまゝに放つて置けば、葡萄糖は水に溶けた液となつて居るが、雜物ばかりは、鍋の底に段々と沈んで來ます。そこで、其の液のみを旨く他の器へ取り移して、これに石灰粉（炭酸石灰）を入れます。これには理由があるので、即ち其の液には、どうしても猶多少の硫酸が殘つて居ますから、石灰で其の硫酸を驅り出すのです。即ち其の石灰が硫酸に化合して 硫酸石灰を生じ、それと餘分の石灰とが、其の糖液の底に沈むのです。こうなると容易に純粹の葡萄糖液が取れるので、これを他の器に移し取つて、充分に冷却します。これに百分の一ほどの醱酵素（酒になる元の品物）を加へて置けば、凡そ五六時間を經て、沸々と泡沫を生じます。猶も其のまゝにして置けば、全くアルコールとなつて終ひます。それを蒸餾すればアルコールだけが、分け取れるのです。此のようにして得た酒は、未だ不純粹のアルコールで、多少の臭氣があります。燒酎といふのが即ち此のことです。だから馬鈴薯から燒酎が造られる譯て、丁度甘藷の芋燒酎も、これと少しも違はないのです。で、此の燒酎から純粹のアルコールが出來ますので、即ち其の蒸餾法を精密にすれば良いのであります。純粹のアルコールは、攝氏七十八度の温で蒸發するものであるから、右の燒酎を温めて七十八度にすれば、アルコールばかりが蒸發して行くので其の他の雜物は多くこれよりも温度が高くなければ蒸發しないから、跡に留まります。此にある圖は、其の蒸餾器で、左にあるのが、其釜で、下から火を焚くようになつて居ります。右にあるのが蒸氣を冷して液とする冷却器で、上から導かれて來た蒸氣は、先づ（イ）の中の螺旋管を通る間に冷されて液となつたのが（ハ）の所に溜まります。しかし此に溜まつた液は實に、目的のアルコールでないから、これは（ホ）の管に依りて猶本の蒸發釜に戻します。そこで未だ液にならない蒸氣は（ヘ）の螺旋管に依りて（ロ）の中を通り抜け、こゝて始めて冷めて目的のアルコールとなり、（ト）の口から滴つて出ます。別に冷却器の中の水は

絶えず冷に保つて置かねばならぬから、(チ)の管に依りて新しい冷水を(ロ)に導き入れ、それが上へ昇つて(イ)の上方から(リ)の管に依つて外へ導き出され、それで以て、新陳代謝いたしますので、決して水が温まるようなことはありません。



酒には色々の種類が澤山にあります、日本酒、西洋酒と大体二つに區別して、其の中が又、清酒や焼酎や味淋などビールや葡萄酒やシャンパンやホイスキーなどがあります。併し、何れにするも、皆アルコールを含んで、それで飲む人が、陶然と酔ふのてあります。酒によりて、其のアルコールの分量が違ひますから、強いと弱いと、又毒と無毒との別が出来るのてあります。今左にアルコールを含む量を、表にして左に掲げます。

	(百分中アルコールの含む割合)
日本酒	
清酒(正宗)	一二、七
清酒(魁)	一二、八
焼酎(三升取り)	四一、五
泡盛	三七、〇
養老酒	一二、九
保命酒	一三、二
流山味淋	一〇、〇
西洋酒	
獨逸ビール	二、九
英國ビール	八、九
葡萄酒(ライン)	九、五
葡萄酒(ボルドー)	一〇、五
シャンパン	一〇、〇
ジン酒	五一、〇
ホイスキー	五四、三

右によりて見ると、日本酒では焼酎、泡盛が強く、西洋

酒ではジン酒ホイスキーが最も强いことが分ります。酒道樂になると、燒酎や泡盛でなければ承知がならぬとなるが、西洋人のホイスキーと來たら一層甚しいのであります。ビールは酒中の最も弱いもので、殊に獨逸の如きは、一茶の代りに飲用する程だそうです。日本のビールは獨逸よりも遙にアルコールが强いといふこと、若しも之れを茶の代りのように飲まうならば、それこそ大變です。

段々と、甘藷と馬鈴薯との話が長引いて、終に酒の話に移りました、すると梅軒居士は、上戸であるかのように思はれるでしようが、決してそうではありません。大の下戸の下戸で、その邊はどうか御安心を願ひます。

森林に獵するよりも市塲に獵するを廉なりりとす

素人看護法

淑德女學校講師醫學士 佐藤恒久

▲心臟の話

心臟と云ふものは肉で出來た所の空虚の袋であります、勿論活きて居る中は此空虚の袋の內には何時も血液が一杯這入ッて居ります、それで曩には人間の身體には右と左の二つの心臟があるかの如く假にお話を致して置きましたけれども實際心臟は二つある譯ではなくして矢張一つでありますけれども、中に中隔がありまして一つの心臟が詰る所矢張左右の二つに分れて居ります、デ左右とも各々出口と入口があります。言葉を換へて言へば二つの靜脉と二つの動脉が一つの心臟に入り込むのであります、それで心臟は肉で出來て居りますから收縮することが出來る、他の肉と同じやうに伸びたり縮んだりすることが出來ます、若しそれが縮みますると中に這入つて居る所の血液は一方即ち動脉に向つて押出されると云ふ工合である、此收縮の時に心臟の下の部分が胸壁に近寄つて來る、それは皆さんも御承知の通り左の乳の下の所を以て脉を打つと同じやうに動く塲所があります、即ち動悸と云ふものがある、之が心臟の下の部分が胸壁に近寄ると云ふ證據で

あります、此收縮に依て心臟内の血液が一方に押出されますと云ふと動脈の中に其血液が往きます、すると其動脈が矢張ゴムで出來たやうなものでありますから、血液が中に充滿すれば從つて動脈も伸びる、又太くなる、其太くなると云ふことは身體の奥の方の動脈では外からは分りませぬが皮の直下にある動脈であると其太くなることも能く分かる、又觸るゝことも出來る、即ち脉を探ると云ふのは此動脉の太くなることを見るのであります、皆さんも脉を診ると云ふことは既に御承知でありませうか、其脉を診る場所と云ふものは何時も皮の直下に動脉の在る所でなければ其脉は探れないのであります、尚脉の診方などは是から後追々御話致しますから其場所などの委しいことは此處では止めて置きます、併し此脈のことに付てお話して置きたいことは脈の數と云ふことで、普通健康體ではどの位あるかと云ふことをお話して見ますると、健康の大人では一分時間に六十から八十迄が通常であります、それより少ないとか多いとか云ふのであると何か身躰に異變があるものと思はなければならない、尤も子供では八十以上と云ふのが當前でありますから年齡に依て此脉の數が增減すると云ふことを承知して置かなければならぬ、生れたての子供などでありますと百四十位あるのが既に當前である、決して百四十あつたからと云つても初生兒では病氣で以て脉が殖へたものとはしないのであるそれから、脉の撿査と云ふものは強ち脉の數許りを見てそれで宜いと云ふものでは決してないのであります、素人の方は脉の數が幾つあつたとか云ふことをお話になりますけれども、脉の數と云ふものは只だ心臟の收縮する度數を示すだけのことでありまして數だけでは決して其人が病氣になつて居るのであるか或は健康であるのか、又は病人にした所で危篤の病人であるのであるか又輕い病氣に罹つて居るのであるかと云ふことは此脉の數では勿論分かるものではありませぬ、脉を診る必要と云ふのは、第一に數を數へるのも必要でありますが其外に此脉に依て心臟の收縮の強弱をも知ることが出來る、又收縮の整つて居るか或は

不規則であるとか云ふことも知ることが出來、又心臓から動脉に向つて押出さるゝ所の血液の量の多少をも知ることが出來ると云ふやうに、此脉を診ると云ふことは我々醫師に取つては余程必要なことでありますからして此後に委しくお話を致す場合もありますから今日は此位にして置きます、次に出血のことを序にお話して置きます、出血には動脉出血と云ふのがあります、動脉出血と云ふのは動脉に傷が付いて血が出るので其場合には其血の色が鮮明であります、且つ血が迸つて出る、迸つて出ると云ふのは心臓の收縮の仕掛で出て來るのでありますから迸るのであります、それからもう一つは靜脉出血と云ふので、之は血の色が黒い、且つ迸ると云ふことはなくしてダラ〳〵と流れる、斯様な譯でありますから色或は流れ工合に依て此出血は動脉から出るものであるか、靜脉から出るものであるから云ふことが直きに分りますから是も御承知なすつて置いて下さるやうに願ひます、

▲呼吸器の話

前項にもお話しました通り黒い血を清潔な血にするのは何の働作に依るかと申すに肺の臓の働作でありまして、此肺の臓に於て空氣中の酸素を血液が取り、又血液中の炭酸を空氣中に捨てる斯う云ふのが肺の臓の働作であります、呼吸器はどう云ふものから成立つて居るとか云ふに第一に肺、それから其肺の中に空氣を送る路即ち氣管及び喉頭是丈が呼吸器の內に屬して居る、肺臓の形は海綿或は蜂の巣のやうな工合でありまして、大層膨れて居つてさうして中が空虚で大きな穴はありませぬけれども小さな空洞が澤山出來て居つて、さうして其小さな空洞の中には空氣が充滿して居る、其在る場所は心臓と共に胸の中にあります、それで瓦斯躰の交易と云ふことはどう云ふ風にしてするかと云ふに、毛細管が肺の臓の中に澤山別れて這入り込んで居ります、其毛細管の外側には空氣が來て居りまして、此毛細管の壁に依つて空氣と血液が只だ界されて居る

だけのことでありますから、此毛細管の薄い壁一重を透して片方からは、酸素が這入り、片方からは炭素が出ると云ふ働きで瓦斯躰の変易が出來るのであります

それから肺の中の空氣がどう云ふ風にして入込み又どう云ふ風に外に出るかと云ふに、喉頭或は氣管を通して口中から或は鼻の中から肺臓迄空氣が出入して居るのであります、喉頭は舌の根の後ろにある所のもので其中には聲帯と云つて聲の出る細い紐が張つてあります、丁度三味線或は琴の糸か或は笛の瓣と同じやうな類である、それ故に空氣が其糸に觸れますと云ふと色々の音が出る、故に喉頭は啻に肺臓の中に空氣を送る路と云ふ許りの役目でなくして聲を出す役目があります、それから氣管は喉頭の下に連つて居る所のもので軟骨から出來た管であります、何ぜ軟骨から出來て居らなければならぬかと云ふに、若し肉で出來て居つたなれば空氣の出入が自由に出來ない、是が軟骨で出來て居ればこそ始終其口が開いて居りますから自由に出入することが出來ます、最初は一本でありますけれども後には左右の二本に別れ其各々が段々細く別れて往きまして遂に肺胞と云ふものに通じます、肺胞と云ふのは前にお話した丁度蜂の巣のやうな工合に小さく區劃された所の空洞であります、其空洞の中へ空氣が這入り込んで往くてのあります、

次に呼吸といふ事をお話を致しますか、呼吸は何てあるかと云ふに詰る所は肺の臓の中に空氣が出たり這入つたりする働きを言ふのである之がどう云ふ譯で出來るか、決して外の方から空氣を肺の中に押込むと云ふのではないけれども、空氣が這入つて往くと云ふのはどう云ふ譯であるかと云ふのに之は胸廓が開くのであります、胸廓は御承知の通り骨と肉とで出來て居りまして夫れが大きくなつたり小さくなつたりすることが出來る、若し大きくなると云ふと中の壓力が減じますから從つて口或は鼻から空氣が胸廓の中即ち肺臓の中に這入り込むのであります、又胸廓を縮めますと云ふと肺臓の中に這入つて居る所の空氣は外に押出されると云ふやうに胸廓の運動が元になつて初めて呼吸と云

ふことが出來る恰も荒物屋で賣る火起しの工合である胸廓の運動は重にも何で出來るかと云ふに肋骨及び其の筋の働きであります、けれども尚其外に横隔膜と云ふものがある、之は胸腔と腹腔との界をなす所の肉でありまして之が丁度腹腔の屋根を造つて居るやうな形でありまして、其屋根が或は尖つて見たり或は平たくなつて見たりする即ち横隔膜の運動であります、若し屋根が低く或は平らになると從つて胸廓の方が廣くなるのは分つた話でありますかな、肋骨などの運動の外に此横隔膜が下の方に下つて屋根が低く平らになると胸廓内が大きくなる、之に反して屋根が尖つて來ると云ふと從つて胸廓内が狹くなるので中の空氣が押出される、此二つの力で以て呼吸と云ふことが出來るのであります、て呼吸の數はどの位であるかと云ふに是も大人と子供、或は老人に依て違ひがありますけれども通例の大人でありますと、一分時間に十六回から十八回の呼吸であります、呼吸と云ふことは讀んで字の如くて空氣を吸ふのとそれから空氣を吐くと云ふことであるからして、詰り十六回或は十八回空氣を吸ひ又出すのである、呼吸のことは是丈けに止めて置きまして、

（次號に消化器の話を紹介すべし）

人が死を恐るゝは小見が暗所を恐るゝがごとし

噴火山の話（中）

松琴女史

▲裂隙の成生とダイク、

前に地層のある裂け目即ち裂隙の事を申しましたが、此裂隙が如何にして出來るのかを申しませう、

此裂隙の出來るのは、種々の作用によりますが、此處では主として火山地方にありますもの、火山作用によりて出來るものを述べます。

火山地方の裂隙は、地下の深所にある溶岩が、何かの變動で上方に押し上げて來るにより出來るのであります、さて、前から地下の深所の溶岩と云ふ事を申しますが、地面からドノ位の深さの處に溶岩はあるものか

と、御不審の御方も御座いませう、此問に答へるのは、少しく困難でありますから、下の事柄から推定するのであります。

地面の上層一二米突の處は、空氣の温度の變化に伴はれて四時變はりますが、二十米突程の下層では、四時一定の温度であります、此事は、深井の水の温度が四時殆んど一定の温度を有つて居るのでも明かであります、又實地に深い井を穿つて温度を調べつゝある學者もあります、夫から尚地下深く進みますと、今度は温度か昇るのであります、此事は北米のシユーペリオル湖地方の鑛山で、實地に知られて居ります事で、地下二百廿三呎を降る毎に、攝氏寒暖計の一度を増します、又英吉利のコーンウオールと云ふ鑛山は、羅馬時代から採堀して居た山でしたが、地

▲歐洲諸國に於る生活費　歐洲諸國の各都會に於て最も食料品の廉價なるは澳國の維納、最も高きは西班牙の馬德里にして麵麭、肉、砂糖、石炭の如き常に格外の高價を唱へ居ると云ふ、露國の聖彼得得堡にて亦麵麭の價は非常に高く、白麵麭の如きは今猶下等社會の食料として贅澤のものなりと信じ之を用ゐざる者多き由、維納に次ぎて食料品の安きは白耳義のブラッセルなるが、佛國の巴里に行けば少しく高くなり、英國の倫敦に行けば尚少しく高くなると云ふ、今是等諸國人が年々費す所の食料に對する平均代價を見るに、英國人は九十六圓、佛國人は九十四圓、獨逸人は八十四圓、西班牙人は六十六圓、伊太利人は四十八圓、露西亞人は四十六圓にして、尚其一年間に要する肉類と麵麭の分量を見るに、肉類に付て英國人は百九斤、佛蘭西人は八十七斤、獨逸人は六十四斤、伊太利人は二十八斤、露西亞人は五十一斤、パンに付て英國人は三百八十斤、佛蘭西人五百八十斤、獨逸人五百六十斤、西班牙人四百八十斤、伊太利人四百斤、露西亞人六百五十五斤なりと云ふ、而して歐羅巴を出づれは比律賓の廉尼剌市が最も生活に金の掛らぬ所なりとのことなり

下餘程深くなつた爲めに、坑夫が坑内で働けぬ程熱くなつた爲めに、現今廢坑になつて居ります。

此温度の増加の度は、地方によりて違ひますが、平均地表より卅三米突を下る毎に、攝氏一度を増すのであります、此割合で推しますと、地殻上表の温度を零度としても、十三里の深くては、千六百度即ち鍜鐵を熔解する温度に達します、其上、地下深さなる程、温度の増加が割合多くなりますから、之よりは尚淺い處で此位な温度に達しませう。

十三里と云ふと長い樣でありますが、地球の半徑を千七百里と見ますと、其千分の八にも足りません、つまり地球のホンノ上皮か、地殻即ち比較的低温度の部分てあります、又是から見ますと地殻は其割合が、地心の熔岩の額と比べて見ますと、薄くて廣い板の樣なもので

ありますから、下から押し上げられて、ヒヽの出來ますのも無理は御座いません。

地殼が若し泥土か或は砂の樣なものである時には、此場合には裂け目は出來ませぬが堅い岩石の層であります時には裂け目が出來ます、凡て物質が外力の爲めに働かれて居ります時には、質肉張力の方向に直角に裂けます、地殼の時にも其通りて、裂け目は地表より中心に向つて出來ます、又地表では直線をなして長く、各裂隙は互に平行して居ります、かく一遍裂隙の出來ました地表が、再び激動に出逢ひますと、前の直線に直角に出來ますが、つまり地表から見ますと數多の矩形が出來ます。

試に、水面にはりつめました、厚氷を壓して破りますと、長く直線的に裂けませう。

地殼に裂隙の出來ます時には、振動と響きが伴はれます、是が地震と地響きて御座います。

此裂隙は、地表から熔岩の處迄達して居りますので、一般に下程廣がつた楔形の空所になつて居ります、之は熔岩の爲めに押し上げられます時に、一上一下して出來るので御座います。

既に裂隙が出來ますれば、地下に高壓力を有します熔岩は裂け目を通じて上昇します、是が地表以上、或は途中迄押し上げられまして、冷へ固まり火山岩となりましたのが即ちダイク岩であります。

此ダイクは、火山地方には多數ありますもので、我國にも例があります、其延長も長さに亘りますもので、千七百八十三年に氷州て、火山迸發の際に出來ましたダイクは、延長二百哩に亘つて居ります。

此ダイクは、無論地下の各地層を貫通して居りますもので、英吉利の北部にありますダイクは、六十哩以上の直線をなし、石炭層や、鮞狀石灰岩をも貫いて居ります、火山地方にありますダイクは、主として火山から噴出されました、岩屑や灰て表面が覆はれて居るので、通例見えませぬ併し地表が多年の間、水蝕作用て洗はれて居りますと、能く見る事が出來ます。

さて熔岩が裂隙を通して ハミ出す時には、其張力や反

爆力の爲めに、又地心からの爆發の力を傳へて、裂隙の中で、抵抗の少なく薄弱な部分は打ち破られて地下の熔岩と空氣と交通し、沸騰噴湧するに充分なる丈けの廣き口が出來ます、ソースルと、是迄地層に壓へられて欝積して居ました蒸氣の泡は、此部分から猛裂な勢で迸出し始め、玆に火山の基を作るのであります。

裂隙を通して登ります熔岩中の蒸氣は、非常の高壓力のものでなければなりませぬ、熔岩の大な柱を支へて之を非常な高さに噴き出し、又火口の周圍にあります岩石をも破らねばなりませぬ、此蒸氣泡は、地下の深所ては、壓力の爲めに比較的僅かの容積でありますが噴火口に達しますと、突然其容積を膨脹して、恰も大砲の砲身内に裝塡せられてある火藥が點火せられました時と同樣、噴火口の軸の方向に沿ふて、垂直に上方に放射さられるのであります。

▲火山の噴出物

熔岩中の蒸氣の泡が噴火口即ち地皮の裂け目の上で破裂しますのを考へますと其壓力は四方へ均しく働きませう、是が即ち火山口の圓形に近い原因であります。

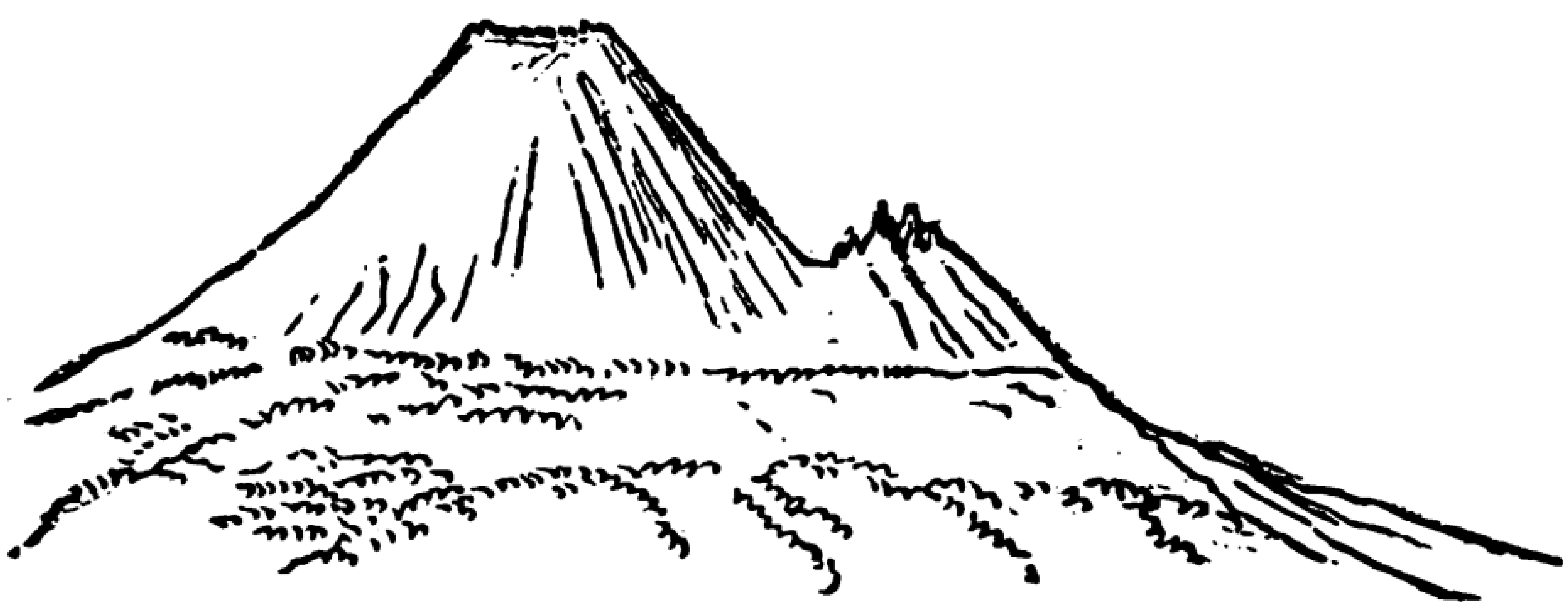
大抵の火山は其火口や山躰の平面圖は楕圓形であります是は前に述べました通り地面にある裂隙の延長の方向に楕圓の長徑がありますので自然の理で御座いませう、此裂隙の兩端は一千八百廿二年にウエスビヤス火山迸發後に火山口の東南崖に見えたと申す事て御座います。

既に噴火口か出來ました上は水蒸氣の破裂と熔岩の迸出は間斷なく行はれまして口が漸次に擴張せられて周圍の岩石は碎かれ空中に吹き飛はされて噴火口の周圍に堆積し爰に完全な、火山が出來るのであります、其噴出物で出來ました圓形の火山口は其大さは迸發の强弱と其經續時間の長短によるもので御座います

噴出物は岩石の外に熔岩や赤熱の岩塊でありますが是は噴出されて可成の高さに達します、大迸發の折には數千尺の高さに噴き上げらるゝ事かあります、其噴出する力の强い事は一例を示しますと一千五百三十三年にコトパキシ山の破裂の後に山麓の平地には火山を中

心として五十哩の半徑を以て書いた圈内には直徑九呎もある岩塊が落ち散つて居たと申す事で御座います、又フムボルトと云ふ學者は同し山の迸發の際に二百噸の岩塊が空中數百尺の高さに投げ出されたと云ふ事を書いて有ります、

熔岩の一部分は噴火口から空中に噴き上げられると空氣中を旋回しつゝ落ちて彈丸狀又は紡錘狀に固まり表面には特有の捩れた、線が出來ます、是は火山地方には數多あります物で富士山麓の甲斐の部分にあります、之を火山彈と稱へます、大さは軍艦の綱具に用います滑車位から胡桃の果位のもの迄あります、此火山彈の心は通例緻密の岩質でありますが、時には他の岩石の破片がありま



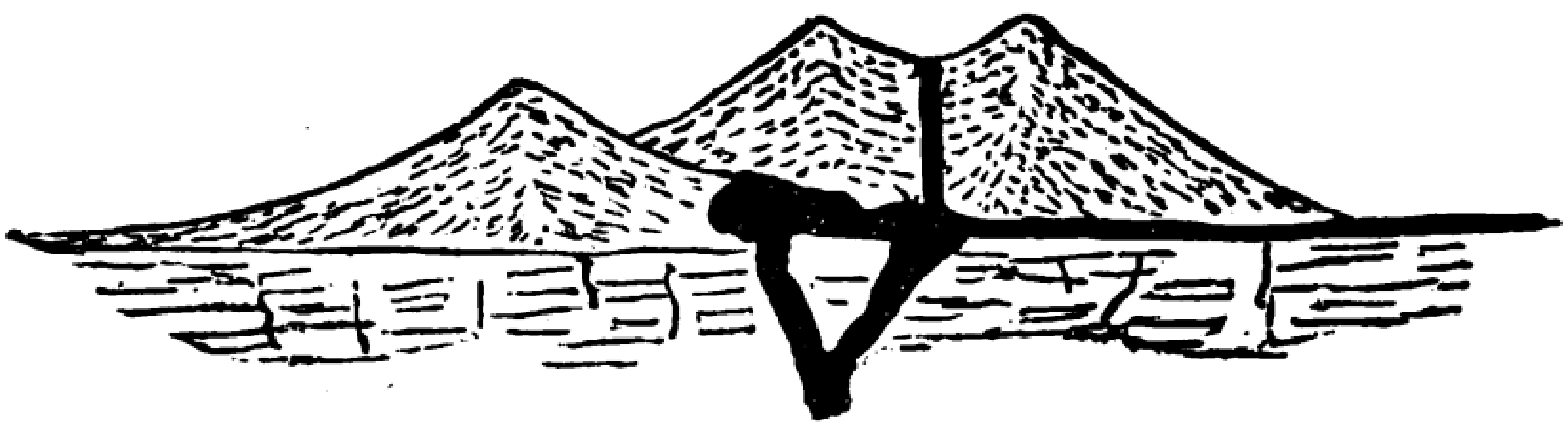
コトパキシ山を十八哩遠方より見たる圖

すが、之は此岩片の周圍に熔岩が附着した儘に噴出せられた者であります、外面は粗鬆であります、空中高く噴き上げられたる熔岩が、空氣中を落下する間に、急に冷えますと、不規則な多竅粗鬆の塊となります、此中で鐵分を、多く含有しますのは、恰も鍛冶場から出ます鐵滓の樣であります長石質のものは、輕く、多くの場合に、多竅狀又は毛狀て、又玻璃光澤を放つて居るのもあります、時として、熔岩の成分の工合で纖維狀に引き伸ばされて、丁度石綿の樣なものが出來ます事があります、

又空氣中に噴出せられまして、中央て相互に磨れ合ひますと、燒石は、角が取れまして、丸い小石の樣

になります、之を火山礫と稱します、色は眞黒のと、赤のとあります、此火山礫の粉が即ち火山灰で、至て細かく灰白色であります、以上の三者は往々相混じまして噴火山の近所にあります、其中に古代の岩石の破片か混して居る事はあります、火山破裂の際に、空中で破片や灰が、互に磨れ合ひますので電氣が起ります、此證據は空中に迸ります噴出物の柱から、電光か閃々と見える事か御座います、一千八百廿二年のウエスビヤス火山の破裂の時には、間斷なく電光か閃いたと云ふ事で、一入光景に凄味を與へたと申します

細微な粉末から、成立つて居ります火山灰は、風に送られて數百里の遠方へ送られる事かありますが、稍粒の大きい物程、噴火口の近處に落ち、噴火口の周圍に圓形の堤か出來ます、之は噴出か永續します程大きくなりますので、頭の平らな圓錐躰で、頂上には漏斗狀の窪みが出來ます、此窪みが火山口であります



此圓錐躰の斜面は、二十度から四十度位な傾斜を有ちますもので、是も堆積します噴出物の粒の大小によつて角度に大小か出來ます、又此圓錐躰の大さは、刈草の積み位から、千餘尺の高さて、數哩の直徑を有するに至るものがあります、

此種の錐躰は、火山地方には群をなして存在して居る事かあります、其各錐躰の配列にも、自から規則があるらしいので、地面の裂隙に沿ふて、一直線に數十里の間連列して居る事もありますし、又九曜の星の樣に、一を中心として他か之を取卷いて居る事もあります、千島列島の火山や伊豆諸島は、前者の例で御座います、伊太利のウエスビヤス山は後者の例で之は一千七百九十四年に、トレデルグレコ市の一部分を破壞したる迸發の際に、同一の裂隙に五ケの密接した圓錐が出來ましたそうです、又

一火山の火腹を破つて、別に噴火口が出來る場合もあります、

裁縫實習

土を積んで山となれば風雨起り
水を積んで川となれば蛟龍を生ず　支那古諺

女子職業學校教員　金子銅子述

▲ペテコート

これは裁ちかたにつきましてはさほどのちがひもありませぬが、縫ひかたによりまして、種々の形が出來ます（用布はキヤリコ若くはフランネルでございます、其裁ちかたは第卅九圖の通りでありまして、後が一巾、前半巾を用ゐます、次に後巾の中央に（ア）の切れめ四寸を入れます、次に長さ一尺六寸五分、巾二寸三分の切一枚、これを帶になります、又長さ四寸五分、巾一寸のもの二枚とを裁ちます、以上申上ました裁ちかたはキヤリコを用ゐます方で、もしフランネルのときは切巾が少々せまくなりますから前巾は一巾を半分にいたしませんで少々多めに裁ち合せます、丈は其小兒によりまして、伸縮致します、縫ひ方は初めに長さ四寸五分、巾一寸のものをとりまして、三十九圖の（ア）の切れ目の兩端に見返しをつけます、それより同圖の（イ）を合せて丁度輪になる樣致します、もしこの（イ）の所がカキメてありましたらいづれも糸にてからげて置きます、縫ひ込みは前にかへります、次に裾がけこれはむしめに一分位に折り次を八分位に折りましてミシンをかけます、手縫ひなれば品によりてマツルか又は千鳥がけにいたします、こゝも飾をつけますがやはり他の飾をつけました通りにレースを用ゐますときは裾がけを致してからマツリつけますし、エンブロイダなれば裾がけの切を折りこみませんでこゝは見返しの切をつけて間にはさみてつけます、次に裾がけの直上より一寸上りまして、二分つまみミシン縫ひにいたすか又は返し縫ひ或はダシ縫ひに致します、しかしこゝはグシ縫ひて極小針に縫ひ置きました方がよろしうございます、次には只今の上げの縫ひめより四分上りまして、二

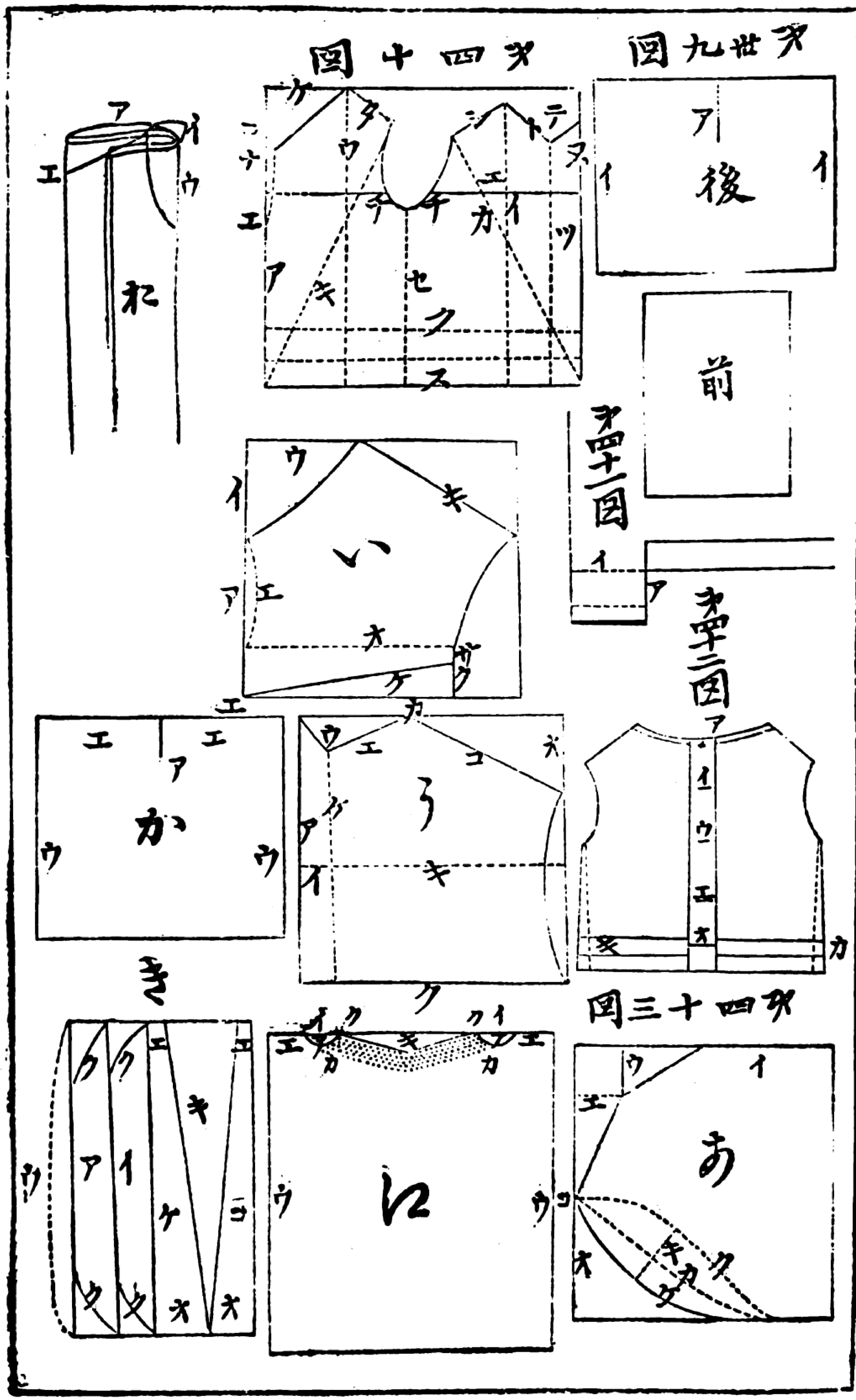
分つまみます、かやうの飾は幾段いたしましてもよろしいのでペテコートの丈が長ければ隨意に幾段もつまんで飾といたします、次に上部の前の中央に標をつけ見返しを除きて端より端まで三通り小針にて縫ひましてギヤダをつくり帶をとりましてこの中央の所をとり腰の中央の所と合せ針を打ちギヤダは前に少くして後に多くする樣にいたし帶を表に縫ひつけ兩端をぬひ帶の一方を裏は綴ぢ付けます、ミシン縫ひなれば裏は躾にてとめをきミシンをかけます、帶はヅロースにてもペラコートにても帶の兩端と帶の附けめとはミシンをかけます、手縫ひなれば返し縫ひを致します、此ペテコートも上につりますからヅロースの如き穴をあけボタンをつけます、次は

▲襦袢

これは大人にて申せばコーセツトの樣なもので、之を裁ちますには矢張り巾を二折にして裁ちます、用布も前と同樣フランネルかキヤリコを用ゐます、第四十圖はこの裁ちかたて、(ア)は切の折り目でございます、(イ)の丈六寸五分、(ウ)六寸八分、(ス)八寸五分(ク)一寸四分、(コ)一寸五分として(ソ)を格好よく弓なりに切りとります、次に(キ)を七寸一分として(タ)の巾一寸九分とし、(カ)を六寸七分、(シ)を一寸九分巾、(セ)二寸九分、(エ)三寸三分、(オ)五寸五分として(チ)の彎面の所を切りとります、次に(テ)二分、(ト)一寸一分、(ツ)の巾八分と致します、こゝは折りこみます所で縫かたになりまして委しく申上ます、(ク)は帶の付く所てこれも縫ひかたのとき申ます、此他に巾一寸三分、長一尺七寸の帶を裁ち猶巾一寸、表七寸の切即ち見返しとなる切をとります、扨縫ひかたははじめに(ナ)の角二分位の巾にいたし下に向ふて二寸五分位の間點線の如く縫ひまして(ニ)の所は縫ひ込みのなくなる樣に致します、次に裾がけを致します、これは單衣の裾がけの半分位に折をつけ躾をかけをきます、去かし此裾がけの兩端は五六分位裾がけをせずに殘して置きます、次に左の背の方の(ヌ)の所に見返しをつけその見返しの切を六分位の巾にして裏に折かへし躾にをさへおきま

す、この見返の下端は裾がけの五六分殘してある所の端を見返しの巾丈第四十一圖の(ア)の樣に切りまして、この(イ)の所と見返しとを合せて縫ひます、次に右の背の方の(ヌ)の所を左より五六分せまく(これは裁ちかたのときに(ツ)の巾八分といたしましたその所でございます、)折り込みまして、躾にてをさへ置きます、この下端もやはり第四十一圖の(ア)の樣に切り込みを入れて下も矢張前同樣一寸衿先きの樣な工合に縫ひ置きます、しかしこの見返しと裾がけの端との折り込みの工合はかく樣に手數をかけませんでもよろしいのでありますからこゝは仕立る人によりまして、適宜にしてよろしいのでござります、たゞあまり切か重り合ひまして格好が惡くなりますからこの樣に手數をかけるのでございます、次は(ク)前に申しました通り帶のつく所で、これは裾がけより八分上りました所でございます、そこに帶の巾を八分位にして兩側を折りまして躾にておさへ(ク)の所の裏の方にとぢつけます、それより其帶の兩端の左の一端は見返しの下に、右の端は(リ)の所の折り込みの上に入れ又躾にておさへまして、裾がけ、帶、見返し、右の(ツ)の所の折り込み殘らずミシンをかけます、もし手縫ひならば殘らずマツリます、次に(シ)及び(タ)との肩を合せ三分位の縫ひしろにしてミシンをかけます、手縫ひなれば返し縫ひに致します、それよりこの縫ひ込みを兩開きにして其はしをマツります、左右ともこゝが出來ましたらば(ソ)と(ト)との所に見返しを付けます、又(チ)の所に見返しつけます、しかしこゝは三ツ折にしてくけるかマツルかいたしてよろしうございます、この見返しは六分位の斜の切を用ゐました方がよろしうござります、次に後の右の衿の見返と一つ、其下に三つ、帶に一つ、と穴をあけ穴しゝりを致します、第四十二圖の(ア)(イ)(ウ)(エ)(オ)の如くいたします、(オ)の穴は大きくあけてボタンも大きいのをつけ置きます、又(カ)及(キ)それと前の中央の帶の所に大なるボタンをつけ置きます。

▲女兒用洋服



第四十図
第卅九図
後
前
第四十一図
第四十二図
第四十三図
れ
い
か
ろ
き
は
あ

今までゝ洋服の下着は終りましたから洋服の簡單のものを申上ませう、日本服でも、裁縫の致し方には上古より種々の變遷がありまして、當今になりましても流行の日に月に變化してまゐる樣でございます、尤も當時になりましては其格好の差はさほど見えませぬがしかし改良服とか女の袴とか種々皆々樣の御説がございます、この洋服に至りましては實に流行の變化の著しきものでございますから形も種々樣々でございます、初めより六ッか敷ものを申上ましても實物に就て御話し致すとちがひ受取にくいものでございますから只今申上ました通り極簡單のものを申上て置きます、これは夏向きによい樣にと夏服にいたしました、用布はキヤリコ更紗又はメリンス のつもりでございます、初めに用布の表を中にして丈を五寸二分に折り又巾を六寸に折りまして（つまり切が四枚重ります、）第四十三圖の（あ）の袖を截ちます、此圖の（ア）が折目てその（ア）の丈が五寸二分、袖山になる所てゝは切らずと置きます、（ア）の折目より（イ）の寸法一寸五分それより（ウ）の角五分（ニ）七分として斜に標をつけ、（オ）二寸として又（ロ）の角まで標をつけ、（カ）三寸五分、（キ）一寸五分として格好よく標をつけ置きまして、切りとります、が、圖中（ク）の點線は上二枚を（ケ）は下二枚をきりとります、次は（い）前即ち胸の所を切か（う）後の背の切をとります、（い）の方は巾四寸位に折ります、（ア）は切の折り目て四寸三分の丈でございます、（イ）一寸六分、（ウ）一寸四分として彎曲に切ります（エ）一寸一分として其の所の巾（オ）三寸二分、（カ）七分、（キ）二寸四分、（ク）の所一寸とし（ケ）三寸五分としていづれも格好よく切りとります、しかし切の折りめの（ア）は切らずに置きます、次は（う）後の切これは布を四寸八分巾に二ッに折ります、これは四方とも切りますから折目はどちらでもよいやうてございますが、布の經緯がありますから一寸申して置きませう、この圖の（ア）が折目てございます、（イ）一寸三分、（ウ）を三寸としてそこより（エ）一寸三分と斜の標をつけ（オ）一寸二分として（カ）の角より二寸四分斥の標をつけ、（ウ）の三分の標の所

より二寸一分下りまして(キ)の巾三寸二分とし弓形の標をつけ(ケ)の點總を除きて他を きりとります、次に(え)の切これは一巾を用ひます、(エ)二寸、(イ)の切りこみの巾二寸六分、(ア)の深さ一寸三分 として こゝをきります、この ときは(お)の圖の樣に(え)の切を折りまして、此圖の(ア)三寸三分、(イ)及び(ウ)を各一寸三分として切ればよろしくあります、また(エ)の所一寸位にして(イ)の角まで圖の如く きり ます、丁度(え)の切の(キ)の樣になります、次は(か)の切 これも また一巾を用ゐます、其中央に(ア)四寸の切りめを入れます、次に(き)の切(ア)及び(イ)の巾三寸、(ウ)の丈一 尺五寸(ク)は格好の よい ように 切ります、次に(エ)二寸、(オ)二寸五分として(コ)及び(ケ)の二枚を切をきりとります、(キ)とあるは殘りきれてございます、先づ截ちかただけは終りましたから次には縫ひかたを申上ませう、今申し上ました(い)と(う)の切は裏地も 表 の通りに裁ちておきます

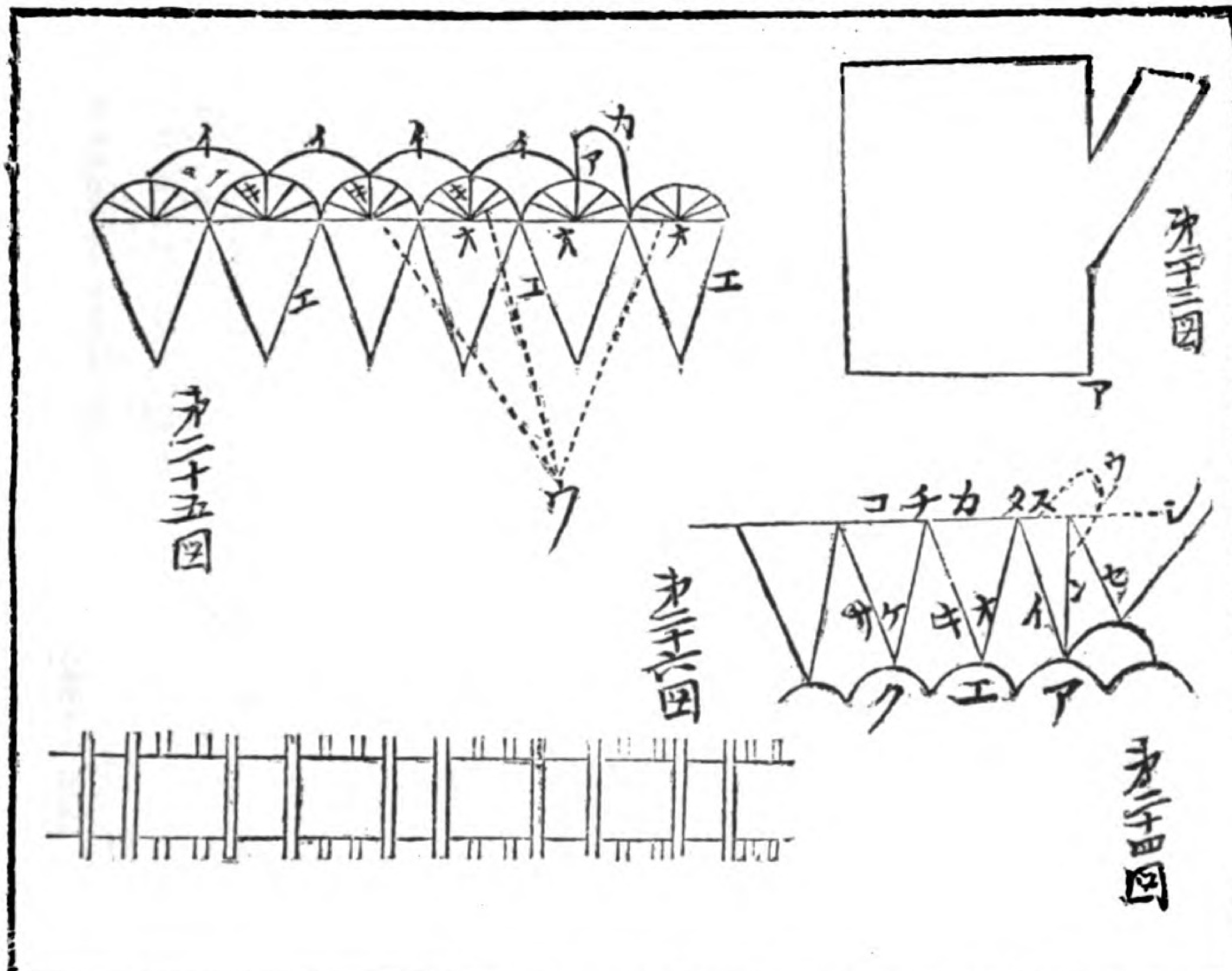
(づゞく)

編物實習

女子職業學校教員 豐原繁尾子述

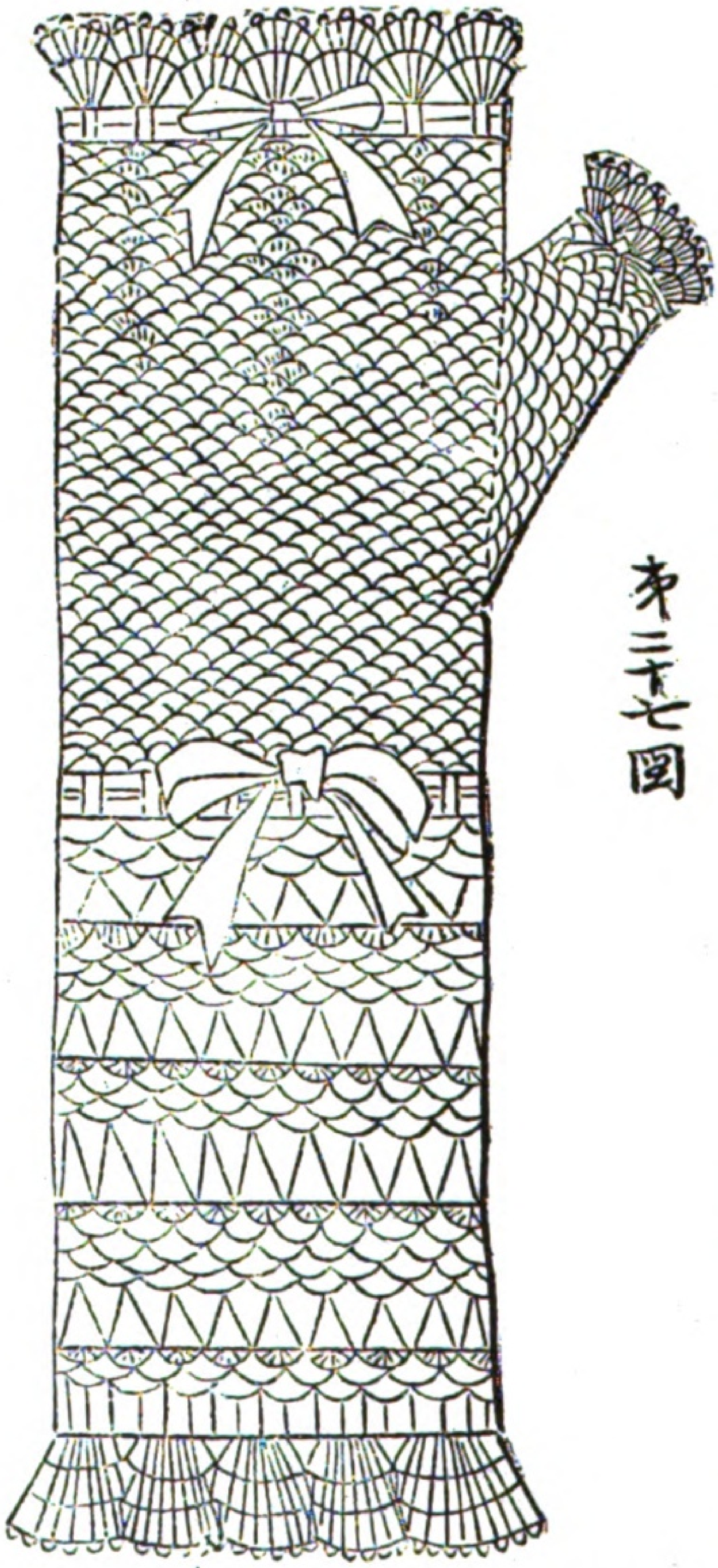
前號に夏手袋の手ぐひより先きの編みかたを申上ましたから此回は腕の方にかゝります、腕は手くびの所を編みはじめますに九十個の鎖編みを致しました其かけめをすくひまして、丁度手先きの拇指のてきてをる下に當る所即ち第三十三圖の所より始めて長編みを一つ鎖編み一つ又長編み一つ鎖編み一つと互ちがひに初めのかけめの鎖編みの目を一つづゝとばして一回致します、次は五の鎖編みをいたして前の側にてきて あります長編み二つとばして其長編みの間にある鎖編みの所に帽子編みを致します、又次も五つの鎖編みを致して前に出來てをる長編み二つとばして鎖編みの上に帽子編みにてとめます、斯樣にして三回 致しそれより次の側は鎖を六つ編みまして、直に其始めに鎖編みをいたしました所の帽子編み即ち第二十四圖の(ア)に長編み(イ)を致します、(ウ)が六の鎖編みになります、次に

(エ)の所に長編み(オ)を入れ、三つの鎖編み(カ)を致します、次に(キ)の長編みを(コ)に入れ又長編み(ク)を(コ)に入れます、次に鎖編み三つを(コ)につくりまして、(サ)の長編みをまた(ク)に、つくります、此の如くして一回いたします終の所は丁度第二十四圖の(ウ)の所にまゐりますからこゝでは(ウ)の鎖編みの(ア)のところより數へて、三つ目の鎖にヘーケルを入れて直に糸を引出し直にその所に帽子編み(シ)を入れます、(ス)の所も三つの鎖編みがあります、(もと此



(ウ)の所は六つの鎖編みゆへ(シ)の所で六つを二つにわける樣になりますから、(ス)にも三つの鎖編み(ソ)にも三つの鎖編みとなります、)それで圖中の(セ)の長編みが此側の終りの長編みてございます、次にはこの(ス)所の中央に長編み五ついたしまして、圖中の(タ)の所に帽子編み一つをいたします、又(カ)の所に長編み五つをつくりまして(チ)の所に帽子編み一つをいたします、加樣にしてこゝ一回いたします、この五個の長編みを一つ所に編みますときはかたく編む樣に

いたすのがよろしうございます、もしこゝがゆるく〳〵ありますときはあふれ出る樣になりて見にくゝなりますから御注意申して置きます、次の側は五つの鎖編みをいたし前の側にてきてをる五つの長編みの眞中に第二十五圖の(ア)に帽子編をいたします、これで(イ)の如き形が一つ增します、それゆへこの(ウ)の松編一回いたします度每に(イ)が一個つゝふえて腕の太くなる所にある樣になるのでございます、(此圖の(エ)は第二十四圖の(イ)(オ)(キ)(ケ)(サ)と同じもの松編みの下の(オ)は三つの鎖編みて二十四圖の(カ)(コ)等に當る所でございます、)次に又五個の鎖編みをいたし



第二十七圖

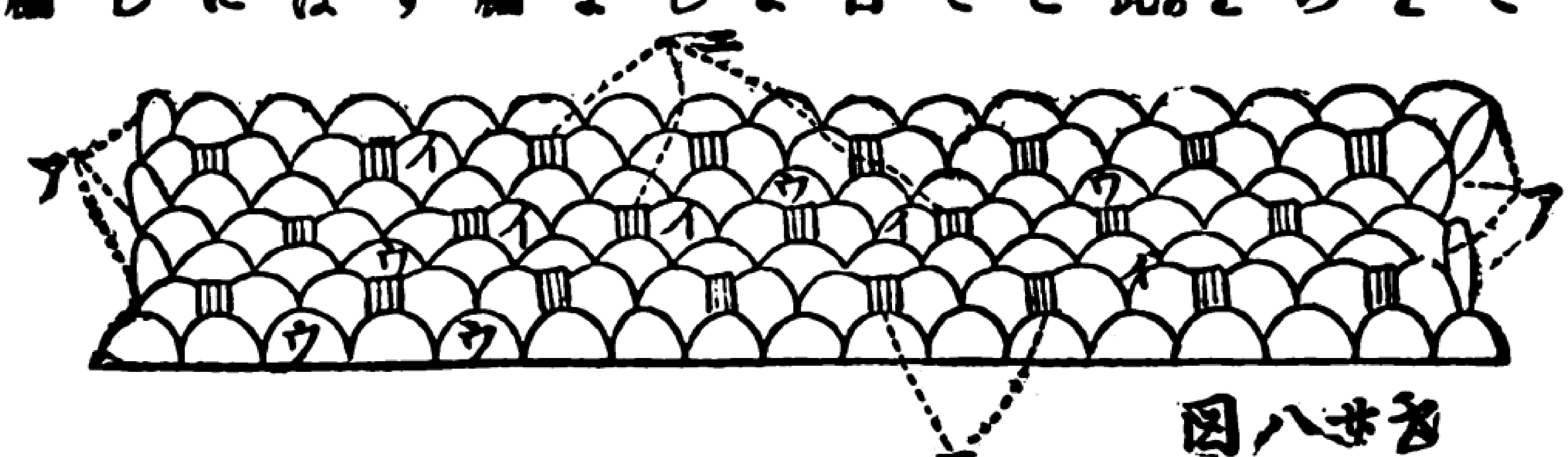
ては松編みの眞中の目に帽子編みを一ついたしてまゐります、此如くして三回編みます、次の側はまた第二十四圖の如く(ウ)の鎖編み六個と(イ)の長編みの(オ)の長編み(カ)の鎖編み三つ(キ)長編みといふ工合にいたして一回いたします、又次は第二十五圖の(カ)の鎖編みを(ア)にてとめ、次は(イ)の如くあむこと三回致します、順次編でまゐりまして第二十五圖の松編み(キ)の如きものを編みますその側が四段出來ましたら又第二十五圖の(ア)(ア)(イ)といふ工合に編でまゐると三回いたして飾になります、しかし腕の長きを好む人は幾回編みたしましてもさしつかへはありませ

ん、扨飾は手の先きの飾を編みました通りはしめに四つの鎖をあみまして、第二十一圖（前號に掲載いたしてありますから御覧下さい）の如く長編み一つ鎖編み一つとたがひちがひに編て一回致ます、次の側は第廿一圖の（テ）帽子編（カ）二の鎖編（キ）長編（ク）帽子編と編ますが只（カ）二の鎖編を致次の（キ）長編を入る時此立は（ウ）の長編二をとばします、これは腕の方が少しく大ゐる爲てこれが一寸手先きの飾とちがふところであります、次（ク）迄の間は矢張長編み（ウ）を三つとばして編みますので、あとば手先きの通りに飾をつけてまゐります、これて手袋編みかたは終りましたが、以上申し上ましたのは左の手てございますから、右の手の方を編みますには只今迄御話しいたしゝものゝ編みかたに向ひあふ様に注意いたします、つまり手の甲の形の出かた指のつまかた目のふやし目等にきとつければまちかひのない様出來上ります、左右とも編み上りましたら手の先き即ち指の出るところと、手頸と即ち第二十一圖の（ウ）の如き長編み一つ鎖編み一つと互ちかひにあみました所に細きリボンを通して、手の甲になる方でリボンの先きを飾り結ひに致して飾といたします、このリボンの通しかたは長編二つツヽ互ちがひに通します、即ち第二十六圖の如くに致します、腕のもとの方へは細き絹ゴムを通しまして、腕の太さに應して伸縮する様にいたして置きます、このリボンは洋服を着用いたしましたときは必すつけますけれとも並の日本服などのときはあまりぎやう／＼しくなりますから通常はリボンなしで用ゐてをります、第二十七圖は出來上りの畧圖でございます。次には

▲肩掛

此編み方は皆様も御承知の通り其種類が澤山ございまして、なか／＼一寸に申上されませんが、いつれ折を見てだん／＼と御話しするとにいたしませう、先つこゝては極簡單のものを御話し致しておきます、この編みかたは一方より編みはしめますので先つ初めに鎖編みをゆるく致します、此長さは其肩掛の大さに應しまして隨意にいたしますから、これは其用ゆる人によりま

して適宜の長さに致します、此鎖編みが終りましたら次の側ははしめに五つの鎖編みを致して下の(既に初の側に編みました鎖の目)目四つをとばして帽子編みにまとめます、次に又五ッの鎖編みを致しましては初めの鎖編みの目四ッをとばして帽子編みをいたします、か様にして此側が編み終りましたら次の側にうつります、この側のはしめもやはり五つの鎖編みをいたして前の側にて編みました五つの鎖編みの所に皆目をすくひまして長編み四ッを入れます、それより三つの鎖編みをいたして前の側にて編みました五ッの鎖編みの上に(のこらず目をすくひまして)帽子編み一つを致します、又鎖三つを編みまして前の側に出來てをる五つの鎖編みをすくひまして長編み四つを入れ又鎖編み三つとばしては前の側に出來てをる五つの鎖編みの所に帽子編み一つをいたします、又三つ鎖編みましては長編みつ四又三つの鎖編みを致して帽子編



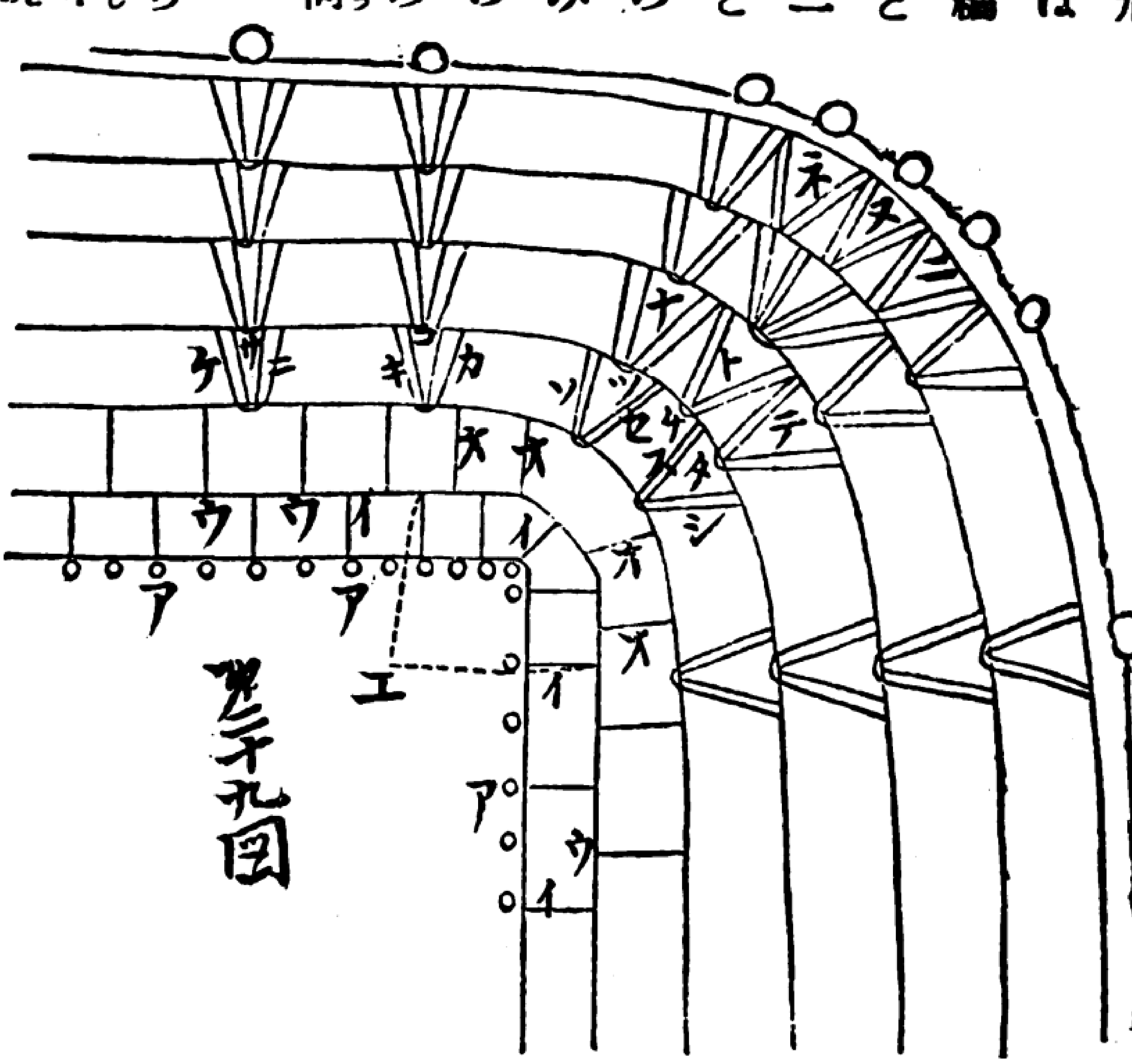
第廿八圖

み一ついたします、か様に互ひ違ひに編みまして此側の終までまゐります、次の側は初めに鎖編み五つをいたして既に出來てをる前の側の三つの鎖編みの所に帽子編みを入れ又五つの鎖編みをいたしましては三つの鎖編みの所に帽子編みにてとめます、か様に編て此側を終ります、次の側は又三つの鎖編みと四つの長編みと互ひ違ひに編てまゐります、即ち第二十八圖の様になります、猶くりかへして申ますれば一側は五ッの鎖編みと一つの帽子編み一側は三つの鎖編みと四つの長編みとて組立ますのでございます、以上申上ました通りにして適度の大さ即ち(眞四角)になりましたらばやめるのでございます、第二十八圖の(ア)は両端五のつの鎖編み(イ)三つの鎖編み、(ウ)五つの鎖編み、(エ)四つの長編みでござります、次は飾の編方でございますが、これも簡單のものを一つ申上ませう。

▲肩掛飾り編方

肩掛が出來上りましたら（これは只今編みましたのにはかぎりませぬ、いづれのにも用ゐてよろしうございます、）四方のつれぬ樣又たるまぬ樣に帽子編みを一回致します、次の側は長編み一つ、鎖編み二つ、長編み一つ、鎖編み二といふ工合に只今一側編みました其帽子編みに編みつけます、即ち帽子編みの目を二本すくひまして長編み一つ致し鎖編み二つ編で帽子編みの目一つとばして長編みを致します、即ち第二十九圖の（ア）は帽子編みの目と見なしまして、（イ）の如く長編みを致します、（ウ）は二つの鎖編みでございます、角になりましたら眞中の目より兩方二つゞゝ帽子編みをとばさずに長編みを致します、圖中の（エ）の如くいたします、これは角のつれぬ爲でよくこゝに注意致しませぬと編み上げてからをかしな形になりまして切角丹精したとも見えなくなります、次の側はやはり此側の樣に長編み一つと鎖編み二つとを編でまゐりますが此度は前の側の二つの鎖編みの目を皆すくひましてそこに長編みを入れます、角の所も並に圖の（オ）の如くに編でまゐります、次には今の側の鎖編みの目を皆すくひまして同じ所に長編み二つ鎖編み一つ長編み二つとをつくります、それより鎖編み三つをいたして前の側に出來てをる長編み二つをとばして隣の所に長編み二つ、鎖編み一つ、長編み二つとを入れ又三つの鎖編みを致して前の側に出來てをる長編み二つをとばしてまゐります、圖中（カ）（キ）は二つの長編み、（コ）及（サ）は一つの鎖編みでわります、角は同じ所に長編み二つ、鎖編み一つ、長編み二つ鎖編み一つ鐵編み二つ、鎖編み一つ、長編み二つと入れます、つまり圖中の（カ）（コ）（キ）、（ク）（ケ）（サ）とが一度にできた樣なもので（シ）長編み二つ、（タ）一つの鎖編み、（ス）長編み二つ、（チ）二つの鎖編み、（セ）長編み二つ、（ツ）一つの鎖編み、（ソ）長編み二つといふ工合になります、こゝ一回出來ましたら次の側はこゝと同樣に編みましてたゞ角の所になりましたら圖中の（タ）に長編み二つ、鎖編み一つ、長編み二つと編みまして（チ）の如くします、次も同樣に（ト）及

（ナ）を（各長編み二つ、鎖編み一つ、鎖編み二つとあみます編します、此（テ）（ト）（ナ）との間は鎖編み三つを致します、こゝで新らしき形が三つできました、次の側はやはり皆並に前の側同様に編みまして、角は（テ）の上と（ナ）の上とは並に長編み二つ、鎖編み一つ、長編み二つといたして（ト）の上には初めの（シ）（ス）、（セ）（ソ）の長編みと（タ）（チ）の鎖編みと同様の形を編みます、次の側も他の所は並に編て即ち前の側と同様に編みまして、角は（ニ）（ヌ）（ネ）の如き又三つの新らしき形がふえます、只今も申上ました通りに角の所は余程きをつけませぬと見にくゝなりますから一層御注意を



第二十九図

願ます、扨次の側は鎖編み七つを致し長編み二つ、鎖編み一つ、長編み二つとできてをる其中央即ち一つの鎖編みの所に帽子編を一つ致し六つの鎖編みをいたしてその糸を長く引出し、ヽ、ヽ、ヽ、ヘーケルに糸をかけて（長編みを編む様に）其鎖編みの目を一つづゝすくひまして、長編の如く糸を引出し（長編みは直に又糸を出して編むのでございますがつまり長編みの半分といふ風でございます、）直に糸をヘーケルにかけまして一つの鎖編みに二度かやうの編みかたを入れ又糸をヽ、ヽ、ヽ、ヘーケルにかけて鎖の目をすくひて前の如く編みますかやうにして鎖の目の隣をすくひ一目に二度づゝ長編みの半分の様な編みかたをいたして帽子編みの所まである

りますとヘ、、、、ークルにかゝりてある糸が都合十本になりますそれを一度に糸を引出しますと、球の様な形ができます、それより帽子編の上にてとめ又七つの鎖編みをいたしまして、長編みの四つの一所に出來てをる中央の一つの鎖編みの所に帽子編みをいたして又前の如き球の様なものをつくります、即ち圖中のノの如きものが出來ます、此飾りも幾段あみましてもよろしいのでございますがこゝでは四腹にして球の飾を編みました。

肩掛の飾は數へきれぬほど編かたがあります、其上この肩掛の飾ばかりではありませぬが外國の新聞などで新形を掲載して送り越しますし、又自分でも種々考案いたして新形をつくりますすまだなか〳〵飾ばかりお話しいたした所で一兩回や四五回では終りませぬしかし追々折を見て申上るとにいたしたいとなします。

●少女の返報

是は新ベツドフオルト銀行の總裁が話された面白い話である、餘り久しい前でもないが一日の事、總裁は役員や理事の人々と共に銀行内の理事部の室に業務上の集會を開いて居つた、誰も此處に亂入する氣遣が無いと皆々信じて居たのに、圖らずも一人の憐れげな而かも幼ない女の子が這入つて來た、見るから其様子で漂流者、即ち宿無しと知られた、縱令用務のある人でも決して此んな這入りやうはせないから皆々吃驚した、襤褸を纒ふて憐める有様をした此少女は、一向頓着せず空いてある場所に這入つて來たが其儘停まつて居るのでもなく、直ぐさま大きな卓子の周圍に坐せる人々の傍へ行つて、小形の石鹸を寄せて買ふて貰らいたいと勸めた、其所に居合はせた眞先の理事は、此少女の傍へ來ると、仕事の邪魔をされたので短氣を起し、頭を振りて語氣烈しく「其を使つたとが無いと」言つた、小さい行商人は此言葉に一向辟易せず、順々に人々へ廻つて行つた、皆々此少女の萎びた小さな容子が可愛そうなあまり銘々買ふてやつた、少女は買ふて呉れた人々に謝して、方さに此室內より出行かんとするとき、先に石鹸を用ゐた事が無いと自ら公言した人の前に一寸立止り、而して其人の頭から足迄見了りて、いとも輕蔑したるさまに、「如何にも御前は左樣見ゆる」と言棄てゝ貴夫人のやうに、すらりと出て行つたといふとである、

講義

漢文評釋

文學士　久保天隨

天女使（五）

初知前夕所謂稱天女使者。則綠林嬌賊。蓋託名於浚池。以掠奪富商之財物焉耳。其聞以爲風雨大作者。非實有風雨。使人撼竹曳柴。以援托搬財物出入門戶之足音履響也。

（訓讀）初めて知る、前に謂ゆる天女の使と稱せしものは、則ち綠林の嬌賊、蓋し名を浚池に托し、以て富商の財物を掠奪せしのみ。その聞いて以て風雨大に作ると爲せしもの、實に風雨あるに非ず、人をして竹を撼かし、柴を曳き、以て財物を托搬し、門戶に出入するの足音履響を援さしめしなるを。

（字解）前夕、前夜・先夜といふに同じ○綠林嬌賊、綠林は、漢の頃に世を騷がした賊黨の綽名であつて、これから賊のことを稱する樣になつた。この天女の使は、美人であるから、特に嬌の字を添へて形容したのである○托、かこつける○掠奪、かすめ奪ふ○撼竹、竹をゆすぶる○曳柴、柴は芝ではなく、灌木の類の總稱であつて、それから轉じて、小さい生きた樹で編み上げた垣根をも稱することがある。こゝでは、庭木を曳き動かすことをいつたのであろう○援、みだす。分らぬ樣に誤魔化すこと○托搬、かついで運搬すること○足音履響、足おと・穿物の響。

（文義）これを見て、やつと分つた。それは外でもない、先夜天女の使だといつて澄まして乘り込んだ女は、實に媚かしい大盜賊であつて、名を池を浚ふことにかこつけて、例の一條の計略を案出し、主翁を欺き、金持の財物をかすめて奪つたのである。その上、

風雨が大に起つたかの如く聞こえたのも、實際風雨があつたのではなく、人をして竹籔をゆすぶらしたり、庭木を曳き動かしたりしたので、財物を擔ぎ出し門戸を出這入りするの時の足音や、穿物の響を誤魔化して、家内の者に悟られない樣にしたのであつた。

(評論)こゝに至りて、騙賊の大仕事が、すつかり分つたが、何と奇々妙々、明いた口も塞からない程、驚くべき凄い仕組ではありませんか。この一段は、風雨の事の假造に出てたのを說明したばかりで無う、天女の使の噓の皮であることも、言外に彰々として分かつて居る。これが、一事兩用といふので、文章簡潔の妙である。

三溪氏曰。斯篇與前檎龍話說。嘗聞之老友松園鹽田翁。其說計詐術。與鹽谷宕陰福神盜說相表裏。彼以利誘之。此假名欺之。彼出滑稽。此行靈威。雖事各異。均是一術耳。吁嗟嬌賊。有才色膽略如此僅綠林白波之雄而止者。信可惜也夫。

(訓讀)斯篇は、前の擒龍の話說と、嘗て之を老友松園鹽田翁に聞く。その詭計詐術、鹽谷宕陰福神盜說を相表裏す。彼は利を以て之を誘ひ、此は名を假て之を欺き、彼は滑稽を出し、此は靈威を行ふ、事各異なりと雖も、均しく是れ一術のみ。吁嗟盜賊、才色膽畧あること此の如く、僅に綠林白波の雄にして止まるもの、信に惜むべきかな。

(字解)前擒龍話說、本朝虞初新誌中、この篇の直ぐ前に出て居る龍を擒にするといふ話を指したので、現に本所擒龍と題した一篇がある。これは、ある香具師が、貧乏浪人の庭の古い池に龍が居るとて、五十兩を與へて之を購ひ、物々しき器械を持ち出し、之を捕へると言ひ觸らし、其實は鰻の背に色取りをしたものをこしらへて誤魔化し、兩國へ見世物に出し、一擧して鉅萬の錢を利したといふ話○老友、年を取つた友嚳松園鹽田翁、名は泰、通稱は順菴、加賀の人。作者三溪とは、昌平黌時代から交つたものらしい○詭計詐術、人をたぶらかす謀、詐る術○鹽谷宕陰、名は世弘、著述數種、世に傳はつて居る○福神盜說、福の神だといつて乘り込んだ大泥棒の話といふこと。この文も、たしか、宕陰文集の中に載つて居て、一讀した

ことあつたやうに思ふか、今とんと考へ出さぬ。それから、其書も手元に無いから、姑らく詳說せずに御預りにして置かう〇彼は福神盜、此は天女使、以下すべて之に倣ふ〇誘之、さそひ込む〇假名欺之、天女の使などいふ名を假りて、人をだます〇滑稽、おどけたる仕草〇靈威、風雨の異似などをした不可思儀の術〇才色膽略、うまく切りまわす才があり、その上標致も善く、且つ膽玉の据つて居ること〇綠林、前に出づ〇白波、これも漢の末に起つて賊黨の名。

●●（文義）作者曰く、この文に書いた事柄は、この書中直ぐ前に載せた本所龍を擒にといふ一件の話とともに、ある時、年老いたる友鹽田松園翁から聞いたので、必ずしも空に架して結撰したものでなく、確かなる據り所のあることとてある。それから、この天女使といふは、鹽谷宕陰が書いた福神盜の話と、頗る類似したところがあつて、互に表裏をなして居るものである。しかし、兩者を比較して、その異つて居るところを考へると、彼は利を以て吹き込んで、むざ〳〵と人を誘ひ、此は名を借りて甘まく辻褄を合はし、うま〳〵と人をだましたのである。その上、彼は滑稽の仕草を出したるに反して、此は靈異なる機關をやらかしたものである。かくの如く、事柄は銘々違つたところがあるけれども、要するに、同じ樣な術を以て、騙局を行つたものである。あゝ美しき盜賊、かばかりの智惠や、容色や、膽略のあるのに拘はらず、僅に綠林白波の中のえら者となつただけて、あたら一生を濟ましたのは、まことに惜いことてあつて、之を甘く利用したならば、もつと目覺ましく、國家の益になる樣な事も出來たろうにと思はれる。

●●（評論）この論贊は、極めて簡潔に出來て居る。この特に之を福神盜に對して、比較一番し、才色膽略、その用を爲さなかつたのを惜んだのは、如何さま、尤千萬な事とうなづかれる。それから、全文の結構を見ると、始は處女の如く、後には脫兎の如く、その手段の靈敏なることは、楠も其處退けと云いたい位てある。しかし作者の奇筆が、之に副はなければ、とても、此程までに描き盡されることは出來なかろう。

（天女使終）

國文學講義

枕草紙

憎きもの（中）

文學士 尾上柴舟

物うらやみし、身のうへ歎き、つゆばかりのことも、ゆかしがり、聞かまほしがりて、いひしらぬをば、怨じそしり、また、わづかに、聞きわたることをば、われも、とくより、知りたることのやうに、こと人にも語り、しらべ云ふも、いと憎し。

○物うらやみし。人の身の上などにつけて、羨むを云ふ。○つゆばかりのこともゆかしがり。少しばかりの、何でもなき事も、しきりに、聞きたく思ふ意なり。つゆばかりは、少しばかりの事、葉に置く露の、すこしばかりなるより、かくは、用ゐしなり。ゆかしがりは、まだ、見ざるもの、聞かざるものを、切に、見たく、聞きたくするを云ふ。○いひしらぬを、怨じそしり。春曙抄に、おのがえ知らぬを、そねみ、うらむるなり、と云へるは未だし。他人の言ひ得ざるを、此方は、わざと隱して、言はざるならむ、と邪推して、怨み、罵るなりと云ふ說もあり、これや正しからむ。○わづかに、聞きわたることをば。少しづゝ、聞き得たることをば、人にかたるなり。聞き渡るは、人より傳聞せるを云ふ。○しらべいふ。調べ云ふならむ。其事を穿義して云ふ意なり。○こと人は、他人の意。

○人の身のうへなどをうらやみ、または、自己の身のうへの幸なき事を歎き、または、少しばかりの事も床しく思ひて、聞きたがりて、他の人の知らで云ひ得ぬを、知りながら云はぬもの、と邪推して、其人を怨み、そしり、または、僅ばかり、聞きかぢりたることを、自己は、元來、知り居たることのやうに、他人に話し聞かせ、また、何かとしらべて云ふ人あるが、これらも、いと〳〵憎きものなり。

○物羨みし、身の上を歎くは、愚痴多き婦人の常なり。少しばかりの事をゆかしがり、聞かまほしがるは、下賤なる兒女の情なり。わづかに、聞きわたりたるを、もとより、知りたるやうに云ふは、ハイカラめ

きたる女學生の風なり。かゝるもの、悉く、著者の嫌惡するところ此文に對して耻るところ多きもの、たゞに、兩三子にとゞまらざるべし。

物聞かむとおもふほどに泣く乳兒、烏のあつまりて、飛び違ひ鳴きたる。(中畧)伊豫簾などかけたるを、うちかつぎて、さら〳〵とならしたるも、いと憎し。もかうの簾は、まして、こはきものゝうち置かるゝ、いとしるし。それも、やをら、引き開けて、出で入りするは、さらにならず。

○物きかむと思ふほど。音樂の類なり、人の話なり、耳を留めて、聞かむとする時の意。
○伊豫簾。伊豫すだれとも云ひ、歌にも詠めり。昔、伊豫國より産出せし簾にて、篠きはめて細く、長さは七八尺もありて、上品のものなりきと云ふ。○うちかつぎて、さら〳〵とならしたる。持ち上げて、肩にかけたる簾を、落して、さら〳〵と音をたてさせたるを云ふ。○もかうの簾、帽額簾なり。○額は、簾の上の方につくる飾にして、横に長く引く帛を云ふ。多くはこれに、窠の紋を染めたれば、遂には、窠をさして、もつかうとも云ふに及べり。帽額ある簾は、竹にて製れるものなれば、從つて、重みも、剛みもあれば、下に落つる時の音は、高きものなり。○やをらは、靜かになり、そっとなり。

○何事か、聞き取らむと思ふとき、けたゝましき聲を擧げて、泣き出だす乳兒も、いと憎し。また、烏の數多うち集ひて、彼方此方に飛び交ひて、かしかましく鳴きたるも、いと憎し。また、此方より彼方の室などに行かむとて、其間にかけたる伊豫簾などを、引き揚げて、肩にかけてさて、其下をくゞらむとして、思はず、落して、さら〳〵と音を立てしめたるも、心づきなき仕業とて、いと、憎きものなり。帽額の簾は、伊豫簾にも、まさりて剛きものなれば、下に打ち置かるゝ音はいと著しく、高きものなり。されば、それも、靜かに、そっと引き開けて、其間より出入すれば、更に、音のするものにあらず。されば、極めて、しとやかに引き揚ぐべきなり。

○物聞かむと思ふ時、泣く乳兒。一句、道破して、甚

だ力あり。いかほど美しき乳兒も、肝要の時に泣き立てられれば、打ち叩きたき心地すなり。烏の、まがく\/しき聲して、軒端に集ひよる、これも、辛棒せらるべきものにあらず。著者が、此事を決惕して、人の意表に出づるの筆致、欽するに堪へたり。中略の個處は、淫猥の嫌あれば、省き捨てたるなり。

また、遣戸など、あらくあくるも、いと憎し。すこし、もたぐるやうにて、あくるは、鳴りやはする。悪しうあくれば、障子なども、たほめかし、こほめくこそ　しるけれ。ねぶたしとおもひて、臥したるに、蚊の細聲に名のりて、顔のもとに飛びありく、羽風さへ、身のほどにあるこそ、いと憎けれ。

○遣戸。引き戸のことなり。○すこしもたぐるやうにてあくる。遣戸も、すこし、持ち上げるやうにして引き開くれば、高き音のすることはなし、といふ意。○障子。今の障子とは異なり。この頃は、襖のことを、しか云へり。今の紙障子は、特に、明障子の名ありき。○たほめかし。春曙抄に、たはめかしなり、とあり。されば、障子を、敷居などより外して、うち撓むる意なり。○こほめく。こほ\/と音さするにて、今のがたつくと仝じ。○細聲に名のりて。蚊の、細き聲をあげて、來ると云ふ。名のるは鳴くこと、「山時鳥名のりして」よどの、名のるとおなじ。○羽風さへ、身のほどにある。蚊の、身體相應の羽風あるを云ふ。蚊の小さきだけ、羽風もすくなきなり。

○帽額の簾のみならず、遣戸などをも、あらく\/しく開くるは、いと憎きものなり。これも、たゞ、すこし持ち上ぐるやうにして、開くれば、決して、高き音のするものにあらず。猶、開け方あしからば、障子なども、打ち撓めかし、それが爲め、がたつくやうになるは、著しきことなり。すべて、此の如き無作法の擧動は、いと\/憎きものなり。また、ねぶたさにたへかねて、打ち臥したる時、蚊の細き聲をあげて、顔のあたりに飛び來るが、その羽風も、その小さき身相應にありて、ふと、顔にあたるこゝちするは、また、いといと憎きものなり。

○遣戸のあけ立て、障子のあつかひ方、無作法連を敬

戒して、あまりあるものなり。立ちながら褄をしめ、寐ながら、障子をあくる類の人、再讀せざるべからず。蚊の細聲を擧げて、顏のほとりを飛揚するは、にくしと思はざる人あらざるべし。「羽風さへ身のほどにある」の一句、寫し出して、尤も力あり。何等の勁拔ぞ。但し、たほめかし、てほめく、又、ねぶたさに堪へかねて云々の句は、冗長にして勢なし。敢て、注意を讀者に乞ふ。

きしめく車に乘りてありくもの、耳もきかぬにやあらむと、いと憎し。我乘りたるは、その車のぬしさへ憎し。物がたりなどするに、さし出てゝ、我ひとり、さいまぐるもの。すべて、さし出ては、わらはも、おとなも、いと憎し。昔ものがたりなどするに、我知りたるけるは、ふと出てゝ、言ひくだしなどする、いと憎し。

○きしめく車。きしめくは、ギイ〳〵と音のするを云ふ。車の具合、車室のつけ方にて、進むにつれて、ギイ〳〵と響を立つる車、今も、田舍の乘合馬車に尠からず。○耳もきかぬにやあらむ。耳にも聞えぬにかあらむ、といふと全じ。他に例少なき云ひ方なり。○我乘りたるは、その車の主さへ云々。我乘りたる時、車のギイ〳〵鳴り出づれば、其車のみならず、所有者さへ、憎く思はる、といふなり。○さし出てゝ、我ひとりさいまぐるもの。さし出でゝは、人の話、いまだ了らぬに、横合より、云ひ散らすを云ふ。さいまぐるは、才枉くる、さし枉ぐる、また、さいまくると讀みて、先設くるなりなど、種々の說あれど、猶、さし枉ぐるや穩ならむ。されば、人の物語りを我說の方へさし枉げて、尤もらしく云ふの意となる。○わが知りたりけるは、ふと出てゝ云々。昔の事ども、物がたりなどする時、人の、自分の知りたる事は、「最早知りたる事なれば、其話は、語るに及ばず」など、ふと、口に出して、他人の話を、いひくさすなどするは、いと憎きものなり、といふ意なり。此句、書き方不充分なるが如きも、よく、玩味すれば、明らかなるべし。自他の區別の判然せざるは、古文には數多あることなり。猶、云ひくたしは、云ひ朽したり。今にていはゞ、云ひくさ

すなること、前述の如し。

○ギイ〳〵と音のする車に乘りて、道を行く人は、いと憎し。これも、その人の耳には、齒の浮くやうなる音も、きこえぬにかと思へば、憎きなり。また、自分の、人の車に乘りて行く時、その車の、また、きしめくことあれば、車のみならず、車の持主さへ、憎くおもはるゝなり。別に、物がたりなどをするに、横合よりさし出でゝ、自分一人、得意になりて、人の話も我說の方へ狂げつけて、道理らしく云ひ散らすものも、憎し。すべて、話し最中、横合より、口を出すは、子供も大人も、いづれにしても、憎き擧動なり。また、昔ばなしなどある時、自分の知りたる話は、最早、聞く必要なければ、「さやうの話は、聞き古したり。止めたまへ」など、ふと、口に出して、其話をくさしなどする人あるが、これも、また憎きものなり。

○きしめく車は、實に、堪へがたきものなり。されど人の車に乘りながら、よし、其車のきしめきたりとて所有者まで憎み嫌ふは、女のすべき事、また、云ふべき事にあらず。これを、公然、筆に上すは、著者の男勝りの致すところなり。横合より、口を出さずに、わらはも、おとなも憎けれども、殊に、女にとりて　、憎さこと此上なし。況んや、人の話の先きを折るに於てをや。戒めざるべからざるなり。

鼠の走りありく、いと憎し。あからさまに來たる子ども、わらはべを、らうたがりて、をかしきものなどとらするに、ならひて、常に、來てゐいりて、調度やうちちらしぬる、憎し。家にても、宮仕へどころにても、逢はでありなむ、と思ふ人の來たるに、空寢をしたるを、わが許にあるものども、おこしより來ては、いぎたなし、　思ひ顏に、引き動がしたる、いと憎し。

○あからさまに來たる子ども、わらはべ。あからさまは、假初、一寸位の意。子ども、わらけべは、重複のやうなれども、子供は少さき方、わらはべは、やゝ、長じたるを云ふと云ふが至當なるべし。○らうたがりて。可愛らしがりての意らうたしは勞痛しの意なり、といふ。○ならひて。可愛がるに馴れての意。○調度

やうち散らしぬる。調度は、種々の道具を云ふ。この道具など、散らかすを云ふ。「調度や、何や、うち散しぬる」、とあるべきが、何やの字、落ちたるにや。〇家は、吾家のこと、宮仕へどころは、奉公をなせるところなり。〇空寐をしたるに、空寐は、佯りて、寐たる風をすること、いはゆる狸寐入なり。これ逢ふまじと思ふ人の來りたる故、寐たる風をしたるに、といふなり。〇起しより來ては。從者の、自分を起して、傍に寄り來りてはなり。〇いぎたなし。寐ばうなるを云ふ。いね、寐なり。されば、寐穢しにて、貪りて寐るの意、起しても起きざる寐ばうの意となるなり。〇鼠の、ちよろ〳〵と走り廻るも、いと憎きものなり。また、ちよと來たる子ども、または、童部を、可愛かりて、おもしろき、氣に入るやうのものなど、與へたれば、それに馴れて、常に來ては入りこみて、わたりの諸道具や、何や引き散すも、憎し。また、別に吾家にあるときにても、御奉公をなしたる處にても、逢はずしてあらむ、逢ふまじ、と思ひたる人の、わが力に來たれば、起きて居りては、逢ひて、話もせてあるべからねば、せんかたなく、寐たる風躰をしたるを、わが許に召仕へる者どもの、わが心もわらず、誠に、寐たるものと思ひて、起しながら傍に寄り來て、寐坊の人かなと思ひたる風にて、引き動かして、起さむとするも、いと憎きものなり。

〇晝間にても、夜にても、鼠の走り廻るは、よき心地のするものにあらず。されど、子供の、馴染のつくにつれて、入り來りて、物を引き散らすは、せん方なきものながら、一層、憎きものなり。從來、物語其他、皆兒供の愛らしきのみ陳べたる中に、かく反對の方面を云へる、これまた、著者の他と異なるものあればなり。空寐入を起されたる、著者の顔さへ見ゆるこゝちして、いと〳〵、をかし。

萬葉女歌人の歌（二）

塚越停春

又夫の『佐穂風はいたくな吹きそ』の歌、『久方の天の露霜』の詠を始め、

吾背子が見らむ佐保路の青柳を
手折りてだにも見むよしもがな。

打のぼる佐保の河原の青柳は
　今は春邊となりにけるかも。
今もかも大城の山に郭公
　鳴きとよむらむ吾なけれども。
しかとあらぬ五百代小田を刈り亂り
　田廬に居れは都し思ほゆ。
こもりくの初瀬の山は色つきぬ
　時雨の雨は降りにけらしも。
佐保川のさゞれ踏み渡りぬば玉の
　駒の來る夜は年にもあらぬか。

と云ふか如き、たとへ其程度を同ふせざるながらも、共に調高く餘韻多きを見るへく、彼か氏神を祭るの長歌亦筆力を見るべからざるに非ず。

而して其『おしてる、難波の菅』と歌ひ出したる怨恨歌、『海神の神の命』と歌ひ出したる其女に越中に贈りたる歌の如きも、亦情思多し。更に彼女が跡見の庄より家に留まりたる大孃に答へたる歌の如きは、何ぞ其姿趣の婉約なるや。又夫の

　來むと云ふも來ぬ時あるを、來じといふを
　來むとは待たじ、來じといふものを。

と云ふに至ては、宛も落花の晴旋風に捲れて、卷き來り卷き去らるゝか如き也。何等の情姿ぞ。何樣の宛轉ぞ。其斷じて待たじとなす處、即ち其大に待つ處にして、恨むが如く、慕ふが如く、綿々たる情思あり。殊に之に次ぐに『佐保の川門の瀬を廣み打橋渡す』の詠を以てするに至ては、最も高潔にして而も藹然掬すべきの愛情を見る。

出てゝいなむ時しはあらぬをことさらに
　つま戀しつゝ立ちて行くべしや。
思はじといひてしものをはねず色の
　うつろひ易き吾か心かも。
烏玉の夜霧の立ちておほゝしく
　照れる月夜の見れは悲しさ。
獵高の高圓山を高みかも
　出て來る月のおそく照るらむ。
なにしかもこゝばく戀ふる郭公
　鳴く聲聞けは戀こそまされ。

及ひ『佐保川の岸のつかさ』の旋頭歌　如き、亦自ら一種の姿態なきに非ず。

然り而して、

青山を横ぎる雲のいちじろく
　吾と笑まして人に知らゆな。
山菅の實ならぬことを吾によせ
　言はれし君は誰とか寐らん。

の類に至ては、則ち所謂逸氣あり、天眞の爛熳あるものに非ずや。

見るべし、彼女の詩歌は言ふまでもなく婦人の詩歌なれとも、同時に斷して奈良時代に於ける婦人の詩歌なることを。之を平安時代に於ける小町伊勢等の徹到徹尾婦人なるに比する、斷々乎として混すべからざるものある也。小野小町が、

思ひつゝぬれはや人の見えつらん
　夢と知りせば覺めざらましを。
うたゝねに戀しき人を見てしより
　夢てふものをたのみそめてき。
いとせめて戀しき時は烏玉の
　夜の衣をかへしてぞきる。
色見えてうつるふものは世の中の
　人の心の花にぞありける。
花の色はうつりにけりな徒に
　我身世にふるながめせしまに。
今はとて我身しぐれと降りぬれば
　言の葉さへももみぢしにけり。
わびぬれば身を浮草の根をたえて
　誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ。

と云ふ如き優婉纎弱の中に、限りなき憂愁を含めるものに非ざるは論なし。伊勢の理性に富みて力ある、

なき名ぞと人にはいひてやみなまし
　心に問はゞいかゞ答へん。
夢にだに見ゆとは見えし朝な〳〵
　我がおもかげにはづる身なれば。
三輪の山いかに待ち見む年ふとも
　尋ねる人もあらじと思へば。
あひにあひて物思ふ頃の我が袖に
　やどる月さへ濡るゝがほなる。
散り散らず聞かまほしきを故郷の
　花見てかへる人も逢はなむ。

にも非ず。又其
　沖つ浪、荒れのみまさる、宮の中は、年經てすみし、伊勢の蜑も、舟流したる心地して、よらむ方

なく、悲しきに、涙の色の紅、は吾等が中の、時雨にて、秋の紅葉と、人々は、おのがちり／＼、別れなば、たのむ陰なく、なり果てゝ、とまるものとは、花薄、君なき庭に、群れ立ちて、空を招かば初雁の、啼き渡りつゝ、よそにこそ見め。

と云へるものにも非ず。若し一方より其疵所短所を擧ぐれば、想詞共に稚氣多きもの固よりある也。聲調の未だ全く圓熟せるもの勿論なきに非ざる也。然とも其一方には何處までも婦人の作家なると共に、亦一方には頗る男々しき調をも出し、奈良の女詩人を代表するに於て、自ら餘りなくむは非ざるを見る。要するに、彼女は我か民族の有したる最初の文壇に於ける最初の女文豪たりしこと勿論也。

物語の發達

文學士　中内蝶二

曩きにこの雜誌の第一巻第拾號、第拾一號の二號にわたりて、（一）物語の意義及起源、（二）物語文の祖、（三）竹取物語など說きはじめたのであつたが、材料の調査、その他種々の事情の爲めに、完結をいそぐ事も出來ないで、今日まで中絶して居たのは、まことに申譯もない次第である。讀者諸媛の御催促もあり、且は自分の責任もあるから、此處暫らく史傳の方に筆を絕つて、速にこの講義を完うしやうと思ふ。

四　伊勢物語と大和物語

物語の元祖たる竹取物語に續いて、世に出たのは大和物語てある。この物語は、古歌から趣向を案じ出して、人の一代記のやうな小說に組み立てたので、卷首に『むかし男ありけり。初冠りして云々』と、成男の時から書きはじめ、卷末には『つひにゆく道とはかねてきゝしかどきのふけふとは思はざりしを』と、臨終の歌を載せて局を終りたるを見ても、作者の意の在る所を知るに足るであらう。

この書の作者については、或は業平の作であるといひ、或は伊勢の御の筆記であるといひ、或はまた、誰れ

の作てあるか知れないといふ說もあるが、平田篤胤の古史本辭經、細川幽齋の伊勢物語闕疑抄、伴信友の假字本末、富士谷御杖の北邊隨筆、土肥經平の春湊浪話、藤原兼範の和歌童蒙抄、加納諸平の伊勢物語論、野々口隆正の在五中將日記復古解などを參考して調べて見ると業平が折にふれて詠むで置いた歌や、心やりに書いて置いた日記などの世間に傳つて居るのを基として、歌のはし書き敷行潤色し、附會の事實を加へて一編の物語としたものと思はれる。全篇百二十五段、何れが業平自筆の文であるか、何れが後から加竄した文であるか、其區別は十分につけることは出來ないが、其文躰は遒勁簡潔、竹取物語に比して敢て遜色がない。段毎に大抵は『昔男ありけり』と冒頭を置いて、歌の序文の稍や長きものを集めて、順序よく排列したやうな觀がある。今その文例を擧げて見れば、

　むかし男ありけり。女のえあふまじけるを、年をへて、よげひわたりけるを、辛うして女の心あはせて盜みいでゝ、いと闇きにゐてゆきけり。あくた川といふ川をいきければ、草の上に置きたりける露を、かれは何ぞとなむ男に問ひけるを、ゆくさきはいと遠く、夜も更けにければ、鬼あるところとも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉のありけるに、女をば奥におしいれて、男は弓やなぐひをおひて、戶口にをり、はや夜もあけなむと思ひつゝ、ゐたりけるに、鬼はや、ひと口にくひてけり。あなやといひけれど、神のなるさわぎに、え聞かざりけり。やう〳〵夜もあけゆくに、見れば、ゐてこし女なし。足ずりをして泣けどもかひなし。

　白玉かなにぞと人のとひし時
　　露とこたへてけなましものを

これは二條の后の、いとこの女御の御許に、つかうまつるやうにて、ゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盜みてをひて出でたりけるを、御せうと堀川のおとゞ、國經の大納言、まだ下﨟にて內へまゐりたまふ道に、いみじう泣く人の在りけるを聞きつけて、とゞめて取りかへしておはしける。それを、かく鬼とはいふなりけり。まだいとわかうて、后のたゞにおはしける折のことゝかや。云々

むかし男ありけり。その男身をやうなきものに思ひなして、みやこには居らじ、住むべきところもとめむとてゆきけり。信濃國あさまのだけに煙の立つを見て、

　しなのなる淺間がたけにたつ煙
　　をちかた人の見やはとがめぬ

もとより、友とする人ひとりふたりして、もろともにいきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河國八橋といふところにいたりぬ。そこを八橋といふことは、水のくもてに流れわかれて、木やつわたせるによりてなむ、八橋とはいへる。その澤のほとりの木かげにおりゐて、かれいひ食ひけり。その澤にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、かきつばたといふ五もじを、句のかみにすゑて、旅のこゝろをよめといひければ、よめる

　から衣きつゝなれにしつましあれば
　　はる〴〵きぬるたびをしぞ思ふ

とよめりければ、みな人かれいひの上に、涙おとしてほとびにけり。ゆき〴〵て駿河國にいたりぬ。うつの山にいたりて、わが入らむとする道は、いと暗うぼそきに、蔦かづらはしげりて、ものこゝろぼそく、すゞろなるめを見ることゝおもふに、すぎやうざあひたり。かゝる道には、いかでかおはするといふに、見れば、みし人なりけり。京にその人のもとにとて、文かきてつく

　するがなるうつの山べのうつゝにも
　　夢にも人のあはぬなりけり

富士の山を見れば、さつきのつごもりに、雪いと白うふれり

　時しらぬ山はふじのねいつとてか
　　かのこまだらに雪のふるらむ

その山は、こゝにたとへば、比叡の山をはたちばかりかさねあげたらむほどして、なりは、しほじりのやうになむありける。なほゆきゆきて、武藏國と、しもつふさの國との中に、いと大なる河あり。それを隅田川といふ。その河のほとりにむれゐて思ひやれば、限りなく遠くも來にけるかなと、わびあへるに、わたし守はや船にのれ、日も暮れなむといふに、乗りてわたらむとす。みな人ものわびしくて、

京におもふ人なきにしもあらず。さるをりしも、白き鳥の嘴と足とあかき、鴫のおほきさなる、水の上に遊びつゝ、いをゝくふ。京には見えぬ鳥なれば、みな人見しらず、わたし守にとひければ、これなむ、みやこ鳥といふをきゝて、

名にしおはゞいざことゝはむ都どり
わがおもふ人はありやなしやと

とよめりければ、船こぞりて泣きにけり。

大和物語は、伊勢物語に倣うて書いたものであるけれど、遙に後に世に出たもので、文章は非常に劣つて見える。作者の名は、かの清輔の袋草紙にもある通り、今詳にすることは出來ないが、文中、延喜帝を先帝といひ、貞信公を太政大臣といひ、清愼公を今の左大臣などゝいつてあるから察して見ると、既に天暦の頃から、誰かゞ書き始めて置いたのを、花山院の寛和、永延の頃の人が、それに所〻書き加へなどしたものであらう。或はこの書を以て、花山院の御著であるといひ、また在原業平の二男滋春の著であるといふ人もあるが、これ等は畢竟附會の説に過ぎない。今その文例を擧ぐれば

亭子院の帝、今はおり居たまひなむとするころ、弘徽殿の壁に、伊勢の御の書きつけゝる

わかるれどあひもおしまぬ百敷を
見ざらむことのなにか悲しき

とありければ、帝御覽じて、その傍に書きつけさせたまひける

身ひとつにあらぬばかりをおしなべて
行きめぐりても何か見ざらむ

となむありける。

帝おり居たまひて、またの年の秋、御髮おろしたまひて、ところ〴〵山ぶみしたまひて、おこなひたまひけり。備前の掾にて、橘のよしとしといひける人、内におはしましけるとき、殿上に侍ひて、御ぐしおろし給ひければ、やがて御ともに、かしらおろしてけり。人にも知られ給はで、ありきたまひける御ともに、これなむおくれ奉らで侍ひける。かゝる御ありきしたまふ、いとあしき事なりとて、内より少將、中將これかれ、さふらへとて、奉らせたまひけれど、たがひつゝありきたまふ。和泉國にいたりたまひて、日根といふところにおはします夜あり。いと心細う、かすかにて、おはしますことを思

ひて、いと悲しかりけり。

さて日根といふことを歌によめと仰言ありければ

このよしとし大とく

故郷のたび寝の夢に見えつるは
怨みやすらむまたとゝはねば

とありけるに、みな人泣きて、え詠まずなりにけり。その名をなむ寛蓮大とくといひて、後までさふらひける。

以上二つの物語に就て見るに、伊勢物語の方は、業平が慷慨憤懣の餘り、自分で身を持ち崩して、この世をわがまゝに振舞ひ暮らした事實も、たまたまは雜つてゐるし、また大和物語も、打ち聞いたまゝのことを記してあるものであるから、兩者共に、全く架空の談ばかりではない。されば、是等の物語を研究するのは、たゞ文章修得の上に利益があるばかりでなく、また歴史上の事實をたしかむる參考ともなるのである。（次號完結）

各國皇后の嗜好　英國皇后は熱心に寫眞術を修め玉ひ又動物を愛し特に牛を飼ふて牛乳を絞取るを好ませらる従來自轉車に乘り玉ひしも近來は自動車に換へられたり、獨逸皇后は撮影に妙を得させ玉ひ皇太子もわれに倣ふて寫眞に深入りするやうになりたりと宣はせらる近時慈善の目的を以て寫眞共進會を開設しゼルサレム旅行に際し親ら撮影せられし寫眞を陳列せらる、サクソン國王妃の道樂は慈善にして學校孤兒院養育院等を設立せり、和蘭女王は騎乘を好み又氷を滑るに巧なり性質動物を愛するが故に獸獵競爭會を喜し玉はず、瑞典那威王妃は敬神の念深くして宗教事業に全力を注ぎ救世軍の保護者たり、ルミニヤ王妃は詠歌を能くし又歴史に精し常に寫字機械を手より離さず手藝にも長ぜり、希臘王妃は快走船に乘じて遊山するを好み、伊太利皇后は韻文を綴り射的に妙を得又自動車を操れり、ボルテンベルク王妃は空中遊戯に耽り又男女同權説に同情を寄せらる、白耳義王妃の嗜好は騎馬にして嚴厩を見舞はる

小説

母の愛

露國 アクサアコフ氏作
嵯峨の屋おむろ譯

秋になッてから私は多く家の内にのみ居たので、自然多く母の話を聽き、又其貌を見るの機會にのみ接して居ましたが、何だ歟母の樣子が常とは少し違ふ樣で有ました、淸やかな美しき其目附で、じッと私の顏を見詰る時、其目の中に何だ歟言ふに言はれぬ秘密の悲しみが含める樣で、時々は私に見せまいとしながらも、つい溢れ出る涙さへ見えるのでした、母のやさしき溫き愛情の爲に、私の胸は搔亂されて、悲しさいたく〱しさに堪ず、如何したので有る歟と言て種々に尋ねましたが、否如何した譯でもない、唯自然斯なので有ると斗り如何しても始は其理由を言ませんでした、然し間もなく其譯を話しましたが、其譯といふのは、小兒には敎育といふものが大層必要で有る、然し此地では其敎育を受させやうと思ッても、就て學ばすべき人がない、若敎育も受させ得ず、無學の儘で生長したならば、行末男兒は皆勤に出なければならぬが、其勤が出來ぬて有らう、其が胸の痞て有るといふのでした、是丈聽て私の胸は縮み上りました、私は其言葉の終りが何で有る歟を知得たのです、扨は悲しい事が來る私はカザニの學校へ往なければならぬ、といふ事を知たのです、而て自分の推測を母に語つた時、母は其通りで有るといふ事を言て、其決心を話しましたが、私は其言葉に據て、其決心の固い事を悟りました、さあ其から數日間といふものは、私は唯泣に泣たのです、母は種々と何を歟私に言て聽せましたが、其は少しも私の耳へは入ませんでした、よし入た處で分りもしませんでした、然し私を是非敎育ある立派な人にしたいといふ、彼の熱心なる冀望は、

彼女のやさしき甘やかしと、彼女の怜悧なる說喩と、彼女の願ひと、彼女の淚とに據て、幼き私の心にも善く會得が出來たので、私は碎たる心を以て終に來るべき運命に服從する事を決心しました、然し斯決心すると同時に、今迄の私の田舍の遊戲は、一ッとして私の心を奪ふに足るものなくッて、一切の事盡く私の爲には無意味のものとなり、空漠のものとなり、私は總てのもの、總ての事によそ〳〵しくなりましたが、其と同時に又母に對する愛情は、日に增て非常に其量が加はッたのでした、此時から父母は私に入學準備の敎育を始めましたが、私は私位の年頃の小兒としては、此上もなく善く書物を讀み、又小兒的に文字をも書得たのでした、其に父は此より以前私に初等數學、即ち初步の四則を敎へやうとした事が有ましたが、私が怠惰て善く解し得ぬので、つい其まゝ棄て仕舞ッたのでした、今度亦始る所、以前とは異ッて、僅か二ヶ月の間に私は盡く此四則を覺えて仕舞ひましたが、此幼年の時に覺えた四則丈は、其他の數學の部分は盡く忘れたにも係はらず、尙今でも善覺えて居るてす、扨四則を覺えて後は、父は唯其雜題を繰返すと、習字を習すとのみて有ましたが、其を私は又出來る丈上手に習ひ得たのてした、且つ總て是等の勉强を、私は何時も母の前てのみやりましたが、是を勉强するのも、唯、母の嬉しがるのが嬉しいから斗て有ました、母は又いふのてす、入學の時此問題て入學試驗に私が及第しない樣なれば、母は恥辱の爲に死ぬで有らう、然しお前は善出來るから佶度及第すると、母に斯言はれた斗で私は嬉しいのでした、而して一步も傍を離れませんてした、其を又母は心配して、鳩を見て來いと歟、隼を見て來いと歟言て、外へ遊びに出さうとするのです、なれど私は何處へも往ず、何時も唯、「かあ樣おいらは嫌」と言ふ斗でした、母は來るべき別に馴させやうとして、絕間なく私に、學校の事や、學問の話をしながら、今に私が大きくなッたら、曾て自分がまだ十七歲の少女の昔、故鄕のウフ縣から自分の弟達をモスクワ大學の寄宿舍に入れた事が有たが、私をも必ずモスクワへ遣て、其寄宿舍へ入れてやる

と言ました、私は自分の年齢に増りて智慧ぃ發達して居た質故、多くの書籍を讀みましたが、其は自分の興味の爲めに讀むよりは、寧ろ母に聞せる爲め音讀した方が多かつたので、書籍も無論私よりは年上の小兒の讀む本で有ました、是といふも私の遊び仲間が母の外にない爲て、而も年上の人とのみ遊んで居る小兒の、智慧の意外にませて居る事は、諸君の常に實見する所で有ませう、されば母が又私に、教育ある者と無教育なる者との差が、どれ程で有る歟といふ事を語る、其が私には善く會得されたのでした、全體私の母は非常に怜悧の質で、且つ驚くべき能辯を有して居て、自分の考へを述る時なぞは、最も感情深き熱心の語を吐く人でしたから、限なく私の精神を支配して、今は全く私の心に少しも早く母の熱心なる願を成遂げ、其冀望に適ふ樣にしたいと思ふ心を起させた程、充分の勇氣を吹込み得たのでした、其故私は仕舞ひには待遠な程、カザンの學校へ行く日の來るのを待て居ましたが、其間私しの母は雄々し氣にも喜ばしき風をして居ました、然しやさしき母心で斯して居るには、どれ程其氣を張詰て居たのでせう歟、顏色は目立て日毎にわるく、形も次第にやつれ往のでした、尤も泣て居る事は有ませんでしたが、然し常よりは多く室内に閉籠ッて、度々神樣に祈禱して居ました、是が即ち母心の限りなき獻身的愛情の眞實の勝利で、母は玆に於て私に其愛情を證據立て居ります、私は前には恐ろしい病身の子でしたから或時の如きは、母は全一年間といふもの、私の枕元を去らず看病をして居た事も有ましたが、其間誰も母の眠ッたのを見た事が無ッたといふ程で、長の病氣の間、母の手の外には何人も私の躰に觸ッたものが無ッたといふ事です、然し此樣な深き愛情も、今手の中の玉と甘やかして育てた、痛々しき迄か弱き今年九歳の一人子を他に教育を與ふべき方法の無き爲め、百里も離れたるカザンの學校へ、官費で入學させる事に決心した、其決心の深き愛情に比べては、殆んど無意味の事で有ます。

（了）

情慾なければ何事も遂ぐる事能ず

女文字

田村松魚

上（たより）芳也記

我から名乘るでもないが、自分は山脇芳也といふ男、大學を卒業したのは去年、丁度二十五歳の夏の初めて、都の空に不如歸啼く五月雨の頃であつた。

越鳥は南に翔り、鴈は北に飛ぶ、兩鄕の雲路各々歸るを言ふ、如何ぞ我は是れ飄々の者、獨り江頭に向つて釣磯を戀ふ。といふ韋莊が思歸の詩を低吟して、書窓遙かに故鄕の空を眺め、僅に逆旅の魂を慰めて居たのが、茲に幾星霜の苦學の功漸くなつて、先づは自分が一生涯の歷史のその一段落を告げたので、一日も早く歸途に就かうと思つて居た其矢先、恰も好し故鄕の老母からも直に歸れといふ音信、それには種々とくど〳〵しい事までもまはらぬ筆で書き立てゝあつた。いつもなら勿躰ないが五月蠅とまでは思はないでも、また例のかとさまで氣には止めぬのであるのに、此度の母の音信は幾度も繰り返した。そして腕を拱ぬき、頭を傾け、茶を喫み、煙草を吸ひ、何時になく深く考へ込んだ。

母の音信には斯いふ事が書てある。其方が歸ると直に結婚をさせやうと思ふ。嫁には好いのがある、而かも兩人ある。何方も其方を慕ふてゐて、いづれも此上もない好い縹緻で好い氣立である。けれどもこれは其方が歸つてからの上に何方とも決るが好い。といふ樣なことであつた。それで自分は何方をと深く考へたのであつたが、たゞ何となく心樂しく思つた。そして餘りに小兒らしい考へてはあつたが、もう幾夜寐れば自分は故鄕の人となるだらうと、私かに指を彈いて見た。故鄕は都を去る三百餘里、少なくとも一週間は費るのだ。あゝ長い〳〵此の一週間、一日が千秋ならば我は正に七千秋の思をなさねばならぬと自烈つたい。

其所で愈々明朝は一番列車で出發と、其日一日は親友やら知人やらを尋ねて、暫時の離別を告げた。別杯を酌むのだと云つて某樓で飲んでの歸途、池の端を通ると、不忍の池、それが夕陽を浴びて辨天堂が鮮かに水の

面に浮いてゐるのが如何も故郷の何處かの景に似て居るかの如く見えた。青葉の上野、その山の色さへも故郷の山、そよ吹く風の微醺の顔をなでるのさへ老母が愛の手か、そしてほのかに薫るは戀人の衣の香ではないか、何處かの二階に若々しい婦人の聲、それも耳には妙に響いた。

好い心持で大得意で歸つた。ドン／＼と梯子段を上つて自分の居室の中央へ大胡座を組んで猶愉快な想像に耽つて居た時、下婢が二通の郵書を持つて來て、ニヤリと笑つて、自分の前に抛げ出した。自分はそれを奪ふやうに兩手で確と掴み取つて、無禮な下婢を白眼んだ積りであつたがその白眼が些ともきかぬも道理で、自分は早くもその郵書に青眼を注いでゐた。見るとそれは何れも媚めかしい女文字、山脇芳也樣御許としてある。

自分はその郵書の一ツを右の手、一つを左の手に持つた。右のは紅色の封筒、左のは白い。紅のは國子から、白いのは瀧子からの音信、いづれも戀しい／＼、夢寐の間にも忘れなかつたその人からの音信である。兩手に花とは此れか、何れが梅、いづれが櫻と、自分ながら後で氣が附いて可笑つたが其時は正しく我は笑壺に入つて居た。

全く白狀すれば此時の嬉しさといふものはなかつた。卒業をした時も嬉しかつたが、其時よりも此時は極めて強く鋭く胸を躍らせた。

けれども自分は直と郵書の何れをも披かなかつた。何となれば此の愉快なる感想を猶長に續けやうと思つたので、兩手に高く差し上げて、仰ぎながら交る／＼それを見た。例へば小兒が母より得た美菓を兩手に捧げて口にもせず微笑むかのやうに長き快感を貪ぼつてゐたのである。けれども一刻も早くこの音信を聞こうといふ心が先に立つので、ツイと其所を起ち上つて椽側に出て、柱に身を倚せた。其時何れのから先に封を披こうかと躊躇つた。紅色のよりか、白色いのよりか、國子か、瀧子かと心は二岐に分れて身は追分の旅衣、右か左か西か東かと迷ふてゐる中に、日はトップリと暮れて

了つた。驚いて洋燈を點火て思ひ切つて心を出した。華かに輝くこの燈火の下でじつと二通の郵便を視比べたが手は自と器械のやうに動いて左方に置いた白い封筒にツヽと觸れた。そして急がしく封を切ると直に讀み初めたが、喉が渇いたのでグイと溫湯を無意識に仰いだ。

一筆しめし上まゐらせ、鬱陶しき時節に御座候へども御機嫌よく御暮し遊され候御事何より御目出度存上まゐらせ、扨とや貴郎さま此度首尾能御卒業遊ばされ候由、何より〳〵御目出度遂に御祝申上まゐらせ、まことに貴郎様御よろこびは申すに及ばず候へども、御國許御母上樣御滿足一方ならず、いそ〳〵と御勇み遊ばされ候て、お顔の皺も御腰ものび〳〵とそれは〳〵他所目にも御うれしさ嘸かしと御察し申上まゐらせ候。さればこそ妾風情までも世にうれしき事に思ひ母諸共山々御祝申上まゐらせ就ては近々中御歸り遊ばされ候よし、くれ〳〵も御道中御大事に遊ばされ候て、たゞ一日も早く御安着遊ばされ候樣にと御待ち申上まゐらせ、いつぞや御歸省の折、鎮守の森の木下蔭に涼しき風を入れての御物語、いろ〳〵と御やさしき御仰せの數々、御分れ申してより此方一日も相忘れ申さず候へども、貴郎樣には猶御胸におんのこし下され候やと御歸りの由承り候につけても、さま〳〵と氣苦勞いたし居候事に御座候、御目もじの節も今暫時の事と存じまゐらせ候へば唯其時をのみ御待ち申上まゐらせ、申すまでもなく拙なき身には候へども昔にかはらぬ御情の程幾重にも御願ひ申上まゐらせ、胸に積る思ひは海山盡きせず候へど、水かれし小川の車とや、今はこれにて筆とめかしこ。瀧より。芳也樣御許。

最負目ではない、手跡から文章のやり方まで、美しい優しい物した上に、暖かな溫和しい情を罩めた心の底があり〳〵と文の上に表はれて居て、如何にも自分はなつかしく嬉しく感じた。それと仝時に、瀧子の俤が目の前にチラツクやうである。何方かと云へば丸顔の美しい眉、二重瞼の凉しい眼が我を見る時に限つてやゝ俯目に、小さな愛らしい口で我が名は云はず兄さまと

呼んで耻しさうに、飽まで白いその横顔をソッと袖で掩ふさまが、正しく其所に髣髴として浮き出たので、自分は暫時總てを忘れて了つた。

戀しき瀧子、慕はしき瀧子、と自分は微かに其名を呼んだ。そして自分は何をか云つて瀧子を慰籍めやうとした時、サッと吹き來る青嵐に洋燈が烈しく瞬いて、アハヤ消えんとしながら青い焔がパッと燃へ上ると、膝の上にあつた今一通の赤色の封筒が舞ひ上つて、ハタと自分の膝の上に落ちたので。驚いてそれを取り上げたか封筒の色が血の樣に紅く見えた。自分は瀧子の手紙を其儘にして直とまた其封を切つた。此時再び茶を仰いだ。

一筆染し上まゐらせ候、時節柄とは申しながら梅雨今にはれやらず候處いよ〳〵御健勝目出度存上まゐらせ候、さて此度は御卒業遊され候御事此又目出度御祝申上まゐらせ候此方兩親も此迄及ばずながら御世話致せし甲斐ありと一方ならず喜び居申候、しかし貴郎樣には瀧子さんといふ人がおありなされ候事故、妾はそれのみ心に掛り御卒業と承はり、御歸郷とお聞き申しては夜の目も合ひ申さず候、恨がましいことを申上候やうなれど、妾方より此迄貴郎樣へ盡せし事は遙に瀧子さん方よりは上かと存まゐらせ候、それにもかゝはらず折々の御音信さへ妾へは下されず候事口惜しき事に存まゐらせ候、父も常々より貴方樣御卒業の上は此上にも一層の御力にならんと申し居候、其事は御歸郷の上にていろ〳〵御相談致すやう申居候、妾の家はいよ〳〵盛へ此度立派に新築など致し候へば御歸り遊ばされ候上にて其家にて御祝など致すべきやうにと皆々大騒致し居候、瀧子さんは一人の御母さんと賃仕事など致し居候、御存じの通り妾とは從姉妹なれど氣性合ひ申さず候、唯一刻も早く御歸り下され候樣にと指折數へて御待ち申上まゐらせ候、詳しき事は御目に掛り候上にて海山申上度先はあら〳〵かしく。

とばかり筆を留めて、これも國子より、芳也樣まゐるとしてあるが、男らしい文字の所々跳ね散らした手跡は瀧子のよりは遙に劣つて見えた。そして恨がましい

言葉の中にも恩に着せたやうな文言の節々、人の品の高尚さと卑下しさとが何處となく其所に表白されてゐるのでないかと思ふと、何んだか厭な氣がさした。そして俄に沸々と湧き立ち煮へ立つた興趣が冷たい汗に汚されたやうな氣がしたのである。併し其感想は瞬時であつた、唯の刹那であつた。自分が再びそれを繰り返すと仝時に國子を愛する心は依然として恢復したのである。

國子は豪家の娘、境遇も教育も瀧子とは異ふのだ、隨つて性質も異ふのだ、それに今迄自分に對して盡した國子の家の仕方から見ても是程の事を云ふのは當然である兎や角瀧子を惡様に書いてあるのもこれも女の情の止むを得ぬことだ、我々愛する心に何處に瀧子と相違があらう。と斯う思ふとまた國子の最愛しさが染々と身にしみて國子の俤が眼前に浮ぶ。細面のツンと高い鼻、切れの長い眼尻が稍々揚つて何處となく人を凌ぐやうな氣味があるので、愛嬌には乏しいけれど、平生でさへも着飾つて居るので一入派手やかな容姿が見えるやうである。

自分は二つの文を膝の上に舒してじつと双眸を打込んで稍々暫時兩女の上に思を馳せ、恍惚として凡ての我を忘却し去つた時、再び夜風が庭の碧桐の葉を鳴らして吹き入ると同時に洋燈は忽ち消えて四方は闇夜、ハッと思つて我に返ると膝の上の二通の文は、恰かも二頭の蛇が鎌頭を怒らせたやうに其一端と一端とが纏れ合ひ絡合つて、暫時彼方此方と組んづ解れつしてゐる。自分は眼をも立てずそれを視て居たが俄に肌が薄寒むくなつて頻りと胸騷ぎがするので、よろ〳〵と起つて障子を閉めやうとすると、庭の小籬に卯の花が闇にこぼれて朦朧、何か怪しいもの〻動搖くやうに見えた。

二つの文を確と旅行鞄の底に秘めて、大事にそれを携へて自分は旅客となつた。車窓の下の轉寢や船室の徒然にも自分の腦中には常に兩人を宿して居た。

二十五の我としては餘りに幼稚い戀と人は笑ふであらう。しかし自分は唯これ丈の戀の他を知らぬ。世の意



地くれた、こみ入つた、泣いたり笑つたり、怨恨みつらみのいろ／＼を嘗めた人の戀は知らぬのだ。唯若い血の燃へる胸の火串であるのだ。

日記帳の幾頁を通して斯う書いた。素より鉛筆の走り書、自分ながら讀みなやむ位、それが船の旅となつて、再び後を書かなかつた。

中　（波止場）　國子しるす

戀しき芳也樣が都よりのお音便、いつものやうに、其方樣には常々御拜見には一入心を入れさせ候事故、申すまでには及ばすと存候へど、婦人の文などのいかつきは餘り見好からぬものに候へば、御手習は御ぬかりなくなさるゝ方よろしかるべくと存候、尊圓親王、貫之など御習なされ候へば間違なく、文章は源氏、枕の草紙などは申すに及ばず、此頃の女流にても世に秀でたる人の物したるは一通り御讀みなされ候も惡しき事には候はず、など妾の爲を思つていろ／＼親切に書いて下されてある。芳也樣であればこそ斯ういふ御注意もして下される、日頃の思が叶ふて文學士の妻となつたとき、其時流石に國子は學者の妻となる程あつて平生からの心掛が好かつたと、人にも褒められるやう、それ計りかあの瀧子さんに引を取らぬやうと心を勵まして、手習書見と心を籠めた甲斐あつて、今では自分ながら土地でも肩を並べる程の女はあるまいと思ふ。自慢ではありませぬ、學校に居た時こそ瀧子さんには負けてゐたけれど、それはもう三年後、それから今日までの星霜の中にあの瀧子さんが貧乏世帶の中で、どれ丈の書見が出來るものか、どれ丈のお手習が出來るものか、機織り裁縫仕事、そんな手間暇に晝夜を費してゐて源氏物語枕の草紙、こういふものが覗かれる筈もない、して見れは妾はもう學力の上でも瀧子さんよりはずつと／＼上である、此前芳也樣御卒業の御祝の手紙、乾度瀧子さんからも上げたであらうが、妾のと比べて、何方か上手か拙手か、芳也樣が御目にもそれとまつたことであらう。

おゝ、待ち憧れたは芳也樣の御歸省、今日か明日かと指

折り數へて、只もうそは〳〵と氣も心も落附かなんだが、いよ〳〵、明朝早くと、芳也様の御母上様の所へ電報のかゝつたとの報知を聞いて、一番に妾が馳け附けて行くと、お母上様は、それ程に芳也の事を思ふてお呉れか、國子さん忝けない、との御言葉 妾は今に妾の御母上様ともなる方から斯ういふ御禮を仰しやられて、嬉しさが胸にこみ上げながらいろ〳〵と芳也様の御話をしてゐる所へ、あの瀧子さんが氣息を切つて來た。これもその報知を聞いて馳け出して來たのとやら、お母上様は瀧子さんにも矢張りわたしへの挨拶と全じやうな事を仰しやつたが、此時妾はお母上様を恨んだ。わたしと瀧子さんとを同等にお扱なさるのは、餘りわたしを御見下げなさるなされ方と云はねばならぬ。全じ從姉妹同士でも瀧子さんは貧乏人、妾は土地切つての豪家、島崎と云へば知らぬものゝない大地主の娘、それを御存じの上でなさるゝ御心が妾には一層口惜しいあれ程芳也様の御爲めもお母上様の御爲めもしてゐるのに。

それてわたしは氣がくさ〳〵して腹が立つて〳〵直ぐと家へ歸つた、それでも何んだか心が落附かないで、まだ今日は芳也様が御歸りにならぬといふ事はちやんと分つて居ながらも、起つたり居たり、櫺子窓を開けて港の方を眺めて忙然、夕陽をうけて入船の、あれが芳也様の乗つてお出の船ならと由ない事を思つて太息をついたり、耐え兼ねて門へ出て柳の下にしょんぼりと立ちくらして、お前は何をそは〳〵してゐるのとお母上様に叱られたり、もう〳〵氣が氣ではなかつた。其中日も暮れてしまつたが、短夜とは云ふものゝどうもそれは長いこと〳〵、夏夜のふすかとすれば杜鵑鳴く一聲に明る東雲といふ古今集の歌は皆んな僞で、人ちらしな夜中から雨が降り出して點滴の音までが耳について、それは一眼もまんじりとはしなかつた。

それでも漸々東が白んだので、妾はすぐと臥床を出ました。オヤお嬢様、今朝は大層お早うございます、と下婢の三がいやに妾を見て笑つたので、何んだか氣恥かしいやうでもあつたけれど、そんな事は係はないで、す

ぐと化粧部屋へ這入つてお化裝を始めた。ほんとに今日は一生懸命なのだもの。

芳也樣のお到着は七時といふのだけれど、妾はお父上樣やお母樣や、弟の賢ちやんなどを急き立てゝ港へお出迎。船宿の二階の一等好い室へ通つて、此所で待合せてゐた。すると追々村の誰彼が羽織やら袴やら、日頃のをかしな風とは見違へるやう、しかつめらしく義者ばつて町長樣、助役樣、學校の先生と、大衆これも芳也樣出迎の爲にと、づらりと海岸に立つて遠くを眺めてゐた。海面は一面、朝靄が深く籠めて船の姿も見えぬ。其所で旭日がパツとさしたが、まだそれても靄は散らないて美しい紫色や金色の一面の虹のやう、海は彩色れてゐた。妾はもう船が着くかと二階の窓から頸を延して見てゐたけれど、それも自烈つたいので、一人で大衆の所へ行きました。すると一同が妾を視て丁寧に挨拶をして、芳也樣がいよ／＼御歸りでございますそうて、お嬢樣も嘸ぞ御うれしいことでございませう、などゝ、云ふのだもの、何んだかキマリが惡くつて、好加減に此方でも挨拶をしながら、（實は心の中では嬉しかつたのだけれど、妾は可成眞面目な、ツンと澄ました顏をしてゐた。）彼方の夫婦松の下の方へ行かうとした。妾が何故夫婦松の下へ行きたかつたかと云ふことは、大衆の人も、誰も氣は附かないでゐたらうけれど、自分では色々なことを思つて其方へ足を運ぶと。驚いた。ほんとに縁起でもない、其大事な／＼松の下にあの憎らしい瀧子さんが居るのだもの、お母上さんと二人でじいつと沖の方を眺めてゐた。妾の近づいたのには氣も附かぬと見えて、兩人で話をしてゐる。妾は人の惡るいことをと思つたけれど、どんなことを話してゐるかと、此方の小松の陰へ身を倚せて耳を立てた。すると瀧子さんの聲で、お母上樣、ほんとに遲ふございますのねえ、もう船が見えさうなものを、昨夜少しばかり風が出ましたが海は何んともなかつたでございませうか、若しやの事でもありはしませんでしたらうかねえ、芳樣はお船がお嫌いで入つしやるから……と心配さうに右の手を帶の間へ挿入れた。妾は入らぬお世話でご

さいます、と口の中で云つてやりました。ほんとに入らぬお世話だもの、餘計なことだもの、其位の心配はちやんと此の妾がしてゐるのだもの、そんな氣苦勞位は嫌といふ程此の國子がしてゐるのに、、、あなたなどが他所から出しやばつて口を出す必要がないと、これが男であつたら、面と向つて云つて退けてやりたい位だつたけれど、女の身ては、、、ハシタないと、やう〳〵胸を按つた。それから妾はそつと其所を出て舊の所へ歸ると、もうお父様やお母上様なども波止場の所へ出て入つしやつた。いよ〳〵船の着く時刻になつたので。――靄もやう〳〵晴れて海面は眞蒼、賢さんは妾に向つて、姉さん、あれが所謂水天髣髴青一髪といふ景だ、と頻りに說明をしかけたけれど、其様なことが妾の耳に這入るものか、妾は一等先へ出て覗て居ると微かに見ゆる一艘の船、それを見ると一同は云ひ合せたやうに聲を揚げた。勇ましい滊笛の聲、腸へ染み通る程嬉しい、船……次第と近づく、大きくなる、瞬く中に埠頭の直ぐ側へ着いた時

は、もう氣がそわ〳〵して胸の動氣が激しくなつて足元が慄へるやうである。妾はじつとお母上様の袂につかまつて見てゐると、大衆の出迎の人は立ち騒いで我勝に棧橋の方へ走る。妾も其方へと行かうとするのをお母上様は危險いからとお留なされた。彼是する中に大衆の人の中に圍まれて此方へ御出なさるのは誰あらう、戀しい〳〵芳也様！。國や、サア、芳也様に御挨拶、とお母上様が御云ひなさるまで妾は何もかも忘れてゐた。ハッと思つて二足三足芳也様の方へ母上様に手を引かれて出たが、顔は上氣をして仰くことも出來ぬ、口の內で何か云つたがそれも如何云つたやら覺えて居ませぬ。お歸り遊ばせ、暫くてございましたとても云つたのであつたか、先立つものは嬉し涙で、唇が戰へて舌が强ばつて、自分ながらあれ程意氣地のなかつたことはない。それでも芳也様が、ヤア、國子さん、暫らくてした、と仰つた御言葉は慥かに聞き取れたので、思切つて顔を上ると芳也様も懐かしさうにじつと妾の顔を御覧になつた。妾ももう

斯うなれば度胸が据つてお顏を視上げた。その目と目がハッタリ一緒に見合つた時は飛び立つ程嬉しかつたそして耻かしかつた。芳也樣は立派な洋服を召してゐらつしやる。すらりとしたお身長の御立派なこと、お顏も此前お目に掛つた時よりは少し太つて居しつて、濃い眉、凉しい目元、凛としたお口元、何處から見ても好い御容子、それで今日からはもうちやんと文學士。芳也樣が妾等の前をお通りになつて六七間お歩行なされると、ツイと其所へ來たのが瀧子さんとお母上樣であつた。兩人とも見すぼらしい容子をして、小さくなつて芳也樣の前へ出た。瀧子さんが何んと云つて御挨拶をするかと妾は見てゐると、矢張り何とも云はないて、下を向いて、そして汚ないハンケチで眼を拭いてゐた。瀧子さんも嬉涙にくれたのであつたであらうけれど、これもほんとに餘計なこと、妾は憎々しく思つた。けれども誰が見ても彼の立派な御容子の芳也樣の前へ、妾と瀧子さんが出て、何方が能く似合ふかと云へば自慢ではないけれど……、今日のお出迎の中に妾程美しく着飾つて……、そしてあの瀧子さん程見すぼらしくして、……彼の人も不標緻ではないけれど、物も出來ぬてはないけれど、……、とても妾の戀の敵てはない、と此時だけ何時になく妾は安心をしたやうな氣がした。けれども芳也樣の氣は分らぬ、何處がよくつて那樣な女を、瀧子さん等をと、何んだかほんとに自烈つたかつた。

芳也樣がいよ〳〵御歸りになつてからといふものは、妾の家ではそれは〳〵立派な歡迎をした。それから種々御祝も上げた。そして芳也樣の御世話は金に飽してした。瀧子さんは大層それを口惜がつてゐたそうだけれど それは無理といふものと妾は思ふ。妾の家で妾の行々の良人に世話をするのは當然、それを兎や角思ふのは瀧子さんの身勝手といふもの、口惜しければ一人で泣いてゐるが好い。

下（機をり）　瀧子しるす

何事も拙ない運とあきらめ、無い緣と思ひ切つて了へばそれ迄の事ではあれど、あきらめかね、思ひ切りかね

て、愚痴も怨悔も重なるは女といふ淺間しいものに生れた因果であらうと思へば猶更悲しい。

彼の芳也樣がお着鄉なされて波止場でお目に掛つた時オヽ瀧子さんか、暫らくでした、と仰しやつたお聲に、顏も上げず淚にくれて人前の恥しさも忘れて了つた程の嬉しさも皆な夢、うたゝねに戀しき人を見てしより夢てふものは賴みそめてきといふ古の人の歌の心を責めてもの便りに、いつぞやの御言葉を生命の綱とも思つて行末を樂んだことも、今更思へば口惜しい、眞の夢を賴んだ昔に引かへて今は現の夢を果敢なむ此身を哀れとも氣の毒ともあの芳也樣は思て下されぬか。

芳也樣がお歸りなされると直に、國子さんのお家では、それは〳〵大したお祝、あの新築の大廣間とかへ町中の人を客にして、二日二晩といふものを飮み明かし騷ぎ暮したとやら、それは誠に芳也樣の御目出度御卒業をなされてお歸り遊したこと故、それ位の御祝を緣につながるものゝするのは當然のことであるけれど、これを聞く妾の身、またお母上樣のお身、幾何丈辛らいことであつたか、三味の音太鼓の音が直ぐ其所に賑はしふ聞くに附けて腸は斷れるやうに思はれた。國子さんの家からも妾等への招待きもあつたけれど、どうしておめ〳〵と行かるゝものか、けれどもお顏を出さぬといふのも義理が惡い、其方は嫌であらう故、わたしが一寸と顏丈出して來ると、母上樣がお出になつたが、其時はどれ丈けお辛いことであつたらう。そして直ぐとお母上樣はお歸りになつたがお顏の色も大變惡るし、お眼には淚を持つてお出故、如何なされましたとお尋ね申せば、瀧や、わたしは口惜しい思をした、斯ういふ事なら滿更顏を出さぬ方がよかつた。わたしは世間の義理といふものを思ふて行つたことであつたが、と仰やつてお泣きなされる故、其理由をお正し申せば何の事、あの國子さんや國子さんのお母上樣達がいろ〳〵と嫌味やら當てこすりやらを仰やつたとやら、氣心の知れた人達の、何を云ふがお心に掛さりまするな、とは申したものゝ、其れを聞いた時の口惜しさ情けなさ、お母上樣諸共齒を食ひしばつて一夜を泣き明かしました。

それからといふものは國子さんの家とはふつゝり往來も絶へたやうな風になつたので、世間ではいろ／＼の取沙汰もしてゐたとやら、いづれ勢につく人の心の氣にもとめぬけれど、芳也樣までが其勢にお附きなされて了つて、とう／＼彼の新築の宅へ御引越しなされたのはマア何んといふお心であらう。

尤も男心の變り易いは秋の空にも譬へてあれば、それも無理ではない。國子さんは何から何まで好く出來た御方、御標緻なら御氣立なら、いづれにしてもそれはもう申分はなし、お家と云へば近郷切つての豪家、お父樣もおありなされば、人一倍お豪い方とやらの御母上樣もお出なさる事故、とても妾風情が兎や角思ふ丈けが愚痴といふものであるけれど、それにしても芳也樣が一昨年御歸りなされて、わたしをあの鎭守の森へ伴れてお出でなされての御言葉が、まださ／＼とこの耳に殘つて居るばかりか、一月前までの御手紙にも其時の御言葉に變らぬ親切しい御音信、それを聞いてもゐれば見て居る妾に未練とやらではないが、心殘りのないことが如何して出來やう。よしや今は那樣して國子さんのお家へお引越なされ、朝夕國子さんと御一緒に睦しさうにしては居らつしやるものゝまだ結婚の沙汰も聞かぬ上は、ひよつとまた妾をあはれと思召さぬことのないとも限るまい、お歸りなさつてから、まだ染々お話をすることも出來ぬ故、御心の中をそれと推することも出來ず、滿更早まつて後で悔むやうなことがあつてはと、じつと耐へて居る中の悲しさ、アヽ、思へば思ふ丈け愚痴といふもの、うらみといふもの。

聞けば國子さんの家からはお祝としていろ／＼の贈物などをなされたとやら　けれども妾の家からはまだ何もお上げ申さぬので、餘り心無い人達と芳也樣や芳也樣の御母上樣の思はくもと其事をお母上樣に申し上げた。するとお母上樣はまたお嘆きなされた。其時お母上樣は妾が十三の年お亡くなりなされお父上樣の事を仰やつて、其方が最愛しい、世が世であつたら、斯う云ふ辛らい思はさせまいもの、誰や、何も皆な因果だと思ふて斷念めてお呉れとお云ひになつてお泣きなされた

お母上樣の御話ばかりでもない、世間の噂でも能く妾は知つて居る、彼の國子さんのお家の那の樣に富くなつたのは、家のお父樣の御死去なされてからのことゝて、田地も家宅も皆な舊は妾の家のであつたのが、妾達には分らぬけれど、色々と入組んだ事情から那樣いふ事になつたとやら。これも矢張愚痴であらう。

それも今更いふても詮ない事、それよりは何か芳也樣へ御祝の記をと、いろ／＼お母上樣とも相談の上、妾が自分で紬地を織つてそれを贈物にすることにした。お母上樣の仰やるには總て贈物といふものは價の高下よりは人の情の籠つたものが相應はしい、其方が心を籠めて織つた紬なれば、それに增したものはあるまいとの御言葉、妾も道理と思つたので。

それからすぐと其れに取掛つた。吉日を撰んで機に上げて、妾はそれを織り初めた。南向の風通りの好い椽側に高機を据えて、朝まだきより筬の音、杼の走る數、一つ二つと積れば一寸二寸と次第に織り行く衣一の目毎に、戀しき人、情なき人、その人を思ふ情、怨む心の稜り／＼て一尺二尺、日の暮れるのも知らずにそれに計り氣を取られてゐれば、程近い國子さんの家からはコロリンシヤンと琴の音、あれは國子さんが芳也樣を慰むる晩酌の折の一手かアヽその音色は異ふとも筬の音も琴の音も全じ思ひの音であるのに。

今日は氣がくさ／＼して仕事も捗らぬ。絲が無暗と切れて、杼の幾度となく辷り落る、筬で指を傷めると何の故か嫌な日であつた。氣がつまつて仕方がないので、もう止さうかと思つてゐた所へ、わたしの仲善のお作といふのが草履の音パタ／＼と氣息を切つて驅けて來た。そして私の顏を見ると、涙組んだ眼を瞬いた。

わたしは筬の手を留めて、どうしたのと聞くと、どうしたと云ふてお瀧さア、あの今晩、芳也樣の所へお國さアが嫁入りなさると。……………。お前さア口惜かつたと思ふて知せに來たゞ、とばかり。

わたしは、もう覺悟はして居ました。けれどもまだ未練はありました。唯この未練があつたはつかりで機も織つてゐたのであつた。しかし、もうこのお作の言葉

を聞けばそれまでゝある。わたしは何も云はないで、突然傍にあつた鋏を右の手に確と持つた。そして織りかけた機をジヤキツと斷つた。そして私はペツタり其所に倒れて泣きました。此時お母樣が走り出て私の手を取つてお泣でした。

（終）

石すゞり

印東鏡浦

書き終へし歌の草稿を讀むともなく、暫し見つむる程、文机の上の大小幾冊かの書籍、幾本かの筆、水入、筆たて、文鎭のいづれもは、いつしか闇の中に包まれゆきて果は我身さへ浮世の外の境にもてゆかれし心地しつ。此奇異なる一天地は、或は海と化し、或は山と變じ、花咲く園生、鬼住む城の樣々なる形を寫し出たりしが、何者かの聲は罵しる如く聞えきて、身は再び住みなれし旅宿の一室、もとの机の前にとおかれたりき。

清水の湧き出るが如き音とみに我胸に響く。いぶかし、何にかあらむと見れば、年頃秘めもたる硯なりき。彼は恰かもうまいより醒めたるさまにて、我とわが水の鏡にさゝ波をたゝすと見えしが、遂にあるじの君よと聲高にわれを呼ぶ。我は茫然としていふ所を知らざりしに、彼はやがて言葉をつゞけつ。其聲音は、時どきなき父君のによく似てきこえき。

君よわびしき雨の日を、病める御身のいかに頭重うおはさむ。いかでわがしばしの物語を聞き給へ。硯はかくいひて形をたゞしつ、さておもむろに語りつぎぬ。

我は君に仕ふること〻に年あり。否君のみにはあらず、君が父翁の代より用ひられしなり。數ふれば早五十年の昔、世の中さわがしかりし頃、長門國赤間關のほとりにぞ我は生ひいでたる。さて星移り時變りゆくまゝに、浮世の辛酸をも堪へ忍びつゝ、流れ〳〵て東の京にと出てしは今より二十年の前なり。さるを不幸は小さなる我身にまつはりて、古道具屋の手におちし後は、某の市、某の店にと引き廻され、果は夜毎にけがれたる塵の上にさすらひの身とはなりつ。かくていついかなる人の手に、あがなはれゆくにかと、人しれず思ひわびしに

一夜我店の前にと杖をとゞめ、我をしもあがなひゆき給ひしは、則亡き翁なりき。我はこよなき幸をえたり。身さすらへて數年間、望みにのぞみし學者の手に拾ひ上られたる、其夜の嬉しさ又何にか譬へむ。翁は朝に夕べにわれをいつくしみ、われに馴れ給ふまゝに、吾もまめやかに吾つとめをつくしつ。されば翁が晩年の著書の、我が記憶に存せる又多かりき。かくて翁うせ給ひし後、翁が遺愛の文墨の具は、をしへ子の君たちに形見にとてわかたれし中に、我は年若き君にと仕へたりき。あゝ戀しき昔、戀しき翁よ、翁は今やいつこの空にか、詩界のかはりゆくさまをながめますらむよ。さて君も亦よく吾を愛し給へど、君が平常勉め給はざる、我を用ふるに半日とつゞきたる事なし。我身にとりては勞少なけれど、さりとて亡き翁の何とかおぼし給はむにはと、心苦しかりき。君は何とかおぼす。我は寂しきなり、今日のごと雨降る日はことに寂しきなり。君が去年の春此處に渡り來ましゝ時、我も亦君が行李の中に入れられきて、既に二とせの長き月日を重ねつ。かくて今日の我は君が鏡が浦にあさります、朝夕の歌文、又戀しき都へのたよりなど、くさ〴〵のものかきます時に、君が胸の思に相應じてつとむるなりき。とはいへ君が此頃は、あまりに世を捨てたるなり、つらく〳〵みづからもとめ給ふなり。よしや病ありとも、よしや心のなやみありとも、今すこし身の養ひ、今少し心をかたくしたまへや。あないみじいひ過ぎたり、免し給へゆるし給へ、筆も心地よげにふしをれるを、あしうも我のみ一人起きいてて、安くねぶりましゝ君を驚ろかし申しゝ哉。わびしき雨の日よ、其まゝやすませたまへ。

あやしき夢よりさめてあたり見まはせば、いつのまに日は暮れけむ、燈火枕べにあかく、窓をうつ雨の音しきり也。

天は萬物を人に與へずして其の働に與ふ

雜録

日本婦人と西洋婦人

菅原白峰

現今世界中に於て、最も優等にして最も幸福なる位置を占め、且つ婦人界の王者たるべきものは米國婦人なりとは、歐洲の輿論にして、二十世紀に於ける世界趨勢の一大變化たる男女位地の轉倒を實現したるものは實にこれを米國に於て見るべしといふ。この如く米國婦人の現況は、最上幸福者たり、最上地位者たり、今この最優等、最幸福の位地にありて、世界各國の人より翹望さるゝ米國婦人を借り來りて是れを我が國の婦人と比較す、不倫と雖も又聊か東西婦人の狀態の如何に懸隔せるかを見るに足るべし。

▲教育　米國婦人の教育は上、中、下の社會を通じて一般に普及し、その結果として女子に科學者あり、文學者あり、その他廣く學問の爲めに獨立の生活を立つる婦人多く、且つ新聞雜誌を讀まざるものは殆んど罕なり。

▲日本婦人の教育は未普及なり、唯僅かに上流社會の女子に少しく高等の教育あるを見るのみ、近年女子教育の隆昌を來すと雖もこれとて全躰よりいへば極めて少數なり、されば日本婦人の大部分は猶未だ明盲目といふべし。

▲道德　米國婦人は公德心に富むのみならず、又私德にも富めり、但し法律思想の發達せるより往々私德の上に多少遺憾の點あるが如きもこは文明社會に伴ふ一般の事情と見るの外なし、

▲日本婦人は未だ公德の何物たるを解するもの少し私德に於ては貞操、律義、節儉、謙遜等、舊思想に養はれたる婦人の部分に割合に多きがごとし、此の點は大に生噛りの文明婦人に勝れり。

▲理想　凡そ理想の高きこと世界各國中に於て恐らく米國婦人の右に出づるもの少かるべし、これ蓋しその國風に依る事にて、米國婦人が他國に比して獨立心の盛なる結果に外ならず、されば高潔にして偉大なる一世の矯風家、社會改造の木鐸者、豫言者並に時勢の先導者たらんと期するもの婦人社會に多し。

▲是に反して東洋の婦人は一般に理想低し支那、朝鮮は言ふに及ばず近頃女子教育上に一段の進歩を來せる日本と雖も婦人の理想に至つては極めて卑くして其の期する處ろは單に目前の利益のみ、富貴、榮達といふも要するに黄金と美服を追ふて生涯するものこの大部分を占む、期する處ろは有形の慾望



に過ぎず、その稍高尚なるものを求むるも僅かに子女の成功を望むの外他に之れなきが如し、是れ日本婦人一般の理想の卑き所以なり。

▲躰力　米國婦人は體育上又世界に超絶す、活潑勇壯、且つ冒險を好みて時に有髯男子を瞠若たらしむるものあり、さればその躰力は一般に勇大强健にして上流社會の貴婦人と雖も農家の勞働婦人と等しく如何なる困難にも堪へ如何なる窮厄に遭ふも平然たるは畢竟その躰力の强健にして意志の堅固なるに由る

▲日本に於ては農家の婦人、勞働者の妻女を除くの外、躰力は一般に軟弱にして蒲柳の如く、

殊に上流社會に至つてはその躰質益々薄弱にして輕羅にも猶堪へざるが如く、その所謂美人と稱するものゝ中には殆んど病者の如く、顔色青蒼にして物に耐へず隨つてその意志極めて弱く忍耐力の乏しきは小兒の如し、されば若し貴族社會に於て偶々農婦の如き躰力を有し活潑に勞働するものあれば、異數として社會より驚視さるゝ程なり。是れ要するに、多年深閨の間に人となり、荒らき風に當つる事を忌みたるの習慣なるべし。

▲慈善並に信仰心　米國婦人の信仰は基督教に基き樂天的なり、その慈善心の如きは所謂博愛主義にして區々たる小事に齷齪する事なく而して又その實行に富み直接に世を益し、人を救ひ、矯風事業、改良事業等着々として進行せり。

▲日本婦人は信仰心に乏しくその慈悲心の如きも偶々あれば小乘的の佛敎主義にして狹愛を免かれず、且つ一般に瑣々たる事に頓着して博愛事業等に身命を捧ぐるもの極めて罕なり

▲愛情　米國婦人の愛情は一般に冷淡なりこれその心の自然博大なるに因るものか、その様恰も艶麗馥郁たる薔薇に鋭き刺あるがごとし、又その良人に對する情の如きも彼の痴婦が情郎に纒綿するが如き態なく、而かも驕慢不遜なると同時に自から又一家の見識を持し、容易に下らざるの風あり。さればその子に對するの情に於ても情に溺れず、痴に走らず、嚴然として萬事規律に因り、一家團欒の裡にも絕へず智を働かすを忘れざるが如し

▲日本婦人の愛情は概して濃厚なり、是れその胸襟の狹隘なるが故ならんか、之を譬へば猶花に戯むるゝ胡蝶の如く鴛鴦の兩々相馴るゝがごとし、且つその良人に對するの情の如きも、濃厚にして痴情多く。萬事依々諾々として始終良人の歡心を迎ふるのみならず戀情に慣れて節なく、度なきが如し又その子に對する時も概ね情に溺れ易く偽めに甚だしく酷愛して愚人の態あるを免かれず。

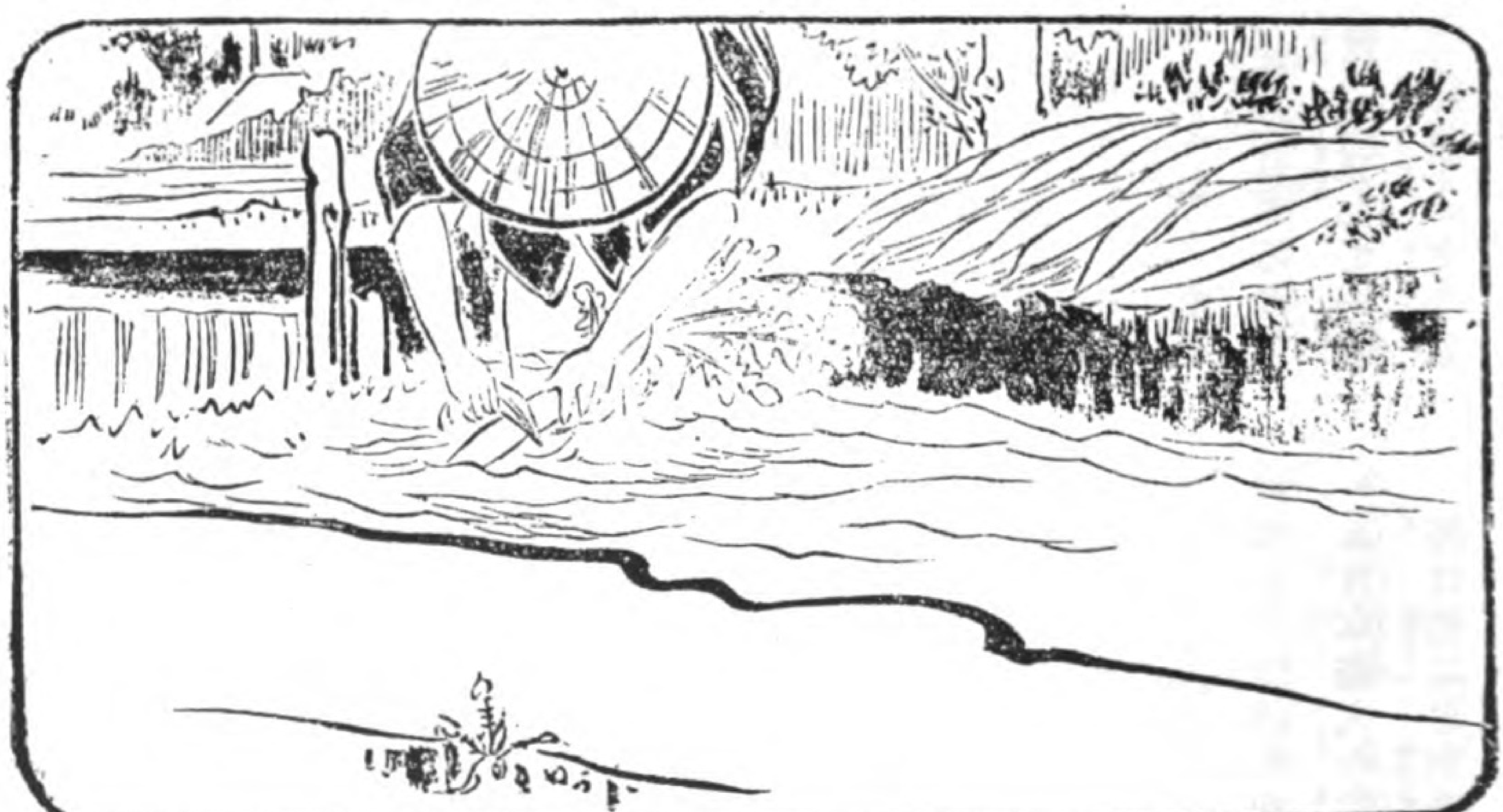
▲遊戯　米國婦人は戸外の遊戯を嗜好す、即ち乘馬、自

轉車、ドライブ、ピクニック、旅行、運動、散歩等なり

▲日本婦人は未だ戸外に於ける遊戯に嗜好を持たず、概ね遊興は室内的にして。坐談、カルタ等その重なるものなり、芝居を好むは東西一樣なり、

▲名譽心　米國婦人は名譽心頗る盛にして老幼を問はず一般に功名を競へり、且つ又既婚者と雖も決してその良人の榮譽功名を以て滿足せず、自己も又婦人に相應せる一分の功名を立てんと欲するが如し、是れ或は社會進步の一因か、

▲日本婦人は從來の蟄居の習慣に卷かれ來りし所以か名譽心の如きは未だ甚だ發達せず、唯僅かに學校時代に優等を爭ふ位が、稀れに



日本婦人之[illegible]婦人

社會的の功名を爭ふが如きあればそは特種の例のみ、大抵父兄、良人の名譽成功を以て一生の譽れとし、これに甘んずる位に過ぎず。

▲交際　米國婦人は天成の交際家なり、老練圓熟恰も我が藝技に學問と見識とを授けたるがごとし、その態度は頗る活潑にして又圓滑、姿勢極めて優美にして堂々たる有髯男子の間に進入して少しも怯する態なく、滿坐稠人の間に立ちて高く談じ、輕く笑ひ、時には輕妙なる洒麗を使ひ、踊り舞ひ且つ歌ふの有樣我が藝妓も殆んど三舍を避くべし。

▲一般の日本婦人は此の點に於て全く無能力者なり。是れその

從來の敎育主義が常に溫順退讓を以て婦德の一となし假りにもさし出がましき事を爲せば忽ち社會よりお轉婆の嘲を受くるが故なるべしと雖も、去りとは又因循なる風俗といふべし。

▲常識　米國婦人は學問の素養あるに加へて廣く社會の實際に接するの機會多く且つ其の敎育主義自然獨立を尊ぶ所以にや常識の發達せる事著るしく學事、世事、に付て辨識判斷するの能力は驚ろくべきものなり、誠に是れ庶物敎育の賜なりといふべし。

▲是に反して日本婦人は蟄居的の風習を以てして多く事物に接せず、敎育の力普及せざるを以て常識は極めと乏しく學問上、政治上、經濟上其他すべての事に對する辨別判斷の力なく、且つ世事の事柄に就て說明し且つ自個の思想を演ぶるの能力乏しく、僅かに男子の補助を得て稍く事物を解するが如く、到底一人前の男子と相對して事を議する事能はざるなり

▲職業　米國婦人は男子と同じく社會に獨立して一個の生業を營むもの甚多し、官吏、醫師、辯護士、文學家美術家、學校敎師、書記、商家の番頭等枚擧に遑あらず而かも男子と比して其の成績決して讓らず、唯僅かに機械に關する業務幷に非常の力作を要する仕事には天性不合格なるを以て從事するもの稀なるのみ。

▲日本に於ける婦人の職業は目下僅かに少數の看護婦、產婆、電話局雇員位に過ぎず、今後婦人敎育の發達に伴ふて漸次その區域を擴張するに至らん。

▲文學思想　米國婦人の文學思想は一般に普及し中には頗る卓絕せるものあり、是れ恐らくは又世界に比なき所ならん、

▲日本に於ては近時少數の高等敎育を受けし婦人の間に少しく文學の嗜好の解されたるが如くこれを外にしては又論ずるに足らず。

▲法律思想　是又普及して歐洲各國婦人の及ばざる所あり、現今離婚、遺產、分配等に關する訴訟の多きは或は婦人に法律思想の普及せる反影ならんか

▲日本婦人の間に於て法律上の問題を提起せんか彼等は殆んど別世界の事を聞くが如く、一として其の

頭念を促がすものあらず、法律思想に皆無なる又ての如きはあらざるべし、併一德あらば一失あり恕じいに法律思想を養成して事々に裁判沙汰を聞くも又倦むべき事にあらず

▲經濟思想　米國婦人は單に一家の經濟を行ふを以て滿足せず、わはせて米全州の經濟をも論究討査せんとしつゝあり。畢竟國民敎育普及の結果にして婦人が國家の財政に就て個々の意見を有するが如きは東洋諸國に於ては夢にも知らざる處なるべし。

▲日本婦人は割合に家事經濟には長ぜり、但しその着眼は極めて狹隘なり固陋にして常に消極的なるは惜むべし。

▲衞生思想　米國婦人の衞生思想に深きは驚嘆すべし一身一家日用の百事すべき衞生上より打算して萬般の設備を怠らず加ふるに公共衞生に就て大に注意し公同的に之を遵守する如きは眞に嘆賞すべし。

▲近時女子敎育の普及と共に衞生思想の發達を爲したりと雖も全國一般に於て之が實行を爲すもの極めて少きは嘆ずべし。

▲音曲遊藝　米國婦人にして歌謠、奏樂、舞踏の三者を知らざるもの殆んど罕なり、中等以上の婦人に至つてはその他猶特種の遊藝を備へて交際場裡に橫行闊歩し、且つ家庭に於て之を演奏しつゝ歡娛するは米國婦人の特色なり、以て自から樂しみ、以て良人子女を慰藉し、以て一家團欒の好具となせり。

▲日本婦人の間には琴、三味線若しくは洋琴を彈じ或は踊りの多少を習ひ覺ゆるものあるも概して是れ婚姻支度の一にして結婚し畢れば是等の音曲、遊藝は最早無用の長物に歸して敢て之を一家の團欒に供せんとするものなし、勿論這はその樂調の一般に卑猥淫靡なるの致する處なりとはいへさりとは又遺憾至極といふべし

▲法律上の地位　米國婦人は法律上に於て男子と同等に認めらる、所謂女權振張の結果ならん、選擧權の如きも男子と同樣にせんとて運動するものありとかや　隨て社會上の地位も又頗る優勢にして自然に尊敬を博

せざるを得ざるなり。

▲日本に於ける婦人は限定能力者と認めらるゝのみ、隨つて社會より猶蔑視さるゝを免かれざるなり。

兩婦共に居れば
氣候を寒冷ならしむ

鑛毒被害地の婦人

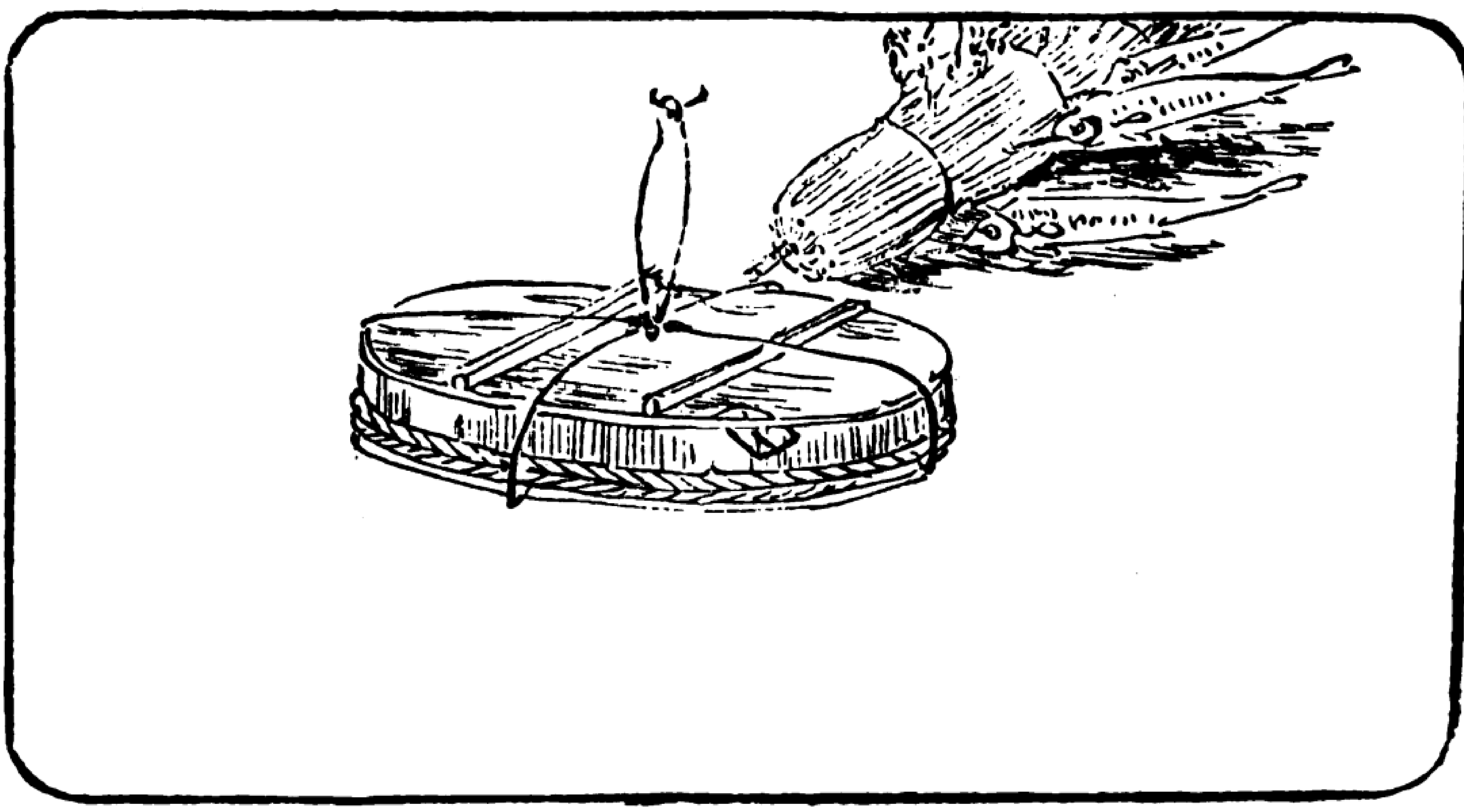
鈴木げん

過る日物へまかりて、芝なる愛宕山の下に來かかる時、年の頃はまだ廿歳をや超へさらん、一人の婦人縞目あ洗ひはけたる筒袖の衣裾短かにとり上げ、菅の編笠いたゞきたるが、狂せる如く何やらん配りあるきて助け給へ〳〵とよぶるに、心得ずと受けて見れば、是や噂に聞し被害地の婦人が、鑛毒和讃といふを唱へて世の同情を促すものなりき、あはれ錦ときそひ、華美とてらふ都大路の眞中と、おのが形裝の人目をひくに心も付かず、此年比のものまてもかく、熱狂するあはれさよ、いて故鄕の慘狀思ひやるべきなり、生れし里の名をとへは、下野國阿蘇郡界村なりと答ふ、思ひ當るふしなきにあらねば、我れさしよりてさらは姓を野口とは申されすやといふに、彼女驚きて我顔見つむる面ざしは似たりやな、これぞ先つ頃、我れ田中正造翁に導かれ被害地見舞ひし時、數多の人々お迎へ給ひし中に田畠山林の何くれ動植物の數々採集めて鑛毒の及ほす處を熱心に說明しくれられし、野口春藏氏の娘にて、其時は折惡敷あひ見ざりしかど田中翁よりくれ〴〵と其人の前途を托されて、有望の婦人なりき。

四五日經て小雨そぼふる夜二人料りの婦人と共に、なみ子は我宿に來ませり、夜更る迄語りつづけていつを果てとも知らさる涙のまとゐ、いまも猶忘れやらす、心に聞しにまさる天晴の人材、あはれ之をよく用ゐなば、世の爲めにまた得がたかる器を、一國一鄕の犧牲にいつ迄苦しましむるものぞといと惜しくなん。

彼等は實に古來關東の大財源渡良勢、利根の二長流の曾てナイルの河が埃及全洲に富と寶を散ぜしがごとく、沼岸數十萬町步の田園に、無比の天產を氾濫して、

所謂沃野千里の偉觀を呈せる、天祐他に類ひなき地に生れて、祖先代々惠みに飽き、鼓腹して太平を歌へるものが、今や桑田變じて海となるたとへにもまさりて、同じ天地に生を享くる人一人の榮花に資せんが爲めに、三十萬の生靈、日に月に其犧牲と衰へ行く二十年來の辛酸苦痛如何斗りぞや、枯れはてし乳房にすがる泣く子より、泣かれぬ親の悲しさを、訴ふる處は悉く之れ仇の片割れ、いへば即ち口を縫はれ、かこてはやがていましめらる、せんすべなきに堪へかねて、大擧中府に請願せんとすれば、權をもて壓倒され、暴力身にふりかゝる、遂には聞も及ばぬむづかしき罪名を附せられて、獄裡にうきを重ねざるべからず、父兄の身己に然れ



鑛毒被害地の婦人

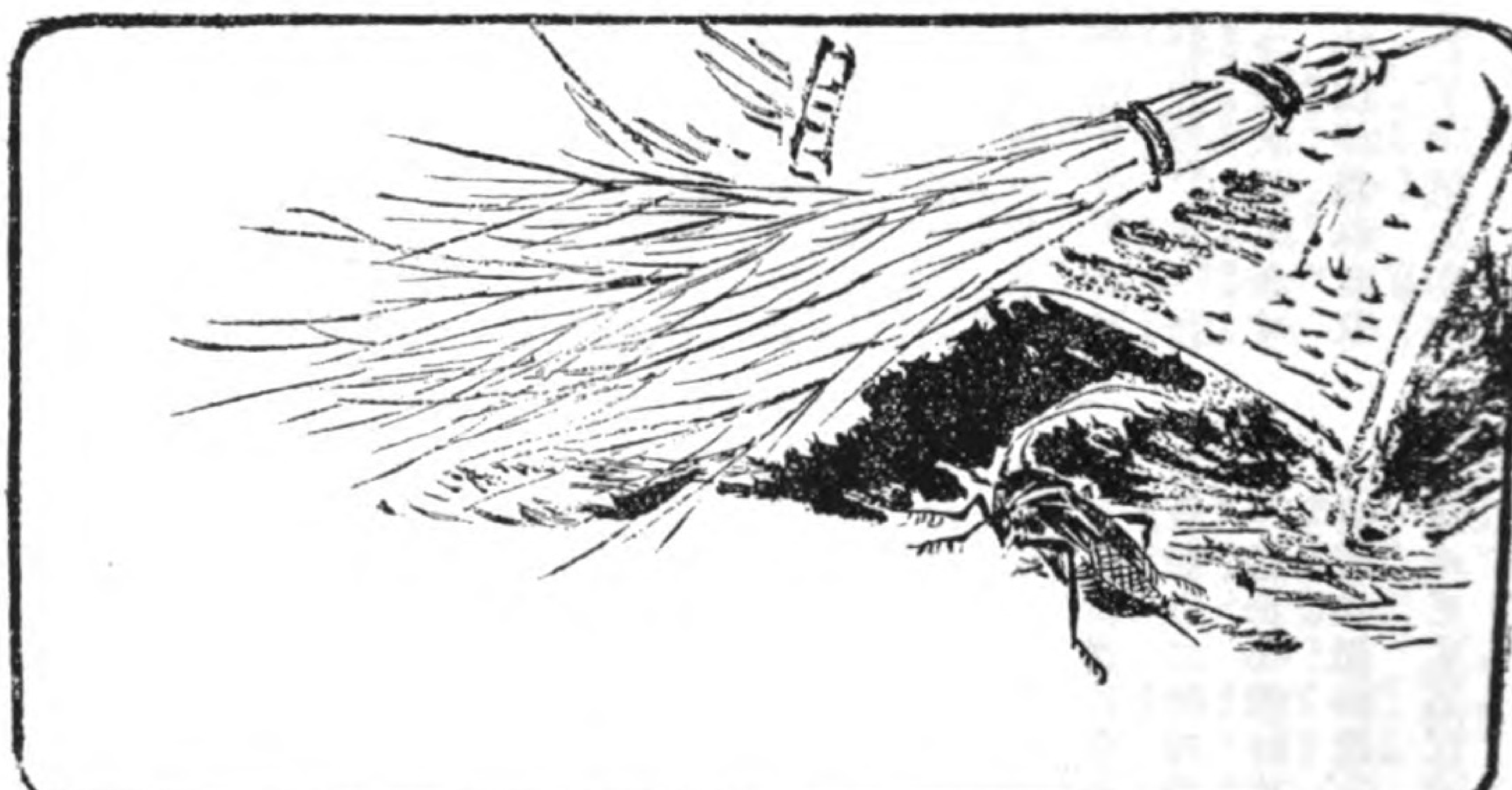
ばあさは、唯泣くより外に道もなく、やがて前橋の公判に無罪の宣言うけて晴の夜に燈火得たる嬉しさも夥なりき、再び檢事の控訴受けて、都のひとやにまた幾月日をや詫ぬべきしかも、地獄のさたもげに金だにあらば一時保釋にて出獄し得べしと聞けど、あれはてし我家の何處に求めてか、五十八十の黄金のいづべき、扨も猶、杖柱なる人一人にかはられば、無理に無理してからく調へ迎へ來し其人は、長き獄內の幽囚に身はやせ、氣は衰へてたのみし甲斐もなけれど、赤き心の看護に漸うもとに腹せし比は又候控訴院の公判は爲めに出京せざるべからず、宿屋住ひに費用又もやかさみ　其上二回三

回十數回に及べども猶いつ果つべしとも思はれず、寒さは貧とともに身に徹し、老をかひなき世の末をうらみ、幼きは唯ひた泣きに饑になく、されば、座してみす〳〵死を待たんよりは、迚も消ぬべき露の命を的にして、亡びの淵に我かごと陷りつゝある、數多の人の身を救はんとて、いひ合さねど五十余名の婦人、古河の停車場に打集ひしは甚少し前、いまや一聲の滊笛と共にはやる心を乘せて打立たんとする、一刹那かねて、不穩の取沙汰ありしと見えて、非常をまもり居し巡査數名、ひし〳〵と圍みて、かつ諭かしつ、威し聞かされば權と力に訴へて抑制しければ、同盟五十餘人は涙ながらに思ひやみしが、以來ます〳〵怨みこもて つひに二月十九日といふの朝まだき、東雲の空まだほの暗きに、一族親信に水盃して、なれし故郷もけふを限りと見かへりつゝ、死を決して出立ちぬ。此心の暗合せしもの十八名、其筋の人の油斷のすきに首尾よく乘り移りて、都に入りし人々の中に壯婦浪子も居たりき。

出京して久し振にて對面せし親兄の、いと〳〵衰へ果てし姿見るに付けても、素志ます〳〵かたく人々のとむるも聞かず、内務、農商務、並に總理大臣の官邸を訪ひ、折しも雪ふり埋もりて庭石のほとり眞白くなりたる、上に朝まだきより端座して訴へ聞ゆと雖とも、志しは少しも達せずして空しく追拂はれ、せん方なければ此度は被害の模樣を和讃につくりて聲悲しく歌ひありきて、朝は四時に起きて物引したゝめ、なれぬ市中の家ことに、哀を告げて終日めぐりありきぬ、或は乞食よ物請ひよと擯斥され、或は鑛毒をたてに金を貪るものと罵らる、されど志ある人にはやさしく問ひ慰め、米、味噌、醬油、夜具、手道具何くれと惠まるゝ忝なさ斯くして獄裡に食を贈り、衣を贈りて囚はれし親兄を慰め居けるがさすがに公明の裁斷は六十餘人の被告皆大方ゆるされて、天にも上る喜びも僅々三日檢察官は再び上告裁判所に向つて無罪の不服を提出せり、年をいはゞ前後三年三度び束縛の身となりし男子の鐵腸猶且とげなん、況して憐れなる婦人の心をや、悶へ死なん計りに怨み歎けども、故鄉の人々か涙の淵に沈み居る有

樣と推計りまたも意をとり直し、偏に成行末と祈る程に、大審院の裁決はおもひもよらぬ破毀となりて、宮城控訴院へ移されんとす、宿世如何なる罪ありてかかく執拗くまとふ禍ぞ、錆びたる鈍刀に胸元肩先のきらひなく、切り弄ばるゝにもまさるこの苦しみを如何にせん。

凡そ水の性は靜穏にして低きにつき障りなければ聲を出さす、遮るものなきに響を放たず、若し夫れ中流一岩の立つあり、河底俄かに下るあれば轟然として鳴り囂然としてひゞくべし、誰か此聲此響をもて水の性と批判するものぞ、そは蓋し太だ酷なり、田畠の間林野にかけ耕して食ひ漁りて飽き自然かゐへる無窮の産物に足ることを知りて一生を無爲に送



震災被害地の婦人

り得べき邊陬の婦人の身を驅りておふけなき中府の官廳にせまらしめはた一切の行動情に激するの極常軌を失する多からしむるは抑も時世と先覺の罪ならずして何ぞ。

凡そ人窮すれば父母を思ふ、飾り下ろさんとして懷舊の情に不堪、たらちねはかゝれとてしも我黑髮をなでさりけんと歌へる、僧遍照、汨羅の水に身をすてんとして、其親を追想せる箕子の心、昔をいまに變らざれば、況して暑さ寒さにつけ饑餓痛痒の何につけても聲をあげて泣叫ぶ、彼の幼子が一言の父母の慰めには、殘りなう忘れ去るぞかし、されはこゝの大火彼處の震災きこし召さるゝ毎に厚き御詞下し玉ひ、御手許の黄金さへ玉

はりて罹災者を慰め玉ふ、皇上の御仁徳至り、いたらぬくまなき世に、火災震災の一時の災ひとは事變り十數年來ぬるき火の油に入れて煮らるゝ魚より、まさりてつらき禍ひにかゝり乍らも世上の同情をひき得ず、漸く昨年夏以來僅かに人の耳目を惹しも是れら勢ひに趨り一時の事とて、今は早忘れたらん樣にすてられ、公けに設けられたる調査會もいつ解決のつくべくも見えず、此不思議の問題のよつて來る處を尋れば、今は昔慶長年間始めてこゝに脈あるを知りて、試堀されたる足尾の山其銅もて、名に高き日光廟の屋根の瓦にふかれしと聞く、其時節の事とて器械も備はらず、收支償ひ難きふしありて幾程もなく、中絶え居りしを、明治十年の頃今の鑛主古川氏の手に歸してより限りなき其富と力の屆かん限り、文明の器具に飽かせて堀り出されければ、昔十粒に碎きしものも、今は千百粒に粉碎して、含める限りの銅分をとり、他は渡良勢の上流に推し流すと、二つには神代乍らに鬱茂せる足尾の山の森林日に月に切り離けられてやがては赭とやならん、已に樹木

なければ山の上の土、雨ふる每に流れ落ちて河身を埋め、一年一里の割合にて運輸の便は止り行き、下流に沿へる村里の、肥料はかれ、その上に、毒分わけて乃より恐ろしき砒素毒を含める洪水來りて、動植物を枯らし、灰にも似たる鑛土を置去る事處によりて厚薄あり、此毒土のあらん限りは如何に人造の肥料を置いて、培ひ耕すとも、些の功もなく物皆枯死し了んぬ　彼劇甚なる鑛毒地に至たば十數年來積り〳〵し此毒土殆んど二三尺に至り古しへは、反每に九俵十俵を收獲ありし天下の美田も今や一粒の實りあらず、又藪などの鋤鍬入れ難き地に至れば根張り極めて强固なる竹すら、悉く根は枯れ果てぬ、此有樣なれば、成出る植物の中にも含める毒分夥しくそれを知りつゝ猶饑を凌ぐ程に日に〳〵色靑さめ呼吸せわしく疲れ衰へ、軀體は手足と共に骨細りて物の役に立つべくもあらず、婦女子は乳かれて粿粉の扱ひ左なきだに尋常ならずげに此世からなる叫喚地獄かな、されは衣食に窮する極は、持たる田畠賣らんとするにも　鑛毒ありと稱して誰とて買ふもの

なく、乳不足といへば婚姻上に難癖付きて取結ぶものなしといふ、其他尤も害を被る事多きは織物の染業の二上より之等は昔渡良勢川水清かりし時は川水の盡きぬ流れに晒し置けば勞尠くして功極めて多く糸の光澤他に類なかりしより、桐生足利とて國中類少なき其名所となりぬるをいまは、此水にさらせば彼の絹糸を絞る時發する一種の鳴り音らせ、糸質は爲めに弱り光澤又失せて用をなさずといふこれ等の被害擧げて數ぞへ難しされどこれをいへば、官にては被害民の言を誇大なりと言ひて取りあはず されば、今や二十萬の被害民は今や早旻天に號泣するの外なきがごとし。

婦人と職業（三）

危險に遭遇せざる人は
勇氣な保證する能はず

江湖生

▲女教師

女教員（茲には小學校の教員をいふ）もまた光明あり、光榮あり、希望あるもの、職業の一つで、其神聖なることは決して前述のガベチアスに讓らないのである。何しろ自分が教育すべき子女は——女教員の多く受持つ子女——は何れも七八歳頃から十歳位までの愛らしいので、世話の燒ける割に面白く樂しいもので、ガベチアスに似た所はあるけれど、異る點はそれよりも一層複雜なので。前者は多くて二三人の子女を預つて行けばいゝのだが、後者け數十名の子女を一堂の裡に收めて教鞭を執らねばならぬのと、前者は主從の關係になつてゐるけれど、後者は師弟の關係でやる。て、その資格の如きも前者の樣に唯高等小學全科を卒業すれば足れりとする理由には行かぬ。制規の年限を尋常師範校に費して卒業したものか、若くは是れと同等の學力を備へてゐて尋常高等の、何れにもせよ、檢定試驗を經て、教員免狀を有つてゐるものでなくてはならぬ。て、此の教員に正教員、准教員の二種あつて、正教員は高等科の檢定試驗を受けたもの、准教員は尋常科の檢定を受けたものとの相違だ。從つて その收入にも等差があ

る。甲——正數員——は一ヶ月最低額十月から最高額二十四五圓までは得らるゝが、乙——准教員——の方ては五圓位から十四五圓が止まりてある。尤も地方に依つては三四圓の准教員もあるソーだ。併し是れが他の職業と違つて美しく神聖なる教育事業だから、收入は自己の生活し得らるゝ程度まて得れば充分で、敢へてその多少をいふの必要はあるまいと思ふ。

▲貸本業

是れは處女の遣るべき職業てはない。良人は勤人の居間は大概留守勝てあるから、その相間を見て、妻たるべきもの丶唯遊んでゐてはと冥利を考へての營業て、身生持の身躰に餘裕のある人には適當の事業てある。て、貸本といつても到底高尚のものは出て行く氣遣はないから重に小說、探偵物、講談と此の三種に限られてゐて、重なる得意は書生、細君、店㽞、娘、後家、妾、病人と兎角は身躰が樂過ぎて唯ゐるのも退屈だからといふ手合が借りて見るので、畢竟は日暮し、氣晴らしに讀むのだから可成場面の變化の多い、面白いものを撰んで置かなければならぬ。先づ一番多く出るのが探偵物、講談物の二種だが、小說は不相變浪六、弦齋などのが受けがいゝ、それに文壇て大家といはるゝもの丶作も置かねばならぬ。今の人を露伴、紅葉を始めとして眉山、水蔭、鏡花、天外、風葉などから近頃賣出した蘆花、春雨などの作もなければ困る。又雜誌ては文藝倶樂部、新小說、文藝界、大阪の小天地等、是等は每號長短の小說が各二三種は揭載されてゐるから是非なくてはならぬ。そふするると資本も大分かゝるけれど最初の中は四五十圓あればいゝ、此金て右の種類を凡そ百五六十部だけ揃へて置くのだ、其他の新刊物はその發行の都度拔目なく新聞や雜誌の廣告に注意して買ひ入れるとすれば左樣面倒のことはない。尤も大掛りにするにはなかなか此樣ことでは行かないけれど、たから妻君の片手間仕事だから是れだけ遣れば充分である。

斯うして始めて其收入は何の位あるかといふに、何れも客次第だから一樣には云へないが、講談、探偵物の數は四日の期限てその見料は二三錢、小說類は同じく三四

錢、新刊物となると當分四五錢は取れる。是れを一日平均一部に付て八厘づゝとして總部數百五十部の内半數は動くとみて八十部を毎日貸附れば一日の收入六十四錢、一ヶ月十九圓二十錢の收入となる。けれども最初の内はなか〳〵左樣は動かないからマア絶えず三十部出てゐればいゝ方で、一日が二十四錢、一ヶ月六圓二十錢、是れに依つて三四人の家内から米代位は上つて來る。併も多い得意の内では得て貸倒れが出來るものだから小説なり、講談なり最初貸す時にその書物定價だけの金は擔保として預かつて置き、書物を返しに來た時にその内から見料を差引て渡すのだ。斯うすれば書物の持逃げをされる氣遣はなし、萬一された時にも直ぐ代りのものを仕入れることが出來る。近時何處の貸本屋でも皆此方法を實行しつゝある。兎に角、妻君の片手業としては奇麗で、割合に面倒でなくていゝ職業である。



▲産婆

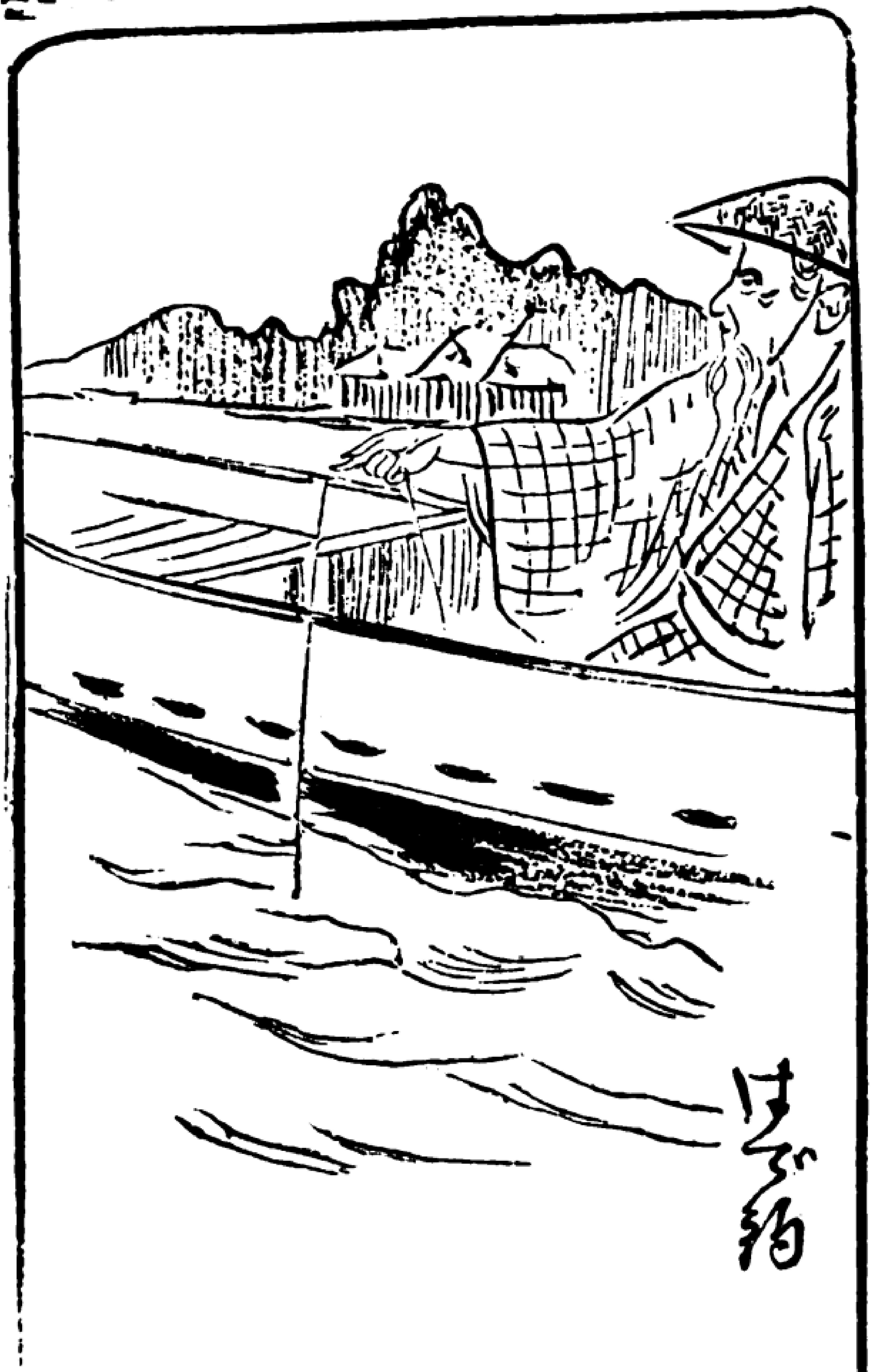
同じ職業の中でも此位小面倒臭いのは少からう。恰度男子の醫師の樣なもので、夜深更叩き起されることが度々ある。雖然また其中に言ふに言はれぬ樂しみのあるもので、生まれて來るものは何れも未來に大なる光明と大いなる希望と大いなる生命とを有つて出て來るのだから、それを我が手に掛けて現世へ出すのだと思

ふと一種の樂しさが胸の裡に漲ざつて來る、多く手に掛けた中に男なら、軈ては國家を料理すべき大臣の器もあらうし、一管の筆に天地自然の美を歌ふの大詩人も出様し、或ひは又經濟界を左右すべき大富豪もあらうし、若し又女でも、萬世に範を垂るゝ名媛、賢母もあらふ。

產婆の職業は爾く價値のあるもので、是等のことを思へば決して小面倒臭いと排斥すべきものではない。否、自ら進んで當るべき女子の職業として耻づべきものではない。然らば是れを爲すべき資格は如何。從來は隨分ともに怪しい產婆もあつたけれど、取締規則が漸次嚴重となつた今日では多年の經驗のみでは此職業を續けて行けなくなり、少くとも三年間位は專門の學理を研究して、後產婆試驗を受け是れに合格したものでなければ免狀を貰へぬのである。斯うなるには何樣ことをしても學費として三四百圓を要するのである。

さて試驗にも及第し、免狀も下附されて一人前の產婆たる資格を具へ、茲に始めて開業した曉には何の位な收入を得らるゝかといふに。その前、是れと大關係がある出產のことを調べねばならぬ。年々歲々人の死ぬよりも生まるゝ方が多いのは明らかに統計の示す所て、是れ國家の慶事である。て、此出產人口の多少に依つて大いに逕庭のあるのは自然の勢ひて、東京は有繁に全國の大都會だけあつて人口も最も多く、出產の數もまた非常なものて俗に一日の出產は百人と稱せられる。一日百人とすれば一ヶ年十萬八千五百人の出產がある譯で、この出產は何れも產婆の手に掛らねばならぬのである。是れに對する產婆の數は千數百人で、一人で凡そ千八百人の取上げをする勘定となる（以上の中貧民て產婆を雇ふことの出來ないのもあらうと、又、非常に輕くつてその手を煩はさないて濟むものもあらうから、必らず左樣と斷言することは出來ない。又其產婆の技倆と評判とに依つて賴みても違ふし、場所の如何も大いに關係して流行るのと不人氣のとて收入の差もあらう。が、その收入はといへば、先づ懷胎五月の（岩田帯）の時に御祝儀の最下等は十錢て最上等は四五

圓にもなるけれど通例は五十錢と見て、それから臨月まで毎月二三回宛見廻りに行けば車代としてその家柄によらうけれど平均一回二十錢、帶月から臨月まで十回として二圓、愈よ臨月となり分娩する場合には必らず米一升と鰹節とは古來からの定めて、別に酒代又は肴料として目錄が出る、是れは大方五十錢位、さて產も輕く濟んで最後の謝禮の包みは元より一樣には行かぬけれど二位圓には當る。是れに依つて計算すると出產一個に付平均五六圓の收入となり。一ヶ月十人手に掛けるとすれば五六十圓にはなる。是れより進んで中等、上等の產婆となると其出入する家が何れも上中等に位してゐるので、上等は一と出產に付二十圓から三十圓に達し、中等でも八九圓の收入は必らず得らるゝのである。是等から押して行くと女子の職業として產婆もまた上の部といつてもよからう。



▲煙草店

唯、煙草屋といへば製造から卸賣、小賣といろ〳〵あるけれど、玆には「貸本屋」と同じて妻君の片手間にするのを言ふのだから、極く〳〵小さい小賣のことを紹介するまでに止めて置く。

世の中に何の商賣が多いとて小賣煙草屋位多いのはあるまい。一町內に少くて二軒、多いとなると四五軒は必らずある。是れを見ても如何に我が邦の人は煙草を

嗜むかも知れ様。さて此等の店を開くには何の位な資本を要するかといふに、大概二三百圓あればまア遣つて行ける。先づ人通りの多い表通りを撰んで一軒の家を借るとすれば此敷金が廉くて三十圓造作買受けに五十圓、店の棚附又時計、火鉢其他の店飾りが凡そ六七十圓、是等を併せると百四五十圓になる、殘り百十圓乃至百三五十圓を以て煙草の仕入に充てる勘定だから充分の品物を置くことが其來ない、そこで空箱などを積並べて躰裁だけを誤魔化して置くのださて。その賣揚は、場所柄の善い所なら一ヶ月百圓以上にもならうけれど大抵の店では五十圓乃至七十圓が關の山だから、平均六十圓の賣揚としてその利益を計算して見ると日本巻煙草が二割、刻煙草が一割五分、ホーク、コイン其他の木村製一割、ヒーロや其他の村井製が同じく一割、カメオ、アツキス、オールドなどの舶來物は僅かに五分といふ利益だから、此平均は一割二分と見て賣揚六十圓に對して七圓二十錢の利益しか得られぬ。此の金額が一ヶ月の利益では僅かに家賃を拂つて行くのが漸くのことであるが、是れは新店に就て調べたので漸年數を重ねて行きさへすれば一家の小遣と米代位は得ることが出來様と思ふ。尤も煙草の多く賣れて行くのは秋から翌年の三四月頃までゞ、夏季になると何れの店でもその賣高を減じて行くソーだから、一定した所は茲に斷言することが出來ない。

女子の職業といつた所で、以上掲げ來つた種類に盡されたのではない。まだ此外に新聞記者(最近行はれて來て、現に萬朝報、報知、國益等に從事してゐるものもある)、小說家、裁縫等があるけれど、餘りに長くなるからそは他日に讓ることゝして一と先此邊で筆を擱くことにする。

(完)

譬へ裸身にて嫁入るともよく、家を治むれば萬金の持參に勝たり

庖厨小言

鶯溪女史

▲下婢の徳義(無責任)

下婢は家庭の和樂を扶けて行くものであるから、決し

て等閑に附すべきものてはありません、併し下婢といふものゝ地位は日本に於てまだ十分に認識されて居ません。一と口に下婢と申しますがこれは家政の補助者てあり、又庖厨機關の運用者てあれば家庭に於ける重要なるものと見做さねばなりません、けれども日本に於ては古來の習慣からして下婢といへば兎角賤しいもの、劣つたもの、又智慧が無くて唯主人の頤先て追ひ使はれて居るものとばかりに解釋されて、少しも下婢其ものゝ地位が見認られて居ないやうてあります、これは大變に間違つた事てはありますまいか、今日文明の世の中ては臺所の整頓といふ事が、家庭和樂の一元素てある以上は、その臺所の運用を司どる所ろの下婢の地位を、そう無造作に見過してはなりません。

下婢の使い方、敎へ方、又勤め振り、働らき振りなどゝいろ〳〵六ヶ敷い事がありますが、日本の習慣風俗は下女を下女として追ひ使ふばかりてあるから、唯主婦が八ヶ間敷いふばかりて仕事が上りません。歐米の家庭のやうに、一定の規律があるとか、又は十分に其人を信任して萬事に責任を持たすといふ事がないから、主婦は毎日氣ばかり使ッて居る、下婢は唯骨ばかり折つてゐて、それて格別家の治りがつかないといふやうな按排てあります、これは双方共に大なる間違てあらうとおもひます。一體世の中の事は何事に限らず、させる人に責任を持たすといふ事が一番肝腎で殊に家の内て人を使ふにはその人に責任を重んずる感念がなくては何事も埒は明きません、縱へば夜が明けてから、今日は天氣が好いから洗濯をしろと命令した處ろが、さア旦那のお寢卷は何所にある、坊ちやんの涎掛が見へませんなぞと押入を掻きさがしたり、石鹼を尋ね廻ッて居るうちに午前になッて肝腎な日光は傾いて仕舞います、それよりは洗濯すべきものは洗濯すべきもの、綻ろびた物は綻ろびたものとそれ〳〵前以て取まとめて置いて明日の日和を見て前夜に溫湯にでも浸して置くやうてなくては仕事の順序は立ちません、これが下婢の氣轉といふもので、つまり家の事一切任せられたその人の腹から出た働らきてなくては決して善良な家政の

整理者とは申されません。每日のお菜でしらへにしても又客來の節に出すべき御愛想にしろ、大體の事は自分の氣轉でして行つて奧樣の指圖や手數を煩はさぬ位にして行くのが本當の下婢の役目でありますが、今日の處ろ左樣に參らないのは第一下婢たるものゝ地位が低く、且つ無教育であるから、自然と事に忠實といふ念が乏しい、そこで萬事の信任が置けない點もありませうが、又一つは主人の方で兎角下婢を輕蔑して責任といふ事を少しも持たせないからてあります、それで使ふ方では年が年中小言をいひ、使はれる方では每日膨れてばかり居るといふ、小言をいへば膨れる、仕事がぬるければ誹ると、そんな不忠實な事では決して家の治りがつくものではありません。若し西洋風に家婢が一家の事をやつて行けば給金は今日の三倍四倍出しても却て經濟であり、その上、家の品格も數等進みませう。何も下婢が無教育であるといつて打捨て置くべきものではありません、常識さい備はつたものであれば、今日日本の中等社會の家庭の事を打任せて決して差閊へる事はない筈です、されば傍ら導き、傍ら信任して使ふたならば見事家は治まつて行きます。どうか新家庭の主婦たる人は此の邊に御注意ありたいものです。まづ今日の下婢の使い方の一例を申せば、下婢が皿一つ破しますと、御主人から眼の玉の飛び出るほど叱ります、下婢はそれがいやさに恐ろしさに破した事を默つて言はずに於いて內證で新らしいのを買つて來ッて、そつとして置くのです、さてそのお錢は何處から出したかといふに、これは買物の節くすねて置いた金であッたといふ。まことに馬鹿らしい御話ではありませんか。西洋あたりでは決してそんな馬鹿氣た事はないのみか。空費して行く時間の上にすらそんな陰日向はありません。皿何十人前庖厨の器具幾種、これは自分が此の家に雇はれて居る間の自分の財產であるから一つ破れゝば自分の財產が減ると心得て自分の物として取扱を鄭重に仕ます、それから又主人の方でも、盃小鉢は破れるものと見て、鄭重に取扱へば扱ッたやうに、年中の成績を見てそれだけの保險料として賞を與へますから

一つも家の費になる事はありません。家の費はつまり國の費ですから、歐米の下婢は坐ながら國益を傷しに居るやうなものであります。自分の物として遣ふ一圓のお金は他人のものとして遣ふ三圓五圓よりも尊く、自分の時間として働く一時間は他人に使はれる五時間六時間よりも大切であるから、歐米の下婢は日本の下女のやうに主人の眼の屆かぬ所ろは徒に遊んでゐるなどゝいふ事は決してありません、されば何卒ぞ家に下婢を置かれる方々はその下婢に十分信任を置き十分責任を持たせて、家の事を自分の事として働かせるやうにせねばなりません、他人根性の下婢を家の内に置く位ならば寧ろ置かずに主婦が自身で烹炊した方がよろしいのです。

我國でも下婢の善良なのは、主人に仕へてよく働らき、仕事の捗取のを樂しみとして、時間の經濟、品物の經濟、家の秩序を立派にして行くのがありますけれども惜しい事には主人の方でそれを十分に見て遣らず、矢張通り一遍の雇人として待遇して少しも前途を見てやらぬのがあります、又主人の方で十分目を掛けて教育し、いたわり、眞實行末の力にもなつて遣らうとおもつても下女の方が一向不束不忠實ていけないのがあります、双方ともよく心掛たいものであります。

▲婚禮の費用（大金の行くえ）

今の世の中で凡そ不經濟の骨頂と申せば婚禮の費用でありませう、元より婚禮は人間一生の大禮であッて見れば、鄭重の上にも鄭重にせねばなりません、けれどもその鄭重と申すのは、單に形式の上ではなく、相互の精神上に鄭重の旨を忘れてはなりません。又その形式の上でも今日のやうに唯儀式を盛んにしたり、習慣上の贈遺に無用の費用をかけて、却て、伉儷の大儀を等閑に附するのは甚だ歎かはしい次第といはねばなりません。然る處ろ近年は都會、田舍に限らず一般に生活の程度が高まつて十年前に贅澤とした事柄も今日では普通となッた程で隨て婚禮に大金を費す事が一般の習

慣となりました。

地方の農家などでは年來倹約一偏でこの家を持ち耐へる習慣であるのに拘らず、いざ婚禮となると隨分思ひきつて金を費ふやうであります。東京附近で二三萬圓位の財産家でも娘の結婚に三千圓近くの支度を整へるのは今日一般の例で、其都度呉服屋の潤ひとなるのが半分以上、それから下つて一萬圓内外の身分でも、帯一筋に百圓近くの金を掛けるのもあれば、下着一枚に何十圓といふ價を拂つたのが幾何もあります。近年益々此の流行が盛んになッて、それでなければ、嫁入つて肩身が廣くないといふやうな譯で。嫁入支度に金を惜めば。身すぼらしくて行けないといふ、又支度が充分ならねば、折角の良縁も結ばれずといふ何とも困ッた習慣であります、娘を持ッた親の迷惑は一と通りでないながらも、これも世の流行とて、如何とも致し方なく、心弱い人々の情としてその習慣、風習に打勝つ事も出來ず、迷惑と知りつゝ、矢張その流行　逐はれて居るといふほどの次第。實に惡弊と　いはねばなりません、斯樣な惡弊は親々の迷惑は申までもなく、嫁入る當人に取つても、迷惑であり又行々夫婦となりて將來家庭を組織する一家の上に取つて何の益にもならぬばかりか却て家の爲めに不利益を來す原因となる位のものでせう。可惜大金を費やして將來の爲めに不利益を招くといふやうな。そんな惡弊は一日も早く戒しめたいものです。

娘三人あれば身代倒るとの諺があります　日本では嫁入仕度といつて昔しから是れに費用を掛けたものだ嫁入に仕度が立派でなければ自づと子女の肩身が狭いやうに思はれその惡習慣が今日に至つていよ〳〵甚だしくなりて、實際地方などでは家に三人の嫁があれば、大概な身代ではその嫁入仕度に倒ふれて仕舞ふ位であります、况してや此の節では女子に學校の教育が必要となッて、從來ならば、十二三歳にもならば、母親の手許で縫物を教へ、煮焚を教へ、行儀作法を教へてそれでよかつたものが、今日では、小學校を畢れば、直ぐ高等女學校へ出て四五年の間は家政だの、裁縫だの、料理だ

の、躰操だの、いろ〳〵の課目に追はれて中等社會で娘一人前にするには中々大金のかゝる其の上に婚禮仕度て、何千圓といふ巨費をされては親たる者の身の續いたものではありません。

今日婚禮の入費と申せば何でありませうか、まづ衣裳が第一で、それから器物、調度、頭髮のものから、夜具、その外いろ〳〵ありませうが、まづこれは他日殘るものとして、その他一時の儀式に費えて仕舞ふ入費も又少からぬ金でありませう。地方では婚禮は七日の祝儀と申して、初日から終りの日まで一週間がほどは毎日客を代へて宴を開くといふやうな風俗になつて居ります。これは元より富豪家の事でもありませうけれども尋常普通の家々でも三日が間は必らず燕を開いて客を致します。この費へといふものが小身代にはなか〳〵少からぬ倒れてあります。娘を遣る方でも嫁入仕度で双方の兩倒れとなる譯で、それが爲めには、少々の財産を附て貰つても、貰ふ方で引合はぬといふのもあれば、又少し身分のよい所へ遣るには、娘を片付る爲めに自分の家の田地を大半賣拂つて勝手向が左前になつたなどゝいふ話を到る所ろで聞きます、双方共に不利益千萬な事で、其の不利益を承知しつゝ、猶、やつて行かねば世間の義理が濟まぬやうに思はれてゐるのは、如何にも馬鹿らしい譯ではありませんか、凡そ世の惡弊といつても、これほどな弊習はありますまい。實に不經濟千萬の事で國家の大害といはねばなりません。

一躰斯樣な事は銘々の勝手で政府から立入つて制限をする等の事は出來ないにした處ろが、心ある人々は能く〳〵前後の利害を考へて世間の風潮の外に立つ勇氣がなくてはなりません。假りに今日の資産家の格で三千圓の嫁入仕度に遣ふ處ろを千圓に減じて餘りの貳千圓を公債證書か又は銀行預にして置けば毎年何程かの利息も附きませう、殊更人間の一生は有爲轉變で浮沈榮枯の定めない世の中であれば今日榮華の身の上も他日どんな事で墓ない身の上になる歟も知れません。その時に譬へ錦や金襴の裲が幾重ねあッた處ろが何の役にも立ちません、こんな時に嫁資の貯蓄でもあれば

それが直ちに活きて働らくのであります。されば嫁入仕度に無用の費へを省いて後日の計を爲すのは嫁その人の生涯を安全ならしむるの好き方便であります。

これは元より榮枯盛衰の上から見た考てありますが、譬へそうなくとも、今日どんな富豪の娘でも一旦他家へ嫁入つて仕まへば身についた財產といふものは一つもないから、何となく心細くて何も角も夫に服從せねばならぬ、且つその生活は一切夫の財產收入に依賴して居る故、主婦としての地位は實に憐れむべきもの、若し不幸にして良人に先だゝれるか、又は離緣にでもなッて親里へ歸へる事があると想像して御覽なさい。その時親里の有樣はどうでありませう。惣領に嫁が來て小供が出來



紡績工場（婦）

れば、最早里とても以前のやうに我儘は出來ず。兄の家に寄食人で辛い思をせねばなりません。そんな時に嫁資の貯蓄でもあれば、との位心丈夫でありませう。

世間では嫁入は一生の晴れであるし且その時に調へて遣る衣裳器物は親からしてその娘に與へる財産の一つてその財産は生涯娘の身に着いた物で、金錢ならば時として先方の人(夫)に費消はれる恐れもあるが衣裳にして置けばその心配もない一番安全な物だとも考もありませう、けれどもこれが大變な誤解かとおもはれます。成程衣裳にして置けば金錢ほどには自由が利きませんから夫に消費る憂は尠いとした處ろが、その衣裳といふものには時々の流行といふものがあつて今年の

人職業繪（



新意匠も來年になれば流行後れとなつて百圓の價がしたものも賣る時には二三十圓にもならぬのが一般の例て桐柾目の簞笥檜の長持に遣入つて居る時は何千圓の價があるものと安心して居られませうが扨てこれを實際財産として眞逆な時の役に立てやうとする時には二足三文で思つて居た五分の一にも當らないのが多い。誠に泡のやうなものであつたとは世間に零落た人の身の上を聞くまでもない事でせう。又金錢ならば夫に消費されゐ恐れがあるといふけれども、今日でも民法上て十分夫婦の財産上に規定があるからこれを妻の財産として一生涯の大事變に遭遇せぬ限りは何人も手を付けられぬやうにして置けば、これほど安全で又堅固な事はありません。世間では夫婦で財産を分けて置くは家に風波の起る因だと申ますけれども、妻に特別の財産があつて十分それを保護して行くのは萬一の用愼てつまり良人の身の爲め家の行末の爲であります。どうか世の父母たる人はその娘の爲めに末々の利害を考へて嫁資貯蓄の計をして遣られなければなりません。

嫁資は無用の虛飾

又この嫁入入費に就ての附加への御話でありますが世間で娘を嫁入らせる、その時は一生の晴れといふのて、簞笥幾棹、長持幾棹といふて兎角その數の多いのを晴れとする隨て一時に多くの衣裳を調へる。是れが實に日本の惡習慣で、又不經濟の極度でせう。小袖一襲に何十圓、帶一と筋に幾百圓とかけた、その晴衣裳を嫁入つた後一生涯の內に何度着る時がありませう。恐らくは婚禮當日着た切りて後は唯、夏冬の虫干に出して見る位が關の山でせう。可惜衣裳は年中簞笥の底に葬られて仕舞ふのがどの位あるか知れません、實に惜しむべきと申そうか、世の中の費へと申さうか、世にこの位不經濟な事はないのです。世間の義理とか、附合とか、顏とか、娘の肩身を廣ろくする爲めとかいふ、つまらぬ習慣の犧牲になつてゐるのであります。

嫁を撰むは人物が第一

動物の虐待禁止

（帝國教育會茶話會にて）
文學博士　加藤弘之君

此頃一種の社會問題として動物虐待防止會なるもの成立せり其主旨は至極結構なることなれども虐待の程度如何に至りては大に議論のあるべき事なるべしと信ずるが故に暫らく我輩が考ふる所を述べんに昔より動物虐待を禁じたるは佛教を以て最とすべし其說に依れば總ての動物にも佛性あり有情のものは未來に於て佛になり得るものなり而して人間も均しく動物の一種なるが故に人間は他の諸動物の上に何等の權利をも有し得べきものに非ず故に人は啻他の動物を殺して之を食ふこと能はざるのみならず之を使用することも爲すべからざることなりと云ふにあり併しながら是は專ら出世間の人間即ち僧侶のみに對する戒律にして俗人に對しては必ずしも然らずして多少寛嚴の相違はありと雖も要するに其旨趣の存する所は異ならざるものゝ如し

扨今日所謂動物虐待と云ふことは實際何の位の程度の事なるや判然せざれどもマサカ佛說に唱ふるが如く甚しきものには非ざるべし虐待も意味の取り樣によりては色々に解釋せらるゝなり動物虐待の最も甚しきは之を屠殺するにあるは論を俟たざる可きが故に考へ樣によりては衞生の爲めに吾人が鳥獸を屠つて其肉を食ふことは虐待の最も甚しきものなる可く又月給も遣らず無償にて牛馬を使役することも亦虐待たるを免がれざる可し然れども斯の如きは決して動物虐待防止會の精神には非ざる可く要は唯無殘の殺傷苛酷の使用取扱を爲さゞるの意味にて人間の滋養の爲めに其肉を食ひ人間の便利の爲めに之を使用するを禁ずるものには非ざる可きを信ずるなり抑々太古に遡つて國家成立の起源を尋ぬるに其一原因は猛獸の侵害を避け之と鬪ふ爲に人類の一致結合を促がせるに相違なく若し佛說の意義に從うて一切動物虐待を爲さゞりしならば吾人々類は今日迄に絕滅に歸せしやも知る可からず幸に人類の優等なる智力ありて他の動物を征伐して今日人類社會の隆盛を來たせし事なれば現今世界の文明は一は動物虐待に因りて得られたりと云ふも敢て過言に非ざる可し今日にても野蠻の地方にては尙ほ未だ猛獸を狩り盡し得ずして之が害毒に苦しみつゝあるもの尠からず此點より見れば動物虐待の巧妙なる人類が開明の人類なりと云ふこを得べし

佛者は曰く昔法然上人は嚴に殺生戒を守りたる人にして上人一生の間には蚊の脚一本をも折りたることなしと之れ一の方便たるべきも馬鹿氣切つたる次第にして人類は何の故に他の諸動物の侵害を斯く絕對に甘受せざる可からざるやは吾輩の解釋に苦しむ所なり當今佛教社會にて高德の名嘖々たる雲照律師は說て曰く人修養を積んで内心一點の邪念なきに至れば猛獸毒蛇も些の危害をも加ふるものに非ずと余は之に答へて律師は一代の高德なれば修養に於て足らざる所あらざる可し望らくは律師親しく上野或は淺草の動物園に行き躬ら猛虎の檻中に投じ以て其功德の顯著なるを硯せしめよ然らずんば單に空論のみにては余は之を確信する能はずと云ひたりしが實際は流石の律師も虎は懼しいと見えて遂に其事なくして止みたり

右にも述ぶる如く丸ッ切り人間が他の動物を殺さない使役しないといふことは畢竟出來ない相談であるとすれば虐待防止は結局何の位迄に止む可きかといふ事を豫じめ定めざる可からず我輩の考を以てすれば何處迄も人間の生存、利益を目安に立て人間の利益の存する所迄は虐待す可く利益なき所に至つて之を止む可し人類は勿論明かに他の動物を虐待す可き權利を有せずと雖も自己の生存の必要に應じて之を虐待す可き權力を有するものなればなり

然り人類は或る程度迄即ち利益の存する程度迄は動物虐待も必要なりとして扨其利益の程度と云ふ事に就ても亦幾多の問題を生ず可し例へば兒童が蟬や蜻蛉を捕へて翼をムシリ目玉を引拔きなどする樣なことも全く無益の事の如くなれども或は強て是に理屈を附けて兒童

の心神を娛しましむるの利益ありと云ひ又は能く夏向きの料理に鯉の生作りと稱して魚の片身を切り取り之を刺身にして其上に載せ尾鰭をパチ〱させながら膳に上せて鮮しいと云うて賞玩する等の事あり是も强て理屈を附けて新鮮にして衞生に宜しと云ふかなれども是等は二ツながら吾輩の賛せざる所なり如何となれば此の如きことは吾人の生存の上に餘儀なき必要に非ざればなり

前例を以て殘忍の所行と云ふも何人も異論はなかる可しと雖も玆に猶ほ一つ解釋に困難なる物あり蛤蜆の汁を好み屢々之を食することなるが此物ばかりは死するを待つて料理する譯に行かず夫にては味も惡るし又往々中てらるゝこともあるが故に是非共生きのよき內に之を料理せざる可からず是れ甚だ鯉魚の生作りに對して前後矛盾の惑ありと雖も又熟ら考ふるに諸動物の中にて人間に近き物程同情を寄するもの多く遠き物程同情の薄きものなれば鯉の生作りを食ふは情に於て忍びざるも蜆汁に至りては餘り多く人間の惻隱を寄せざるが如し故に此邊の程度は專ら普通の常識人情に訴へて判斷すべきものなりとす猶ほ一言す可きは動物を虐待せざる事が反て人間に利益となることある事なり歐羅巴に於ては統計上殺人犯は比較的屠獸者に多數なりと云ふこは單に歐洲のみに非ずして我邦に於ても恐くは然る可し是に就て一話柄あり舊幕時代に麹町に山田淺右衞門と云うて首斬を專門にせし者あり當時士人が刀劍の試しを爲さんとする者は大槪之を淺右衞門に託せと云ふ位にて隨分腕の達者な男なりしが此男一日他出して夜に入り歸り來りけるに丁度母親は行燈の傍にて頭を垂れて針仕事を爲しつゝありけるを淺右衞門圖らず之を見て其頭の垂れ工合の餘りに斬るに宜しかりし爲めは思ず刀の柄へ手を掛けしが急に心付きて其母なるを知急に思ひ止まれり是より淺右衞門大に惡ずる所あり其職を人に讓りて生涯隱匿餘生を送りしと云ふ習ひ性となるの諺の如く平素動物に對して殘忍なる所行を爲すときは遂には肉親双を加ふるを敢てする樣になりて結局人類社會の利益に反することなれば此種の利益を保護する爲めにも虐待防止を奬勵したきものなり此外に醫學上虐待を必要とする場合屢之れありと雖も多くは人類の利益の爲めなれば之を防止するの必要を認めす

最後に遊獵の事に就ては虐待防止の旨趣に反するが如くに解する者ある由なれども我輩の考を以てすれば國家の隆盛を企圖するには主として青年の元氣を鼓舞するを要す而して元氣鼓舞の爲めには山野を跋涉する等の事は最も必要の事なるを以て遊獵は總て之を禁ぜざるのみならず寧ろ之を奬勵す可きものなりとす

動物虐待防止の事に就ては猶ほ幾多の問題も起る可しと雖も要するに人類の生存利益の必要に應じ常識にて判斷し殘酷に涉らざるの程度に於て之を殺傷使役するも敢て差閊なきを信ずるものなり

日本の生活

統計審査官　呉文聰君

富國强兵と能く人はいふけれども强兵の方は海陸軍の擴張で或は出來るかも知れないが富國といふとは中々六ケ敷いのである、日本は大体貧乏であるが其貧乏といふのは日本の分子即ち吾々が貧乏だかなだ、吾々の貧乏は何故かといふと先づ第一に家賃が高いから少々ばかりの利益は皆家賃に取られてしまう外國へ行くと建築物は立派だ東京では帝國ホテルや日本銀行のやうな物が第一か知らないが外國へ行つて見ると東京地方裁判所や大審院日本銀行のやうな建物は門並みだ、此建物は一個人で一ツつ、所有して居るのかと思うとさうではない大きな資本家があつて家を立てゝ其內を一ト間づゝ貸して居るのですから外國へ行つて見ると隨分面白いことがある入口を這入ると右の一間が日本の領事館で向ふの一間が大倉組といつたやうな譯で堂々たる一國の領事館が貸間の家に居るのがある、然ふいふ工合で其代り比較的經費が掛らない安く上がる夫だから日本でも資本家があつて大きな建築をして其內を一ト間づゝ貸して吳れるやうにしたら立派な家に住んで家賃が安く上がるだらう吾々は社會平等主義を鼓吹するが決して吾々は金持を叩き壞して分捕りをしやうと云ふのではない、金持は金持で進むと共に卑い階級の者が生活の程度が高くさへ成つて來れば夫で宜しいのである故に、大きな財產家が大きな家を立つて安く貸して吳れさへすればば貧乏の者が生活の程度を進むる一端に成らうと思ふ、今米國と日本との國民が生活の程度を對照して見ると實に情けない、是は一年の間に家族があつてどれだけ金を使かうとい

ふ亞米利加勞働者の有様を調査したものであるが、

一ケ年百圓の所得として内譯が

六十二圓	食物
十六圓	家賃
十二圓	被服
五圓	教育費（子弟の）
二圓	餘興補
一圓	諸税
一圓	衞生
一圓	慰み

斯の如き割合になつて居る、此内食物が三分の一で濟めば生計も樂てあるが表の如く百分の六十を食物に費消するやうでは跡に餘裕が無い、是が亞米利加生活の有様で、所て日本の生活を一つ統計で示して見ませう此表は昨年大藏省て官吏は月給が同じて物價には高低があるから生活の程度は何うであらうといふので京都、横濱、長崎、新潟、宇都之宮、仙臺、郡山、長野、廣島、丸龜、熊本、鹿兒島、各地に就て取調べ其結果の表であるが今三十圓の月給の人、一日一圓の人を以て標準として是を百分比例をして見ると其百分の五十だけは食物、着物に百分の十四を使ひ、炭薪に百分の十四を使ひ其他に錢額を使ふといふ譯になる是を亞米利加の率に當てる

三十圓の月給の内譯が

十八圓六十錢	食物及び湯錢髮結錢塵捨賃子弟の教育費交際費を含有す
四圓八十錢	被服
三圓六十錢	家賃
一圓五十錢	炭と薪代
六十錢	神詣及寺へ納める諸入費
三十錢	衞生費
三十錢	自分の慰み

斯ういふ有様であつて迚もお話しに成らない、先達も北信地方を歩いて見ましたが一町餘方の田地を持つて居る百姓に度々聞いて見た、一丁四方を持つて居る百姓は子弟を中學校へやることが出來るかと問ふた所が、ハイ中學校が近所にあればどうかかうか出來ますが若し四里でも五里でも先きに學校があるとすれば通學をする事は出來ないから下宿でもさせなければ成らぬから其入費は迚も出ませぬと答へた、一町四方と申すと二人位いの百姓ては働き切れぬ田地である夫に中學へ通はせるだけの利純が無いとすれば三十圓の月給取ては迚も中學へ子弟を入學させる事は出來ぬのであります、同じ三十圓を米國に於て取るとすると餘程樂に成る何故なれば家賃が日本に比して非常に安い、安いといふものは前に云ふ如く米國は大資本家が大きな家を立てゝ其中に安く住はして吳れるからであつて夫から炭薪の代が要らぬ、是は一軒の大きな家であるから一方に熱を起して各室に送るやうに器械が装置してあるから寒中にも炭は入らぬ又日本の様に米を炊いたり味噌汁を煮ないで出來て居る麵麭を買つて來て是にバタを附けて食し熱の要るのはソツプを暖める位いのものであるから炭薪代と家賃に餘剩があるに由つて自分の樂みとか教育費の方へ其金を廻すことが出來る衣服の金とてもさふてあつて人間の一番儉約なし易いのは衣食住の内で衣に限る、少し惡いのを着るやうに心掛ければ右に示した金額より毎月餘剩が屹度出る夫だから日本に大資本家があつてドン／＼大きな建築をして是を安く賃貸をして吳れて自分が米國の如く食串に臨らず衣服其他に儉約したなれば吾々の生進程度追々に富有と成つて來ます富有に吾々が成れば即ち富國といふ事に成るのであるから大資本家は宜しく蓄殖をして貰度夫から外國には百萬、千萬、一億といふ財産家が澤山ある、所が日本には指を折る程しか巨萬の財産を蓄へて居るものはない是は何故であらうか、勿論富の程度が卑いからであるが、一つは日本の社會は自然的財産平等に出來て居る、私共が改めて財産平等を鼓吹しないでも社會の事情がさう出來て居る、假令ば親が死んで長子が父の財産を貰へば弟や妹は皆兄さんの所へ轉り込んで來る而して其財産を皆んなして喰潰すか若くば借りて行つて仕舞う、折角父から財産を貰つて是から益々其富をなさうと云ふ場合に成ると親類の者が其富を減らして行く故に日本の貧富の懸隔は比較的平等であつて稍もすると日本の人は私は叔父さんがある乃公などは兄貴があるから安心だ姉が居る從兄が居ると大勢の肉身が一人の財産家に縋るのが日本人の常だ外國ては決してさうて無い父から貰つた財産は弟であらうと妹てあらうと決して手は附けもせない父目下に貧窮の者があるとしても其貧者は決して長者の者の財産を貰つて取るやうな事はしない、だから段々溜る者にはドン／＼溜つて來て貧窮の者は益々助けて吳れる者が無いから貧窮に陷るので富の懸隔が甚だしくなつて居るさて外人が富者に傾らず困つても獨力を以て社會をやつて行く氣象は實に結構な譯であつて日本人の如く稍もすると親戚を當てにし甚だしきに至つては他人をまでも當てにするといふ氣象は少なくも矯正しなければならぬ云々。

英語實習（會話）

江口擔舟

ON THE LADIES UNIVERSITY.

A. Where is the Ladies University?

B. It is situated in Koishigawa.

A. When was it established?

B. It was opened in April of last year.

A. What is taught in it?

B. Well, the lessons are divided into three classes, namely, Domestic economy, Japanese classics and English.

A. What grade can enter it?

B. Those who have graduated from Higher Girls Schools.

A. Are gymnastics taught there?

B. Yes, Dancing, Tennis, Croquet, Bare-ball, Ring gymnastic and many others.

A. Is there a preparative class?

B. Yes, a Higher Girls School.

A. How many students are there now?

B. Just four hundred in the preparative class, and rather more than thas number in the regular course.

A. Oh! it is then very prosparous!

女子大學校

甲。女子大學はどこて厶り升か。

乙。小石川に御坐ります。

甲。いつ創立ので御坐りますか。

乙。昨年四月から始まりました。

甲。どんな事を敎える處で厶りましうか。

乙。左樣で御坐りますねー。家政國文。英文の三科に分れて居ます。

甲。如何位の者なら入れ升か。

乙。高等女學校卒業の御方なら。はいれます。

甲。やはり躰操などもあり升か。

乙。はい舞踏や庭球やクロッケーやベースボールや木環躰操やまだ外にいろいろの事が厶り升。

甲。豫科が御坐りますか。

乙。はい高等女學校が御坐ります。

甲。只今生徒の御方は如何程位。いらつしやいますか。

乙。高等女學校の方が恰度四百名で御坐りまして大學の方が其より。も少し多う厶ります。

甲。へー大層盛な事て厶り升ねー。

才媛詞藻

懸賞披露

文學士 大町桂月先生選評

《天》秋風　　河内國北河内郡津田村 河崎さく

捨てられし子は飢になけど渡良瀬の
　河のつゝみはたゞ秋の風

評、鑛毒事件を諷詠して、哀切、痛切。(桂月)

《地》月　　大村鈴田 吉田みね子

仰ぎ見てまたうつむきて幾度も
　眺むる夜半の月の悲しさ

評、李白の擧頭望山月、低頭思故郷の概あり、(桂月)

《人》老翁　　河内 大矢たね子

手にもてるものをたづねて幼子に
　わらはるゝまで老ひにけるかも

評、手に持ち居りながら、何處にあるかと問ふ。まうろく老爺の悌、言外に躍動す。(桂月)

《秀逸》(秋風、月、老爺)

梅壺につま琴のねのきこゆなりふけゆく夜半の大宮の月　　愛知 彩錦女史

評、古くさけれど、流麗也。(桂月)

やれ舟の板子三つ四つうちよせて夕波さむし片はれの月　　横濱 長谷川さく子

評、光景凄涼、(桂月)

病む舟の歩足をたどるほどもなくまたおどろきぬ夜半

の秋風

屍やくけぶり一すぢ野のねしに片なびきして秋風ぞふく　河内 櫻井喜子

孫の手にみちびかれて笑ましげにめくらの翁の寺詣する　大阪 山本ひで子

薬の根をあさる翁の眉しろし松葉こぼるゝ谷の苔みち　河内 櫻井喜子

金字塔影ものすごく照る月にありし世しのぶ埃及が原　横濱 長谷川さく子

荒磯の十里人を見ず鳥を見ず波をならしてあき風のゆく　河内 櫻井喜子

風をりく卒塔婆にさはる音のして秋の夜すごし墓守りの宿　陸奥 角鹿まよ子

琴の役つかうまつれと強られて月に耻らふ我が思ひかな　横濱 長谷川さく子

ほとゝぎすなきすてゝ行く山の端に二十日の月はさしのぼりけり　伊勢 河原芳子

罪人をのせし車のゆく見えて秋風さむし西比利亞の原　長野 今溝ふさ子

罪ひとを西にのせゆく船見えて三日月さむし佐土の島山　小石川 成瀬やへ子

我脊子の都にいづるこのあさけわかつ袂に秋風のふく　磐城 内山ふさ子

おのが身のさかりすぎたる老人のひさぐもあはれ八千草の花　高知 竹村よし子

渡もる翁にむかしとひにけり河中島のあきのゆうぐれ　河内 大矢勇尾子

たそがれて去らん去らじと思ふ間を草の庵の月になりゆく　大阪 酒井み代子

師の君を年經てとへば眉白ういとゞたふとく仰がるゝ哉　三河 小淡えふ子

四十からの百舌に追るゝかげ見えて秋風さむし嵯峨の萩原　伯耆 芥野露枝

ひともとの川そひ柳風みえて山のはちかく月すみのぼる　麴町 上山すみ子

水鳥の飛び立つあとに船見える葦間はなるゝ月まどかなり　信濃 平澤ふみ子

何ひとつ勳功なき身もめでたきは杖ゆるされし七十の　群馬 宮城しげ

翁　河内　雲かつら

亡き月をしのぶ涙に曇りけり共にながめし望の夜の月　伊勢　岸田ちゑ子

順禮の親子たゝずむ渡場のひともと松に秋のかぜ吹く　弘前　今ちか

岸洗ふ波音寒むく日は暮れて磯の松原秋風ぞ吹く　弘前　成田きさ女

酒買ひてすゝめむものを父まさば共にながめむ秋のよの月　信濃　竹鼻はる子

なか〳〵に玉のうてなは羨まじ母とながむる秋の夜の月　神戸　杉田鶴子

太刀とりし手につゑもちて大御代の花をめでつゝ老ゆる樂しさ　ともえ

汗しとゝ辻車引く翁あはれ子をうしなひて妻うしなひて　河内　岡市良子

母君と呼べど呼べども答へなしつめたき石に秋の風吹く　大阪　飯盛和子

さやかなる月夜になりぬ車にはのらでかへらむみち遠くとも　河内　大矢たれ子

佳調

◎月　小石川　秋山しづ子
いざないし友は返りぬ夜はふけぬ月はいよてりまさりつゝ

◎仝　南葛飾　春山よし子
こゝろゆく夜にもあるかな庭の外の尾花にかゝる秋のよの月

◎仝　伊勢　白井きの子
夕月は尾花か末にほのみえて鹿の音遠しむさしの野の原

◎仝　大阪　井上貞女
こゑになく子をすかしつゝ橋の上に脊子まつゆふべ秋風のふく

◎老翁　磐城　内山房子
虫干に文字もかすかの系圖さして勳功を談る白髪の翁

◎月　愛知　鷲尾米子
柴の戸によりて脊子まつ月の夜を道とふ人におもはゆき哉

◎秋風　神戸　松岡きぬ子
わびつゝもいつしか夏を過しきて初秋風のこゝちよきかな

◎月　本所　宮内榮子
みちすがる冴けき月に影くらべおのれ高しと君はゑみにき

◎仝　高田　平野こととづ子
あこかれし昔の今日の月を見てわれこふらんか古里の友

◉秋風　金澤　三澤かず子
なつかしう御姿ゑがく夜の窓のふで驚かす秋の風かな

◉月　越後　坪井わか子
愁秋かおなじ心になかめけり老せぬ月に耳をわすれて

◉仝　南葛飾　吉野錦子
むなしくも兩地の情をてらすかな雲まにきゆる秋の夜の月

◉仝　信州　竹鼻はな子
おばしまに寄添ひながらたまはりし玉章よみぬ月のあかりに

◉秋風　陸前　植地樂樹
夜な／＼に秋風吹きて小山田のいな葉をわたるさ男鹿の聲

◉老翁　岡山　ふま子
物見にも孫に片手をひかれつゝ歩むおきなやいかにうれしき

◉秋風　大坂　鍬子みん子
花すき村のくすしの影きえて秋風寒く夕日濺るゝ

◉仝　佐久間しづえ
あかそへてさゝげし友のおくつきの萩もこぼれて秋風ぞふく

◉仝　信濃　有賀露子
餘りにもひの秋風のさびしきに手枕かせぬゆめしばし見む

◉仝　伊勢　増山はる子
打つれて若菜つみにし春日野は尾花茂りて秋風ぞ吹く

◉仝　三重　楠木とみ子
はら／＼と萩の白露ちる見えて野末遙かに月の上れる

◉月　長崎　古賀秀子
人々の心々に嬉しとも又た悲しとも見ゆる月哉

◉仝　備前　重松竹子
たのしくもまたかなしくも見る人のこゝろにつるゝ月のかげかな

◉秋風　河内　矢寺はぎ子
そのまゝは涼みの床もあれはてゝ庭の芭蕉に秋の風ふく

◉月　東京　石上りう子
眺めやる人の心も住江の松の木の間をもるゝ月影

◉秋風　前橋　永崎淑子
さしてだに物あはれなるあまの夜にさびしくかよふ萩の上風

◉月　大坂　石原幸子
なき人とめでにし松をしのぶかな昔のまゝの秋の夜の月

◉秋風　美濃　高本庭子
芦の葉にまづ吹き初めて閨の戸をたゝくもさびし秋の夕風

◉月　埼玉　關根ふく子
一人さり二人かへりて夜はふけて山のは近く月おちかゝる

◉仝　下野　川連美喜江
なき渡るかりの數さへ見ゆる哉住吉の里にすめる月かけ

◉仝　弘前　平山春江
豆うりて母の好める酒かひて歸る畔路に月は出にけり

◉秋風　三重　石澤あき子
此夕身にしむ秋の風立ちて親の裏の袷届きぬ

◉月　上毛　小野杏子
見るからに心涼しくなりにけり高峯にすめる秋の夜の月

◉秋風　大坂　辰巳季子
虫の聲たかき萩のべ音づれて月かげこぼす秋の初風

◉仝　東京　瀬能光子
今日もまたくれぬとかへる杣人の袖ふきかへし秋風ぞ吹く

◎秋風　　廣島　和知廣子
秋風にはかなく散りて桐の葉にそゞろ涙をこぼしける哉

◎老翁　　長崎　古賀秀子
とぼ〳〵とあゆむ翁の手の花は亡せし媼への手向けなるらむ

◎月　　中里延子
都大路ふけゆく月にてらされて五條あたりを行く車見ゆ

◎秋風　　伊豫　石川君子
いなすゞめ音づれそめし八束穂に入日淋しく秋風ぞふく

◎仝　　横濱　蘭子
御墓邊の前拂ふそべにほろ〳〵と露のこぼれて秋風ぞふく

◎仝　　伊勢　岸田ちゑ子
更ぬだに淋しきものと門の田の穗波片よせ秋の風ふく

◎月　　近江　岩本つれ
そゞろにも涙の味を知りそめぬ月白き夜をわれ旅にして

◎秋風　　河内　三島ふく
あさがほのたれもこぼれて賤が家のやれがきさむく秋風ぞふく

◎仝　　河内　三島ふく
吹送る風に御寺の鐘の音も憐れをそふる秋の夕暮

◎月　　山梨　神奈なみ
鈴虫の聲しのびきく庭のおもに芭蕉のかげの長き月かな

◎仝　　埼玉　林溪花
旅の旗かげ淡き島邊野の茶毘の烟に夕月細し

◎老翁　　四ツ谷　菅田清子
祖父君ののたまふ言葉齒にもれてきゝも取られず威でかなしき

◎月　　茨城　渡邊富子
ふもと原あはき光にほの見えて筑波の山ゆ月さし出る

◎月　　筑前　太田とも子
蝙蝠はうち得てかへる里の子のふりむく梗にかゝる三日月

◎仝　　赤阪　たか子
欸乃は霧の彼方に消え行きて川添堤月ほのめきぬ

◎秋風　　松江　松琴女史
花もなく實もなく葉なき我園のむなしき枝に秋風のふく

◎老翁　　麻布　尾崎操子
家にまつ孫やあるらん柴かりの老翁の手に柿の一枝

◎月　　和歌山　山本ちよ子
松のとに宿せし月を氣づかひて君待ちわぶる草の庵哉

◎秋風　　信州　小林春子
山姫の織れるもみぢの唐錦亂れもぞする風吹くなゆめ

◎老翁　　芳枝子
これもまた孫の爲なり子の爲と今日もひれもす畑にくらして

◎月　　横濱　吉村方にて香花
水底にやどるとすれどせゞらきにくだけて凉し夏の夜の月

◎老翁　　弘前　成田きよ子
門にてゝ孫の夫婦にまたきませと見送る翁に桐の葉散りぬ

◎秋風　　備中　大西益子
病む母の心沈まるひまもなし秋風つよくやり戸叩けば

◎仝　　東京　その子
夕まぐれ招く尾花に誘はれて野邊に出れば秋風ぞふく

◎仝　　備中　妹尾久子
名にたちし村の楠樹うら枯れて夕べ淋しく秋の風吹く

◉秋風　弘前　成田俊子
鮎賣りて米買ひ歸る夕まぐれ青柳堤秋の風吹く

◉仝　和歌山　國中てる
暑さをも忘るゝ今日の嬉しさはかなしき秋の初風ぞ吹く

◉仝　埼玉　林淺花
暮告ぐる鐘つき終へし離俗の後手寒く秋風ぞ吹く

◉仝　山城　野口富士子
なき友の墓に詣て在りし日を忍ぶ秋に秋風の吹く

◉老翁　栃木　田波ひで子
またしても翁が語る昔ばなし秋の夜長のつれづれなるに

◉秋風　信陽　市村とく子
つばなぬき土筆つみたるあとやいづこ野邊の尾花に秋風ぞふく

◉仝　神田　松寺緣子
父を見ず母を見ずして三年へし今年もはやく秋風の吹く

◉月　三陽　土屋房子
とつ國にいてゝましまず背の君は今宵の月をいかに見るらん

◉老翁　人吉　早苗子
打つれしまごもやう〳〵五つ六つの彌陀まうでして笑む翁かな

◉月　伊勢　森本靜子
月見にも一夜は來ませ二見浦朝日のみには限らざりけり

◉仝　備後　酒井まち子
此月の滿つらむ頃とちかいてし友は此世のぬしとなりぬる

◉仝　信濃　竹鼻はる子
むしのなく千草の花に置くつゆの光りさやけき秋の夜の月

◉秋風　山梨　いと子
廣椽に障子つくろふ母そばのころもの袖に秋風ぞ吹く

◉秋風　長門　岩田章子
秋風も身にしむ今朝を初旅の木曾路越え行く君をしぞ思ふ

◉仝　上野　矢島まさ子
父母の墓に詣てゝ孤兒のしぼる袂に秋風の吹く

◉老翁　麹町　安藤よし江
柴負ひてかへる翁の影やせて夕月さむくましらなくなり

◉月　房州　和田きん子
塵の世は遠くはなれて大空に心清くもすめる月かな

◉仝　水戸　武田清子
浮雲の片よる山をよそに見て大空高くすめる月かな

◉仝　大阪　あかつき
夕空をあふぎながらに畦道を月はいづくと歌ふ子守兒

◉秋風　大垣　上田志げ子
餘りにも淋しき秋の夕暮はおとなふ風ぞ心ありける

◉月　和歌山　前山すみ子
罪なくて佐波に流さる舟にして今夜十五夜の月をながむる

◉仝　和歌山　荒岡隆子
三日月に世の哀れさをやらしとや出なきしきる嵯峨の萩原

◉仝　東京　山田敏子
夕立のあとなくはれておはしまにさし入る月の影のさやけさ

◉仝　東京　奥津らく子
望月のかくると見しは軒近き松の木葉のさはるなりけり

◉秋風　名古屋　鈴木ちゑ子
たへかれしきのふの夏は夢なれやはや吹風の身にしみ渡る

◎秋風　伊賀　村尾尙子
母なし子袖はおほひて乳こひにゆく夕ぐれを秋の風ふく

◎月　中備　すみれ草
さなきだに哀れ催す秋の夜に淋しくすめる山の端の月

◎仝　三重　濱口しづ
川岸の柳殘らず散り果てゝ月のみ澄める玉川の里

◎仝　山形　新穗辰惠
人跡のたえし山路をふみ行けば送り顏なる秋の夜の月

◎仝　神戸　今村竹子
故鄕の父母如何におはすらむおもかけうつせ秋の夜の月

◎仝　松江　高木雪子
十年ぶりにわれふるさとの父母と月見する秋の今宵たのしき

◎老翁　岐阜　扶佐子
秋風に白妙のひげ拂はせて菊の畑にたつ翁かな

◎仝　山口　靜子
まけじとて勇めどさすが及ばじと老し翁のかこつあわれさ

◎秋風　赤坂　隰隆子
いつしかに風は秋にや通ふらん落つる一葉の音ある夕べ

◎月　攝津　和久美津雄
世の中のちりのけがれをよそにして淸くもすめる秋の夜の月

◎仝　伊勢　岸田はる子
閑居して豊けき秋を祝ふさへたのしきものを望の夜の月

◎秋風　神奈川　むらさき
辻占を賣りてかへりゆく小娘の袖さむげにも秋風ぞふく

◎仝　伊勢　森本よつ女
秋立ちし頃には譽めし風なれど淋しき今日と早やなりてけり

◎秋風　南葛飾　足立よれ子
聢かうつ礒の音も聞ゆなり松ふく風の響にましりて

◎月　羽前　橫澤花子
みちがくる姿よごとにかはれども同じ山より出る月哉

◎秋風　和歌山　平田靜子
鹽竈の煙しづかに日は暮れて入江の声に秋風ぞ吹く

◎月　牛込　倉持きく子
大空にむかふも同じ影ながらさし入る窓の月ぞわびしき

◎秋風　栃木　田波ひで子
稻雀むれてとび立つ千町田に黃金波よる秋の夕風

◎仝　東京　內海しま子
まとちかき庭の靑桐吹風に一葉ちりぬる文机の上に

◎仝　播磨　積谷のぶ
病める人のうせときゝし此夕いとゞ身にしむ秋の初風

◎仝　神田　千鶴子
都にもおとづれそめし秋風をたひぬる君はいかにきくらん

◎月　淡島　野崎豐枝
窓おせば桐の一葉の散りしきてすきま漏れ來る秋の夜の月

◎秋風　人吉　さなへ子
朝きりにわがせの影は消え行きて露けき袖に秋かせの吹

◎仝　三重　龜井爲登子
やむ友をとはんとたどる道のべの尾花そよぎて秋風そふく

◎月　美作　安藤仙子
むら雨の晴てのあとの山の端にぬれつゝ出る秋の夜の月



天賞

忍び音

茨城縣新治郡土浦本町　山口すみ子

秋としいへばさらでだに物の哀れも深かりなんを、夜色沈々として四邊淋しく、ほろ〳〵と桐の葉おつる垣根の邊り、悲しき聲をふりしぼりて鳴きしきる虫の音に[illegible]ながら砧の音の打添ふなど、取集めたる哀れさに今し眠よりさめたる妾は、わびしき病の床にはかなき夢の跡辿りつゝ、ひとり思ひに沈めるなり。

光かすけき燈火は、ねやのひまもる夜風にゆられ〳〵て、消えなんとしてはまた燃えたつ果敢なさよ、さながら今の我身の上にも似て、と、思ひやりては讀みくる眼、幾度か、拭ひもあへず。

思ひに堪えて妾はそと、宵へとゞきし母上よりの御文くりひろげぬ。

……怪しきまで夜毎の夢靜かならぬを、そなたは如何に暮し給ふぞ、やさしき姑御様、情深き夫の君もおはす事故、いさゝかも心にかゝる節はなけれど、あまりに心許なくて……

讀みさしたる妾は覺えずよゝと出づる泣音を固く噛みしめつ、御文いただきしまゝ泣きふしぬ。

あゝ母上は、妾を幸多き身とおぼし給ふか、優しき姑御もでりと喜び給ふか、情深き夫にかしづく事とみこゝろ安んじゐ給ふか、面に笑ひ陰に針もつ人ありとは思ひ給ふまじ、月に泣き花に恨み、そゞろ昔を忍びつゝ、血を吐く思ひに過し行く我子の様は夢にも知り給ふまじ、輕からぬ病の床に打伏して、影痩せ光衰えたる燈火を友としつゝ、はかなく幽鬼と消えゆくを待ちつゝある、妾の心を悟り給ふよしも侍るまじ、夜々の夢路の亂れ給ふは妾の苦しき心の通じてにや、さらばあからさまに打あけなんか。

否、やみなむ〳〵、よしや煩え死するとも、今の悲しき身苦しき心を打あけえらるべき身かは、家には心好からぬ父上おはすを。

母上は父が無情の行に涙呑みつゝ、いとせめて此方よりの嬉しきたよりを樂しみに、過しゐ給ふ哀れの御身ぞ、さるを〳〵、今の切なき心打あけなばいかにみ心勞し給ふらん、そを知りつゝなどて言ひやらるべきぞ、よし親を偽る天の咎めは多からんも。

苦しき心を强てはげましつ、妾は靜に筆とりぬ。流るゝ涙を硯にうけ、墨すり流し紙伸ぶれど、わなゝく手先を如何にせむ、唇固く噛みしむれどわきかへる胸の血潮を如何にせむ、かくて〳〵この文御手にとり給ひし母様は、涙の墨の筆のあといかなる心にてよみ給ふぞ……妾はえたへてまたもやよゝと泣き伏しぬ。胸はさながらはり裂けんばかり、腸は細かく刻みゆかるゝ心地して。

砧の音ははたとやみぬ。夜は只寂莫、折柄段々と響き渡る二時の鐘。

妾はおのゝく手を確く夜衿の中に合せつゝ、あゝ神よ、暫しなりとも母の心を喜ばしめ給ひ、妾の苦痛は物の數ならぬを、とふし拜みつ、はふり落つる涙をふり拂ひてやがてぞまた筆とりぬ。

……夢は五臓のつかれと聞侍れば、必ず〳〵みこゝろ勞し給ふまじ

く、私は日々家事にいそしみて、此世楽しく暮し居申候……
書き終りしも夢心地、胸の血潮は只狂ひに狂ひて。
折柄軒端に風さわぎて雨か木の葉かはら／＼と雨戸を打ち、又一しきり哀れにすだく虫の聲々。

評　嫁げる一人の女が、日々の勤めのつらさにつけて、生みたる母の戀はしく、また、其母が父の無情なるに悩めるを愁ふるなど、千々に思ひ亂だるゝ情を描きたるは、此文也、されば、思想已に趣味の多きものあるに、いはんや亦た文章の圓熟せるをや、人をして再讀三讀せしむるに足るものあり（奥南）

しら菊の花

遊津留

百花賑ふ春の盛遊に消えて朝露しげき夏草の名残また尋れん由もなき昨日今日涼しさまさる秋風身にしみて淺茅にすだく虫の聲々絶々にやかては木枯しすさぶ霜夜の哀な　かこつらんに何を優しの心ぞや誰が爲めの操守るかけなげにも咲き競ひたる白菊よ色はあく迄清くけたかく香はふくいくとして袖を襲ふいてや其上愛て玉ひし君が御靈にさゝげんと手折る袂にふりかゝる露は涙かそも花心あるか

花心あるか、心あらばせめて背しに立かへり嬉しき夢を語らずや、風にゆらぐはうなづくか、花よしらすや汝は其昔し我戀しき祖母君が汝の清き色香をめでゝ自ら愛に移し植え給ひしさへ幸なるを名さへ「八千代」と名づけ玉ひ年々秋毎の、御いつくしみたゞならず朝おき添ふ霜を厭ひ夕風にあてまじと御心こめての御丹精に汝が世に稀なる色香にしるく思へば汝ある身の上ぞかし、さるをいたましき哉しばしの後秋ならずまたて果敢なくなり玉ひし祖母君を慕ひてや其年はきても汝が妙なる香床しく然れば父上にはせめて御靈を慰めまつらんと一枝を手折り玉ひ「君まさば共に手折らん菊の花今は手向けのぬさならんとは」と打誦し玉ひし御有様わが幼な心にもいつかは忘れはつべきさるをその歌の主又た今日いまさすと知らずやそを亦再びくりかへすべき我心我胸よ——さても幾とせの後我に手折りて歌はん人やたれ

言ふ勿れ朝に結ぶ萩の下露果敢なしと、さとらずや満るはかくる月の始の其よりも賴み難きは人の運命なり實に思へば十年昔しの今日、今宵なりき斗り難きは其夜の雲のあゆみのみかは、颯々たる夜風身にしみて折々時雨を誘ふ夕まぐれ錦染にし梢の紅葉また色なせぬほどに哀れ父君が暮き御笑顔再び待つ由もなく／＼に詮術しらぬ我袖の如何に露けかりけん、むべ其日よりぞ我は賴みべき杖を失ひ行手の燈明消ゆるに譬へん身ぞと思へばあゝ

菊は其名の如く千代に八千代に匂ひぬるを復た來ん秋をまつ甲斐もなき我身の上や今又更に涙のみぞ浮ばるゝ「忍びつゝあたに十年を過しても　けふ手向くべき言の葉もなし」と覺束なくも書きつけて花諸共に何か棚にさゝぐれば一縷の香影淡く細く棚引きて御なつかしの寫しゑかげ朧なるは御靈やらけさせ玉ひしか

野分のあした友の許に

神戸市下山手通二丁目　青木京子

さりげなき朝の空のにくさよ夜半ばかりおどろ／＼しき音に夢さまされ

て枕もたげつゝ聞けば木の枝のをるゝやうなるさては雨戸烈しくうちたゝく恐ろしさに野分と心づきては箱庭のやうなる園の上すら心もとなくておほふばかりの袖もがなとおぼえ候つとめておりたてばかつ〲咲殘りたる朝顔のやれ垣つくろひがほなりし蔓の糸もきれてさながら倒れ伏しつゝやう〲さきたる二つ三つの花もの悲しげにはた此頃盛りの芙蓉ことさらあはれにながめしものをあたらしうも吹き折られ思はず涙こぼれ候ましてひろらかなる御園は一しほあさましき名殘をとゞめたる事と思ひまゐらするにも忘られがたきかの糸萩のきのふけふ盛なるべしなど思ひわたり候はいかに御手洗鉢のあたりの秋海棠それもはかなくおほどれふしたる事と存じ候とにもかくにもかく野らのやうにふきあらされし悲みほかに分つべき方もなければ同じ心におはしますらむとかつは御有樣も承らまほしうて一ことききこえ上げまゐらせ候かしこ

評　一片の雅信、人の情緒を揺かすもの多きは、此手紙において被見申候

地賞

盂蘭盆の口に

大阪　たまその

命數限りありてやさしき宛の御手にすがりたる、又もやはる〲と浮世にもどり來ます故人のみたま、これを盂蘭盆とよぶ。さても盂蘭盆をかしからずや。

五年前に十年前にはた又廿年卅年前に、亡せにし人々のなきみたま今やいづくにかある。御佛の四の國に清き蓮の花侍らしてか。或は遠き〲雲の上に百花咲き匂ふその中にてか。若しくは在世のほどの罪障消滅せずしていまだに苦痛はんもん重れ居たまふか。淺間しや人間そを明らかに定むること能はず。さることは無しといふもの、否有りといふもの、そは兎まれ角まれ、かくかけはなれて隔たり居しみたま、やがて一堂に會して何をか談じ、何をか語らはんとはする。思へばをかしからずや。瓜に茄子に豆に芋に、折からの畑もの供へられざるはなく、桃に梨に菓子にそうめんに其の他あるほどのもの大方奉られざるはなし。やがて夕暮のうすくらがりの頃、たくをがらのその炎を目あてに尋れ來たまふとにや。立ちのぼる白烟やう〲にうすれゆきて、あるかなきかを見まど ふ程、今はとて注ぐ水に最後の烟殘してきゆ。み姿のみは朝のうちより拜しまつりしが、これにてみたまをもをがまるべきなり。きのふみがき置きし燈明皿蠟燭臺その他の佛器、皆かゞやきあひたるに、差しあげたる燈の光映じていとうるはし。いつもこのやうに美しからばと母上いひたまふ。供へたる蓮の答いまだかたくして、開かざるが本意なし。三條四條に立ちならぶ線香の烟のあなた、亡き祖父君に祖母君に、さては伯父上に叔母上に、昔のおもかげの髣髴をも得べけんも、それ覺えぬ身にはたゞ〲甲斐なし。かたばかりに手を合せて伏しをがめば、何とやら常のやうにもあらぬに、折から近きあたりの木魚のひゞき塀ごしに聲ごしに、耳に傳はりくる。深く〲胸の奧にまでも浸みとほるやうにて、我たゞならず悲しと思ひぬ。

さても盂蘭盆會、亡靈まつり。よわき人間の故人に對する報恩の爲なり。おろそかにせざらんが爲の至情よりなり。日頃怠りがちなる心をおのづ

からに慰めんが爲なり。否さにてやあらんか。と。そと妹にさゝやけば答はなくてたゞうなづきぬ。

評　こは盂蘭盆についての感想を述べたるもの、想やゝ新たにして文亦た熟せるが如し(奥南)

ことば訛

仙臺市本柳町五十一番地和知りい方　町田周子

ことばに訛なまりあることは、からもろこし、はては海こへての西の國々も同じとはきけど、わが國ばかりいみじきはなし、さよ西の方九州の人より、中國の人、東の人、さては東北地方の人ども同じ日本の中に生きながら、互にことばの通ぜぬを、誠に外國ひとにやと、思ひあふばかりなるぞ、いつはりかと聞きあやまらるゝ。されば東の人西へ行き、西の人東へ旅するに、おかしきまちがひ多しとかや。それより、東の人、當地に來りて古道具屋に入り、火鉢買はんと其價を問ひしに、店の者壹圓なりと答えぬ、此人はあまり高ければ八拾錢にまけよと、店者「わかりまえん」と答ふ、此人いや、「まけよ」と言ふ事、わかりそふな……と言へば、又店のもの「わかりまえん」と答ふ、この人打腹たちて歸りしとかや、仙臺にては「ダメ」と云ふことを凡て「わかりまえん」と申すなれど、此の人はそれを知られば、まけよと云ふことのわからぬものなりけんと思ひて、そのまゝ歸りけるなりとぞ、又大阪あたりにて、そば屋なぞに上り、ひろ、まむし、の品がきには、しらぬものは、如何なる山男や食ふらんと驚きつべし、されど盗にはあらで、たゞの家鴨、鰻なるには、おもはずもほゝえまるべし。福島あたりの人の「けふはとてもあつい」と云へば、今一人「そうてもなかるまいが」、おかしきことを言ふものかなと思ひしが、慣れて後に始めて「とても」は甚だの意、又「なかるまい」は「あるまい」の意なるを知りぬ、思へば、おかしきものにてこそ、かゝるためしいとまれならず、かゝる國の境一つのことにて、言なれぬものゝ、外くにへ行きしが如きは、如何にぞや。かくの如きを、口やかましく言文一致などゝ、急がはしく言ふ學者もありと思へば、傾笑まるゝ思ぞする。さばれ、此言葉訛も、昔の封建制度に、一領地の私領せしことと、ゆきかひの便ありしことに、よるべく、又此頃は、何地の人も都言葉を學び居れば、國語統一とかも、まもなく出來ん、殊に都言葉はしも、何處のよりもあらましに、もとも文ことばに近ければ、かの學者の望も、はるけきものから、夢にても、あるまじうこそ。

評　こは「言葉訛」について述べたるもの、敢て斬新の説にもあられど、又た一讀に値す(奥南)

小野吟子の君の寫眞交換をうべなひ給ひければ其の返しに

東京小石川區大門町三十一番地中村方　木村貞子

疾う〳〵みうつしゑ給へやとうながしまつるにこそ手前にはけふ下女して注文いたさせ置きつれば出來上り次第に君がみ前の御わらひ草となり侍らむを扨も〳〵君にはいかさまにか暮らせ居給へる朧氣にも中てゝ見候はんか御髪のさまお下げや桃割を結ばせ給ふべき御よはひにはよも候ふまじ當時大流行の英吉利卷なりや扨は夜會結びに色よきリボンをかざし給へるにやあるは我がみ國ぶりの銀杏返しか島田髷か此の方いかば

かり優にやさしく見上げられて御こゝろのほどひとしほ床しう存ぜられ申し候扨父御めしものは何々に御帶は何々を締めさせ給へるにやあるは海老茶の袴めし居給へるかなどさまざまにおもひみだるゝはきのふけふの我が豫想に御坐候こを讀みをはり給ふ時の君が御心のうちいかさまにかおぼすらんあなをかしとほゝゑまれ申しさふらふも亦一興に御座候

かしこ

なほおのれこそみにくうも亦やさしうおもほゆれされどたゞ田舍そだちの健やかなるをとりえに御覽ぜさせたくて

姿こそみ山のおくの朽木なれ
こころは花になさばなりなむ

評　此の如き手紙は、洵に友を慰籍するに足るものと存候

人賞

磯の曙

東京神田仲猿樂町九番地　佐々木和子
夕霧

ある夏の一夜ぬば玉の夢路ふかくわけ入りぬるに、なき父君の御後姿にいとよく似たる人のかなたに行くを見ぬ、いそぎよびとめんとする刹那ゆり起されぬ、いかばかり口惜しかりけむ、かゝる折こそ日頃より好める海の景色になぐさめられてんと

夏の夜ははや明けぬらしうたゝねの
見はてぬ夢のあとぞこひしき

など口すさみつゝいそに出つ、弓手の方に江の島とほくうす墨色にゑかゝれつ、海の香たかくたゞよひて、渚によする波は曙の光をうけてほのほのと白み渡れり、

たちまち我が名を呼ぶ聲聞ゑぬ、再かすかにきこゑぬ、

あゝそはなつかしき父君の御聲なりしよ、

見返れば夢に見し時とは變りて、御すがたいとあきらかに父君はたちませり、聲いださんと思へども惑きわまりて聲出です、御身に近づきまつらんとすれど心にまかせす、とやせんかくやせむともたゆる中に、おぼろおぼろ御姿は霧のまぎれにかくれ給ひぬ、

あゝなつかしき父君はなを叫ぶ哀の我を見すてゝ消え失せ給ひぬ、

それよりぞ、朝毎に磯にいてゝは、その折の御姿を思ひいて涙にむせびつゝ父君を呼びぬ、されど御聲だも聞きまつる事あたわざりき、

父君はうちよする波と共にや來りまさん、いと吹く風にや乘りて見え給ふらんと、たのみ難きことをたのみて、哀れのみなし子が聲もしわがれて出てずなるまで、父君を呼び奉れども、遠き天つ御空には聞え給はぬにや、たゝ磯うつ波のひゝきのみぞ高き、

あはれ波よ、汝の立かへる折に、父なこひつゝ血になく孤子か、雨ふりしきり風吹きすさふ日もたへす濱邊に立ち出てゝ、天にいのり地にねがひ、父君をまつと傳へてよ、いかて再なれの磯によする時、父君の御手とりていざなひまゐらせてよ、

評　文格高遠、また得難きの筆也（奥甫）

野分（日記の一節）

大阪府泉北郡北上神村井上龍方 藤井登美子

（九月一日）あすは二百十日とて、ひとへに天氣のおだやかなるをいのる日の、夕つ方より雲のゆきゝたゞならぬに、心も心ならざりしを、夜ふくるほどに風いみじく吹きいで、雨さへいたう加はりて、あれにあるゝ物音すさまじく、恰もちよろづのいくさ人の、をめきさけぶがごとくあらふる神のおらぶ、かとも疑はれ、家はゆるぎうごきて、さながら舟にのれる心地するに、おそろしき事いはむかたなく、家の人々いだきあひて、夜もすがらいもねず。

（九月二日）つとめて雨風全くをさまりければ、まづ前栽をうち見いだすに、籬はたふれ、庭木の枝は折れ、めでにし秋の花こと／＼くちりて庭には足ふみ入れむ方もなし。

ひるすぐる頃、近くなくなりし妹の奥都城のあたりいかならむと、いとおぼつかなく、おもひやる心さへさわかれて、いそぎゆきて里中なる菩提寺にまうでけるに、おくつきのあたり、いと荒れたり、さてもはかなし、手向にとて植ゑおきし小萩や野菊も、をれふしていとさびしげなるにくれゆく秋のあはれさをまだきに御墓のあたりに見るはかなしきことの限りなりけり。

あさゆふ苔の下にもめでうつくしみけむものを、かくなりぬれば、今日よりは何にかこゝろなぐさむならむと思ふにも、そゞろにうちしほたれて、しばしたゝずむに、かたへなる老松の、なかばふき折れたる枝より露にぬれつゝなく蟬の、病みさらぼひし人のかすかなる息の下に、後のことなどほのかにかたり出づるにも似て、いとあはれなり、あたり見わたせばいとうあれたるに、誰がなきからを埋めたる墓ならむ、たほれたる卒塔婆の下に、籬の朝顔のなりしかれながら、さすがにかたばかり咲きけるこそ、露にてる花の姿に、あらましき風の心もなごみはてけめと覺えてゆかしや。

家にかへれば友なる清子ぬしのもとより

御園生の秋いかならむ思ひやる
　心さへこそさわがれにけれ

そのかへしとて

夜もすがらふく秋風にもの思ふ
　わが心まで野わきしにけり

夜に入りて源氏野分の卷を繙き、讀みもてゆくに、ならびなき筆の匂ひいと哀れに涙さへさしぐまるゝに、心なしにや虫の聲なども、いと悲しげに聞ゆ、窓おし開けば、上弦の月老松の枝にかゝりて、光も淋しげに荒れたる宿をてらせり。

評　筆づかひは、至妙にあらねど、至拙にもあらじ（奥南）

故郷の母の許に

神奈川青木六十七 保田ゆづる

過る某日無事安着の旨は取敢へず端書にて申上候まゝ御心安う思召され候はんと存じ候實に此度の御別れは豫々わか望み叶はせ玉ひし父母君の御慈愛身にしみ有難く學ひの道にいそしむ身の只々嬉しきまゝに出立の日をのみ指折り數へ待ち暮し候もの〻何を申すも御膝下離るゝ初旅路さて出日出時となりては一聲の汽笛にゆるぎいでし汽車の窓より御暑さも

獸ひ玉はす見送り玉ひし母上様の御姿見奉りては瞬く間に見えすなり行く故郷の空の名殘盡きせず何となう胸せまり淚さしぐまれ候も着京の後は先つ目新らしき都の様に心奪はれ温き師の君の御鞠しと昨日今日馴れ初めし友垣に慰められつゝ漸う〳〵此程より定めの授業もとる事と相成候まゝ吳々も思召安く願ひ上候さても秋もやゝ深くなるまゝにもろくの時雨勝なる折柄母上様には例の御持病の御なやみはおはさずや兎角の事につけ先つ思ひ浮はるゝは此事にて候折角御用多の折にも御保護專一に祈り申候やかて本ん年末の御目もしには聊にても上達のさま御目にかけ度と其のみ樂しみに日々いそしみ勉居申候何も都なれぬ身の萬つの事に心落ち居す申上度事の半も盡し得す余はゆる〳〵と申殘し此度は御伺のみにとす

かしこ

評　文少しく摝れぬところもあれど、意を達するには憾み無きものと存申候（奥南）

あきかせ　　生方ひで子

ちゝぶみれにつきはかゝりてしゆんれいの
たどるすえのにあきかせのふく

同　　齋藤花

ますらをがゑみでおほれしあとへは
あきかせさむくもみちちるなり

同　　樋口菊香

かへり來るうまかしらにひはおちて
あれのゝすえをあきかせそふく

女學世界懸賞和歌兼題

山家秋
雁寺

（〆切十月十五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

女學世界懸賞文

▲消息文（二十四字詰二十行限）
▲韻文（二十句限）
▲抒情文（二十四字詰四十行限）
▲叙事文（仝上）

◎〆切　十月十五日
◎披露　十一月五日
◎賞品　以上四種中より甲、乙、丙、を選び十二名に呈す

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚に綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界宛とせらるべし▲投書原稿は一切還却せず

秀逸

野分

滋賀の山里　かう子

野分ばかりすさまじきものはあらじ。宵の程は天つ星一面にきらめき、月を浴びつゝ涼みける翁らの話の上は、ことしの實のりたゝふる聲のみ風のまに〳〵聞えしに、月の傾く頃よりはげしく吹きすさみ、檐をならす音すさまじく、雨にまじりて木の葉のうち散るなどいとさはがしきに虫の音も細く哀れなり。かくては日頃の友と打見つる、萩、女郎花、瞿さてはわらべの、日々色づくを樂しめる柿の實やいかならんと、心さへ打しほれつるに、妻にやはなれけん鹿の一こえ、鶏の床も思ひやられていとあはれふかし。やう〳〵鶏のこえかすかに聞ゆ頃、やゝをさまりぬる景色なれば、急きまどの戸をしあけば、野分の又の日こそと少納言の君のいはれけん如く、庭はあれに〳〵て、柴垣もふきたふれ、かのうしろめたりし花どもはいふも更なり、幼な子にさへまだ折らせざりし夕顔を、あらしける風の心くるしきに、かの柿の實のそこかしこに、あまた葉つきたるまゝ落ちたるなど、いはん方なきにつけても、賤が門田やいかならん、かの翁もと思ひやられて、いとあはれになん。

秋の夜

伊勢　河原芳子

庭の草村にすだく虫の音は月と共に澄み渡りて、更け行く夜氣のいとゝ哀れに、軒端おとなふそよ風の、木立に聖けき歌をのこして、高き〳〵み空の星に尊き笑みを傳ふるしづけさ、衣打つなる聲の幽かに、斷えては續く機織唄の、筬の調子に響き合ひては、いとも床しの曲を誇りつ、汚れなき片山里の自然を包みて、更に神秘の色を添ふるよ。

露の白玉簾にも似て、短檠のあかし小窓にゆらめく初更、やをら起ち立てゝ草の戸を押し開くれば、天地の寂寞は忽ち破れむとして、危うく靜まる泉水のほとり、銀兎波を走りて松にかくるゝを見るや、我れは思はず「夜の歌」を口誦して、夢温かなる天國を慕ひつゝ、其の靡く妙なる翼に乘りて姫神の懐にとこしへの乳房を得んとこそ願ひしか。

あゝ、此の時。

あはれなる隣のやもうどは、いみじき苦悶の聲を絞りぬ。糸の如く續き風の如く斷えて、空を摑む幼兒の俤まのあたりに現はれつるに、みどりするたらち女の胸の内思ひ遣られて、そゞろ涙にくれたりしが。『吾子よまな子よ、助からぬ生命なりせば早く逝けかし、秒一秒も、時一時も、われらはそなたが極みなき苦しみを見るにつけ、げに腸も千切らるゝばかりぞや、助からぬ生命を惡魔に弄ばれんより、み空に居ます父上のお許に、早や安らけき眠りを求めよ』。と打ちわめき泣き狂ふらむよ。腹の實の一人子なれど、人の手に餘るを見てはかくも切なう思ひ入るならむあな痛ましのまがことや、神の冥助もなき世哉、とそゞろ敢果なきれぎことに耽りつ。ふと仰ぎ見る星の様には今一團の雲影かゝりて、物凄ま

じき大氣のさゝやき低うきこゆるかと思ふまに、悲鳴破れ壁を洩るゝと均しく、小さき魂魄は名殘惜しげに舞ひ上りて、西の方へと消えて行きぬ、あゝ、其の小さき魂魄よ。

我れは今迄、美しき理想を描きて靜粛なる夜氣に高き權威を認め居たりしに、この尤無慘なる悲劇に遇ひては、瞬時もそこに居耐りかねて、急ぎ驅け入りて其の樣を物語れば。母君は我が身の苦痛に引き比べ給ひて『あなしなしたり』、と泣き給ひつ。側に居合はすうからやからも、皆たえがてにしほれ入りて、滔息のみぞ高く聞ゆるを、折柄、迷ひ烏の三聲四聲哀れに啼きすてゝ、南の方へと飛び去りしも、心ありげに思ひやられて、なか／＼に甘はむやうなきに、我れは一先づおとづれ見むとて人皆に先立ちつゝ、月洩る扉を押し開きて、隣家に夫れとまかり出づれば。あゝ、痛ましや、あゝ、口惜しや。くすしの君は手を拱きて詮術なしとのみ、息は絶ゐたり。いよゝ泣き狂ふたらちめの心は、そもいかならむそもいかばかりにてあらむ。

更け行く夜氣のいとゞ身に泌みて、惡寒のさゝやきいよゝ物凄く、血の色褪せし小さき骸を抱きて、頰ずりなせるたらち女の胸に、蒼白く輝く燈火の光明、何にかはたくへむ。

あはれ、我が妹のみまかりしも、かゝる秋の夜中にて有りける哉。

またるゝもの

山根松游

腹の痛みなどの類にはげしくて、あるにもあられずもだえ苦しむに、とり散ずよしと聞きつる藥など投ずるも甲斐しるしだも見えず。いよゝ苦しき樣に如何にともせん樣なくてとつをいつ胸痛めつゝ、くすし許走らせつる者の歸るをのみ待つに、やがて戻り來て直に參るべしとぞ傳ふ。やまふどの惱み益强くて見るだに苦しげにてかたへに侍れる者共も汗握りつゝ待に、直にといひしくすしのまだ見えざる又なうまたるゝものにこそ。我身は更なり人の上にも。

久しう打たえたる友の許やりたる文の返り言。遠く離れたる兄上のこたみ生れたるちごのうつし繪贈るといひおこせ給ひる。學の窓に物せし頃の夏季休業。學年試驗の成績發表の日はまたるゝ内にもうしろめたき限りなし。蕾かたきさうびの匂はん程。年へてかへる友などを岸頭に立ち待にやがて遙なる方に船の姿のそれと見ゆれさ容易うは近より來ぬ。夢見などのあしくてさむる則ち筆取りて心にかゝる節々故郷へとひやりたるにかへり言のいと遲き。まして母上などの常よりすぐよかならぬをや。

近き頃隱岐より移り住み給ひし中垣一重へだてし家の內君、主人の君の任に從ひて海のあなたより渡り來ませしなり。岩に碎くる波の音や海士が網引の聲よりも興なき職造のすまゐと聞くを、思ひは同じ故里は戀しきものか一年の後の 夏の休にはなつかしき里に歸らなんとて樂しみ給ふ。夕にもなりぬれば傾く日足眺めつゝあゝ今日も暮れぬ、なつかしの里にかへらん日のまたも一日近よりぬとてをかしくも嬉しみ給ふ。實に如何斗りか長き日影のつらくまち給ふらめ。

いづれか初音をとくきかむと契りし友より未だ何のさたもなき程、いひおこしつれば早かひなし。いみじうむし暑き夏の日の夕立。幾日の後にものせんといふ茸狩摘草秋の山游などなべて。誕生過ぎて漸う這ひ初めたるちごのあゆばむ程。女學世界、わけてまたるゝは臨時增刊なり。拙き歌文など物せし際はまして。

くさぐ〵

京都　四辻清子

○萩

有明の月ほのかにさしたる窓をしあけつるに、綠すゞしき玉櫻朝風にゆるぎて、打しづみし空すべてに秋の色は黝しぬ、今日の朝まだき萩園の景色朝つゆに打しめりし草蹈み分けんはいふべくもあらず、こぞの眺めも思ひやられて、姉上の御許にふみもたせつるに、其返りごとは脊の君ゆるし給はれば好む朝萩もこぞを思ひやりて忍び置かん、此身に行きてよとは、何が面白ふて行かるべき相語りそゞろ歩みてこそ興も深からむをとつぎませる身はまゝならぬ事よ、今は此身もやみなんと思ひわづらひつゝ夢結び一夜あけし今朝は、そゞろものたらぬ心地せられて、せめてもの心ゆかしに小さきながら庭になり立てば松の根方にひと許咲けるを見出し、なつかしの萩よ、墓はしの花よ、と見入りてあれば何處よりか子猫一疋かけ來り、道迷ひしにや、みだれし萩に打ふれて、さも驚きつ又ふりむきてこぼれし花の様をしげに見て過ぬ。しりゑにさけし我はまこと花を愛するは彼とて同じかりけるよ、ふりむき眺め行きしは又なふなかし。

○秋ぐさ

しのゝめ紅に朝日さす大路をこゑあはれなる花賣の彼方の門のべに訪をのぞきぬ、美くしき秋草荷なひし賤が賣べも露に移ろふ風情すてがたく眺められて、桔梗、苅萱、女郎花、紫苑、尾花、雁來紅、など色紫なるも又紅なる葉の緣れる其美くしさ見る目も樂しく、ぎすすゞ虫さへ其間にひそみ居るやうで其風雅さは繪にもかゝまほしくや、花園に咲揃ひし花をむごく切り取られて花市に人の棄にのぼらん事花はそゞろに數くらんそれが爲うるをへるにやと思ふへばかの花朝霧のひぬまぬにてありしよ、あらぬ事ども思ひてみほりぬ。

○かじか

今しも縫ひものゝ針はこばす折から一こゑ高くがしかのなきぬ、つい針の手も止りてほゝ笑まるゝよ此部屋のうちにて聞く聲も、澤山の谷川に立ちてきく思ひのせられて床し。人の最もいむ蠅を二つ三つ日毎に活しまゝあたふれば能くなきぬときゝて、弟の小さき手に朝夕家の內あさり歩み取りあたへぬる故よくなきぬ、まこと其淸きこゑ聞けば、淋しさすの夕べ、かなしき夜のなかぞらの月にも暫し思ひはたへぬ。

玉章の賦

梅木ふた葉

神代に似たる初鷄の聲に、ほの〴〵と年たちかへる朝まだき、若水さへ汲みをへぬに、門より嬉しき聲かけつゝ、投げこみ行く年始狀のかず〴〵取る手遲しととりあげ、去年のまゝなる灯火少しかいたてゝ讀む、先づ嬉しうなむ。年々に封ぜし文は少なうなりゆきて、葉書といへるのみ多きも、移りゆく世の有様とぞ見るべきや。そが中に奉書とやらむいへる紙に、水莖のあと匂ふばかり、いと麗はしうものしたるぞ尊き。外紅葉いとめでたしと聞くものから、しか〴〵と獨りにてはいと興なう侍れば誰らか心あへる友どちそゝのかして、參らせ給へと送りやれば、此方もさ思ひ侍りぬなど送りこせる、なか〳〵に嬉しきかきりにこそ。まいて已れ障りありてえ行かず、口惜しう覺えける時、玉章にそのありさまな

ど書きしるし、花の一輪二輪、添え封じこみたるなど、またなく云ひ知らずかし。なべて雲殴へだつる、遠き國にさすらゐる折からは、只故郷のたらちね、同胞、あるは友どちの音信のみぞ待たるゝ。そも認なき折は、しかとも覚えざらめれど、假初のいたつきに悩み、馴染のうすき他人の中、親しういひ慰むるものなく、わたつみの上に浮べる一葉船、寝られぬ夜半のともしび小暗きさへあるに、折ふし訪れ来る野分の風の誰が玉章かけ行くらむ、雲井の雁かれの聲を、閨のべにおとなへきし時宵につきし故郷よりの玉章闘するに、わが病をいたう案ずる旨につきて養生の法など詳しう書き示し、倚ほすゑにこがれ其のほか用あらば云ひ越せよ、何なりと叶へてむになどありたる、餘りの忝さに先づ涙のみしぐれて、其思ひ其恵み世にある程はえ忘れじとぞ思ほゆかし。親しき者の亡せしに其報知を見るだに涙の種なるを、其の人のまだ世にありし折われに送らばやと認めたりし玉章の、半ばにして筆の跡たえけるを發きこみたる、暫しは只夢幻のとゝのみ涙さへ出でざるが、打かへし〳〵讀みもて行くうち、悲しさ遣瀬なく、あやめも分かずなりし儘、其玉章かい抱きて泣き伏せば、其人の姿さてはありしをども、あり〳〵とうつりて共に外失せぬべう願うも、誰か理りならずとせむ。まして亡人の遺髪うつし繪など添えたる、こよなう悲しき極にこそ。さはれ樂しきは、春雨椿雨のつれ〴〵に懐しき玉章ども出して打誦し、其折々を偲ぶ心にぞ。

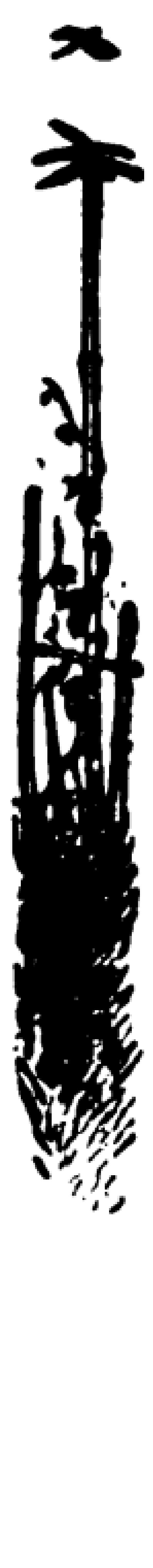
土用干

櫻木櫻子

此夏はいつもより暑さはげしくて堪へがたければなすべき業もうちすてゝあへぎつゝ過しけるにいつしか秋風のそよ吹くにおどろかされて俄に虫干せんとおもひたちぬけふは天氣もよし朝の程にとて文机かたづけくさぐさの書ども出して日に曝し風をいるゝにむしばみたる箱の底よりいたうふるびたる手本めく物いでたりよく見ればわがいとけなかりし時みまかり給ひし母上の我に数へむとてかき給ひし習字手本なりうちつけに昔しのばしくてつく〴〵とうちまもるにそのかみの事とありしかくわりし等さま〴〵思ひいでられやがて御面影さへたちそひぬあはれ母上世におはせましかばかつかつ習ひ得たる文の道手かく業をも見せまゐらましをとかへすがへすおもひ出づるかなしさ知る者はたゞはふりおつる涙のみ下婢の足音におどろかされて我にかへりなほもとりいだすにわがをさなき時の筆すさびの類點つきたる清書など何ならぬものもすぎにし昔を思ふたれならぬはなし

　虫干やむかしを忍ふ物はかり

など口ずさみつゝ彼に目うつり是に心とまりて多くもあらぬ書にいたく時をうつしぬほしをへたる頃は日影やう〳〵高くなりてきびしく照りつくろさま朝の程に似ざるも今日のみはうとましからず



懸賞家庭小說

選外乙賞

別れ路

本郷 本多たづ子

（上）

忍ばずの池とは誰が名づけけむ心なき名にもあるかな、さもあらばあれわれは、夕ぐれ毎に、此池のまわりをそこともなくさまよひて、西にたゆたふ殘んの光りに佇みつゝ何とはなう悲しさに、涙ぐみて、はるかに御空のをちを忍びつ、あるは又、ほのかなる夕月の沈み行く影を眺めて、云はん方なう淋しく心細き思ひを辿るが常なりけり。

あはれ、戀しき古里を立ちいでゝ、遠き都にもの學ぶわれ、健氣なる心はいかで男の君にも劣るべしやと思ふものから、さすがにか弱き女の身の、折りにふれては、いかてか人知れず涙に袖をしほらざらむ。月影明う窓を照らして、虫の音の何處ともなく聞えくる秋の夜や、身をきるばかりなる寒風につれて、霰の降りくる冬のゆふべは云ふも更なり、晴れ渡りたる日曜日を幸ひ、日頃親しき友垣と袖ふりはえて、菊よ、紅葉よと樂しくさまよふ時にだに、戀しき古里の忘られて、兎角に月日の過ぎ行くがいと寛やかなる心地せられつ冬の休みにこそなつかしきふる里にと、飛び立つばかりに嬉しくて、ひたすら其日を千秋の思ひして待ちけるに、折惡しうも、叔母君の俄に烈しう煩はれけるより、打ちすてゝ歸らんもさすがにて、一日二日と氣をいらちつゝ、枕へに侍りて病の怠り玉はんを祈りける中に、あはれや、はかなく冬の休みは打ち過ぎてけり。父上母君を初めとし、妹も我も首差しのべて御身の歸りを待ち居り申候と、休みの前に兄君より寄せ玉ひし手紙の中にも云ひたまひしを思ひ出しては、身も世もあられぬ心地すれど、さりとて詮方もあらざるに、夫よりはたゞ學科にのみ强ひて心を傾くる中、正月は行

き二月は過ぎ、花は咲き花は散りてや、がて忍ぶが岡に若葉の梢涼しげに茂り行く頃とはなりぬ、さらてだに此頃は、世のあはれも人の戀しさもまされ、と吉田のひぢりも云ひおかれけむ、ましてのどかなる山間の春にも背きて、遠き都の空に日を送る身の、ふる里戀しさに堪えざるまゝ、夏の休み迄には尙幾日かあると夜毎に數へつ、その頃六十五十といふ日數のいかばかり、我には長く思はれしよ、やがて九日八日ともなりける頃は、何となう、そわそわとして學科などの手に付かばこそ、机の上には去年の夏、わが古さとを立ち出づる前に一家打ち揃ひて撮りたる寫し畵をのみ取り出しつ。話しする度毎にアハヽと快活なる笑ひ聲を擧げ玉ふ父上。何事にもよく心届きて、いつくしみ深く、やさしき母上。其み前に立ちて母上の膝によりかゝりたる妹の、髮はお下げに結ひたるが、今にも笑ひこぼれんとする顏の愛らしさ。父上母上の眞中に腰かけたるはおのれ。其後ろに立たれ玉ふ兄上の、やさしくて何とはなうなつかしげなるみ顏よと、一人一人に打ち眺めつ。幾程もなく是らの人々と樂しく物がたりすることも出來ると思へば、七日八日のたゞ一時にも過ぎよかしと待ち遠しさに身をもがきぬ。

有明の月影白う汀に寄せくる浪に映りて、臺場の彼方は、尙曉のもやに薄暗きころ、品川の停車場にて我は初めて歸省の途に就けるを悟りぬ。綾瀨の君とともに寄宿より停車場へと車を走らせ、汽笛一聲、都を後にせしより玆に至るまで心落ち付かで、さながら夢路を辿るごとくなりき。あゝ我は今嬉しき歸省の途にあるなり。綾瀨の君とともに唱歌など口づさみつゝ窓より外をながむれば、山や川や草や木や、ことごとく皆笑ひて我らを迎ふるやうなり。知らず古さとには如何なる春が我を迎へんとはすらん、樂しみの中に、いつしか箱根のとんねるも過ぎぬ、け高き富士の姿を仰ぎて、まもなく靜岡濱松を越え、波に千鳥の舞坂に至れば幾世かはらぬ松のみどり濱べに續きて、磯邊に打ち寄する浪の音高し、思へば二た年むかしの夏、母上及び兄君、妹と打ち連れて、此處に遊びし折の、いかにたのしかりける

ことよ、あはれことしの袖ふりはえて再びこゝに遊ばなむかし。白き帆に日を受けて小舟の數多、波に漂ふ濱名の湖水も打ち過ぎたり、はや古里はま近うなりぬ、今ごろ豐橋の停車場には、我れが都へと立ちいづる折送り玉ひし如く、母上は兄君及び妹の花子もろ共に、首さしのべて我が歸りをまたせ給はん。岩屋の山は後ろになりて石巻山は我等が前に見え初めぬ、高師が原の一部を過ぎつゝ轟々として行く汽車は今數分にして止まらんとす。あれ停車場の屋根がと、綾瀬の君を顧みて指さすひまに早、豐橋豐橋と驛夫の呼ぶ聲しきりなり。とどろく胸を押し靜めつゝ、ふと停車場の彼方を見れば、あれ!こなたを見て佇める花子!母上!

飛ぶばかりにして橋を渡り、急ぎて停車場の外に出づれば、母君を後ろに殘してハラハラと衣の袖をひるがへしつゝ、驅けきし妹の、ゝ、ゝ、いきなり我が手を引き捕へて「姉さん」と叫びつゝ我を仰ぎたる愛らしき星の樣なる眼の中には千萬無量の笑を湛えぬ。「花ちやん」とて、やさしく眞白なる妹の手首を、しつかと握りたる我が右手は打ちふるへたり。「おつ母樣御機嫌よろしう」と、ひたすらなつかしくて仰ぎまつれば、よくマア無事で歸つてきてお呉れだ、との玉ひつゝ、しげしげと我を見まもり玉ひしが、涙もろき母上の、嬉しさにや堪えざりけむ、兩の眼よりハラハラと涙をばこぼし玉ひぬ。こゝより綾瀬の君に別れて、我は妹と、母上はお一人、二臺の車にて家路に向ひぬ。

(中)

西にたゞよふ夕榮の色次第次第に失せ行きて、遠くの方より吹きくる涼風、おきあまれる稻葉の露をふきはらふ頃、妹と共に家を出でゝ、裏の小川にかけ渡せる小さき橋の上にきたりぬ、田の草とりつる里の乙女のひな歌は堤に沿うて西の方にと消え行きつ、あとにはたゞ眠れるばかり靜かなる天地の中にひとり平和を歌ふにやあらん、さらさらと音して流るゝ小川の水の、ほのかに照せる夕月の影をさへ浮べたり。

「あゝよい景色だ」ことゝ覺えず我れのひとり言するを姉さん何がよい景色なの」と妹は問ふ。

「何がつて、御覧なさい、ソラ水の中にお月樣が映つてゐるでしやう、花ちやん面白くは思はないの」
と云へば
「それじや姉さん、あれがよい景色だつて云つたの」
「いゝえ、あればかりじやない、何だつて見るものは皆珍らしいんだもの、それだからよい景色の樣に思へるのでしよ、私の居る處などはね、人や車ばかりで、ほんとに煩くつて煩くつてね」
「だつて私東京へ行きたくつて行きたくつて仕方が無いのだもの」
『それは花ちやんが今は左樣思つて居ても、あちらへ行くと又こちらへ來たくつて來たくつて仕方がない樣になりますよ」
「そうか知ら」と妹は何となう腑に落ちぬ樣なる面持なりしが、急に
「あれ、あそこに蝙蝠が飛んで居ますわ」と指す方を打ち眺むれば、それかと思ふ影も我には見えて、遠く續きたる稻葉の波の末に消え殘れる夕榮の色いといとかすかなり。
花ちやんと云ひつゝ我は妹の手をとりぬ。
「兄さんは如何しなさつたの」と云へば、妹は其不意なるに驚ろきけむ、やさしき顔に我を仰ぎしが。
「兄さんは家に居ません」
「それなら、何處へ御行きなさつたの」
『何處だか分からないんですもの」
『ゑゝつ」
『おつ母さんに聞くと、兄さんなどの事聞くてはないつて仰つしやつて……
『それでは、家へは一寸も御出でなさらないの」
『餘程前に一度御出でなさつたのだが、來るとすぐにお父さんと喧嘩をなさつてね」
『マア」
『それで、お父さんが大きな聲で、貴樣の樣な放蕩者は、二度と此家へ來ることならぬつて仰つしやると、兄さんも決して御厄介にはなりませんつて、おつ母さんがとめるのも聞かずに出て行つてしまつたの」

『まあ！と我は驚ろきのあまり、しばし現の夢にさまよひしが、やがて雨の眼よりとめどもなく涙は流れて水に落ちたり、妹はそれにも氣付かざりけむ。
『私兄さんが悪いと思つてよ』と云ふ
我はたゞ無言なりき。あはれかのやさしき兄上の、いかなればさばかり心の變り玉ひけむ、思へば悲しさに胸もはりさくる心地せられぬ。
書齋の中に入れば、机の上に財政術、銀行論など〻、正しく積み置かれたれど、心して掃ふ人もあらざればにや塵の中に埋もれたり、本箱、書棚と一つ一つに拭き終りて後、靜に机の前に坐れば昔兄君の文讀み玉ひし面影さながら其處に浮ぶ様なる心地せられて、なつかしきに、今は又御傍に坐りて不審の個所をきゝ質さんよしもあらじと思へば早くも涙は袖にこぼれぬ。
あはれ何を樂しみにして我はこの夏の休みをば待ち渡りけむ。
入日の影を眺めては悲しき思ひに堪えざるまゝ、妹の手を引きて、昔兄君と螢を追ひし朝倉川の堤をそこともなくさまよへば、やがてたそがれ行く夕の空に飛び交ふ螢は昔の様にかはらねど、朝倉川の淵瀬定めて、思ひもかけず、變るは人の心なりけり、あはれ心慥なる兄君のいかなれば濁り江の中には引き込まれ玉ひけむ、悲しきかぎりや、口惜しき限りや。
一日母君の呼び玉ふまゝ、御傍に参れば、衣縫ふ手を休め玉ひて「又昨日の様に面白い東京の話しを聞かせてお呉れ」との玉ひしが、何となう御顔の冴え玉はぬ御様子。ハイと答へつゝ靜に坐に着けば、
『お前大そう痩せた様だが、兄様の事などをあまり心配するから、それていけないのだらう。兄様も今でこそ全く盲目になつて居るのだから、大阪あたりをも、ぶら付いて居るのだが、何れ目の開く時があるに違ひ無から、心配してはいけませんよ、ね、切角の休みだもの、ゆつくり遊んで行くがよいやね、決して心配などをせずにね』と宣はれし時、我は早くも胸迫りぬ、八月の半は過ぎける頃、父君に伴なはれて、妹と共に舞坂の海水浴へものせしが、昔の遊びを思ひ出しては浪の音さへ何と

なう憂ひを含める聲に聞きなされて、悲しさは增すばかり。

淋しき夕ぐれ、妹とたゞ二人磯の松原に夕日の影を踏みつゝ、彼方此方とさまよへば、夕風に鳴る松の響き颯々として、さながら歌の如くなるに、早くも兄君の胸に浮びて堪え難きまゝ、磯べに出でゝ浪打ちきわに佇めば、暗くなりゆく沖べより小さき白帆のおぼつかなげに歸りくる樣いとあはれなるに、何處よりか舟歌の聲さへ海を渡りて、悲しげに聞え來るに、いつしか涙のはらはらとして砂にこぼれぬ。

（下）

長しと思ひし夏の休みも、悲しき涙の中にはかなく過ぎぬ。荷物は早停車塲まで送りたり。さらばとて夕炊の煙り低う林の影に立ち迷ふ頃、母上妹ともろ共に家を出で八時を半過ぐる頃には停車塲に着きぬ、綾瀨の君は濱松に叔母君を訪ひ玉ふとて二日前に出玉へり。一時間の後には相逢ふ身の、夜の事にもあれば下女を濱松まで連れよと母君のの玉ふを强ひて辭し參らせつ九時には早やま近くなりぬ。

『そんならお母さん、いつも云うた通り、兄さんの事はかくさず知らして下さる樣にね。

『それはもう承知しました、大坂の叔父さんの處に行つて居るのだから心配おしでない、そよれりは自分の體を大切にしてね、どうかわづらはぬ樣に』と云ひ玉ふ折から滊車は轟々として來りぬ。急ぎて打ち乘るほど『そんならばお母さん御機嫌よろしう、花ちやんや左樣なら』と輕く首を下ぐれば、母君は『どーぞ東京の叔母樣によろし』くと仰せ玉ふ、妹は胸せまりけむ母君の御側に立ちたるまゝ悲しげに涙ぐみて何とも云はず。

思へば去年の夏はやさしき兄上もこゝまで我を送り玉ひて、自愛せよやとの玉ひしが今尙耳に殘る樣なり、滊笛に鳴りぬ。今よりこゝを去るかと思へば悲しさに胸迫りて言葉も出でねば、窓によりつゝ、無言のまゝ二人に向ひて頭を下ぐるに、滊車は早動き出したり。「姉さん」と云ふ一聲は後ろに聞えぬ、ふり返り見てやさしき妹が涙にぬれたる顏を今一度と延び上りたれど、人も、

屋根も燈火も瞬くひまに、見えず、見えず見えずなりたり。

濱名の海、舞坂の濱も現の夢に打ち過ぎぬ。濱松の停車場に下車して、綾瀬の君と手をとりあひつ、打ちつれて十一時四十五分の滊車に乘れば、腰を下す間もなきまて人一杯にのり込めり、いかゞはせんとためらふ程、ま近に居し女學生は、うれしくも右手の方におきたる荷物をとりて下におろし、こゝへとて坐を分ち與れぬ。南の窓によりて外をのぞめば、おぼつかなげなる燈火の、ところどころに見ゆるあるのみ。千草の上に置き餘れる露を命にて頻りにすたく松虫すゞ虫くつわ虫などの悲しげなる聲を押し分けつゝ馳せ行く滊車は、こひしき我がふる里を遠くへたて行くなり。なつかしき母上やさしき花子の今宵の夢やいかならん、見返へれば折しも西の空にかゝりたる心細き月の影白うぬれたる我れの顏を照らしぬ。靜岡に着きける頃我が傍なる女學生は、俄に「兄さん」と呼びて、其が前に首を垂れつゝ眠り居たる大學生をゆり起せば、うるさげに顏を上げて

「何、何、何じやと口ごもりぬ。辨當を買つて下さいなと乙女の云ふに、ムヽと云ひ樣立ち上りて窓よりやがて一箱を買ひ取れば、

『あれ、あなたのは如何して?

『僕のか、僕はほしくないのだから

『左樣?と云ひつゝ辨當を兄より受けとりしが

『私し、こんなに食べられないは、殘してしまいますよ』

と乙女は云ふ

『いゝさ、僕が皆たべてやらうと』大學生はいと快活に答へしが、又もや居睡りを初めたり。我はこゝにやさしき兄弟を見るにつけて、新に胸は堪え難くなりぬあゝ我が兄君、兄君は今いづこに如何なる夢や結び玉ふらん、やさしき、なつかしき、我が兄上!

＊　＊　＊　＊

如何で逢ひまゐらせずして止むべきかと俄に立ち上りて、並み居る人々を押し分けつゝ、中等室の一隅に至れば「たつ子か」と呼び玉ふ御聲はまさしく兄君、『兄樣、、、といきなり左の御手にとりすがれば

『滊車も餘りに暑い故、下りて暫く散歩しやう、と云ひ玉ふまゝ、後ろに從ひて下車するに、茲は松青くして砂白き樣、舞坂の濱に少しも變らず、松原を過ぎて濱邊に出づれば、寄せくる波の、またサラサラと歸り行くさま得も云はれずをかしさに

『兄さん、あれあの浪の面白い事、早く行つて遊びませう』と、早ザブザブと水に這入れば、折しもあれ、沖の方より山なす大濤のドッとばかり崩れ來るに、

『あれつ』と叫ぶまもあらせず、胡蝶の如くに驅けきし兄上の、我が肩を捕へ玉ふと見れば、俄にハッと、目をさましぬ。

『あなた何か怖ろしい夢でも見たのでせう、私夢も見ずに濱松からこゝまで、ぐつすり寢入つちまつたんですよ』と、後ろより我が兩肩に手を置きて語り玉ふは綾瀬の君なり。夜は早更け渡りぬらん、あたり皆寢に入りて瓦斯の光たゞほの白し。

隣に居し女學生は床の上に毛布を敷きて其上に座し、顏をば兄なる人の膝に埋めて深く寢入りぬ。

幾何もなく夜は明け放れたり。

山北の驛を發する頃、となりの乙女は。

『兄さん、あの峯はほんとに明神山によく似て居ますね』と北に聳えたる山を指しつゝ『妾通る度にそう思ひますわ』と云ふ

『ムヽ、少しは似て居る樣だね』と頻りに茶を飲み居たる大學生は答へぬ。

『少しばかりじやありません、あれ、あの木の生えて居る具合などはソックリ明神山の通りですもの』

『そうそう、そう云うて見ればよく似て居るね』と、山の形を眺めつゝ小さき土瓶を足元に置きぬ。

八時何分、滊車は早くも大森、品川を經て新橋にま近くなりぬ。やをら立ち上りたる大學生は、網の上よりカオリンを取り下しつ

『あれ、私がそれを持つて行きますよ

『いや良ちやんだと砕かれるかも知れないから、僕が持つて行くとしよう、それから革嚢と風呂敷包……

『それじや革嚢と風呂敷包みを私が持ちませう』

「いやナニ僕が持つから」

「そんなにあなた」と乙女は早立ち上りて、兄の持てるを奪はんとす。

「それなら良ちやん、此風呂敷包み丈け頼む」と云ふ時は、汽車はいつしか止まりて、人々は我れ前にと立ち上りつゝ、あわたゞしげに外へ出でたり。

「なにも、あわてる事は無い」と云ひつゝ、ヴオリンを右の脇に抱へ、右手に革嚢を提げたる大學生は、左手に妹の手をとりて、人込みの中を、睦じげに語りあひつゝ、改札所の方へと歩み去りける。

* * * * * * * * *

此時茫然としてたゞひとりプラットホームの隅に佇みたる我は涙にくもる眼をあげて何處までもと二人の影を打ち見まりぬ。

（完）

短文寄書募集

本誌愛讀の皆さまより毎月いろ／＼な投書を當編輯へ宛てゝ、御寄せ下さいますので、一々御掲載して御高意に酬ひまいらすべきでありますけれども、何分長文のものが多くて、それを一々御掲載いたす事は限りある誌面の經濟上出來兼ますゆゑ、據なく大抵は沒書にして仕舞ひましたがこれでは折角の御高志を空しふする譯でありますから次號よりは別に短文寄書欄といふのを設けて皆さんの御寄書を採用する事にいたしました。されは皆さまは、本誌に就て御心づきの廉は何それとなく御遠慮に及ばず御申越下さいまして編輯者の心の届かぬ所、目の及はぬ個所を御補ひ下さるやうに願ひます、さて御投書の事柄は何にてもよろしく江湖の出來事に就ての御所見、本誌掲載上の事故文の善惡の事柄は御隨意に任せますが唯々限りある誌上に皆さまの御希望を悉く充たす譯にも參りませぬゆゑ、行政に制限を置き文意を簡明にして一讀して直ぐに事の要領を得るやう願ひます。行政は事柄の如何にもよりますが、まづ十行以内として大抵な事は三四行にて用事の達するやう御注意を願ひます譬へは

前號初もみぢ消息文中友の不品行をいましむといふ文は齋藤梅子著文の林の記事と同様なり御注意すでに云々

或は初もみぢ新躰詩中露と虫と題する文は一昨年中學世界秀才詞林秋の卷伊藤氣砂氏の文と同様剽盜か暗合か信州上田町の春枝女史に一言す云

右は唯剽窃文に對する投書の一例でありますが短文寄書の行數は此位にして置きたいものであります

女學世界定期增刊（發行十一月十五日）

懸賞文募集 ふゆこだち

投書〆切十月廿日

才媛詞藻 冬の卷

歌は心の花なり、文章は思想の錦なり、うるはしかるべき婦人にして其の心に花のかざりなく、思想に錦のよそぼひなかりせば、如何ばかりもの足らぬ心地さるべき、昭代教育の發展に伴ふて、女子の文藝は著るしく其歩を進めぬ、茲に女學世界の才媛詞藻は來るべき晩秋の好季節を以て又更に其の定期增刊を發刊せんとす「ふゆこだち」即ち是なり、さればうるはしき心の花の一ひら、いみじき思想の錦の一片を寄せて我が才媛詞壇を飾られん事を

文種

▲**小說**（文體隨意）
二十行二十四字詰ニテ
紙數十枚マデ

▲**和歌**（題 殘菊 枯野 虹）
端書ニ一題一首ノ事

▲**新體詩**（題隨意）
二十句限

▲**抒情文**（題隨意）
十行二十四字詰ニテ
紙數二枚限リ

▲**敍事文**（題隨意）
二十行二十四字詰ニテ
紙數二枚限リ

▲**消息文**（候文言文隨意）
二十行二十四字詰ニテ
紙數一枚限リ

賞品

特賞　金拾圓　壹名
　　　金五圓　壹名
甲賞　金參圓（圖書切符）　五名
乙賞　金貳圓　仝　六名
丙賞　金壹圓　仝　拾名
秀逸　金五十錢　仝　二十名

注意

▲特賞は小說の優等者に限る
▲和歌の高點は乙賞以下にて別に相當の賞品を呈す
▲小說原稿は紙捻にて綴る事
▲各種規定の紙數に超過するものは一切採用せず
▲封筒には必ず「ふゆこだち」と附記すべし

彙報

◉大演習行幸御豫定　來る十一月肥筑の野に擧行せらるべき陸軍大演習には　大元帥陛下行幸の御豫定にして其筋にては虎列剌病流行地に付き撲滅方に付盡瘁し居りしが十四日以來は全く新患者の發生なきに至り尚時日の遠ことなれば其頃迄には行幸御差支へなきに至るべしと云ふ今行幸御日割の御豫定を漏れ承るに

十一月六日　東京御發輦
同七日、八日　御途中
同九日　熊本御着輦
同十日　御休息
同十一日、十二日、十三日　演習御統監

◉龜山天皇木型御像　元弘の紀念碑として筑前國千代の松原に建設さるべき龜山天皇御銅像の木型は木彫家山崎朝雲氏の擔當にて昨年夏始めて工事に着手し、爾來滿一年間の精勵にて此程稍く落成せしを以て去月十四日、駒込千駄木林町なる同氏の邸園内に於て弘く美術家の觀覧に供したり、御像の丈は一丈五尺餘にして頗る立派なる出來なりし、尚其鑄造は鑄金家岡崎雪聲氏之を擔當する由

◉大隈伯内庭の波瀾　政治上社交上に大勢力ある大隈伯の家庭に斯る不祥の事ありたるは誠に悲しむべきの至りなるが右事の起りは今回離縁となりたる南部秀麿氏の身上にあり、氏は舊盛岡藩主の家に人となり、幼少より海外に留學して伯林のホン大學を卒業し歸朝後間もなく大隈家に養はれ伯爵先夫人の出たるクマ子と琴瑟を和し以て今日に至りたるが、元來氏は大名の家に人となりて下情に通ぜさる爲めにや性來謹直の資性にも似ず金錢上の利害に關しては全く別人の如く無頓着なりしより、奸人等の爲めに誤られ、多數の約束手形に署名捺印したる結果巨額の負債を生じ爲めに伯爵家に累を及ぼさん事を恐れ　潔く退身して自から方畧を決せんとの決心を以て遂に實家に復歸する事となれり。大隈家にては事の意外に驚ろき直ちに南部家に其旨を通ぜしかば南部家にても大に面目を失し英麿氏の決心通り如何樣とも處分せられたしとの旨を述べて引取た

りしかば、大隈家にては直ちに媒妁人、親戚等合議の上にて離縁する事となれり、大隈伯は二十年來親子たりし關係を一朝にして破るは情に於て忍びさる所ありしも多數の決する如何ともすべからず、殊に二十年來貞淑に仕へ來れるクマ子夫人の愁傷を慰むる術なく去月十五日兩家の代表者宮内省に出頭して遂に其手續に及びぬ、されど兩家の交誼は從來通り繼續し、英麿氏は南部家の別邸に引取りて徐ろに負債償却の方法を講すべしとなり

◉女子學術講習會●●●●　東京府教育會の同會は愈々本月五日より神田橋外高等女學校内に於て開始する筈なるが科外として修身、教育、家事の三科を課する事となり講師は下田歌子女史なりと

◉教員撿定試驗修了と卒業式●●●　府教育會の家事傳習所にては過般來卒業試驗執行中の處其成績は去月三十日發表し卒業證書授與式は來る十月五日第一高等女學校内に於て擧行する由

◉女子大學の近況●●●●●　同校にては從來校内には家族の寮舍三棟と校外に二家族の寮舍に二棟ありし所今學期より樺山伯の好意によりて同伯邸内に二家族の寮舍二棟を設け樺山寮と名けて七十余名の生徒を收容し寺田勇吉氏の邸内に森村市左衛門氏の好意により三家族の寮舍一棟を建て豐明寮と稱し七十余名の生徒を收容し之にて都合大凡全生徒の半數即ち四百名の生徒を收容することゝなり自宅以外より通學する者は止を得ざる事情のものゝ外悉く入寮せしめ嚴重に監督保護することゝなしたる由

◉ローズベリ卿の結婚と美人の失望●●●●●　英國政海に於て若年政治家として又前自由黨内閣の首相として名望一世を動かすの貴族ローズベリー卿は曾てロスチヤイルド家の令孃を娶り琴瑟の和人の羨む所なりしが其夫人數年前病死せるより交際場裡の多くの美人は我れこそと心を込めたるもの少からざりしが卿は何故にや高く塵外に超然たりしが此程突然チロル、レランドと云へる美人の聞え高き或る富貴の後家と結婚すべしとの噂傳へられロンドン幾十の美人をして痛く失望せしめたりと

◉有毒の蕈と無毒の蕈●●●●●　日毎に秋冷に向ふに連れ、蕈の食膳に上る季節となりたれば、其有毒性のものと無毒のものとを左に記すべし。食料貯藏に用ゆるは、香

茸、松茸、玉蕈、靑頭菌、早松蕈、千本玉蕈、栗蕈、木耳、石蕈、麥蕈、茅蕈等にて有毒なるは天狗傘、唐人蕈、落葉蕈、萠黄蕈、臼蕈、蠅殺蕈、虛無僧蕈、蠅取蕈、又天狗蕈、簽蕈又月夜蕈、楓蕈、又笑蕈等にて、是等は決して口にすまじきものなり。尤も市井にて賣出すは、大方商賣人の眼を經たるものなれば、左まで危險の事なけれど、蕈狩にて得たる分は、充分の注意こそありたけれ

◉**文部省女學生取締を內訓す**　文部省にては輓近女學生の風儀大に壞亂し延て將來の女子敎育上に影響すること大なるを以て此際取締を厲行せんとし先月十六日全國各高等女學校長等に學生の風紀を振肅すると共に力め品行不正の者には放校除名の制裁を斷行するに躊躇せず一般學生を戒飭すべしとの意味を傳へたる由殊に府下の私立女學校に對しては目下敎員生徒の操行に就き秘密に調査中なれば其結果或は認可を取消さるゝもの一二有る可しと

◉**女學生と下宿屋の取締**　昨今學生の風紀大に紊れ殊に女學生の醜聞日々に增加するの傾きあるより文部省にては既に各女學校に訓示して嚴重に其戒飭に務むる所ありしも之と同時に一方に於ても彼等の寄寓せる下宿屋に充分の取締を與へざれば到底其實効を奏すると難く現に市內に於ける各下宿屋の狀態を見るに殆ど言ふに忍びざる有樣にて女學生の寄宿せる下宿屋は自然繁昌すると云ふ姿なるより狡猾なる營業者は特に一二の女學生を歡迎し其間に立ちて多分の利益を締めんとするもの多ければ此際規則を改正して男女の下宿營業を別にし女生は女生男生は男生のみを寄宿せしめんとの議起りし由なるが兎に角此取締こそ目下の一大急務と云ふべきなれ

新刊紹介

▲**家庭小說女樂師**　著者は家庭讀本に一生面を開きたる畑內新泉氏にして嘗て國民新聞紙上に連載されしを今回集めて一卷となしたるものなり、富貴にして世の塵に染まざる家庭の趣を雅致ある筆もて描かれ、高尙優雅にして當世紛々たる俗小說と大に其撰を異にせり、唯その描かれたる人物幷に事態があまりに超世的、出生間的、且つあまりに貴族的、隱遁的にして現世の生活を見る能はざるは聊か慊らぬ心地ぞさるされはこは唯白玉の微瑕のみ、家庭の讀物としては好書といふべし。國光社發行

▲**日本料理法**　活庖會幹事赤堀氏幷安西こま子兩氏の書にして日本各種の料理數百種を蒐む本書は徒らに虛飾を事として經濟實用の如何を顧みざる從來の料理法とは大に其面目を異にし、專ら實用を主とし、應用を主眼としてあらゆる料理の仕方を敎へたるもの新たに組織されたる家庭の主婦が庖厨の友として一本を備へなば益する處尠からざるべし（大倉書店發行）

▲**料理法講義錄**　日用惣菜、交際料理、茶事寶石、西洋、支那等の料理の講義あり、尙食品の吟味、食堂の心得等斯道の心得方を集めたる好個の講義錄あり（大日本割烹會發行）

女學世界第貳卷第拾四號豫告

(十一月五日發行)

左の外講義、史傳、學藝等毎月連載の有益なる記事あり

毎月一回五日發行

定價表

一册(紙數二百八頁)……金二十錢
四册(三ヶ月分)……前金七十五錢
八册(半ヶ年分)……前金一圓四十五錢
十六册(一ヶ年分)……前金二圓八十錢
内{定刊數……十二册　增刊四回……三、六、九、十一月價格同一}

郵稅　一册　二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	四十三錢	三十五錢	三十錢	
半頁卅二行	十三圓七十六錢	十一圓二十錢	九圓六十錢	
一頁六十四行	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず。
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す。
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る。
●總目錄御入用の方は二錢郵券相添へ申込あれ。

明治卅五年十月五日發行(第弐卷第十三號)

編輯人　松原岩五郎
發行人　内山正如
印刷人　石川金太郎
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番

博文館各雜誌發行表

定價

雜誌	定價	郵稅	發行
●太陽	一冊參拾錢	郵稅參錢	每月一回
●少年世界	一冊拾錢	郵稅壹錢五厘	每月一回
●中學世界	一冊貳拾錢	郵稅貳錢	每月一回
●女學世界	一冊貳拾錢	郵稅貳錢	每月一回
●文藝倶樂部	一冊廿五錢	郵稅貳錢五厘	每月一回
●太平洋	一冊六錢	郵稅五厘	每月曜日
●圖書世界	一冊參錢	郵稅五厘	每月一回

拾月發行日

雜誌	號	發行日
●太陽	第十二號	五日發行
●中學世界	第十三號	十日發行
●女學世界	第十三號	五日發行
●文藝倶樂部	第十三號	一日發行
●少年世界	第十三號	一日發行
●圖書世界	第三號	廿五日發行
●太陽臨時增刊 世界國勢要覽	第十三號	廿日發行
●文藝倶樂部秋期增刊 名古屋と伊勢	第十四號	十五日發行
●少年世界秋期增刊 植物園	第十四號	十日發行
●太平洋	第四十號	六日發行
	第四十一號	十三日發行
	第四十二號	二十日發行
	第四十三號	廿七日發行

廣告料

雜誌	廣告料	活字
●太陽	一行一回 金四十五錢	五號活字十八字詰
●少年世界	同 金四十錢	五號活字廿四字詰
●中學世界	同 金三十錢	五號活字廿四字詰
●文藝倶樂部	同 金四十錢	五號活字廿四字詰
●女學世界	同 金三十錢	五號活字廿四字詰
●太平洋	同 金四十錢	五號活字廿二字詰
●圖書世界	同 金十五錢	五號活字廿四字詰

（後口の一）

博文館　九月再

- 第四版　三馬傑作集　博文館編輯局校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢
- 第三版　柳澤、黒田、越後、加賀、伊達騷動記　博文館編輯局校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢
- 第三版　京傳傑作集　博文館編輯局校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢
- 再版　種彦傑作集　博文館編輯局校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢
- 再版　通俗呉越漢楚軍談　博文館編輯局校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢
- 第三版　楠廷尉秘鑑　博文館編輯局校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢
- 再版　滑稽名作集　上　博文館編輯局校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢
- 第三版　滑稽傑作集　下　博文館編輯局校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢
- 第六版　近松時代淨瑠璃　饗庭篁村君校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢
- 第三版　忠臣藏淨瑠璃　幸堂得知君校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢
- 第五版　眞田三代記　博文館編輯局校訂　正價金六十錢　郵税金十六錢

版圖書 發兌

第四版 海底軍艦 押川春浪君譯述 正價金三十錢 郵稅金六錢

第四版 福 鶯亭金升君著 正價金三十錢 郵稅金六錢

第十一版 二人むく助 尾崎紅葉君著 正價金十二錢 郵稅金四錢

第十版 今辨慶 江見水蔭君著 正價金十二錢 郵稅金四錢

第十二版 維新三傑 川崎紫山君著 正價金十二錢 郵稅金四錢

第七版 雨の日くらし 山田美妙君著 正價金十二錢 郵稅金四錢

第十版 寶の山 川上眉山君著 正價金十二錢 郵稅金四錢

第六版 姉と弟 嵯峨の舎主人著 正價金十二錢 郵稅金四錢

第十版 親の恩 宮崎三昧君著 正價金十二錢 郵稅金四錢

第六版 德川家康 矢部五州君著 正價金十二錢 郵稅金四錢

第八版 高山彦九郎 村上浪六君著 正價金十二錢 郵稅金四錢

（後付の三）

博文館 九月再

- 第五版　**社會學**　文學士 十時彌君著　特製金五十錢 郵稅金十錢　並製金卅五錢 郵稅金八錢
- 第十版　**論理學**　高山文學博士著　特製金五十錢 郵稅金十錢　並製金卅五錢 郵稅金八錢
- 再版　**邦語獨逸文典**　文學士 青木昌吉君編　特製金五十錢 郵稅金十錢　並製金卅五錢 郵稅金八錢
- 第三版　**世界格言大全**　澁江保君著　正價金四十錢 郵稅金四錢
- 再版　**言行要錄**　菅綠蔭君著　正價金卅五錢 郵稅金四錢
- 再版　**通俗世界歷史**　長谷川天溪君著　正價金廿五錢 郵稅金八錢
- **太平記**（下）　萩野、落合、小中村三先生校註　正價金廿五錢 郵稅金三錢
- 第十二版　**日本女禮式大全**（入帙）　坪谷善四郎君著　正價金七十五錢 郵稅金十六錢
- 第十二版　**日本女禮式大全**（入函）　坪谷善四郎君著　正價金壹圓 小包四百匁
- 第五版　**古今和歌集**　佐々木信綱先生校註　正價金十五錢 郵稅金六錢
- 第十版　校註**俳諧獨學**　三宅青軒君著　正價金廿五錢 郵稅金六錢

（挾付の四）

版圖書　發兌

版	書名	著者	定價
再版	植物學汎論	理學士 飯塚啓君著	特製金五十錢 郵稅金十錢 並製金卅五錢 郵稅金八錢
第七版	肥料學	農學士 木下義直君著	特製金五十錢 郵稅金十錢 並製金卅五錢 郵稅金八錢
第三版	應用化學	工學士 蜂屋貞興君著	特製金五十錢 郵稅金十錢 並製金卅五錢 郵稅金八錢
第三版	畜產各論	農學士 田口晋吉君著	特製金五十錢 郵稅金十錢 並製金卅五錢 郵稅金八錢
第五版	獸醫編	獸醫學士 內村兵藏君著	全二冊各金十五錢 郵稅金六錢
第九版	果樹栽培全書	福羽逸人君著	全四冊 卷ノ一金卅錢 二三四各金廿五錢
第三版	機械設計製圖學初步	松尾哲太郎君著	正價金六十錢 郵稅金四錢
第九版	日用品製造編	農學士 石坂橘樹君著	正價金十五錢 郵稅金六錢
第五版	日本酒釀造法	農學士 矢本久太郎君編	正價金十五錢 郵稅金六錢
再版	砂糖編	農學士 石井淳一郎君編	正價金十五錢 郵稅金六錢
再版	電氣渡金術	工學士 鴨居武君著	正價金廿五錢 郵稅金四錢

版圖書　發兌

版	書名	著者	正價	郵稅
第七版	小公子	若松賤子君譯述	正價金卅五錢	郵稅金八錢
第八版	累卵の東洋	大橋乙羽君著	正價金十八錢	郵稅金四錢
第十二版	枯野の雪	落合、小中村兩先生著	正價金十八錢	郵稅金四錢
再版	决志少年	櫻井鷗村君著	正價金三十錢	郵稅金六錢
再版	漂流少年	櫻井鷗村君著	正價金三十錢	郵稅金六錢
第五版	高島秋帆	福地櫻痴君著	正價金十三錢	郵稅金四錢
第三版	續法螺先生	巖谷小波君著	正價金七錢	郵稅金二錢
第六版	珊瑚島	巖谷小波君著	正價金七錢	郵稅金二錢
第九版	校註神皇正統記	大宮宗司君校註	正價金廿五錢	郵稅金六錢
	平家物語	萩野文學博士著	正價金廿五錢	郵稅金三錢
	增鏡	萩野文學博士著	正價金廿五錢	郵稅金三錢

（奥付の七）

九月再版圖書

第十三版 理論應用 **普通算術** 片山清謙君、三田暉信君合著 正價金三拾錢 郵税金六錢

第三版 幼年讀本 **日本地理** 巖谷小波山人著 正價金拾五錢 郵税金四錢

第十九版 **實用料理法** 藤本藤蔭君著 正價金廿五錢 郵税金六錢

再版 **化粧品製作法** 工學士松永新之助君著 正價金廿五錢 郵税金六錢

第七版 **米麥編** 農學士楠原正三君著 正價金拾五錢 郵税金六錢

第八版 **圍碁入門** 初版小林鍵太郎先生編 正價金拾五錢 郵税金四錢

第四版 **圍碁定石** 初版小林鍵太郎先生編 正價金拾五錢 郵税金四錢

第廿三版 **一年有半** 中江兆民先生著 正價金卅五錢 郵税金八錢

第十八版 **續一年有半** 中江兆民先生著 正價金卅八錢 郵税金八錢

第三版 **新風船** 石井研堂君著 正價金十錢 郵税金四錢

第四版 **新撰算術** 理學士高木貞治君著 （上製金五十錢 郵税金十錢 並製金卅五錢 郵税金八錢）

女學世界
毎月壹回五日發行
明治參拾參年貳月廿五日第參種郵便物認可
第貳卷第拾參號
明治參拾五年十月五日發行

（定價金貳拾錢）

 東京秀英舍印刷